

PeopleSoft®

EnterpriseOne 8.9
システム・アドミニストレーション
PeopleBook

2003 年 9 月

PeopleSoft EnterpriseOne 8.9
システム・アドミニストレーション PeopleBook
SKU AC89JSY0309

Copyright 2003 PeopleSoft, Inc. All rights reserved.

本書に含まれるすべての内容は、PeopleSoft, Inc. (以下、「ピープルソフト」) が財産権を有する機密情報です。すべての内容は著作権法により保護されており、該当するピープルソフトとの機密保持契約の対象となります。本書のいかなる部分も、ピープルソフトの書面による事前の許可なく複製、コピー、転載することを禁じます。これには電子媒体、画像、複写物、その他あらゆる記録手段を含みます。

本書の内容は予告なく変更される場合があります。ピープルソフトは本書の内容の正確性について責任を負いません。本書で見つかった誤りは書面にてピープルソフトまでお知らせください。

本書に記載されているソフトウェアは著作権によって保護されており、このソフトウェアの使用許諾契約書に基づいてのみ使用が許諾されます。この使用許諾契約書には、開示情報を含むソフトウェアと本書の使用条件が記載されていますのでよくお読みください。

PeopleSoft、PeopleTools、PS/nVision、PeopleCode、PeopleBooks、PeopleTalk、Vantiveはピープルソフトの登録商標です。Pure Internet Architecture、Intelligent Context Manager、The Real-Time Enterpriseはピープルソフトの商標です。その他すべての会社名および製品名は、それぞれの所有者の商標である場合があります。ここに含まれている内容は予告なく変更されることがあります。

オープンソースの開示

この製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) が開発したソフトウェアが含まれています。Copyright (c) 1999–2000 The Apache Software Foundation. All rights reserved. このソフトウェアは「現状のまま」提供されるものとし、特定の目的に対する商品性および適格性の黙示保証を含む、いかなる明示または黙示の保証も行いません。Apache Software Foundationおよびその供給業者は、損害の発生原因を問わず、責任の根拠が契約、厳格責任、不法行為（過失および故意を含む）のいずれであっても、また損害の可能性が事前に知らされていたとしても、このソフトウェアの使用によって生じたいかなる直接的損害、間接的損害、付随的損害、特別損害、懲罰的損害、結果的損害に関しても一切責任を負いません。これらの損害には、商品またはサービスの代用調達、使用機会の喪失、データまたは利益の損失、事業の中断が含まれますがこれらに限らないものとします。

ピープルソフトは、いかなるオープンソースまたはシェアウェアのソフトウェアおよび文書の使用または頒布に関しても一切責任を負わず、これらのソフトウェアや文書の使用によって生じたいかなる損害についても保証しません。

目次

小数点以下表示桁数の更新	1
データ辞書の管理	2
オブジェクト管理ワークベンチ構成の理解	5
デフォルト・プロジェクト	5
構成プロセス・フロー	6
アクティビティ・ルール	6
可能な操作	6
プロジェクトとオブジェクトのログ	7
プロジェクト固定情報	7
オブジェクトのロケーション	7
オブジェクト操作の通知	7
通知サブスクリプション	8
アプリケーションとユーザー・ロールのセキュリティ	8
ユーザー・ロールへのセキュリティの適用	8
管理更新へのセキュリティの適用	8
構成オプションの選択	9
構成設定インジケータ	9
ユーザー・ロールと可能な操作の設定	10
可能な操作の設定	13
オブジェクト管理ワークベンチ機能の構成	17
SAR システム・インテグレーションの無効化	17
プロジェクト固定情報の設定	21
アクティビティ・ルールの構成	22
プロジェクト状況アクティビティ・ルールの設定	22
オブジェクト転送アクティビティ・ルールの設定	24
オブジェクトの保存ロケーションの構成	30
保存ロケーションの作成	30
通知の設定	31
ログの処理	35
ERP 9.0 レポートの印刷	48
ERP 9.0 の印刷処理の理解	48

サーバーでのレポート実行	49
ワークステーションでのレポート実行	49
印刷時の特徴	49
ワークステーション jde.ini での印刷設定	50
プリンタ定義プログラムの処理	50
レポート・ログの生成および取込み	68
バーコード・フォントを使用するためのプリンタの設定	71
ERP 9.0 ライン・プリンタで実行するレポートの設計	72
プロジェクト・プロモーションのライフ・サイクル	76
サーバーの処理	78
サーバー・ジョブの処理	78
レポートの状況チェック	79
優先度/ジョブ用プリンタの変更	80
ジョブの印刷	80
レポートのオンライン表示	81
ジョブ・ログの表示	82
ジョブの終了	83
ジョブの保留とリリース	83
ERP 9.0 待ち行列の管理	85
待ち行列の管理	86
ジョブ待ち行列一時変更	89
ERP 9.0 サブシステムの処理	90
ERP 9.0 サブシステムの理解	90
サーバーで実行する ERP 9.0 サブシステムの検索	94
ERP 9.0 サブシステムのジョブ・レコードの検討	95
ERP 9.0 サブシステムの終了	95
ユーザー・プロファイル	97
ユーザー・プロファイルの理解	97
プロファイル化を容易にするロール・プロファイルの使用	97
ユーザー・プロファイルの改訂アプリケーションで使用されるテーブル	97
新規ユーザーの追加	98
個々のユーザーの追加	98
複数ユーザーの追加	99
ユーザー・プロファイルのセットアップ	101
ユーザー・プロファイル/ロール・プロファイルの作成と変更	101
ユーザー/ロール・プロファイルのコピー	104
ユーザー・プロファイル/ロール・プロファイルへの環境の追加/削除	106
ユーザー/ロール・プロファイルへのビジネス優先情報への割当て	108
バッチ処理を使用したプロファイルの作成	110
ユーザー・ロールの設定	112

ERP 9.0 へのロールの移行.....	113
ロールの定義.....	120
ロールの改訂.....	121
ロールの順序設定.....	122
ロールへの環境の追加.....	123
ロール・リレーションシップの設定.....	124
ワークステーション初期化ファイル・パラメータ.....	129
サインオン時に表示するロールの選択.....	130
ロールの委任.....	130
ロール間のリレーションシップの作成.....	132
ロールの管理.....	132
初期化ファイルの変更.....	137

セキュリティ 138

セキュリティ・ワークベンチの理解.....	139
ユーザー、グループ、および*PUBLIC の理解.....	139
ERP 9.0 のセキュリティ・チェックの理解.....	140
キャッシュ・セキュリティ情報の理解.....	140
セキュリティ・タイプの理解.....	140
ERP 9.0 オブジェクト・レベルのセキュリティの理解.....	141
セキュリティの対象となるユーザーとオブジェクトの識別.....	142
セキュリティ・ワークベンチの処理.....	143
アプリケーション・セキュリティの管理.....	143
アプリケーションのフォームへのセキュリティの適用.....	149
アクション・セキュリティの管理.....	150
タブ・セキュリティの管理.....	151
ロー・セキュリティの管理.....	154
カラム・セキュリティの管理.....	155
処理オプション・セキュリティの管理.....	158
エグジット・セキュリティの管理.....	165
排他的アプリケーション・セキュリティの管理.....	168
外部コール・セキュリティの管理.....	170
ユーザー/グループのセキュリティのコピー.....	174
〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームでのセキュリティの解除.....	174
サインオン・セキュリティの理解.....	175
セキュリティ・テーブルへのアクセス.....	175
パスワード暗号化.....	176
セキュリティの設定.....	176
ERP 9.0 サインオン・セキュリティのプロセス・フロー.....	178
Web ユーザーのサインオン・セキュリティ.....	182
ユーザー・セキュリティの処理.....	185

ユーザー・セキュリティの作成と改訂	185
セキュリティ履歴の検討	192
ユーザー・セキュリティのデータ・ソース管理	193
ユーザー・セキュリティのための jde.ini ファイルの変更	195
セキュリティ・アナライザ・レポートの実行	199
汎用ログオンの管理	202
Solution Explorer のセキュリティ	205
Solution Explorer のセキュリティ設定の理解	205
Solution Explorer のセキュリティ設定の表示	205
Solution Explorer のセキュリティ設定	206
Solution Explorer のデフォルト・セキュリティ設定の使用	207
用語一時変更	209
用語一時変更へのアクセス	209
用語一時変更の作成	212
用語一時変更の検討	215
用語一時変更のリセット	216
スケジューラ	219
ジョブのスケジュール	220
ジョブのスケジュール設定	220
定期ジョブのスケジューリング	223
スケジュール・ジョブの改訂	226
スケジューラ用処理オプションの入力	229
すべてのジョブまたはローカル・ジョブの検討	230
ジョブのプロパティの処理	230
環境の一時変更	231
ジョブ有効期限スペックの一時変更	232
スケジューラによるジョブの再投入時期の定義	234
バッチ・アプリケーションのスペックの一時変更	236
レポート・インターコネクトへの値の追加	237
ジョブ・スケジュールの処理	239
すべてのジョブ・スケジュールの検討	239
ジョブの起動状況の変更	241
ジョブ詳細の表示	242
手作業によるジョブの状況設定	243
ジョブ・スケジュールのリセット	244
スケジューラ・サーバー	245

制御レコード	245
ディスパッチ機能	246
起動ループ	246
ジョブ・モニタ・ループ	246
夏時間規則の修正	249
スケジューラ・レポートの実行	252
スケジューラ・サーバーの処理	253
メディア・オブジェクトとイメージング	255
メディア・オブジェクトとは	255
イメージングとは	256
ERP 9.0 のメディア・オブジェクト機能の有効化	256
メディア・オブジェクト待ち行列の処理	260
イメージ・メディア・オブジェクト	260
OLE メディア・オブジェクト	261
URL メディア・オブジェクト	261
メディア・オブジェクト・テーブル	261
ERP 9.0 テキスト項目	261
イメージングの設定	265
イメージング・プロセス・フロー	267
ユニバーサル・テーブル・ブラウザ	269
テーブルのデータ表示	269
フラット・ファイル・エンコーディングの処理	273
フラット・ファイル・エンコード・レコードの追加	274
フラット・ファイル・エンコード・レコードの有効化	275
ERP 9.0 の命名規則	278
パス・コード	278
データ・ソース	278
パッケージ名	279
サーバー名	279
ワークステーション名	279
jde.ini ファイル	280
jde.ini ファイルのロケーション	280
ワークステーションの jde.ini 設定の理解	280

[DB SYSTEM SETTINGS].....	281
[DB SYSTEM SETTINGS - SECONDARY]	283
[OFFLINE DB SYSTEM SETTINGS].....	284
[DEBUG].....	285
[EVEREST].....	286
[INSTALL].....	286
[JDE_CG]	287
[JDEMAIL].....	288
[JDENET].....	288
[JDENET_KERNEL_DEFx].....	288
[LOCK MANAGER]	289
[NETWORK QUEUE SETTINGS].....	289
[OBJECT LIBRARIAN].....	290
[SECURITY].....	290
[SVR].....	291
[UBE]	292
[WORKFLOW].....	293
[EXPLORER]	293
[ACTIVE DIRECTORY].....	294
AS/400 サーバーの JDE.INI 設定の理解.....	294
[AS400].....	294
[BSFN BUILD]	295
[DB SYSTEM SETTINGS].....	296
[DEBUG].....	298
[INSTALL].....	300
[JDEIPC].....	300
[JDEMAIL].....	301
[JDENET].....	301
[JDENET_KERNEL_DEFx].....	302
[LOCK MANAGER]	305
[NETWORK QUEUE SETTINGS].....	306
[SECURITY].....	306
[SVR].....	307
[TCENGINE].....	307
[UBE]	308
[WORKFLOW].....	309
[WORLD ENVIRONMENT MAP].....	309
[LREngine].....	310
UNIX サーバーの jde.ini 設定の理解(HP9000、RS/6000、または Sun サーバ ー)	310

[BSFN BUILD]	310
[CLUSTER]	312
[DB SYSTEM SETTINGS].....	312
[DEBUG].....	313
[INSTALL].....	314
[JDEIPC].....	314
[JDEMAIL].....	315
[JDENET].....	315
[JDENET_KERNEL_DEFx].....	316
[LOCK MANAGER]	319
[MEMORY DEBUG].....	320
[NETWORK QUEUE SETTINGS].....	320
[SECURITY].....	320
[SERVER ENVIRONMENT MAP]	321
[SVR].....	321
[TAM].....	322
[WORKFLOW].....	322
[INTEROPERABILITY].....	322
[JDENET_KERNEL_DEFx].....	323
[SAMPLE_EVENT].....	325
[JDEITDRV].....	326
[LREngine].....	326
Windows NT エンタープライズ・サーバーの jde.ini 設定の理解	326
[BSFN BUILD]	326
[BSFN Builder].....	327
[DB SYSTEM SETTINGS].....	328
[DEBUG].....	329
[INSTALL].....	331
[JDE_CG]	331
[JDEIPC].....	332
[JDEMAIL].....	333
[JDENET].....	333
[LOCK MANAGER]	334
[NETWORK QUEUE SETTINGS].....	335
[MQSI].....	336
[SECURITY].....	337
[SERVER ENVIRONMENT MAP]	337
[SVR].....	338
[ACTIVE DIRECTORY].....	338
[INTEROPERABILITY].....	339
[SAMPLE_EVENT].....	339
WebSphere サーバーの jde.ini 設定の理解	339
[JDENET].....	340
[JDENET_KERNEL_DEF13].....	340
[MQSI].....	340
Web サーバーの jas.ini 設定	342

[OWWEB].....	344
[CACHE].....	346
[SERVER COMPONENTS]	347
[JDENET].....	348
[SERVER]	348
[LOGS].....	348
[SECURITY].....	349
[PORTALCONFIGURATION].....	350
Web サーバーの jdbj.ini 設定	357
J.D. Edwards ERP データに固有なセクション	357
汎用セクション.....	360

小数点以下表示桁数の更新

数量フィールド・クラスの小数点以下表示桁数を変更できます。数量データ項目(QTYINV)の表示小数点以下桁数はデータ辞書でゼロに設定して出荷されていますが、8 桁まで変更することができます。4 桁に変更すると、100 は 100.0000 と表示されます。

警告

小数点以下表示桁数は、本稼働用データを入力する前に、CRP 環境でのみ変更する必要があります。これは、ERP 9.0 にはデータ変換機能がないため、ユーザーがデータの入力後に小数点以下表示桁数を変更すると、それ以前に入力されたデータが正しくなくなるためです。

はじめる前に

- 『開発ツール』ガイドの「データ辞書」の概念を理解しておく必要があります。ここでは、データ辞書の使用方法和データ用語を定義する方法を説明しています。

データ辞書の管理

辞書に用語の定義が含まれているのと同様に、J.D. Edwards のデータ辞書はデータ項目の定義と属性を含むセントラル・リポジトリです。これらの属性によって、データ項目の次の設定が確定されます。

- レポートとフォームでの表示状態
- アプリケーション内でのデータ入力の検証方法
- カラム(列)とロー(行)への記述の割当方法
- フィールド・センシティブ・ヘルプのテキストの表示方法

変更した内容はソフトウェアをリコンパイルしなくてもアプリケーションに自動的に反映されるので、ERP 9.0 データ辞書はアクティブです。

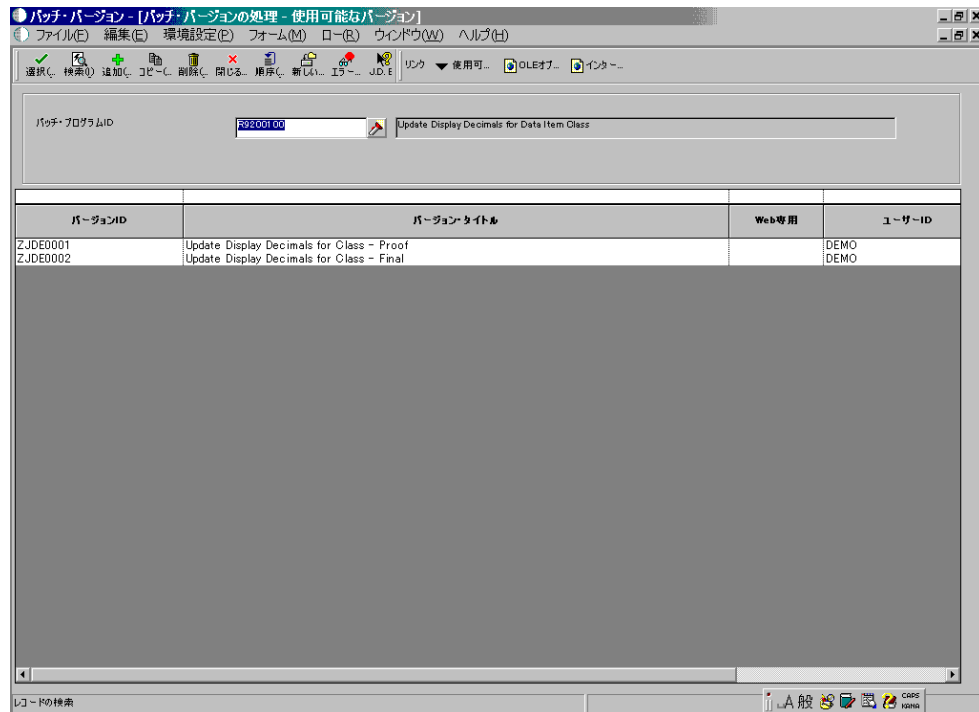
ERP 9.0 のアプリケーション領域ごとに、データ辞書管理者を 1~2 人ずつ割り当てる必要があります。データ辞書管理者は ERP 9.0 の使用経験を持つユーザーで、会計や製造など、担当製品の分野に関して包括的な知識が要求されます。また、データ辞書管理者は、担当製品グループのデータ項目に対するすべての追加、変更、および削除を行います。これらの変更は、エンタープライズ・サーバー上の基本データ辞書に反映されます。

データ辞書管理者は、次のことを考慮する必要があります。

- セットアップが『CNC インプリメンテーション』ガイドの「標準的なカスタマー構成」で提案しているセットアップに類似している場合は、すべての環境で同じデータ辞書が共有されます。したがって、管理者は任意の環境にサインオンして変更を加えることができます。権限を持たないユーザーによるデータ辞書の変更を防ぐために、〈セキュリティ・ワークベンチ〉を使用して〈データ辞書〉アプリケーション(P98DREP)上でアプリケーションのセキュリティを割り当てることをお勧めします。
- 共存環境で実行する場合、WorldSoftware と ERP 9.0 は同じデータ辞書を共有できないので、2 つの製品内ですべてのデータ項目を作成する必要があります。

▶ 小数点以下表示桁数を更新するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉プログラム(P98305)を選択します。



1. <バッチ・バージョンの処理>フォームで、[バッチ・プログラム ID]フィールドに“R9200100”と入力して[検索]をクリックします。
2. 次のバージョンから 1 つ選択して[選択]をクリックします。
 - Update Display Decimals for Class – Proof(クラスの小数点以下表示桁数の更新-テスト)
テスト・バージョンでは、最終モードでの処理内容を示すレポートが生成されるだけです。
 - Update Display Decimals for Class – Final(クラスの小数点以下表示桁数の更新-最終)
最終バージョンでは、実際の変更が行われます。
3. <プロンプト>で、[データ選択]オプションをオンにして[投入]をクリックします。
4. <データ選択>フォームで次のステートメントを作成します。

If BC Data Item Class (F9210) = “QTYINV”

注:

QTYINV は、小数点以下表示桁数を修正できる唯一のデータ項目クラスです。他のデータ項目クラスを修正する場合は、調査して修正内容が ERP 9.0 に及ぼす影響をテストする必要があります。また、QTYINV データ項目クラスに属するデータ項目を修正する場合も、同様に調査して影響をテストする必要があります。

5. [OK]をクリックします。
データ選択文を変更した場合は、最初に[更新]をクリックしてから[OK]をクリックします。

6. <Processing Options (処理オプション)>フォームで、次のフィールドに値を入力します。
 - 更新モードで実行する場合は“1”、テスト・モードで実行する場合は“0”と入力します。デフォルト値は 0 です。
 - データ項目クラス
 - 新しいデータ小数点以下表示桁数
7. [OK]をクリックします。
8. 各ワークステーション上で、次のスペック・ファイルを削除します。

qlbltbl.ddb, qlbltbl.xdb

dddickt.ddb, dddickt.xdb

ddtext.ddb, ddtext.xdb
9. 小数点以下表示桁数の変更をユーザーへとプッシュするには、変更を行ったサーバー上で R92TAM を実行します。

オブジェクト管理ワークベンチ構成の理解

オブジェクト管理ワークベンチ(OMW)によって、前回のリリースで手作業で行っていたオブジェクト管理タスクの多くが自動化されています。この自動化の大部分は、システム管理者が〈オブジェクト管理ワークベンチ〉の構成プログラムを介して慎重に構成する必要があります。

〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を使うと、任意で次の機能を設定することができます。

オプション	説明
固定情報	OMW プロジェクト全般の固定情報を設定できます。
SAR システム・インテグレーション	OMW との SAR システム・インテグレーション(ERP 9.0 開発ツール)を無効にできます。
ログ・システム	ログを記録するプロジェクトとオブジェクトのイベントを指定できます。また、ログ・エラーの発生時に開発を無効にしたり、開発は許可して転送は無効にすることもできます。
オブジェクト操作の通知	[オブジェクト操作の通知]を有効/無効にすることができます。このオプションを選択すると、オブジェクトのチェックインまたはチェックアウトなどの操作の実行時に、通知メッセージが送信されます。
通知セットアップ	開発者は、オブジェクトに対する操作が実行される時に通知を受け取るようにサブスクライブできます。
アクティビティ・ルール	プロジェクト状況とオブジェクト転送に関するアクティビティ・ルールを追加および修正できます。
ユーザー・ロール	ユーザー・ロールを保守管理できます。
可能な操作	特定のプロジェクト状況で各オブジェクト・タイプについて可能な操作を、ユーザー・ロールに割り当てることができます。
保存ロケーション	オブジェクトの保存ロケーションを追加、修正、および削除できます。

デフォルト・プロジェクト

〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を初めて実行すると、ユーザーID が付いたデフォルト・プロジェクトが作成されます。デフォルト・プロジェクトは、研究開発に使用できる個人用プロジェクトです。

デフォルト・プロジェクトの用途は、次のとおりです。

- 後で正規のプロジェクトに移動するオブジェクトの開発
- プロジェクトに後で追加するオブジェクトの保管
- OMW の外部で処理されたオブジェクトの自動的な格納

デフォルト・プロジェクトは、プロジェクト状況が変更されないことを除いては、一般のプロジェクトと似ています。したがって、デフォルト・プロジェクトはオブジェクトの転送には使用できません。

オブジェクト・ライブラリアン以外のオブジェクトは OMW 以外でアクセスできます。OMW 外のバージョン、ユーザー定義コード、メニュー、または RDA などのオブジェクトにアクセスする場合は、これらのオブジェクトはデフォルト・オブジェクトに追加されます。これらのオブジェクトに対する変更は、デフォ

ルト・プロジェクトを介して追跡し、管理する必要があります。また、この種の非オブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトに対する修正は、常にログに記録されます。

状況を進める場合は、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を使用してオブジェクトをデフォルト・プロジェクトからプロジェクトに移動します。

構成プロセス・フロー

すべての〈オブジェクト管理ワークベンチ構成〉ツールを使用するのに推奨するプロセスは次のとおりです。最初の 3 つのステップには、次のような事前の準備が必要です。

- ユーザー・ロールの割当て
- 可能な操作のユーザーへの適用
- プロジェクト状況ルールとオブジェクト転送ルールのセットアップ

これらの機能を構成する前に、ユーザー・ロール、可能な操作、プロジェクト状況ルール、およびオブジェクト転送ルールを理解しておく必要があります。

アクティビティ・ルール

アクティビティ・ルールには次の 2 つのタイプがあります。

- プロジェクト状況アクティビティ・ルール
- オブジェクト転送アクティビティ・ルール

プロジェクト状況アクティビティ・ルールでは、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プロジェクトに考えられるパスを定義します。このタイプのルールでは、特定のプロジェクト状況について、その状況から進行できる次のプロジェクト状況を定義します。

プロジェクト状況アクティビティ・ルールごとに、1 つ以上のオブジェクト転送アクティビティ・ルールを構成することができます。各オブジェクト転送アクティビティ・ルールでは、オブジェクトが特定のソフトウェア・リリースとの間で移動する場合の、移動元と移動先のロケーションをオブジェクトのタイプごとに定義します。

たとえば、あるオブジェクト転送アクティビティ・ルールでは、指定したプロジェクト状況が変化する間に、すべての APPL オブジェクトを DV9 ロケーションから PY9 ロケーションに転送するように指定できます。

可能な操作

〈可能な操作〉フォームでは、特定のプロジェクト状況で各オブジェクト・タイプについて許可する操作を、ユーザー・ロールに割り当てることができます。ユーザーが実行可能な操作を設定する前に、ユーザー・ロールを作成する必要があります。

可能な操作を設定すると、管理者は特定のロールを持つユーザーが実行できる操作を制限することができます。

プロジェクトとオブジェクトのログ

〈オブジェクト管理ワークベンチ〉のログ機能により、プロジェクトとオブジェクトに関する情報が追跡されます。次の場合には、メジャー・ログが作成されます。

- プロジェクトが作成、コピー、または削除された場合
- プロジェクト状況が変更された場合
- プロジェクトについて新規または既存のオブジェクトが追加または削除された場合
- オブジェクトが作成、コピー、または削除された場合
- オブジェクトがチェックイン、チェックアウト、保存、復元、転送、または取り込まれた場合

これらの操作に含まれる重要なステップまたはイベントすべてについて、詳細ログが作成され、メジャー・ログ・レコードに添付されます。

プロジェクト固定情報

〈オブジェクト管理固定情報〉フォームを使用すると、管理者は OMW プロジェクトに関して次の一般固定情報を設定することができます。

固定情報のタイプ	説明
ユーザーの個人用デフォルト・プロジェクトのプロジェクト状況	〈オブジェクト管理ワークベンチ〉内でデフォルト・プロジェクトに割り当てるデフォルトの状況。標準プロジェクト状況コードの 1 つを指定できます。
すべての新規プロジェクトのプロジェクト状況	プロジェクトが最初に作成されたときに割り当てられる状況。標準プロジェクト状況コードの 1 つを割り当てるか、この用途に合わせて状況とコードを作成できます。
プロジェクトの作成者に割り当てるユーザー・ロール	プロジェクトの作成時に、そのプロジェクトのユーザーとして作成者が追加されます。このプロジェクト固定情報では、作成者に割り当てるユーザー・ロールを定義します。

オブジェクトのロケーション

〈オブジェクトのロケーション〉フォームには、オブジェクト・ライブラリアン(OL)オブジェクトの保存ロケーションが表示されます。保存ロケーションを定義すると、ユーザーは保存されているオブジェクトを指定したパス・コードに転送できます。現在のところ、定義できるのはオブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトの保存ロケーションのみです。

オブジェクト操作の通知

〈オブジェクト操作の通知〉フォームでは、オブジェクト操作の通知をアクティブ化/非アクティブ化することができます。〈オブジェクト操作の通知〉システムでは、オブジェクトに対してチェックインやチェックアウトなどのイベントが発生するたびに、電子メールが送信されます。オブジェクト操作の通知は、デフォルトで使用可能になっています。

通知サブスクリプション

通知システムでは、オブジェクトのチェックインやチェックアウトなど、システム内のオブジェクト変更に関する電子メール・メッセージがユーザーに送信されます。〈通知サブスクリプション〉フォームを使用すると、通知サブスクリプションの追加、削除、および修正だけでなく、選択した条件に基づいて通知サブスクリプション・レコードをソートできます。

アプリケーションとユーザー・ロールのセキュリティ

次のアプリケーションは、アプリケーション・セキュリティを使用してセキュリティを設定する必要があります。

- P98230 – オブジェクト管理構成
- R98210B – オブジェクト管理ログの除去
- P98231 – OMW 転送アクティビティ・ルール・セットアップ・ディレクタ

ユーザー・ロールへのセキュリティの適用

F98221.puomwur フィールドでロー・レベルのセキュリティを使用して、プロジェクトへのユーザーの追加を禁止することができます。このフィールドには、特定プロジェクトのユーザーごとに、ユーザー・ロールの UDC コードが含まれています。

ただし、新規プロジェクトのセットアップ時には、ユーザー全員に次のユーザー・ロールの追加を許可する必要があります。

- 入力者
- 監督者
- 管理者
- 開発者
- QA
- 製品サポート

管理者ロールは、少数を除くすべてのユーザーから保護する必要があります。管理者ロールと監督者ロールは保護できないため、保護できる製品管理者または同等のロールを作成することを検討してください。この新規ユーザー・ロールには、プロジェクト間でのトークン切替の許可など、セキュリティ属性を与えることができます。

管理更新へのセキュリティの適用

プロジェクト状況 40(本稼動オブジェクト開発)、41(プロトタイプ・オブジェクトへの本稼動オブジェクトの転送)、および 42(開発オブジェクトへのプロトタイプ・オブジェクトの転送)の場合は、プロジェクト状況の変更を含めすべての操作を保護する必要があります。これらの状況では、管理者は本稼働用パス・コード内でオブジェクトに修正を適用してから、そのオブジェクトを開発パス・コードにプロモートすることができます。これを行う権限は管理者のみに限定する必要があります。

構成オプションの選択

すべての構成オプションは、〈オブジェクト管理構成〉アプリケーション(P98230)を使用して設定します。構成するオプションに対応するボタンをクリックすると、そのオプションを選択できます。

▶ 構成オプションを選択するには

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)を選択します。

1. 必要に応じて、[一般]タブをクリックして機能オプションを表示します。
2. 次のボタンを1つクリックし、対応する機能を構成します。
 - 固定情報
 - SAR システム・インテグレーション
 - ログ・システム
 - オブジェクト操作の通知
 - 通知の設定
 - アクティビティ・ルール
 - ユーザー・ロール
 - 可能な操作
 - 保存ロケーション

構成設定インジケータ

〈オブジェクト管理の設定〉フォームでは、一部の機能ボタンの横に設定インジケータがあります。設定インジケータは、[SAR システム・インテグレーション]、[ログ・システム]、および[オブジェクト操作の通知]オプションの現在の設定を示します。各設定インジケータの目的は次のとおりです。

インジケータ	説明
SAR システム・インテグレーション	SAR(ソフトウェア・アクション・リクエスト)システムが〈オブジェクト管理ワークベンチ〉と統合されているかどうかを示します。SAR インテグレーションは有効化または無効になっています。
ログ・システム	プロジェクトまたはオブジェクト・イベントの完全ログが選択されているか、簡易ログが選択されているかを示します。
オブジェクト操作の通知	オブジェクト通知システムが有効または無効かどうかを示します。

ユーザー・ロールと可能な操作の設定

ユーザー・ロールと可能な操作の設定は、最も重要な OMW 設定タスクの 1 つです。OMW の自動操作は、ここでシステム管理者により慎重に設定されます。

次の表は、各ユーザー・ロールに許可するユーザー操作、各操作の権限を与える必要があるプロジェクト状況、および、そのユーザー・ロールに属するユーザーの役割に関する推奨事項を示しています。

推奨するプロジェクト状況	ユーザー・ロール	可能な操作(推奨)	説明
11 新規プロジェクト保留検討	入力者	状況変更	入力者は、状況を 91(入力エラーのキャンセル)に進行させる必要が生じる場合があります。
	管理者、監督者	プロジェクトの更新	プロジェクトの値を変更します。
		ユーザーの更新	ユーザーの値を変更します。
21 - プログラミング	開発者	状況変更	プロジェクトを次の状況に進行させます。
		オブジェクトの追加	修正または拡張のためにプロジェクトにオブジェクトを追加します。
		オブジェクトの削除	間違ってプロジェクトに追加されたオブジェクトをプロジェクトから削除します。
		チェックアウト	サーバーからオブジェクトをチェックアウトします。
		チェックイン	サーバーにオブジェクトをチェックインします。
		取得	サーバーからオブジェクトを取得します。
25 - 再作業 - 同じ問題	開発者	状況変更	プロジェクトをプログラミング状況(21)に変更します。
		取得	サーバーからオブジェクトを取得します。
26 - QA テスト/検討	品質管理担当者	取得	サーバーからオブジェクトを取得します。
		状況変更	プロジェクトを次の状況に進行させます。
28 - QA テスト/検討	管理者、監督者	プロジェクトの更新	プロジェクトの値を変更します。
		状況変更	プロジェクトを次の状況に進行させます。
38 プロダクション	管理者、監督者	状況変更	プロジェクトを次の状況に進行させます。
01 - 完了	開発者	オブジェクトの削除	状況 91 のプロジェクトから、追加されたが除去されていない可能性のあるオブジェクトを除去します。

注:

開発者が割り当てられた作業を実施できない場合や、処理の検証が必要な場合は、管理者ロールと監督者ロールに開発者ロールと同じ操作を許可することができます。

次のデフォルトの可能な操作は変更できません。参考のみとしてください。

値	説明
02	チェックイン
03	チェックアウト
04	削除
05	追加
06	コピー
08	保存
09	回復
10	設計
11	取得
12	プロジェクトからオブジェクトを削除
13	プロジェクトの更新
16	プロジェクトにオブジェクトを追加
21	トークンの切替え
23	トークンを待ち行列から強制解放
30	チェックアウトの消去

次のデフォルト・オブジェクト・タイプは参照のみです。

値	説明
01	オブジェクト・ライブラリアン・オブジェクト
02	データ項目
03	バージョン
04	UDC
05	メニュー

06 ドキュメンテーション・レコード(SAR オブジェクト)

11 転送レコード(SAR オブジェクト)

12 履歴レコード(SAR オブジェクト)

▶ ユーザー・ロールを修正するには

〈オブジェクト管理メニュー〉メニュー(GH9081)から〈オブジェクト管理構成〉プログラム(P98230)を選択します。

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[ユーザー・ロール]ボタンをクリックします。
2. 修正するユーザー・ロールを選択します。
3. 変更する最初のフィールドをダブルクリックして修正します。
4. 必要な修正をすべて完了するまでステップ 3 を繰り返します。
5. [検索]をクリックし、修正結果がリストに表示されることを確認します。
6. [OK]をクリックします。

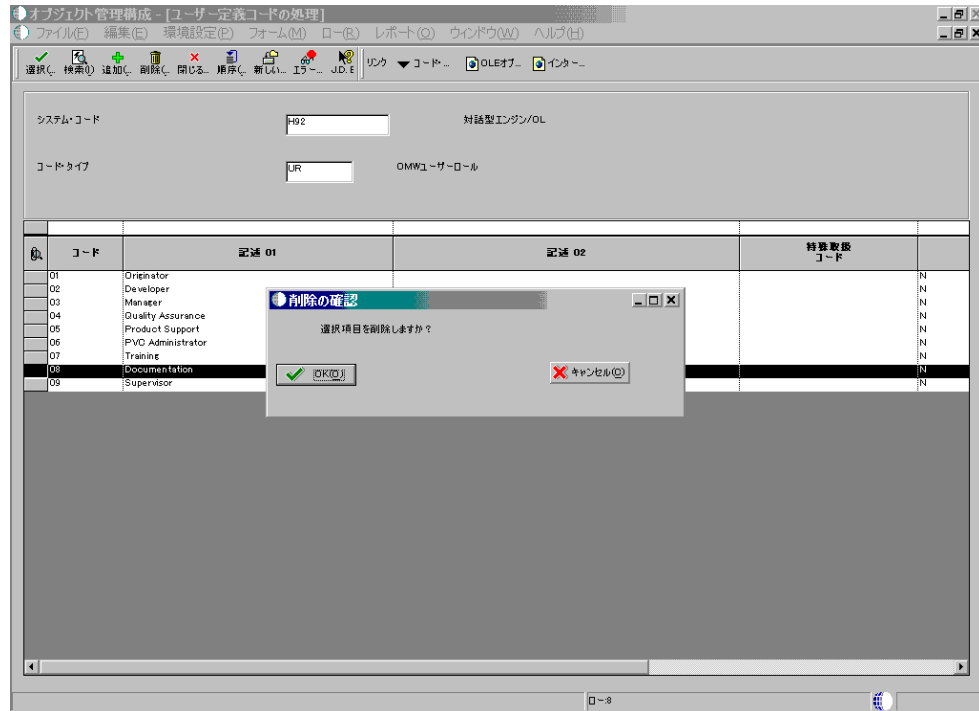
フィールド記述

記述	用語解説
記述 1	ユーザー定義名称または備考。
記述 2	J.D. Edwards システム中のフィールドをさらに記述または説明する追加テキスト。
ハードコード	ユーザー定義コードがハードコード化されているかどうかを示すコード。チェックマークの場合、選択されていればハードコードされていることを意味します。有効な値は次のとおりです。 Y ハードコードされている N ハードコードではない
コード	ユーザー定義コードテーブルの有効なコードのリスト
ユーザー定義コード	ユーザー定義コードを含むテーブルを示すコード。このテーブルは UDC(ユーザー定義コード)タイプともいいます。
特殊取扱コード	特定のユーザー定義コードの値に対して、特別の処理条件を指定するコード。このフィールドに入力する値は、各ユーザー定義コード・タイプに対して固有にしてください。 特殊取扱コードはさまざまに使用されます。たとえば、使用言語に定義された特殊取扱コードは、その言語がダブルバイトかどうか、または大文字が含まれていないかどうかを指定します。このフィールドをアクティブにするには、プログラミングが必要です。
システム・コード	システム・コードを示すユーザー定義コード(98/SY)

▶ ユーザー・ロールを削除するには

〈オブジェクト管理メニュー〉メニュー(GH9081)から〈オブジェクト管理構成〉プログラム(P98230)を選択します。

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[ユーザー・ロール]ボタンをクリックします。
2. 削除するユーザー・ロールの左のセルをクリックします。
3. [削除]をクリックします。



4. 〈削除の確認〉フォームで、[OK]をクリックします。
5. ステップ 2～4 を繰り返し、対象のユーザー・ロールをすべて削除します。
6. [検索]をクリックし、ユーザー・ロールが削除されたことを確認します。
7. [OK]をクリックします。

可能な操作の設定

〈可能な操作〉フォームでは、特定のプロジェクト状況で各オブジェクト・タイプについて許可する操作を、ユーザー・ロールに割り当てることができます。オブジェクト関連の許可する OMW 操作は、次のユーザー定義コードで定義します。

- 02 - チェックイン
- 03 - チェックアウト
- 04 - 削除
- 05 - 追加

- 06 - コピー
- 07 - インストール
- 08 - 保存
- 09 - 回復
- 10 - 設計
- 11 - 取得
- 12 - プロジェクトからオブジェクトを削除
- 13 - プロジェクトの更新
- 16 - オブジェクトをプロジェクトに追加
- 21 - トークンの切替え
- 23 - トークンを待ち行列から解放
- 30 - チェックアウトの消去
- 38 - 状況変更

たとえば、プロジェクトが状況 21 になっているときに、開発者にすべてのオブジェクト・タイプでのチェックインを許可する場合は、[ユーザー・ロール]フィールドに“02 - 開発者”、[オブジェクト・タイプ]フィールドに“*ALL”と入力し、[可能な操作]フィールドで“02 - チェックイン”、[プロジェクト状況]フィールドで“20 - プログラミング”を選択します。

注:

許可する操作を設定する前に、〈ユーザー定義コード〉フォームを使用して、ユーザー・ロールをユーザー・ロール UDC に追加する必要があります。

▶ 許可するユーザー操作を設定するには

〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[可能な操作]ボタンをクリックします。

1. [検索]をクリックし、以前に定義したユーザー操作を表示します。
2. 定義を追加できるようにブランク・ローを作成するには、処理対象の許可するユーザー操作を基準にソートします。
3. 必要な[QBE]カラムに値を入力して[検索]をクリックします。
4. リスト最下部にあるブランク・ローまでスクロールします。
5. ブランク・ローの次の各フィールドに値を入力します。
 - OMW ユーザーロール
 - オブジェクトタイプ
 - プロジェクト状況
 - 操作

注:

[ユーザー・ロール]以外のフィールドには“*ALL”と入力できます。*ALLは、選択したユーザー・ロールがすべてのオブジェクト・タイプ、プロジェクト状況または操作を処理できることを示します。

ローへの入力を完了すると、新規ローが表示されます。

6. 許可するユーザー操作をすべて設定し終わるまで、この手順を繰り返します。
7. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
OMW ユーザーロール	<p>プロジェクトにおけるユーザーの機能の定義。通常、プロジェクト・マネージャがユーザーにプロジェクトを割り当てます。プロジェクトを割り当てる場合は、ユーザーのロールも指定します。ユーザー・ロールの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">01 入力者: プロジェクトまたはその必要性を入力したユーザー。02 開発者: プロジェクトのオブジェクトを変更するユーザー。03 管理者: プロジェクトを管理するユーザー。04 品質管理: プロジェクトの機能を確認するユーザー。06 PVC 管理者: プロジェクトの状況、ユーザー・ロール、オブジェクトなどを設定するユーザー。 <p>--- フォーム固有 ---</p> <p>プロジェクトにおいて特定の役割を果たすユーザーのみが実行できるアクション</p>

オブジェクトタイプ

ONEWORLD というオブジェクトとは ONEWORLD ツールで作成されたソフトウェアスペックに基づく、使用可能なエンティティです。これらのオブジェクトには、バッチアプリケーション(UBE)、データ構造体(DSTR)オブジェクト、および対話型アプリケーション(APPL)などのオブジェクトライブラリアンのオブジェクトが含まれます。

OMW では、この定義を拡張して、パスコードベースのオブジェクトでなくオブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトタイプやデータソースベースのオブジェクトも含みます。ユーザー定義コントロール(UDC)、ワークフロー、ACTIVERA、メニュー、およびデータ項目などがあります。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトは次のとおりです。

- バッチアプリケーション
- ビジネス関数
- ビジネスビュー
- データ構造体
- イベントルール
- 対話型アプリケーション
- メディアオブジェクト
- テーブル オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクト
- データ辞書項目
- UDC 項目
- ワークフロー項目
- メニュー

--- フォーム固有 ---

アクションは特定のオブジェクトタイプに適用されます。処理に設定するオブジェクトタイプを選択してください。

プロジェクト状況

プロジェクト状況を示す値。有効な値は次のとおりです。

- 01 完了
- 11 新規プロジェクト保留検討
- 21 プログラミング
- 25 再作業 - 同じ問題
- 26 QA テスト/検討
- 28 QA テスト/検討完了
- 38 プロダクション
- 40 プロダクション開発
- 41 プロダクションをプロトタイプに転送
- 42 プロトタイプを開発に転送
- 45 プリステインの取得
- 91 エラー発生時にキャンセルを入力

このプロジェクト状況は、〈オブジェクト管理構成〉アプリケーション(P98230)で定義される状況アクティビティ・ルールの開始ポイントとなります。

--- フォーム固有 ---

操作が可能になった状況を示すインジケータ。その処理がすべてのプロジェクト状況コードに対して可能なことを示すには、“*ALL”を入力します。

操作

ユーザーが選択したオブジェクト・タイプで実行できる操作を識別する値。
プロジェクトが次の状況の場合に使用されます。

01 転送
02 チェックイン
03 チェックアウト
04 削除
05 追加
06 コピー
08 保存
09 回復
10 設計
11 取得
12 プロジェクトからオブジェクトを削除
13 プロジェクトの更新
16 プロジェクトへオブジェクトを追加
21 トークンの切替え
23 トークン待ち行列から強制解放
30 チェックアウトの消去
38 状況の変更

--- フォーム固有 ---

ユーザー・ロールに許可された操作を示すコード。ユーザー・ロールがすべての操作を実行できるように指定するには、“ALL”と入力します。指定する値は、ユーザー定義コード(H92/AX)に定義されている必要があります。

オブジェクト管理ワークベンチ機能の構成

オブジェクト管理ワークベンチ(OMW)機能を構成するために、SAR システムを無効にすることができます。社内で SAR を使用していない場合は、この操作が必要です。ログ詳細を制御すると、ログが完了しなかった場合に開発を無効にしたり制限したりできます。また、プロジェクトの固定情報を設定して、プロジェクト開発をトラッキングすることができます。

SAR システム・インテグレーションの無効化

ほとんどの企業には、SAR(ソフトウェア・アクション・リクエスト)システムはありません。〈オブジェクト管理の設定〉フォームで[SAR システム・インテグレーション]ボタンの右にある設定インジケータを調べると、SAR システム・インテグレーションが無効化されているかどうかを確認できます。

SAR システムがインストールされていないのに、[SAR システム・インテグレーション]設定インジケータで SAR システム・インテグレーションが有効になっている場合は、無効にする必要があります。

▶ SAR システム・インテグレーションを無効化するには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[SAR システム・インテグレーション]ボタンをクリックします。
2. [SAR システムの統合]オプションがオフになっていることを確認します。
3. 他のすべてのフィールドがグレー表示され、選択されていないことを確認します。
4. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述

用語解説

SAR システムの統合

オブジェクト管理ワークベンチ(OMW)を使用すると、SAR と OMW プロジェクトを関連付けることができます。OMW と SAR のインテグレーションスキームにより OMW から SAR システムを更新できます。SAR システムが OMW を更新することはできません。

このオプションがオンになっていると、ユーザー定義コード(H92/SI)で、インテグレーションポイントを設定する必要があります。SAR インテグレーションフォームにある OMW SAR マップエグジットを使用すると、この UDC に対するユーザー定義コードが表示されます。

OMW では次のことが可能です。

- プロジェクトの状況コードを変更した場合、関連する SAR の状況も変更する。
- プロジェクトにオブジェクトを追加したときに SAR セクションも更新する。
- ユーザーを SAR から関連するロールの関連プロジェクトに追加する。

SAR ビジネス・データ

システムビジネスデータソース(自動入力の場合)および SAR インテグレーションがオンの場合、オブジェクト管理ワークベンチ(OMW)では、このフィールドからデータソースが使用され、SAR システムを使用する場合には作業オーダーと住所録テーブルが開かれます。

フィールドをブランクのままにすると、SAR インテグレーションがオンの場合でも、SAR システムを使用する際に OMW が OCM を使ってこれらのテーブルを開きます。マップするテーブルは、F0001、F0006、F0101、F0111、F01131、F01132、F01133、F069116、F0901、F0911、F48001、F48002、F4801、F4802、F4826 です。

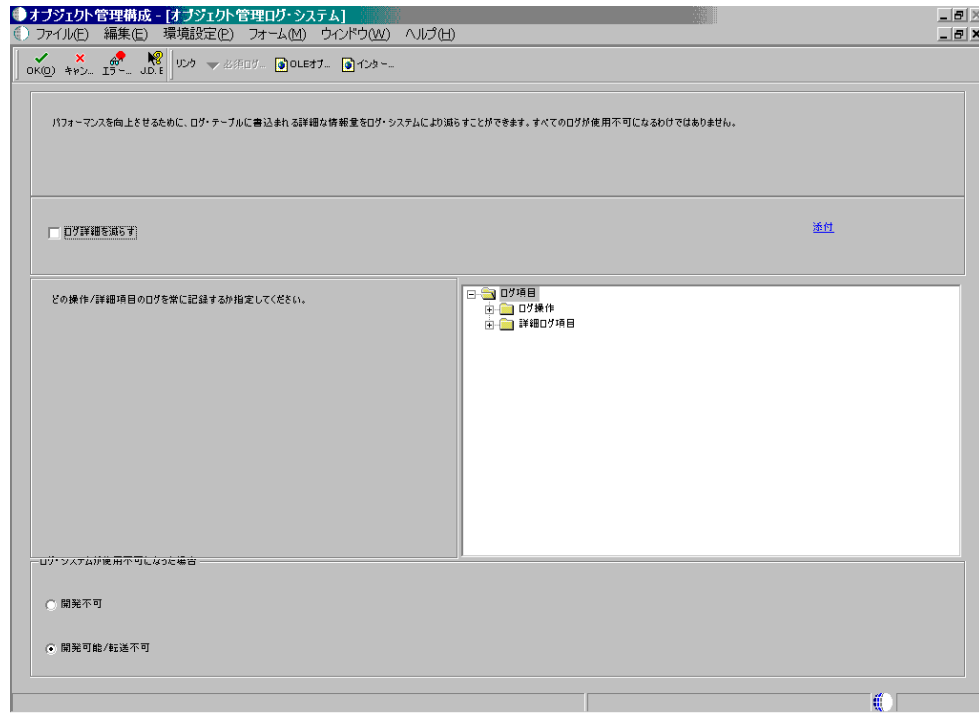
SAR 制御テーブル・データ

システムコントロールデータソース(自動入力の場合)および SAR インテグレーションがオンの場合、オブジェクト管理ワークベンチ(OMW)では、このデータソースが使用され、SAR システムを使用する場合には自動採番およびユーザー定義コードテーブルが開かれます。フィールドをブランクのままにすると、SAR インテグレーションがオンの場合でも、SAR システムを使用する際に OMW が OCM を使ってこれらのテーブルを開きます。

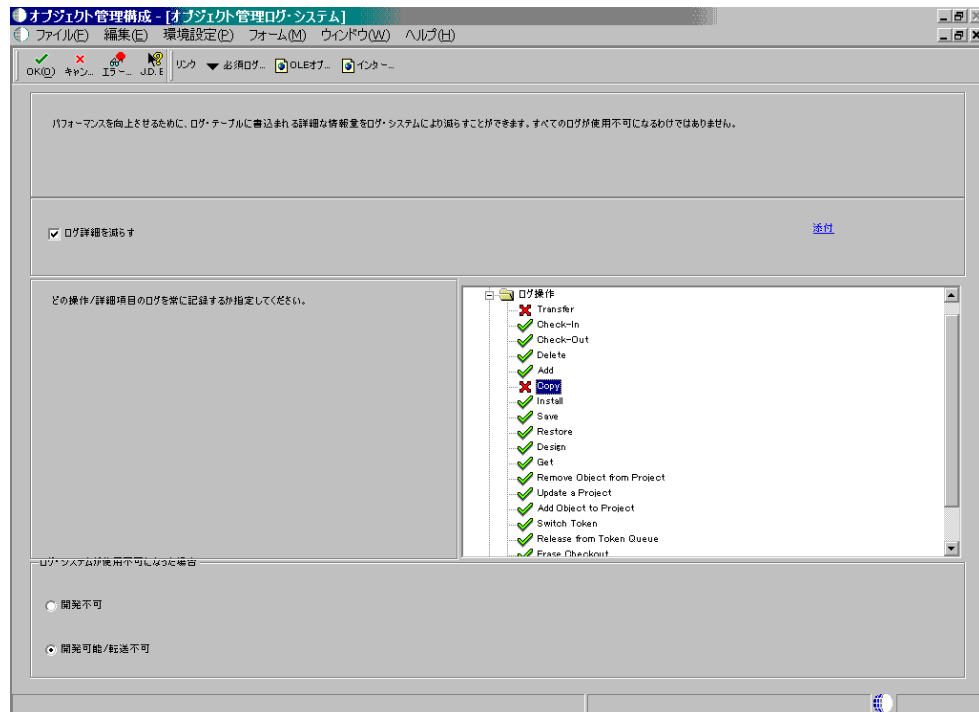
▶ ログ詳細を制御するには

〈オブジェクト管理ログ・システム〉フォームでは、ログを記録するプロジェクトとオブジェクトのイベントを指定できます。

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[ログ・システム]ボタンをクリックします。



2. [ログ詳細を減らす]オプションをクリックにします。
選択したオプションの横にはチェックマークが表示されます。
3. [ログ操作]フォルダと[詳細ログ項目]フォルダをダブルクリックします。
4. 詳細を記録しない項目をダブルクリックします。
選択解除した項目の横には、赤い X マークが表示されます。



5. 不要なログ詳細項目をすべて選択解除し終わるまで、ステップ 3 を繰り返します。
6. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
ログ詳細の減少	社内のすべてのユーザーに対して、オブジェクト管理ワークベンチ (OMW)がログ詳細レベルを下げます。低レベルのログは、ほとんどの詳細ログを削除しますが、オブジェクトの転送、チェックイン、および削除などの主なイベントのログは保存します。

▶ ログ・エラー発生時の開発を制御するには

〈オブジェクト管理ログ・システム〉フォームでは、ログ・エラーの発生時に開発を無効化するか、または開発は許可して転送を無効化するように設定できます。

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[ログ・システム]ボタンをクリックします。
2. ログ・エラーの発生時に開発を無効化するには、[開発不可]オプションをオンにします。
3. ログ・エラーの発生時に開発は許可してオブジェクト転送を無効化するには、[開発可能/転送不可]オプションをオンにします。

注:

[開発可能/転送不可]ボタンは、デフォルトで有効になっています。

4. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
開発不可	データベースとログテーブルにエラーがあっても、続行できます。 ただし、ログシステムがダウンしている間はオブジェクトを転送できません。これは、本稼働用環境の整合性を確実にするためです。
開発可能/転送不可	データベースとログテーブルにエラーがあっても、続行できます。 ただし、ログシステムがダウンしている間はオブジェクトを転送できません。これは、本稼働用環境の整合性を確実にするためです。

プロジェクト固定情報の設定

〈オブジェクト管理固定情報〉フォームでは、OMW プロジェクトに関する一般固定情報を設定することができます。設定できるプロジェクト固定情報は、次のとおりです。

- ユーザーの個人用デフォルト・プロジェクトのプロジェクト状況
- すべての新規プロジェクトのプロジェクト状況
- プロジェクトの作成者に割り当てるユーザー・ロール

▶ プロジェクト固定情報を設定するには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで[固定情報]ボタンをクリックします。
2. ユーザーの個人用デフォルト・プロジェクトのプロジェクト状況を入力するには、次のフィールドのビジュアル・アシストをクリックします。
 - ユーザーのデフォルト・プロジェクトのプロジェクト状況コードを入力してください。
3. プロジェクト状況をダブルクリックします。
4. すべての新規プロジェクトの初期プロジェクト状況を入力するには、次のフィールドのビジュアル・アシストをクリックします。
 - すべてのプロジェクトに当初のプロジェクト状況を入力してください。
5. プロジェクト状況をダブルクリックします。
6. 入力者をプロジェクトに割り当てるときに使用するユーザー・ロールを入力するには、次のフィールドのビジュアル・アシストをクリックします。
 - プロジェクトに入力者を割り当てるときに使うユーザー・ロールを入力してください。
7. プロジェクト状況をダブルクリックします。

注:

この3つのフィールドの右にある[添付]ボタンをクリックすると、それぞれの添付情報を表示できます。

アクティビティ・ルールの構成

〈オブジェクト管理の設定〉フォームの[アクティビティ・ルール]ボタンを使用すると、プロジェクト状況アクティビティ・ルールとオブジェクト転送アクティビティ・ルールの両方を設定できます。プロジェクト状況アクティビティ・ルールでは、プロジェクト開発サイクル中に発生するさまざまなアクティビティを定義します。オブジェクト転送アクティビティ・ルールはプロジェクト状況アクティビティ・ルールと連動し、移動されるオブジェクトの移動元と移動先のロケーションを定義します。

プロジェクト状況アクティビティ・ルールの設定

開発があるフェーズから次のフェーズへと以降する際の、プロジェクトのさまざまな状況を設定できます。たとえば、プロジェクトがプログラミング・フェーズから管理者検討フェーズへと移行する場合があります。このような切替えごとに次の情報を定義します。

- このプロジェクト状況ルールがアクティブかどうか
- このプロジェクト状況の切替えが適用されるシステム・ロール
- 関連する To プロジェクト状況
- 関連する From および To SAR*状況

From および To の SAR 状況を指定するのは、[SAR インテグレーション]が有効になっている場合のみです。

初期化されているデフォルト状況

インストールされているプロジェクト状況とその定義は、次のとおりです。

- 01 - 完了
- 11 - 新規プロジェクト保留検討
- 21 - プログラミング
- 25 - 再作業 - 同じ問題
- 26 - QA テスト/検討
- 28 - QA テスト/検討
- 38 - プロダクション
- 40 - プロダクション開発
- 41 - プロダクションをプロトタイプに転送
- 42 - プロトタイプを開発に転送
- 45 プリスティンの取得
- 91 - 入力エラーのキャンセル

▶ プロジェクト状況アクティビティ・ルールをセットアップするには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[アクティビティ・ルール]ボタンをクリックします。
2. [検索]をクリックします。
有効なプロジェクト From 状況がすべて表示されます。
3. 1 つ以上の To プロジェクト状況を設定する[プロジェクト状況コード(From)]をクリックします。
4. [選択]をクリックします。
〈プロジェクト状況アクティビティ・ルール〉に、選択した From プロジェクト状況に有効な To プロジェクト状況がすべて表示されます。

現在のプロジェクト状況は[プロジェクト状況コード(From)]フィールドに表示されます。
5. リストの下にあるブランクのローまでスクロールして、次のフィールドに値を入力します。
 - アクティブ
このフィールドを使用すると、特定のユーザーのみ、または指定したグループのメンバーであるユーザーのみに、状況変更を許可することができます。このルールをユーザー全員が使用できるようにするには、このフィールドに"*PUBLIC"と入力します。
 - ユーザー/ロール
 - プロジェクト状況コード (To)
 - SAR 状況(FROM)
このフィールドに値を入力するのは、プロジェクトが SAR を伴い、[SAR インテグレーション]が有効になっている場合のみです。[SAR インテグレーション]が無効化されている場合、これらのカラムは使用不可になります。
 - SAR 状況(To)
このフィールドに値を入力するのは、プロジェクトが SAR を伴い、[SAR インテグレーション]が有効になっている場合のみです。[SAR インテグレーション]が無効化されている場合、このカラムは使用不可になります。

値を入力したローの下にブランク・ローが表示されます。
6. ステップ 5 を繰り返して、この From プロジェクト状況の他の To プロジェクト状況を設定または修正します。
7. 操作を完了してから[OK]をクリックします。
8. 次の From プロジェクト状況を選択して 5 から 7 までの手順を繰り返し、それぞれの From プロジェクト状況コードにプロジェクト・アクティビティ・ルールを設定します。
9. すべてのプロジェクト・アクティビティ・ルールが完成した後に、[OK]をクリックして〈オブジェクト管理アクティビティ・ルールの処理〉フォームに戻ります。
10. [閉じる]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
アクティブ	プロジェクトの状況ルールをアクティブにするかどうかを指定できます。 アクティブでない場合は、(OMW エンジンにより)実行されません。
プロジェクト状況コード (From)	プロジェクト状況コードの 1 つです。次のオプションがあります。 01 完了 11 検討を保留 17 計画または調査 18 設計 19 設計の検討 21 プログラミング 22 プログラマテスト 23 管理者の検討 24 本稼働用への転送 25 再作業 26 QA テスト 28 QA テスト完了
プロジェクト状況コード (To)	現在は元("FROM")状況コードのプロジェクトに次に使用可能な状況コード
SAR 状況(FROM)	プロジェクトが元("FROM")状況コードにあり、先("TO")状況コードに移動された場合、対応する SAR はこの状況コードになります。
SAR 状況(To)	プロジェクトが元("FROM")状況コードにあり、先("TO")状況コードに移動された場合、対応する SAR はこの状況コードになります。

オブジェクト転送アクティビティ・ルールの設定

操作を実行するプロジェクトに使用するオブジェクト・タイプごとに、オブジェクト転送アクティビティ・ルールを構成する必要があります。

操作を実行するオブジェクト・タイプごとに、次の情報を定義してください。

- ユーザーがオブジェクトをチェックイン、チェックアウト、および取得するときのプロジェクト状況。オブジェクトを取得するとは、チェックアウトせずにそのスペックを作業領域にコピーすることを意味します。
- オブジェクト転送時の状況変更
- オブジェクトのトークンが解放されるときプロジェクト状況

オブジェクト転送アクティビティ・ルールの設定時には、次のオブジェクト・ロケーション定義タスクを実行する必要があります。

- 各プロジェクト状況切替え時の各オブジェクト・タイプの FROM 転送ロケーションと TO 転送ロケーションを定義します。たとえば、プロジェクト状況 21 (開発) がプロジェクト状況 26 (プロトタイプ) に変わる場合を考えます。この場合、オブジェクトは DV9 から PY9 に転送されます。

- オブジェクト・ライブラリアン・オブジェクト・タイプのチェックアウト・ロケーションと取得ロケーションを定義します。
- オブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトのチェックイン・ロケーションを定義します。

注:

転送アクティビティ・ルールには、発生順序の制限はありません。たとえば、複数のオブジェクト転送を必要とする状況変更があるとして、オブジェクトは任意の順序で取り込めるので、オブジェクトを DV9、PY9、PD9 へと順に転送する場合は、DV9 から PY9 へのオブジェクト転送ルールと、DV9 から PD9 へのオブジェクト転送ルールを設定できます。

▶ オブジェクト転送アクティビティ・ルールを設定するには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[アクティビティ・ルール]ボタンをクリックします。
2. [検索]をクリックし、使用可能なプロジェクト状況をすべて表示します。
3. オブジェクト転送アクティビティ・ルールをセットアップする[プロジェクト状況コード(From)]フォルダをダブルクリックします。
4. 関連する To プロジェクト状況を 1 つクリックします。

このフィールドでは、オブジェクト転送アクティビティ・ルールを構成する From および To プロジェクト状況の切替えを完了する To プロジェクト状況を定義します。From および To プロジェクト状況の切替えごとに、さまざまなオブジェクト・タイプに関する複数のオブジェクト転送アクティビティ・ルールを作成できます。

5. [選択]をクリックします。
6. リスト最下部にあるブランク・ローまでスクロールします。必要なオブジェクト・タイプの次のフィールドに値を入力します。

- アクティブ
- ユーザー/ロール

このフィールドを使用すると、特定のユーザーのみ、または指定したグループのメンバーであるユーザーのみに、アクティビティ・ルールを適用することができます。このルールをユーザー全員が使用できるようにするには、このフィールドに“*PUBLIC”と入力します。

- オブジェクトタイプ

注:

転送アクティビティ・ルールを定義するときには、“*ALL”は使用できません。

- ロケーション(FROM)
- ロケーション(To)

注:

オブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトでは[ロケーション(From)]と[ロケーション(To)]の値にパス・コードが使用されますが、非オブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトの場合はデータ・ソース値が使用されます。バージョンの場合は、パス・コードを入力すると、バージョンのバージョン・リスト・レコード(F983051)とスペックが転送され(バッチ・バージョンの場合)、データ・ソースを入力すると、F983051 レコードのみが定義したロケーション間で転送されます。

- リリース(From)

このフィールドには、現在作業している ERP 9.0 のリリース・レベルが表示されます。[リリース(From)]の値は、[リリース(To)]の値と同じになります。

- リリース(To)

現在は使用されていません。このフィールドには、[リリース(From)]の値が自動入力されます。

- トークンのリリース

- 許可する操作

完了するとブランクのローが表示されます。ワークフロー・オブジェクトの転送アクティビティ・ルールをセットアップする場合は、追加のフォームが表示されます。このフォームを使用して、アクティビティ・スペック・テーブル(F98811)レコードの From データ・ソース値と To データ・ソース値を指定します。

7. この手順を繰り返して、このプロジェクト状況切替えの他のオブジェクト・タイプを設定または修正します。
8. [OK]をクリックし、〈オブジェクト管理アクティビティ・ルール〉フォームに戻ります。
9. 次の From および To プロジェクト状況を選択してこの手順を繰り返し、オブジェクト転送アクティビティ・ルールを設定します。
10. すべてのオブジェクト転送アクティビティ・ルールを完成するまで、ステップ 9 を繰り返します。
11. [OK]をクリックし、〈オブジェクト管理アクティビティ・ルール〉フォームに戻ります。
12. [閉じる]をクリックします。

注:

APPL オブジェクトの転送アクティビティ・ルールを設定する場合は、OMW で APPL オブジェクトの*PUBLIC ユーザー一時変更を転送できるように、ユーザー一時変更オブジェクト・タイプのルールも定義する必要があります。このルールを定義しなければ、APPL オブジェクトは正常に転送されません。

フィールド記述

記述

用語解説

プロジェクト状況 - FROM: プロジェクト状況コードの 1 つです。次のオプションがあります。

- 01 完了
- 11 検討を保留
- 17 計画または調査
- 18 設計
- 19 設計の検討
- 21 プログラミング
- 22 プログラムテスト
- 23 管理者の検討
- 24 本稼働用への転送
- 25 再作業
- 26 QA テスト
- 28 QA テスト完了

To: 現在は元("FROM")状況コードのプロジェクトに次に使用可能な状況 コード

アクティブ

プロジェクトの状況ルールをアクティブにするかどうかを指定できます。
アクティブでない場合は、(OMW エンジンにより)実行されません。

ユーザー/ロール

To 状況が有効となる対象のユーザーまたはグループを示す値。有効な To 状況
に対してユーザーが設定されていない場合は、プロジェクトをこの状況に進めるこ
とができません。

"*PUBLIC"は、このフィールドに有効です。

--- フォーム固有 ---

転送アクティビティ・ルールが有効となる対象のユーザーまたはグループ。示され
た状況が変更する間、オブジェクト管理ワークベンチ(OMW)がユーザーに対して、
このフィールドで*PUBLIC の付くオブジェクトをすべての転送ルールに対して転送
します。

注:これは一時変更ではありません。*PUBLIC に対してルールを 1 つ、およびユ
ーザーID と一致するルールをオブジェクト・タイプに 1 つ定義すると、オブジェクト
は 2 回転送されます。

オブジェクトタイプ

ONEWORLD でいうオブジェクトとは ONEWORLD ツールで作成されたソフトウェアスペックに基づく、使用可能なエンティティです。これらのオブジェクトには、バッチアプリケーション(UBE)、データ構造体(DSTR)オブジェクト、および対話型アプリケーション(APPL)などのオブジェクトライブラリアンのオブジェクトが含まれます。

OMW では、この定義を拡張して、パスコードベースのオブジェクトでなくオブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトタイプやデータソースベースのオブジェクトも含まれます。ユーザー定義コントロール (UDC)、ワークフロー、ACTIVERA、メニュー、およびデータ項目などがあります。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトは次のとおりです。

- バッチアプリケーション
- ビジネス関数
- ビジネスビュー
- データ構造体
- イベントルール
- 対話型アプリケーション
- メディアオブジェクト
- テーブル オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクト
- データ辞書項目
- UDC 項目
- ワークフロー項目
- メニュー

ロケーション(FROM)

プロジェクトが元("FROM")状況コードから先("TO")状況コードへ進行すると、指定されたタイプのロケーションにあるオブジェクトは、どれも元("FROM")ロケーションから先("TO")ロケーションへ移動されます。

オブジェクトタイプがオブジェクトライブラリアンまたはスペックベースのオブジェクトの場合はこれがパスコードとなり、オブジェクトのタイプが UDC やメニューなどのオブジェクトライブラリアン以外の場合は、データソースとなります。

ロケーション(To)

プロジェクトが元("FROM")状況コードから先("TO")状況コードへ進行すると、指定されたタイプのロケーションにあるオブジェクトは、どれも元("FROM")ロケーションから先("TO")ロケーションへ移動されます。

オブジェクトタイプがオブジェクトライブラリアンまたはスペックベースのオブジェクトの場合は、これがパスコードとなり、オブジェクトのタイプが UDC やメニューなどのオブジェクトライブラリアン以外の場合は、データソースとなります。

リリース(FROM)

転送ルールは、このリリースにおけるプロジェクトのオブジェクトにのみ適用します (オブジェクトは常にプロジェクトのリリースに固有です)。リリース (From/元) およびリリース (To/先) フィールドは、常に同じです。

トークンのリリース

すべてのプロジェクトには、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトが含まれ、これらのオブジェクトでは、1人のユーザーがオブジェクトに対する別のユーザーの変更を上書きしないように、トークンが使用されます。

トークン管理システムは、単一チェックアウト環境を提供し、アプリケーション開発を系統立てます。トークンでは、オブジェクトをマージしたりオブジェクトバージョンを設定する必要はありません。

--- フォーム固有 ---

プロジェクト状況コードが変更された後にオブジェクトのトークンを解放するかどうか指定してください。スペックは転送せずに状況変更のみを行う状況でトークンを解放する場合は、先("TO")および元("FROM")ロケーションは空白にします。状況コードフローでトークンを解放しないとトークンは解放されず、次の開発者がこのオブジェクトを処理できなくなります。

許可する操作

ユーザーが選択したオブジェクト・タイプで実行できる操作を識別する値。プロジェクトが次の状況の場合に使用されます。

- 01 転送
- 02 チェックイン
- 03 チェックアウト
- 04 削除
- 05 追加
- 06 コピー
- 08 保存
- 09 回復
- 10 設計
- 11 取得
- 12 プロジェクトからオブジェクトを削除
- 13 プロジェクトの更新
- 16 プロジェクトへオブジェクトを追加
- 21 トークンの切替え
- 23 トークン待ち行列から強制解放
- 30 チェックアウトの消去
- 38 状況の変更

--- フォーム固有 ---

オブジェクト転送アクティビティ・ルールがこの状況に適用する操作タイプ。有効な値は次のとおりです。

- 01 転送のみ
- 02 削除のみ
- 03 転送または削除
- 04 チェックイン
- 05 チェックアウト/取得

OMWによって状況変更でオブジェクトが転送されると決定された場合、操作 01 および 03 のオブジェクト転送アクティビティ・ルールが使用されます。オブジェクトを削除すると決定した場合は、操作 02 と 03 のオブジェクト転送アクティビティ・ルールが使用されます。この状況でチェックインが行われた場合、OMWでは 04 のオブジェクト転送アクティビティ・ルールが使用されます。チェックアウトが行われた場合は、05 のオブジェクト転送アクティビティ・ルールが使用されます。オブジェクトを削除しようとして削除フォームで[サーバーから削除]を選択すると、02 のオブジェクト転送アクティビティ・ルールが使用されます。

すべての操作には 05 を除いて複数のルールが使用できます。オブジェクト・タイプの 05 ルールは、1つのプロジェクト状況について1つしか使用できません。

オブジェクトの保存ロケーションの構成

OMW を使用すると、保存ロケーションを作成できます。パス・コード開発者は、このロケーションに各自のオブジェクトを保存します。保存されたオブジェクトを転送できるように、作成した保存ロケーションを使用してシステムにパス・コードを追加します。保存ロケーションは、修正したり削除することもできます。

保存ロケーションの作成

インストール・プロセス中に、OMW 保存ロケーションとして使用する他のパス・コードが追加作成されていない場合があります。この機能を使用するには、開発者が開発中にオブジェクトを保存するパス・コードを作成する必要があります。ユーザーが保存を実行すると、そのオブジェクトは保存ロケーションとして定義したパス・コードにチェックインされ、復元を実行するとオブジェクトはこのロケーションから取り込まれます。

▶ オブジェクトの保存ロケーションを追加するには

〈オブジェクトのロケーション〉フォームには、オブジェクト・ライブラリアン(OL)オブジェクトのロケーションが表示されます。保存ロケーションを定義すると、保存されているオブジェクトを指定されたパス・コードに転送できます。現在、定義できるのはオブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトの保存ロケーションのみです。

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[保存ロケーション]ボタンをクリックします。
[ロケーション]カラムには、ERP 9.0 のバージョンがインストールされているパス・コードの名前が表示されます。
2. 新規ロケーションを追加するには、[ロケーション]カラムのブランク・フィールドをクリックします。
3. ビジュアル・アシスト・ボタンをクリックします。
4. オブジェクトの現在のロケーションを探してダブルクリックします。
〈オブジェクトのロケーション〉フォームが再表示され、今度は[ロケーション]カラムにオブジェクトの現在のロケーションが表示されます。
5. 同じローで、ステップ 4 でクリックした[ロケーション]フィールドの右にある[保存ロケーション]フィールドまでスクロールしてダブルクリックします。
6. ビジュアル・アシスト・ボタンをクリックします。
7. オブジェクトの新規ロケーションまでスクロールしてダブルクリックします。
〈オブジェクトのロケーション〉フォームが再表示され、今度は[保存ロケーション]カラムにオブジェクトの新規ロケーションが表示されます。
8. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
ロケーション	スペックを保存しようとしているユーザーに割り当てられるパスコード
保存ロケーション	オブジェクトのスペックを保存するパスコードを入力してください。

▶ オブジェクトの保存ロケーションを変更するには

〈オブジェクトのロケーション〉フォームでは、オブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトの保存ロケーションを修正できます。この操作は、プロジェクト中に必要になる場合があります。

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで[保存ロケーション]ボタンをクリックします。
2. [保存ロケーション]フィールドをクリックします。
3. ビジュアル・アシスト・ボタンをクリックします。
4. オブジェクトの新規保存ロケーションまでスクロールしてダブルクリックします。

〈オブジェクトのロケーション〉フォームが再表示され、今度は[保存ロケーション]カラムにオブジェクトの修正後の保存ロケーションが表示されています。

5. [OK]をクリックします。

▶ オブジェクトの保存ロケーションを削除するには

オブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトを削除する場合は、システムから完全に削除されるように、そのオブジェクトの保存ロケーションも削除する必要があります。

1. 〈オブジェクト管理構成〉フォームで、[保存ロケーション]ボタンをクリックします。
2. 〈オブジェクトのロケーション〉で、削除するレコードを選択します。
3. [削除]をクリックします。
4. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。
5. [OK]をクリックします。

通知の設定

〈通知サブスクリプション〉では、オブジェクトのチェックインやチェックアウトなど、システム内のオブジェクト変更に関する電子メールがユーザーに送信されます。オブジェクトの通知を有効にすると、通知サブスクリプションで追加、変更、削除、ソートなどができます。〈オブジェクト操作の通知〉は、デフォルトで使用可能になっています。

▶ オブジェクト操作の通知を有効または無効にするには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[オブジェクト操作の通知]ボタンをクリックします。
2. オブジェクト操作の通知を有効にするには、[オブジェクト操作通知のアクティブ化]オプションをオンにします。
3. オブジェクト操作の通知を無効にするには、[オブジェクト操作通知のアクティブ化]オプションをオフにします。
4. [OK]をクリックします。

注:

プロジェクトに対するユーザーの追加または削除に関する通知は、オブジェクト操作の通知を無効にしても常に送信されます。この状況では、該当ユーザーに電子メール・メッセージが送信されます。

フィールド記述

記述	用語解説
オブジェクト操作通知のアクティブ化	通知システムを使用可能にするフラグ。オブジェクト管理ワークベンチ(OMW)により ONEWORLD オブジェクトで実行された操作に関して、ユーザーに電子メールメッセージを送信します。環境設定アプリケーション(P98230)の OMW 通知サブスクリプションフォームを使用して、通知システムの環境設定を行ってください。

▶ 通知サブスクリプションを追加するには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[通知の設定]ボタンをクリックします。
2. [検索]をクリックし、現在の通知サブスクリプションを表示します。
3. ブランク・ローまでスクロールし、次の必須フィールドに値を入力します。
 - OMW ユーザーロール
 - 操作
4. 以下のオプションのフィールドに情報を入力します。
 - オブジェクトタイプ
 - オブジェクト名
 - レポートシステム・コード
 - パスコード情報入力を完了すると、新規のローが表示されます。
5. すべての通知サブスクリプションの追加を完了するまで、ステップ 3 と 4 を繰り返します。
6. [OK]をクリックします。

注:

通知サブスクリプションは、次のオブジェクトに対して実行される操作に関して作成できます。

- 指定したシステム・コードのすべてのオブジェクト
 - 指定したタイプのすべてのオブジェクト
 - 1 および 2 の組合せによるすべてのオブジェクト
 - 特定のオブジェクト名とタイプ
-

フィールド記述

記述	用語解説
操作	<p>ユーザーが選択したオブジェクト・タイプで実行できる操作を識別する値。 プロジェクトが次の状況の場合に使用されます。</p> <p>01 転送 02 チェックイン 03 チェックアウト 04 削除 05 追加 06 コピー 08 保存 09 回復 10 設計 11 取得 12 プロジェクトからオブジェクトを削除 13 プロジェクトの更新 16 プロジェクトへオブジェクトを追加 21 トークンの切替え 23 トークン待ち行列から強制解放 30 チェックアウトの消去 38 状況の変更</p>
オブジェクト名	<p>ONEWORLD オブジェクトの識別子として働く 200 文字フィールドオブジェクト管理 ワークベンチオブジェクトタイプ(OMWOT)と組み合わせて使用すると、どの ONEWORLD オブジェクトも識別することができます。このフィールドを使用して識 別子を保管するオブジェクトタイプのリストは、H92/OT UDC を参照してください。</p> <p>--- フォーム固有 ---</p> <p>オブジェクト名 - オブジェクト名に基づいて通知を設定することができます。指定し た名前のオブジェクトを含むプロジェクトにアクションが起こると、メッセージがユー ザーに送信されます。オブジェクト名は常にオブジェクトタイプと組み合わせて使 用します。</p> <p>オブジェクトタイプ - オブジェクトタイプに基づいて通知を設定することができま す。指定したタイプのオブジェクトを含むプロジェクトにアクションが起こると、メッセ ージがユーザーに送信されます。オブジェクトタイプは常にオブジェクト名と組み合 わせて使用します。</p>

オブジェクトタイプ

ONEWORLD でいうオブジェクトとは ONEWORLD ツールで作成されたソフトウェアスペックに基づく、使用可能なエンティティです。これらのオブジェクトには、バッチアプリケーション(UBE)、データ構造体(DSTR)オブジェクト、および対話型アプリケーション(APPL)などのオブジェクトライブラリアンのオブジェクトが含まれます。

OMW では、この定義を拡張して、パスコードベースのオブジェクトでなくオブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトタイプやデータソースベースのオブジェクトも含まれます。ユーザー定義コントロール(UDC)、ワークフロー、ACTIVERA、メニュー、およびデータ項目などがあります。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトは次のとおりです。

- バッチアプリケーション
- ビジネス関数
- ビジネスビュー
- データ構造体
- イベントルール
- 対話型アプリケーション
- メディアオブジェクト
- テーブル オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクト
- データ辞書項目
- UDC 項目
- ワークフロー項目
- メニュー

パスコード

ONEWORLD オブジェクトのポインタとなり、ONEWORLD 内でのオブジェクトとそのロケーションをトラッキングするのに使用します。

レポートシステム・コード

レポートおよびアプリケーション一時変更のシステム番号を示すユーザー定義コード(98/SY)。

--- フォーム固有 ---

システムコードに基づいて通知を設定することがあります。オブジェクトがプロジェクトにあり、指定されたシステムコードに属し、オブジェクトに対して指示された処理が行われるか、指定されたパスコードにオブジェクトが移動された場合、メッセージがユーザーに送信されます。

OMW ユーザーロール

プロジェクトにおけるユーザーの機能の定義。通常、プロジェクト・マネージャがユーザーにプロジェクトを割り当てます。プロジェクトを割り当てる場合は、ユーザーのロールも指定します。ユーザー・ロールの例は次のとおりです。

- 01 入力者:プロジェクトまたはその必要性を入力したユーザー。
- 02 開発者:プロジェクトのオブジェクトを変更するユーザー。
- 03 管理者:プロジェクトを管理するユーザー。
- 04 品質管理:プロジェクトの機能を確認するユーザー。
- 06 PVC 管理者:プロジェクトの状況、ユーザー・ロール、オブジェクトなどを設定するユーザー。

--- フォーム固有 ---

プロジェクトにおいて特定の役割を果たすユーザーのみが実行できるアクション

▶ 通知サブスクリプションを修正するには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[通知の設定]ボタンをクリックします。
2. 〈通知サブスクリプション〉で、[検索]をクリックして現在の通知サブスクリプションを表示します。
3. 修正するフィールドを選択して変更を加えます。
4. [OK]をクリックします。

▶ 通知サブスクリプションを削除するには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[通知の設定]ボタンをクリックします。
2. 〈通知サブスクリプション〉で、削除するレコードを選択します。
3. [削除]ボタンをクリックします。
4. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。
5. [OK]をクリックします。

▶ 通知サブスクリプションをソートするには

1. 〈オブジェクト管理の設定〉フォームで、[通知の設定]ボタンをクリックします。
2. ルール見出しの上で、フィルタ処理する[QBE]カラムをクリックします。
ビジュアル・アシストが表示されたら、フィルタ条件をダブルクリックします。他の[QBE]カラムにフィルタ条件を入力します。
3. [検索]をクリックします。
フィルタ処理された通知サブスクリプションが表示されます。
4. [OK]をクリックします。

ログの処理

〈オブジェクト管理ワークベンチ〉には、オブジェクト管理ログ・アプリケーションが含まれています。プロジェクト・ログとオブジェクト・ログは、プロジェクトやオブジェクトの開発履歴の優れた検討手段です。さらに、モニタに現在表示されているログのレコードのログ詳細を表示できます。〈ログ詳細の処理〉フォームから、〈ログ・テキストのフル表示〉ウィンドウに実際のログ・エントリを表示できます。

このアプリケーションでは、ログ・フィールドを並べ替えてソフトウェア開発レポートをカスタマイズすることもできます。特定のオブジェクトまたはプロジェクトに関して、すべてのログ、ソート済みログ、または最新のログ操作のみを表示できます。次の2つのタスクは同時に実行して、カスタマイズしたプロジェクトとオブジェクト開発レポートを作成してください。

- ログ・レコード・フィールドの順序再設定
- ログの印刷

▶ プロジェクト・ログまたはオブジェクト・ログを表示するには

1. Solution Explorer で、[略式コマンド]フィールドに“GH902”と入力して[Enter]キーを押します。
2. 〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ログ〉を選択します。
3. 〈オブジェクト管理ログの処理〉で、次の操作のいずれかを実行します。
 - [検索]をクリックし、OMW 内のすべてのプロジェクトとそのオブジェクトのログを表示します。
 - [QBE]セルにソート条件を入力し、検索結果をフィルタ処理して[検索]をクリックします。
 - [最後の処理のみを表示]オプションをクリックし、特定のプロジェクトまたはオブジェクトに関する最新のログ操作のみを表示します。
4. [閉じる]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
オブジェクト名	ONEWORLD オブジェクトの識別子として働く 200 文字フィールドオブジェクト管理ワークベンチオブジェクトタイプ(OMWOT)と組み合わせて使用すると、どの ONEWORLD オブジェクトも識別することができます。このフィールドを使用して識別子を保管するオブジェクトタイプのリストは、H92/OT UDC を参照してください。
オブジェクトタイプ	<p>ONEWORLD でいうオブジェクトとは ONEWORLD ツールで作成されたソフトウェア仕様に基づく、使用可能なエンティティです。これらのオブジェクトには、バッチアプリケーション(UBE)、データ構造体(DSTR)オブジェクト、および対話型アプリケーション(APPL)などのオブジェクトライブラリアンのオブジェクトが含まれます。</p> <p>OMW では、この定義を拡張して、パスコードベースのオブジェクトでなくオブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトタイプやデータソースベースのオブジェクトも含みます。ユーザー定義コントロール(UDC)、ワークフロー、ACTIVERA、メニュー、およびデータ項目などがあります。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">○ バッチアプリケーション○ ビジネス関数○ ビジネスビュー○ データ構造体○ イベントルール○ 対話型アプリケーション○ メディアオブジェクト○ テーブル オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクト○ データ辞書項目○ UDC 項目○ ワークフロー項目○ メニュー

プロジェクト状況コード (From) プロジェクト状況コードの 1 つです。次のオプションがあります。

- 01 完了
- 11 検討を保留
- 17 計画または調査
- 18 設計
- 19 設計の検討
- 21 プログラミング
- 22 プログラマテスト
- 23 管理者の検討
- 24 本稼働用への転送
- 25 再作業
- 26 QA テスト
- 28 QA テスト完了

--- フォーム固有 ---

このフィールドは、プロジェクト状況変更処理(UDC38)にのみ有効です。進行中のプロジェクトの前の状況を表示します。フィールドは、オブジェクトの処理に対しては自動入力されません。

▶ オブジェクト・ログを検索するには

1. Solution Explorer で、[略式コマンド]フィールドに“GH902”と入力して[Enter]キーを押します。
2. <クロス・アプリケーション開発ツール>メニュー(GH902)から<オブジェクト管理ログ>を選択します。
3. <オブジェクト管理ログの処理>で、[フォーム]メニューから[オブジェクト・ログ]を選択します。
4. <オブジェクト・ログの処理>では、次のことができます。
 - [検索]をクリックし、すべての OMW オブジェクトのログを表示します。
 - [QBE]セルにデータを入力して検索対象を限定し、[検索]をクリックします。
 - [最後の処理のみを表示]オプションを有効にして、最新のログ操作のみを表示します。
 - [添付ファイルのチェック]ボタンをクリックし、添付情報の有無をチェックします。
5. [閉じる]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
FROM データソース	<p>これらのフィールドは、次のオブジェクト操作に対してのみ有効です。プロジェクトログにはブランクのままにします。</p> <p>転送 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトのスペックを移動するのに使用するソースおよびターゲットのデプロイメントデータソースです。</p> <p>オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、データレコードを移動するのに使用するソースおよびターゲットのメインデータソースです。</p> <p>チェックイン - 先("TO")フィールドは、チェックインのデプロイメントデータソースを表します。元("FROM")フィールドには、ローカルが含まれます。チェックインは、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。</p> <p>チェックアウト - 元("FROM")フィールドは、チェックアウトのデプロイメントデータソースを表します。先("TO")フィールドには、ローカルが含まれます。チェックアウトは、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。</p> <p>削除 - 先("TO")フィールドは、オブジェクトが削除されたデータソースを指定します。元("FROM")データソースは、削除に関係ありません。</p> <p>追加 - 元("FROM")と先("TO")フィールドは同じです。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトが作成されたパスコードのデプロイメントデータソースです。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、オブジェクトが作成されたデータソースです。</p> <p>コピー - 元("FROM")と先("TO")フィールドは同じです。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトがコピーされたパスコードのデプロイメントデータソースです。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、オブジェクトがコピーされたデータソースです。</p> <p>保存 - 元("FROM")ロケーションは常に「ローカル」です。先("TO")ロケーションは保存パスコードのデプロイメントデータソースです。保存はオブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。</p> <p>復元 - 先("TO")ロケーションは常に「ローカル」です。元("FROM")ロケーションは保存パスコードのデプロイメントデータソースです。復元はオブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。</p> <p>表示 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、パスコードの元("FROM")ロケーションのデプロイメントデータソースを示します。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、元("FROM")ロケーションのデータソースを示します。先("TO")フィールドには常に「ローカル」が含まれます。</p>

FROM パスコードまたは環境

これらのフィールドは、次のオブジェクト処理に対してのみ有効です。プロジェクトログにはブランクのままにします。

転送 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトスペックの移動に使用するソースおよびターゲットパスコードです。このフィールドは、オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合はブランクのままにします。

チェックイン - 先("TO")フィールドは、チェックインパスコードを表します。元("FROM")フィールドには、「ローカル」が表示されます。
チェックインは、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

チェックアウト - 元("FROM")フィールドは、チェックアウトパスコードのロケーションを表します。先("TO")フィールドには、「ローカル」が含まれます。チェックアウトは、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

削除 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、先("TO")フィールドは、スペックが削除されたパスコードを示します。
オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、先("TO")フィールドは、オブジェクトが削除された環境を示します。
(適用可能な場合 - 開発者がローカルからオブジェクトを削除した場合にのみ、オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトに対してこのフィールドが自動入力されます。)オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、オブジェクトがローカルで削除されたパスコードを示します。(適用可能な場合 - 開発者がオブジェクトを削除した場合にのみ、ローカルスペックは削除されます。)元("FROM")フィールドは、オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトには常にブランクとなります。

追加 - 元("FROM")と先("TO")フィールドは同じです。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトが作成されたパスコードです。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、オブジェクトが作成された環境です。

コピー - 元("FROM")と先("TO")フィールドは同じです。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトがコピーされたパスコードです。
オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、オブジェクトがコピーされた環境です。

保存 - 元("FROM")ロケーションは常に「ローカル」です。先("TO")ロケーションは保存ロケーションのパスコードです。保存はオブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

復元 - 先("TO")ロケーションは常に「ローカル」です。元("FROM")ロケーションは保存ロケーションのパスコードです。復元は、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

表示 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、ロケーションのパスコードを示します。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、環境の元("FROM")ロケーションを示します。先("TO")フィールドには常に「ローカル」が含まれます。

オブジェクト名	<p>ONEWORLD オブジェクトの識別子として働く 200 文字フィールドオブジェクト管理ワークベンチオブジェクトタイプ(OMWOT)と組み合わせて使用すると、どの ONEWORLD オブジェクトも識別することができます。このフィールドを使用して識別子を保管するオブジェクトタイプのリストは、H92/OT UDC を参照してください。</p>
オブジェクトタイプ	<p>ONEWORLD でいうオブジェクトとは ONEWORLD ツールで作成されたソフトウェア仕様に基づく、使用可能なエンティティです。これらのオブジェクトには、バッチアプリケーション(UBE)、データ構造体(DSTR)オブジェクト、および対話型アプリケーション(APPL)などのオブジェクトライブラリアンのオブジェクトが含まれます。</p> <p>OMW では、この定義を拡張して、パスコードベースのオブジェクトでなくオブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトタイプやデータソースベースのオブジェクトも含みます。ユーザー定義コントロール(UDC)、ワークフロー、ACTIVERA、メニュー、およびデータ項目などがあります。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ バッチアプリケーション ○ ビジネス関数 ○ ビジネスビュー ○ データ構造体 ○ イベントルール ○ 対話型アプリケーション ○ メディアオブジェクト ○ テーブル オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクト ○ データ辞書項目 ○ UDC 項目 ○ ワークフロー項目 ○ メニュー
プロジェクト名	<p>ONEWORLD プロジェクトの識別子。ONEWORLD のプロジェクトは、タスクを完了するために開発者が変更または作成した ONEWORLD オブジェクトのグループから構成されます。ONEWORLD にあるオブジェクトの処理は、プロジェクトのコンテキスト内で完了してください。</p>

TO データソース

これらのフィールドは、次のオブジェクト処理に対してのみ有効です。プロジェクトログにはブランクのままにします。

転送 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトスペックの移動に使用するデプロイメントのソースおよびターゲットデータソースです。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、データレコードの移動に使用するソースおよびターゲットメインデータソースです。

チェックイン - 先("TO")フィールドは、チェックインのデプロイメントデータソースを表します。元("FROM")フィールドには、「ローカル」が含まれます。チェックインは、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

チェックアウト - 元("FROM")フィールドは、チェックアウトのデプロイメントデータソースを表します。先("TO")フィールドには、ローカルが含まれます。チェックアウトは、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

削除 - 先("TO")フィールドは、オブジェクトが削除されたデータソースを指定します。元("FROM")データソースは、削除に関係ありません。

追加 - 元("FROM")と先("TO")フィールドは同じです。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトが作成されたパスコードのデプロイメントデータソースです。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、オブジェクトが作成されたデータソースです。

コピー - 元("FROM")と先("TO")フィールドは同じです。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトがコピーされたパスコードのデプロイメントデータソースです。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、オブジェクトがコピーされたデータソースです。

保存 - 元("FROM")ロケーションは常に「ローカル」です。先("TO")ロケーションは保存パスコードのデプロイメントデータソースです。保存は、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

復元 - 先("TO")ロケーションは常に「ローカル」です。元("FROM")ロケーションは保存パスコードのデプロイメントデータソースです。復元は、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

表示 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、パスコードの元("FROM")ロケーションのデプロイメントデータソースを示します。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、元("FROM")ロケーションのデータソースを示します。先("TO")フィールドには常に「ローカル」が含まれます。

TO パスコードまたは環境

これらのフィールドは、次のオブジェクト処理に対してのみ有効です。プロジェクトログにはブランクのままにします。

転送 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトスペックの移動に使用するソースおよびターゲットパスコードです。このフィールドは、オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトにはブランクのままにします。

チェックイン - 先("TO")フィールドは、チェックインパスコードを表します。元("FROM")フィールドには、「ローカル」が表示されます。
チェックインは、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

チェックアウト - 元("FROM")フィールドは、チェックアウトのパスコードロケーションを表します。先("TO")フィールドには、「ローカル」が含まれます。チェックアウトは、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

削除 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、先("TO")フィールドは、スペックが削除されたパスコードを示します。
オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、先("TO")フィールドは、オブジェクトが削除された環境を示します。

(適用可能な場合 - 開発者がローカルからオブジェクトを削除した場合にのみ、オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトに対してこのフィールドは自動入力されます。)オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、オブジェクトがローカルで削除されるパスコードを示します。

(適用可能な場合 - 開発者がオブジェクトを削除した場合にのみ、ローカルスペックは削除されます。)元("FROM")フィールドは、オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトには常にブランクとなります。

追加 - 元("FROM")と先("TO")フィールドは同じです。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトが作成されたパスコードです。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、オブジェクトが作成された環境です。

コピー - 元("FROM")と先("TO")フィールドは同じです。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、オブジェクトがコピーされたパスコードです。
オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、オブジェクトがコピーされた環境です。

保存 - 元("FROM")ロケーションは常に「ローカル」です。先("TO")ロケーションは保存ロケーションのパスコードです。保存は、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

復元 - 先("TO")ロケーションは常に「ローカル」です。元("FROM")ロケーションは保存ロケーションのパスコードです。復元は、オブジェクトライブラリアンのオブジェクトにのみ適用されます。

表示 - オブジェクトライブラリアンのオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、元("FROM")ロケーションのパスコードを示します。オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトの場合、元("FROM")フィールドは、ロケーションの環境を示します。先("TO")フィールドには常に「ローカル」が含まれます。

プログラム ID	<p>対話型プログラムまたはバッチ・プログラムを識別する番号。たとえば、〈受注オーダー入力〉プログラムの ID は P4210(対話型)、〈請求書印刷〉プログラムの ID は R42565(バッチ)です。プログラム ID の桁数は固定ではなく、TSSXXX の形式で構造化されています。</p> <p>T プログラム名の最初の英字が、P はプログラム、R はレポートなどそのタイプを示します。たとえば、P4210 の P は、これがプログラムであることを示します。</p> <p>SS 2 番目と 3 番目は数字で、システム・コードを示します。たとえば、P4210 の 42 は、このプログラムがシステム 42(受注管理システム)に属していることを示します。</p> <p>XXX プログラム名の残りの数字は固有のプログラムまたはレポートを示します。たとえば、P4210 の "10" は、受注オーダー入力アプリケーションであることを表します。</p>
更新日付	テーブル・レコードが最終的に更新された日付を示します。
更新時刻	プログラムがこのレコードに対して最後に更新を実行した時刻。
ユーザーID	ユーザー・プロファイルを識別するコード。

▶ プロジェクト・ログを検索するには

1. Solution Explorer で、[略式コマンド]フィールドに"GH902"と入力して[Enter]キーを押します。
2. 〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ログ〉を選択します。
3. 〈オブジェクト管理ログの処理〉で、[フォーム]メニューから[プロジェクト・ログ]を選択します。
4. 〈プロジェクト・ログの処理〉では、次のことができます。
 - [検索]をクリックし、すべての OMW プロジェクト・ログを表示します。
 - [QBE]セルにデータを入力して検索対象を限定し、[検索]をクリックします。
 - [最後の処理のみを表示]オプションをオンにして、選択したプロジェクトに関する最新のログ操作のみを表示します。
 - [添付ファイルのチェック]ボタンをクリックし、添付情報の有無をチェックします。
5. [閉じる]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
操作	<p>ユーザーが選択したオブジェクト・タイプで実行できる操作を識別する値。プロジェクトが次の状況の場合に使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 01 転送 02 チェックイン 03 チェックアウト 04 削除 05 追加 06 コピー 08 保存 09 回復 10 設計 11 取得 12 プロジェクトからオブジェクトを削除 13 プロジェクトの更新 16 プロジェクトへオブジェクトを追加 21 トークンの切替え 23 トークン待ち行列から強制解放 30 チェックアウトの消去 38 状況の変更
From 状況	<p>プロジェクト状況コードの 1 つです。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 01 完了 11 検討を保留 17 計画または調査 18 設計 19 設計の検討 21 プログラミング 22 プログラマテスト 23 管理者の検討 24 本稼働用への転送 25 再作業 26 QA テスト 28 QA テスト完了
オブジェクト名	<p>ONEWORLD オブジェクトの識別子として働く 200 文字フィールドオブジェクト管理ワークベンチオブジェクトタイプ(OMWOT)と組み合わせて使用すると、どの ONEWORLD オブジェクトも識別することができます。このフィールドを使用して識別子を保管するオブジェクトタイプのリストは、H92/OT UDC を参照してください。</p>

オブジェクト・タイプ	<p>ONEWORLD というオブジェクトとは ONEWORLD ツールで作成されたソフトウェアスペックに基づく、使用可能なエンティティです。これらのオブジェクトには、バッチアプリケーション(UBE)、データ構造体(DSTR)オブジェクト、および対話型アプリケーション(APPL)などのオブジェクトライブラリアンのオブジェクトが含まれます。</p> <p>OMW では、この定義を拡張して、パスコードベースのオブジェクトでなくオブジェクトライブラリアン以外のオブジェクトタイプやデータ ソースベースのオブジェクトも含みます。ユーザー定義コントロール(UDC)、ワークフロー、ACTIVERA、メニュー、およびデータ項目などがあります。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ バッチアプリケーション ○ ビジネス関数 ○ ビジネスビュー ○ データ構造体 ○ イベントルール ○ 対話型アプリケーション ○ メディアオブジェクト ○ テーブル オブジェクトライブラリアン以外のオブジェクト ○ データ辞書項目 ○ UDC 項目 ○ ワークフロー項目 ○ メニュー
プロジェクト名	<p>ONEWORLD プロジェクトの識別子。ONEWORLD のプロジェクトは、タスクを完了するために開発者が変更または作成した ONEWORLD オブジェクトのグループから構成されます。ONEWORLD にあるオブジェクトの処理は、プロジェクトのコンテキスト内で完了してください。</p>
To 状況	<p>現在は元("FROM")状況コードのプロジェクトに次に使用可能な状況 コード</p>
プログラム ID	<p>対話型プログラムまたはバッチ・プログラムを識別する番号。たとえば、〈受注オーダー入力〉プログラムの ID は P4210(対話型)、〈請求書印刷〉プログラムの ID は R42565(バッチ)です。プログラム ID の桁数は固定ではなく、TSSXXX の形式で構造化されています。</p> <p>T</p> <p>プログラム名の最初の英字が、P はプログラム、R はレポートなどそのタイプを示します。たとえば、P4210 の P は、これがプログラムであることを示します。</p> <p>SS</p> <p>2 番目と 3 番目は数字で、システム・コードを示します。たとえば、P4210 の 42 は、このプログラムがシステム 42(受注管理システム)に属していることを示します。</p> <p>XXX</p> <p>プログラム名の残りの数字は固有のプログラムまたはレポートを示します。たとえば、P4210 の "10" は、受注オーダー入力アプリケーションであることを表します。</p>
更新日付	<p>テーブル・レコードが最終的に更新された日付を示します。</p>
更新時刻	<p>プログラムがこのレコードに対して最後に更新を実行した時刻。</p>
ユーザーID	<p>ユーザー・プロファイルを識別するコード。</p>

▶ 詳細ログを表示するには

1. 調べるログ・レコードをダブルクリックします。または、必要なログ・レコードのローをクリックしてハイライトし、[選択]ボタンをクリックします。
2. [検索]をクリックします。
選択したログの詳細ログ・レコードが表示されます。選択したログ・レコードに関するすべての詳細が番号の昇順に表示されます。
3. [記述]フィールドのテキスト全体を表示するには、このフィールドをクリックして[選択]をクリックします。
実際のログ・エントリを示す<ログ・テキストの完全表示>ウィンドウが表示されます。
4. [前へ]および[次へ]ボタンをクリックすると、詳細ログ間で移動できます。
5. [閉じる]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
記述	ユーザー定義名称または備考。
ログ順序	特定の処理に対するログ詳細の固有な順序番号
マシンキー	ロケーションあるいはマシンキーは、ネットワーク(サーバーまたはワークステーション)上のマシン名を示します。
ログ・データ項目	ログ詳細データ項目。チェックイン、チェックアウトなどの主なログ操作のもとでログ詳細テキストを定義します。これらのすべてのデータ項目は用語解説のデータ項目で、中にはテキストで代替されているものもあります。ログ項目の詳細については、<環境設定>アプリケーション(P09230)のログシステムセクションを参照してください。
プログラム ID	対話型プログラムまたはバッチ・プログラムを識別する番号。たとえば、<受注オーダー入力>プログラムの ID は P4210(対話型)、<請求書印刷>プログラムの ID は R42565(バッチ)です。プログラム ID の桁数は固定ではなく、TSSXXX の形式で構造化されています。 T プログラム名の最初の英字が、P はプログラム、R はレポートなどそのタイプを示します。たとえば、P4210 の P は、これがプログラムであることを示します。 SS 2 番目と 3 番目は数字で、システム・コードを示します。たとえば、P4210 の 42 は、このプログラムがシステム 42(受注管理システム)に属していることを示します。 XXX プログラム名の残りの数字は固有のプログラムまたはレポートを示します。たとえば、P4210 の "10" は、受注オーダー入力アプリケーションであることを表します。
更新日付	テーブル・レコードが最終的に更新された日付を示します。
更新時刻	プログラムがこのレコードに対して最後に更新を実行した時刻。
ユーザー ID	ユーザー・プロフィールを識別するコード。

▶ ログ・レコードのフィールドを並べ替えるには

1. Solution Explorer で、[略式コマンド]フィールドに“GH902”と入力して[Enter]キーを押します。
2. 〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ログ〉を選択します。
3. 〈オブジェクト管理ログの処理〉で、[順序]をクリックします。
4. 〈使用可能なカラム〉ウィンドウで、ソートしたい最初のカラムをクリックします。
5. 右向き矢印をクリックし、右側の〈ソートされたカラム〉ウィンドウに移動します。
6. 表示したいすべてのカラムが適切なソート順になるまで、ステップ 3 と 4 を繰り返します。
順序が間違っている場合は、カラムを〈使用可能なカラム〉ウィンドウに戻して再度ソートできます。再度ソートするカラムを選択し、左向きの矢印をクリックします。
7. 〈グリッド・ローのソート順選択〉フォームで、[OK]をクリックするとログのカラムが並べ替えられます。

▶ ログを印刷するには

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ログ〉プログラム(P98210)を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ログの処理〉で、[ファイル]メニューから[画面印刷]を選択してください。
2. 必要に応じて印刷設定を修正します。
3. [印刷]ダイアログ・ボックスで[OK]をクリックします。

ERP 9.0 レポートの印刷

〈プリンタ〉アプリケーション(P98616)からは、ERP 9.0 内の各プリンタを一括して構成することができます。このアプリケーションによって、ワークステーションとエンタープライズ・サーバー用のプリンタを定義できます。これらの定義は、〈プリンタ〉アプリケーション(P98616)によって保守管理される ERP 9.0 テーブルに保管されます。

ERP 9.0 では、独自のレポートを作成するだけでなく、ビジネス・ニーズに合わせて使用と修正ができる、事前定義された多数のレポートとレポート・バージョンがあります。また、バッチ・エンジンを使用してレポートが作成され、PDF(ポータブル・ドキュメント・フォーマット)で生成されます。PDF ファイルは、Adobe Acrobat Reader を使って表示することができます。

レポートは、バッチ・アプリケーションとして実行されます。レポートを投入するときは、レポートに表示するデータ選択、データ順序、処理を行うロケーション、レポート処理のログ記録、印刷するプリンタなどを選択します。

ERP 9.0 の印刷処理の理解

ERP 9.0 レポートを投入すると、バッチ・エンジンによって PDF(ポータブル・ドキュメント・フォーマット)ファイルが生成されます。バッチ・エンジンは、PDF ファイルを作成するのにデバイス・コンテキストを使用します。デバイス・コンテキストとは、ページ・サイズおよびページ内の印刷領域などの情報です。この情報は、どのプラットフォームの場合も、ERP 9.0 によってプリンタ・テーブルから生成されます。

ERP 9.0 では、レポート(PDF ファイル)をワークステーション上で Adobe Acrobat Reader を使用して表示するか、プリンタに直接出力するかを選択することができます。Adobe Acrobat Reader から印刷することもできます。レポートをプリンタに送るときに、変換フィルタを使用して PDF ファイルを 3 つの PDL(ページ記述言語)のいずれか(PCL、PostScript、ライン・プリンタ・テキスト)のプリンタ・タイプに変換します。変換フォーマットは、レポートを印刷するプリンタ・タイプによって異なります。

ERP 9.0 のバッチ・エンジンでは、後述の論理パスを使用してレポートの出力先プリンタが確定されます。最初の方法により有効なプリンタ名が返ってこない場合は、バッチ・エンジンは次の方法を実行します。

ユーザーがレポートを投入すると、次のイベントが発生します。

1. バッチ処理により、〈レポート設計ツール〉(RDA)の Do Initialize Printer イベントがトリガーされます。この処理により有効なプリンタ名が取得された場合は、以降の処理は行われません。
2. レポートが投入された時点で、ユーザーがデフォルトのプリンタ名を一時変更します。ユーザーが有効なプリンタ名に一時変更すれば、以降の処理は行われません。
3. RDA スペックからバッチ処理にプリンタ名が渡されます。この処理により有効なプリンタ名が取得されれば、以降の処理は行われません。
4. プリンタ定義テーブル(F98616)から、現在のユーザー、ユーザーがサインオンしている環境、およびレポートを処理するホストに基づいて、有効なデフォルト・プリンタが確定されます。

サーバーでのレポート実行

レポートをサーバーに投入すると、〈プリンタ〉プログラムで定義しておいたプリンタ名が表示されます。サーバーは、イベント・ルール(ER)により一時変更されていない限り、選択したプリンタと関連付けられた設定を使って PDF ファイルを自動作成します。ただし、[プリンタ選択]ダイアログ・ボックスでプリンタ、ページ方向、PDL、用紙タイプなどの設定を変更することにより、サーバーが PDF ファイルを生成する前にサーバー上のレポート印刷を制御できます。レポートをサーバー上で表示すると、PDF ファイルがサーバーからワークステーションのローカルの¥b9¥PrintQueue ディレクトリにコピーされます。

レポートの実行時には、オプションでログ機能をオンにすることもできます。そのためには、レポートの投入時に〈上級〉フォームにアクセスします。ログを表示すると、そのファイルはワークステーションの¥b9¥PrintQueue ディレクトリに保管されます。

参照

- サーバー上の PrintQueue ディレクトリの場所については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「レポート・ログの作成および取込み」

ワークステーションでのレポート実行

レポートのオンライン表示を指示すると、処理エンジンは〈レポート設計〉で定義したプリンタに接続を試みます。接続に失敗したりプリンタが定義されていないと、プリンタ・テーブルで指定されているデフォルト・プリンタが使用されます。処理エンジンは、取り込んだ設定を使って PDF ファイルを作成し、Acrobat Reader を通じて表示します。この PDF ファイルは、ローカルの¥b9¥PrintQueue ディレクトリに保管されます。

レポートをローカルで実行して直接プリンタに送る場合は、[プリンタの選択]ダイアログ・ボックスが表示されるので、ここでプリンタ、ページ方向、PDL、用紙タイプなどの設定を変更することができます。このダイアログ・ボックスに最初に表示されるのは、RDA で定義したプリンタ、または、RDA で定義していない場合はデフォルトの ERP 9.0 プリンタです。処理エンジンは、[プリンタの選択]ダイアログ・ボックスで指定したプリンタに接続して、関連付けられた設定を取り込みます。これらの設定を使用して PDF ファイルが作成され、ERP 9.0 変換フィルタを使用して PDL ファイルに変換され、プリンタに送信されます。

印刷時の特徴

レポートの印刷時には一時変更オプションがあります。このオプションは、レポート投入時のプリンタ一時変更とは別のものです。投入時には当初、有効なプリンタであればどのプリンタを選択することもできますが、プリント時には、プリンタと同じプラットフォーム、PDL、用紙タイプをサポートするプリンタでのみ一時変更できます。これは、バッチ・エンジンにより既にレポートの PDF バージョンが作成され、PDF ファイルにプラットフォーム、PDL、用紙タイプ情報が埋め込まれているためです。

ワークステーション jde.ini での印刷設定

ワークステーションの jde.ini 設定では、レポートを即時に印刷するかどうか、および ERP 9.0 でレポートの処理後に出力を保存するかどうかを制御します。

```
[NETWORK QUEUE SETTINGS]

PrintImmediate=TRUE/FALSE

SaveOutput=TRUE/FALSE
```

設定	説明
	処理の完了後にレポートが自動的に印刷されるかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。
PrintImmediate	TRUE。レポートはサーバー上で実行され、PDF ファイル作成後、定義されたプリンタの PDL に変換されて印刷されます。 FALSE。レポートはサーバー上で実行されますが、自動印刷はされません。印刷する場合は、〈サーバーの処理〉アプリケーションを使用します。
SaveOutput	レポートの表示または印刷後にファイルを保存するか削除するかを指定します。有効な値は次のとおりです。 TRUE。レポートの表示または印刷後にファイルを保存します。 FALSE。レポートの表示または印刷後にファイルを削除します。

プリンタ定義プログラムの処理

ERP 9.0 には、プリンタを設定できるように、ディレクタ・インターフェイスを使用する単一プログラムが用意されています。これにより、新しいプリンタの追加や既存プリンタの変更を行ったり、ユーザー、ホスト、環境の組合せに対してデフォルト・プリンタを定義したりできます。プリンタ設定を追加および修正する際に、用紙タイプや、プリンタが使用するカスタム変換プログラムの追加や変更ができます。

注:

プリンタは、社内ですべて使用する各サーバー・プラットフォーム上で設定する必要があります。

参照

- レポートの投入時に ERP 9.0 で印刷用のプリンタが確定される方法については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ERP 9.0 の印刷処理の理解」

はじめる前に

プリンタを追加するときには、ディレクタに処理の各ステップに関するヘルプ情報が表示されます。ディレクタの各フォームに表示される指示に従って、プリンタ追加プロセスを実行します。

- プリンタを新しく追加する場合は〈プリンタ設定ディレクタ〉の説明に従ってください。

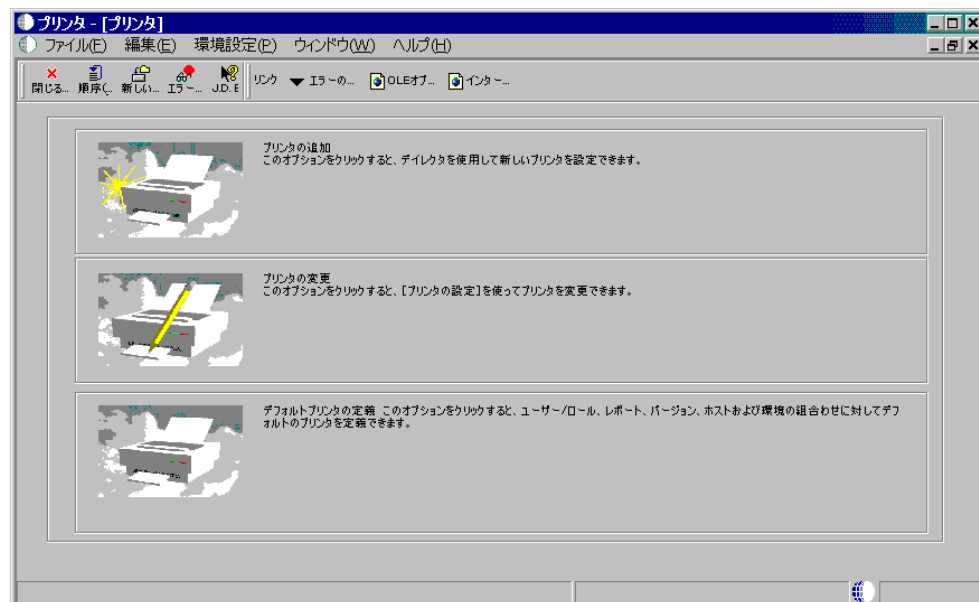
- 最初のプリンタをインストールする場合は、このタスクを実行してから、「デフォルト・プリンタを定義するには」のタスクを実行してください。
- ディレクタの各フォームに表示されるすべてのフィールドに、情報を入力する必要があります。

▶ **新規プリンタを追加するには**

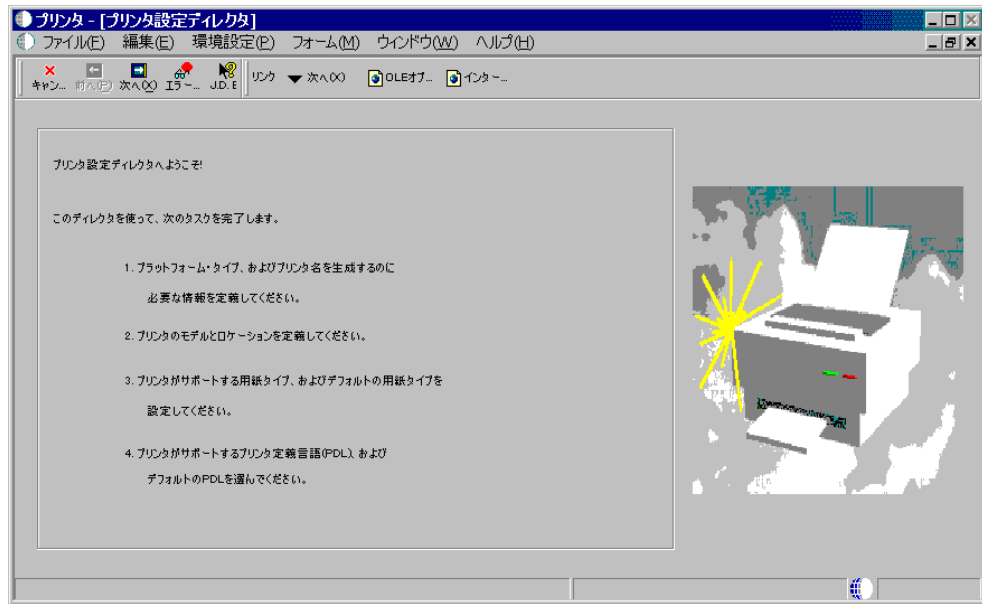
注:

ディレクタの各フォームに表示されるすべてのフィールドに、情報を入力する必要があります。

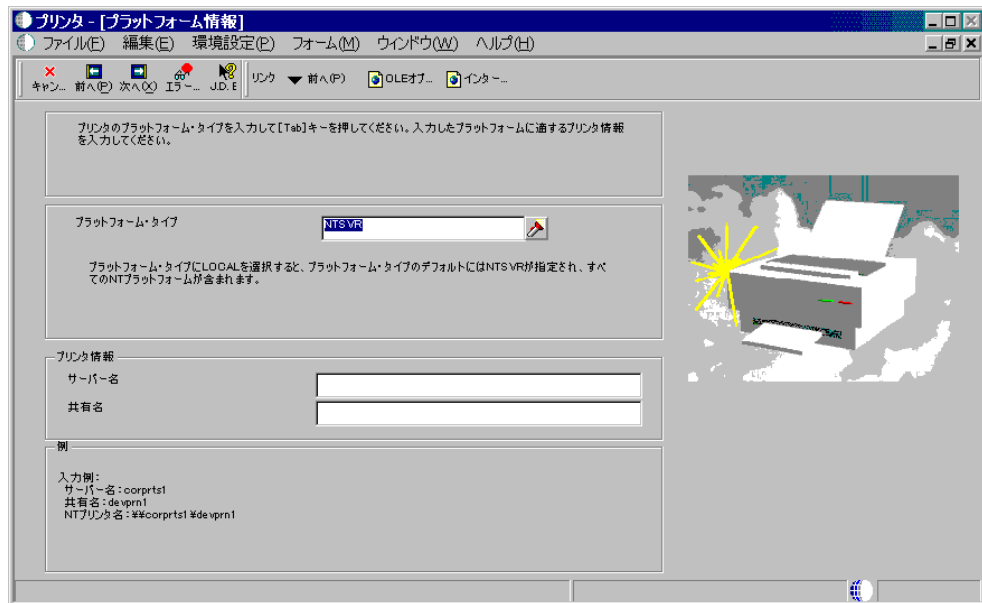
〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉プログラム(P98616)を選択します。



1. 〈プリンタ〉フォームで、[プリンタの追加]を選択します。



2. プリンタ設定ディレクタの開始ページで、説明を確認したら[次へ]ボタンをクリックします。
[プラットフォーム・タイプ]のデフォルト値は、実行するオペレーティング・システムに応じて〈プラットフォーム情報〉フォームに自動的に入力されます。



3. 〈プラットフォーム情報〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - [プリント・サーバー名]
設定しているプリンタのプリンタ・サーバー名を入力します。プリンタ名にはプラットフォームで有効な任意の文字が使用できます。ERP 9.0 では、この名前とプリント共有名を使用してプリンタ名が作成され、後続のフォームに淡色表示されます。

AS/400 の場合: ライブラリ名/出力待ち行列名

AS/400 の場合は、物理プリンタ名を出力待ち行列名と同じにする必要があります。デフォルトの QGPL ライブラリを使用して出力待ち行列を保管する場合は、このフィールドに出力待ち行列名を入力するだけで済みます。このフィールドは大文字で入力する必要があります。

例: DEVDES3A

出力待ち行列がデフォルトの QGPL ライブラリ以外のライブラリにある場合は、このフィールドにライブラリ名と出力待ち行列名を入力する必要があります。

例: QUSERSYS/DEVDES3A

注:

出力待ち行列名と共にライブラリ名を入力する場合は、名前が競合しないように注意する必要があります。競合すると、レポートが予期しない出力待ち行列から処理に投入される恐れがあります。

Windows NT: ¥¥サーバー名¥プリンタ名

例: ¥¥corprts1¥docprf2

UNIX: プリンタ名 (スラッシュなし)

例: devprn16

プリンタ・サーバー名は小文字で入力する必要があります。

レポートをネットワーク・プリンタ以外に出力する場合は、このフィールドをブランクにしてください。

- Print Shared Name (共有名)

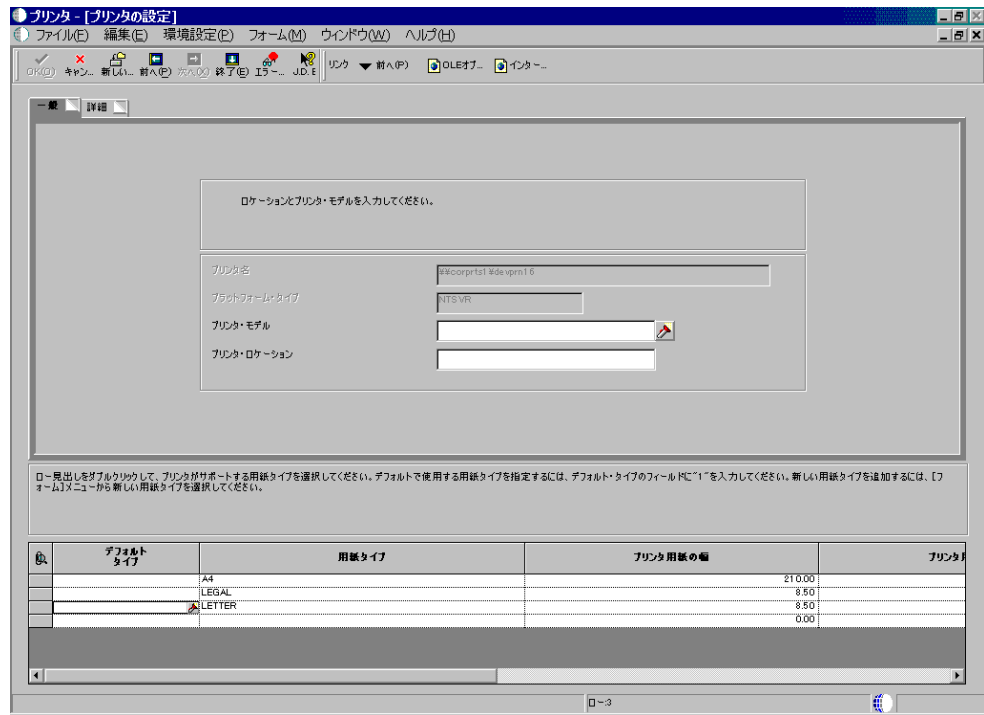
設定するプリンタの共有名を入力します。プリンタ名にはプラットフォームで有効な任意の文字が使用できます。ERP 9.0 では、この名前とプリント・サーバー名を使用してプリンタ名が作成され、後続のフォームにグレー表示されます。

4. [次へ]をクリックします。

〈プリンタの設定〉フォームが表示されます。このフォームでは、プリンタ・モデル、プリンタの場所、プリンタ定義言語、用紙タイプ、エンコーディング選択 (AS/400 のみ) などを指定します。

注:

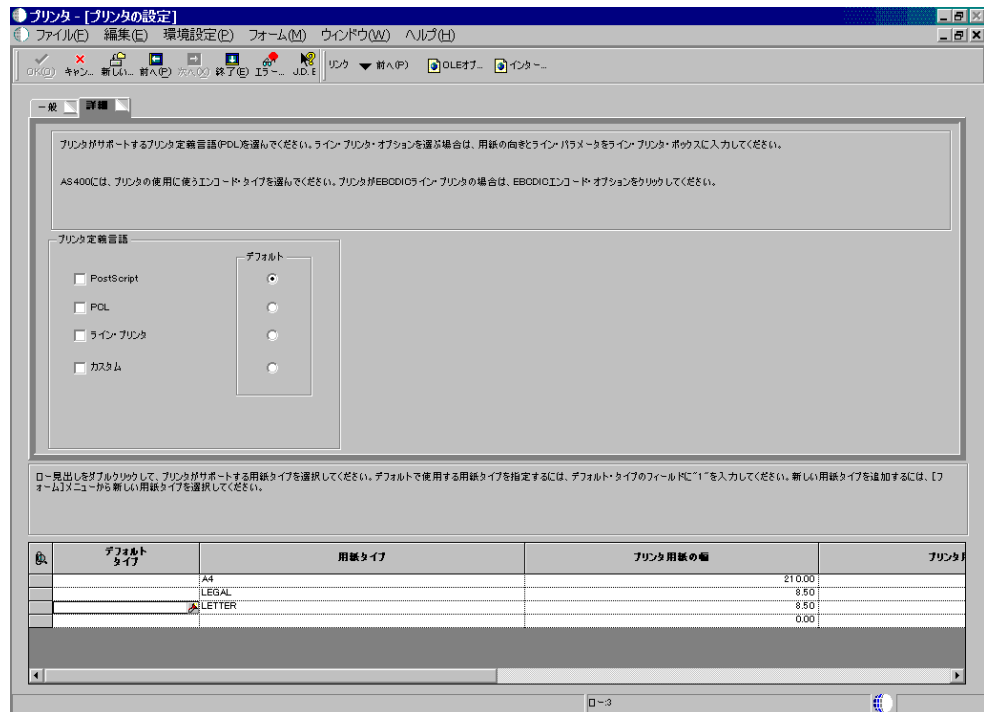
既存プリンタの設定を変更する場合は、このフォームで行います。『システム・アドミニストレーション』ガイドの「既存のプリンタを変更するには」を参照してください。



5. [一般]タブで、次のフィールドに情報を入力します。

- プリンタ・モデル
- プリンタ・ロケーション

6. [詳細]タブをクリックします。



7. [詳細]タブの[プリンタ定義言語]で次のオプションを選択します。

- PostScript
- PCL
- ライン・プリンタ

注:

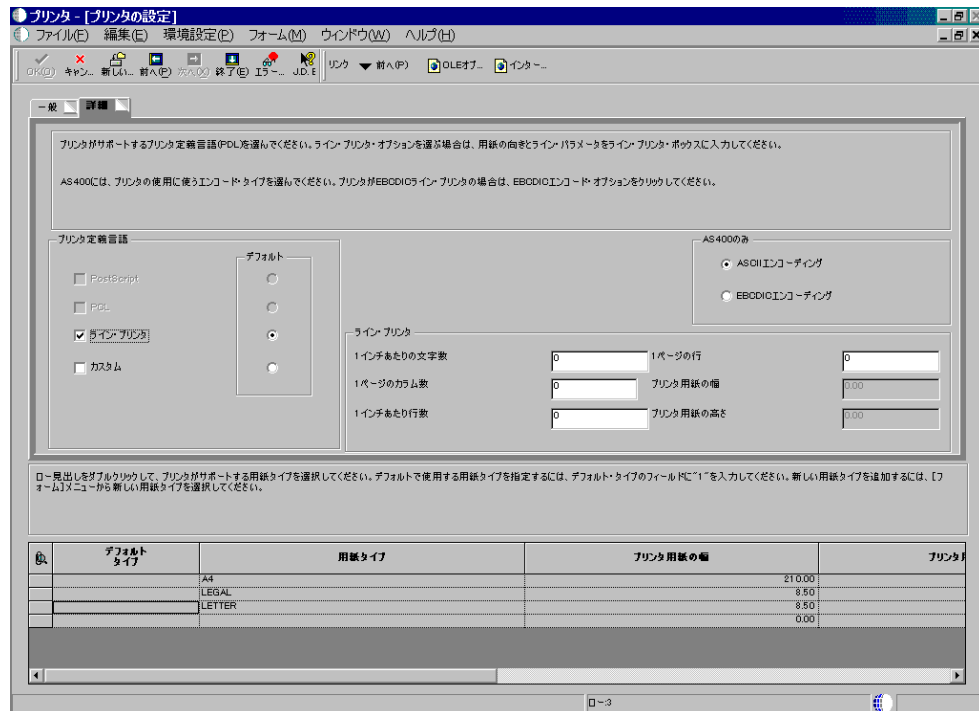
[PostScript]または[PCL]を選択すると、[ライン・プリンタ]オプションは無効になります。[ライン・プリンタ]を選択すると、[PostScript]および[PCL]オプションは無効になります。複数のプリンタ定義言語(PDL)を選択できますが、デフォルト PDL は 1 つだけです。この操作により、デフォルトとして指定する PDL が設定されます。この PDL はバッチ処理の投入時に一時変更できます。

8. [PostScript]オプションを選択する際には、[用紙トレイ]にある次のフィールドに値を入力してください。

- 最大用紙トレイ数
このプリンタが利用可能な用紙トレイの数を入力します。
- デフォルト用紙トレイ
ERP 9.0 で給紙に使用するデフォルトのトレイ番号を入力します。

9. [ライン・プリンタ]オプションを選択する場合は、[ライン・プリンタ]にある次のフィールドに値を入力して、用紙サイズと行数のパラメータを指定してください。

- ASCII エンコーディング
- EBCDIC エンコーディング



注:

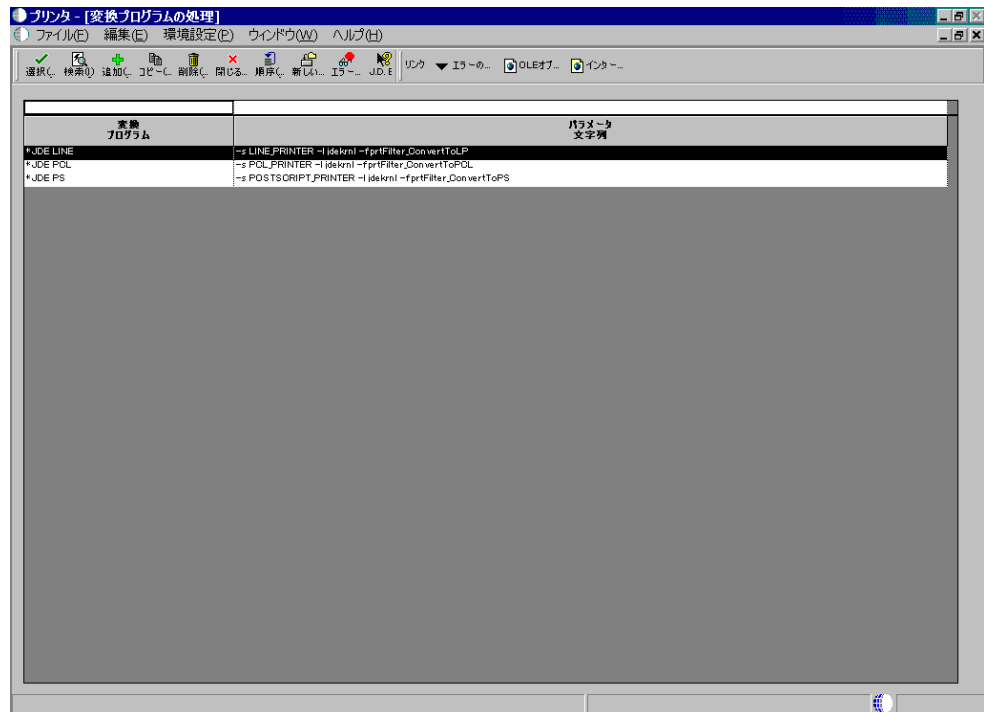
AS/400 サーバーを選んで[PostScript]または[PCL]オプションを選択すると、[AS/400のみ]ボックスは[ASCII エンコーディング]オプションが選択された状態でグレー表示になります。

11. [カスタム]オプションを選択する場合は、次のオプションやフィールドに値を入力してください。

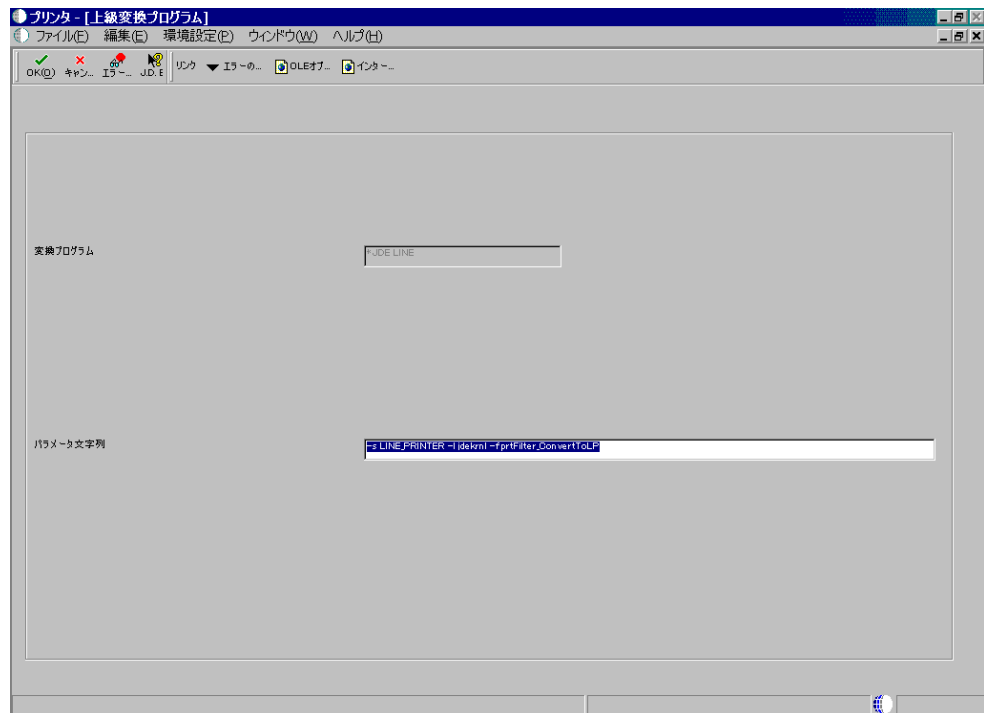
注:

カスタム・オプションでは、〈プリンタ〉アプリケーションの上級機能が使用されます。このオプションは、プリンタのパラメータ文字列作成を理解しているユーザーだけが使用してください。

- [カスタム]オプションを有効にします。
[カスタム]チェックボックスの下にフィールドが表示されます。
- 使用する変換フィルタ名を入力します。
フィルタは、フィールドに直接入力するか、ビジュアル・アシストを使って選択することもできます。
- フィルタを追加または変更するには、[フォーム]メニューの[上級]を選択します。このオプションは[カスタム]チェックボックスが選択されている場合のみ有効です。



- ・ 〈変換プログラムの処理〉フォームで、[追加]をクリックするか既存のフィルタをクリックして[コピー]または[選択]をクリックします。



12. 〈上級変換プログラム〉フォームで、次のフィールドを変更して[OK]をクリックします。

- ・ 変換プログラム

前のフォームで[追加]または[コピー]をクリックした場合は、このフィールドは入力可能になっています。追加またはコピーにより作成する変換プログラムの名前を入力します。コピーを作成する場合は、前のフォームでハイライトしたプログラムのパラメータ文字列が[パラメータ文字列]フィールドに表示されます。

- パラメータ文字列

このパラメータ文字列は、自動的に入力されます。この値は、印刷に使用するホスト (AS/400、HP9000 など) とプリンタのタイプ (PostScript、PCL、またはライン) に基づいています。たとえば、次のように記述します。

```
-s string_name -l library_name -f convertPDFToPS
```

この場合、`-s` では文字列名、`-l` (数字の 1 ではなく英小文字の l) ではライブラリ名、`-f` では機能名を定義します。

PDF ファイルを変換せずにプリンタに直接送るには、次のパラメータ文字列を入力します。

```
-s script_name
```

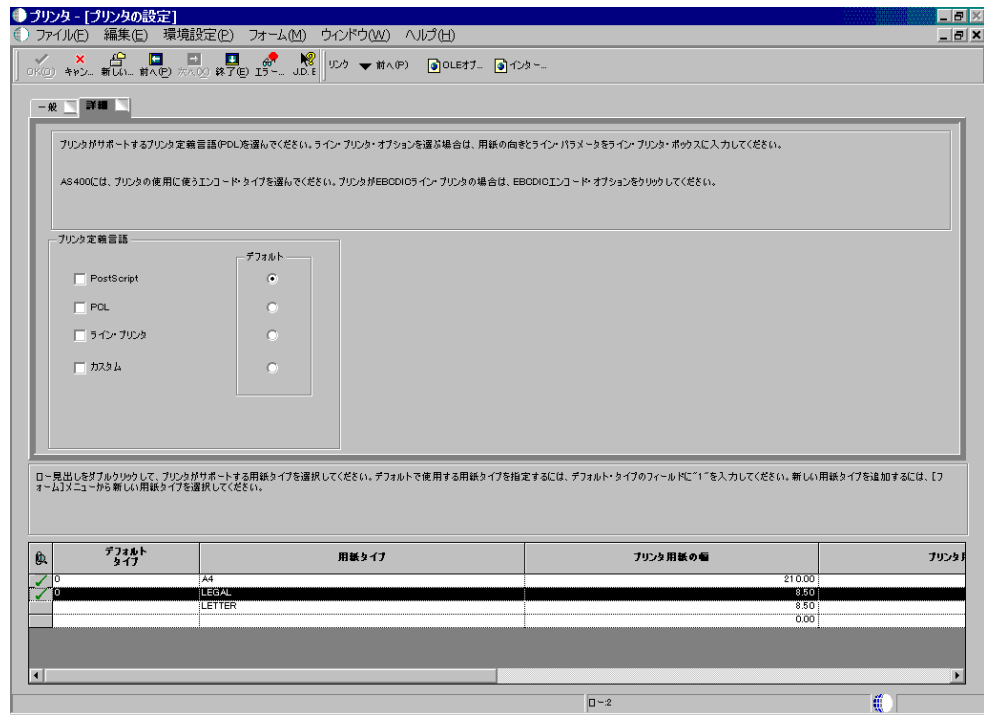
`script_name` は、PDF を UNIX の待ち行列に送るシェル・スクリプト (PCL_PRINTER スクリプトなど) の名称です。ファイルは変換されないため、`-l` および `-f` パラメータは不要です。

13. 〈プリンタの設定〉フォーム下部のグリッドで、プリンタがサポートする用紙タイプのロー見出しをダブルクリックします。

ダブルクリックした用紙タイプ行のロー見出しには、チェックマークが表示されます。

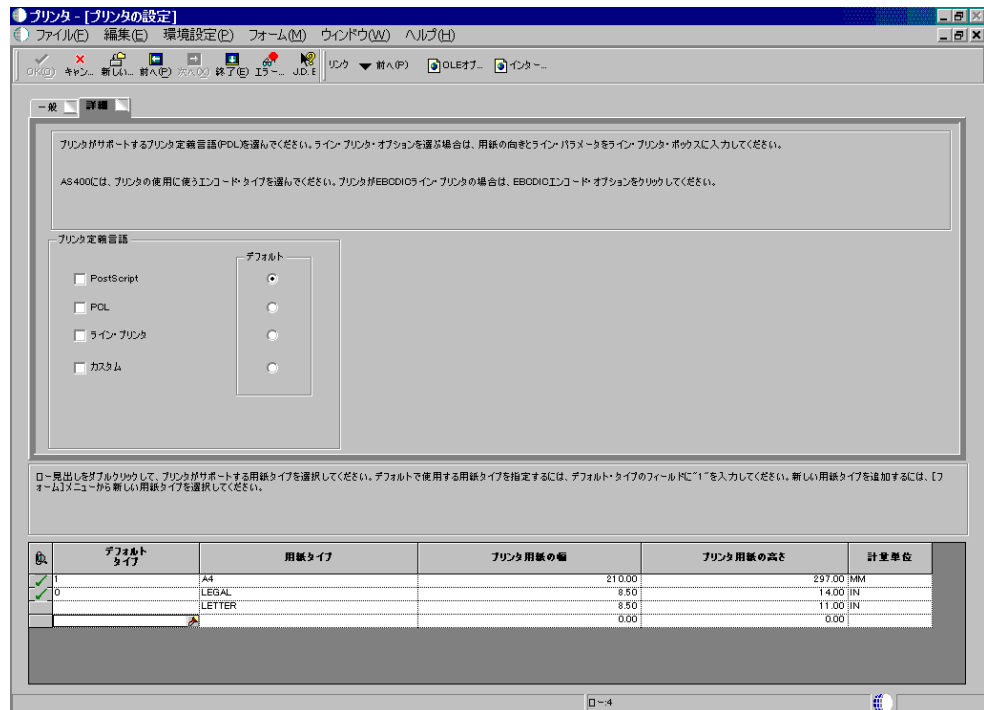
注:

必要に応じて新しい用紙タイプを追加できます。説明はこのタスクの後半にあります。

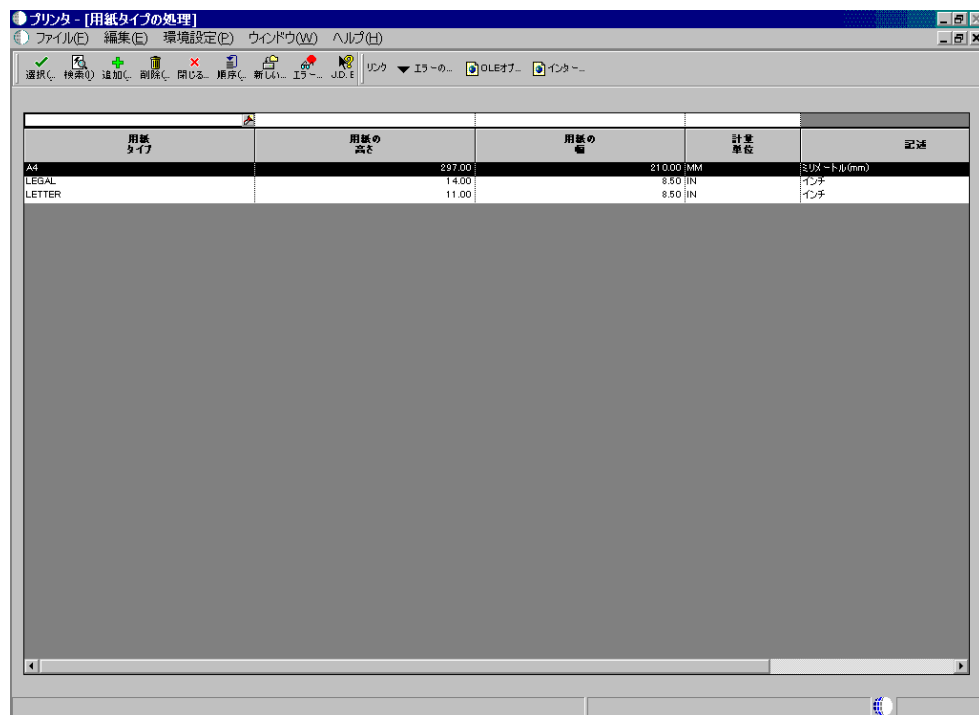


14. デフォルトとして使用する用紙タイプ行の[デフォルト・タイプ]カラムに数字の“1”を入力します。

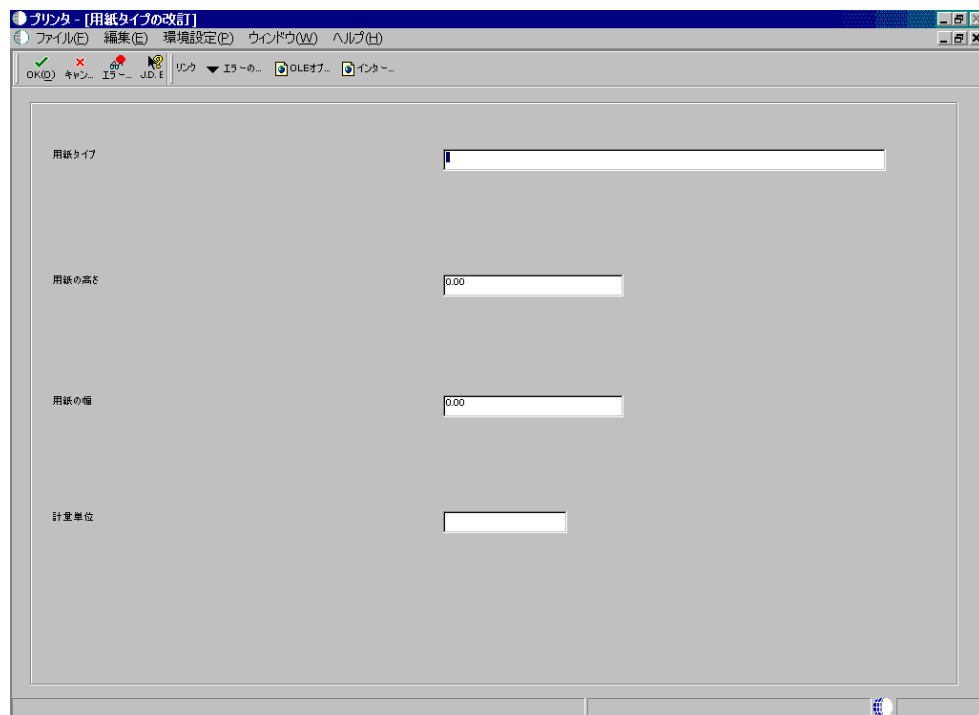
デフォルトとして選択できるのは1つだけです。バッチ処理の投入時にデフォルト用紙タイプは一時変更できます。



15. 新しい用紙タイプを追加するには、次のステップを実行します。
 - a. [フォーム]メニューから[新しい用紙タイプ]を選択します。



- b. 〈用紙タイプの処理〉で、[追加]をクリックします。



16. 〈用紙タイプの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- 用紙タイプ
- 用紙の高さ
- 用紙の幅
- 計量単位

新しい用紙タイプが保存され、〈用紙タイプの処理〉フォームが表示されます。〈用紙タイプの処理〉フォームを閉じると、〈プリンタの設定〉フォームのグリッドには新しい用紙タイプが表示されます。以前に選択した用紙タイプはクリアされるので、これらを再使用するためには再度選択する必要があります。

17. プリンタ情報を入力したら、[終了]ボタンをクリックします。

新規プリンタが保存され、〈プリンタ〉フォームが表示されます。

フィールド記述

記述	用語解説
プラットフォーム・タイプ	データベースが常駐している、実際のハードウェアのタイプ
プリンタ名	会計プリンタ 1 などネットワーク上の指定プリンタに割り当てる名称。 ONEWORLD の場合、この名称は、使用している操作システムで許可されていても、スペース文字を含むことはできません。
プリンタ・モデル	プリンタ性能は次のとおりです。 プリンタモデル: プリンタのモデル プリンタロケーション: プリンタが物理的に常駐する場所 エンコーディング: AS/400 のユーザーのみの機能
用紙タイプ	レターサイズ、リーガル、または A4 など、プリンタがサポートする用紙サイズ。 --- フォーム固有 --- レターサイズ、リーガル、または A4 など、プリンタがサポートする用紙サイズ。
プリンタ用紙幅	この種類の用紙の横の長さを指定する値。計量単位で指定された単位を使用します。
プリンタ用紙高さ	この種類の用紙の縦の長さを指定する値。計量単位で指定された単位を使用します。
計量単位	在庫品目の表示数量を示すユーザー定義コード(00/UM)。 たとえば、CS(ケース)や BX(箱)などです。
EBCDIC エンコーディング	プリンタ性能は次のとおりです。 プリンタモデル: プリンタのモデル プリンタロケーション: プリンタが物理的に常駐する場所 エンコーディング: AS/400 のユーザーのみの機能
カラム数/ページ	1 ページあたりのカラム数を指定するラインプリンタ・パラメータ

1 インチあたりの文字数	水平方向の印刷密度。プリンタでサポートされている 1 インチあたりの文字数
1 ページあたり行数	1 ページあたりの行数を指定するライン・プリンタ用パラメータ
1 インチあたり行数	<p>行スペースは、1 インチあたりの行数として入力してください。プリンタにサポートされている必要があります。有効な値は次のとおりです。</p> <p>4 IBM 5219、5224、5225、および 3287 プリンタのみ</p> <p>6 IBM 5224 プリンタのみ</p> <p>8 IBM 5224 プリンタのみ</p> <p>9 IBM 5225 プリンタのみ</p> <p>標準コンピュータ印刷は 6LPI および 10CPI です。8 で 1/2"X11"用紙を印刷する場合は、8LPI および 15CPI を指定してください。</p>

▶ デフォルト・プリンタを定義するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉プログラム(P98616)を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[デフォルト・プリンタの定義]をクリックします。

〈デフォルト・プリンタの処理〉フォームが表示されます。

2. [追加]をクリックします。

〈デフォルト・プリンタの改訂〉フォームが表示されます。

3. 次のフィールドに情報を入力して[OK]をクリックします。

- ユーザー/ロール

ビジュアル・アシストをクリックし、このプリンタ用の特定ユーザーを選択するか、ロールを選択します。このフィールドを空白にした場合、デフォルト値は*PUBLIC です。

- レポート名

ビジュアル・アシストをクリックし、印刷する特定のレポートを選択します。このフィールドをブランクにした場合、デフォルト値は*ALL です。

- バージョン名

ビジュアル・アシストを使って、実行するバージョンを選びます。このフィールドをブランクにした場合、デフォルト値は*ALL です。レポート名が *ALL の場合、バージョン名も *ALL になり変更できません。

- 環境

現在サインオンしている環境の名前が自動的に入力されます。この情報は変更できます。

- プリンタ名

- ホスト名

レポートを実行するサーバー(ホスト)を入力します。ビジュアル・アシストを使用すると、選択したプリンタ名に基づいて適切なホスト名が表示されます。

- オブジェクト状況

状況をアクティブに変更すると、この新規プリンタをデフォルト・プリンタにすることができます。エラーが発生した場合は、現在は別のプリンタがアクティブなデフォルト・プリンタに設定されていることを意味します。新しいプリンタをアクティブにする前に、現在のデフォルト・プリンタを「アクティブでない」に変更する必要があります。〈デフォルト・プリンタの処理〉フォームでは複数のプリンタ状況を変更することができます。説明は、このタスクの最後にあります。

〈デフォルト・プリンタの改訂〉フォームで、[OK]をクリックすると〈デフォルト・プリンタの処理〉フォームが表示されます。

4. 〈デフォルト・プリンタ〉フォームで、デフォルト・プリンタの状況を変更するには、[ロー]メニューから[変更状況]を選択します。

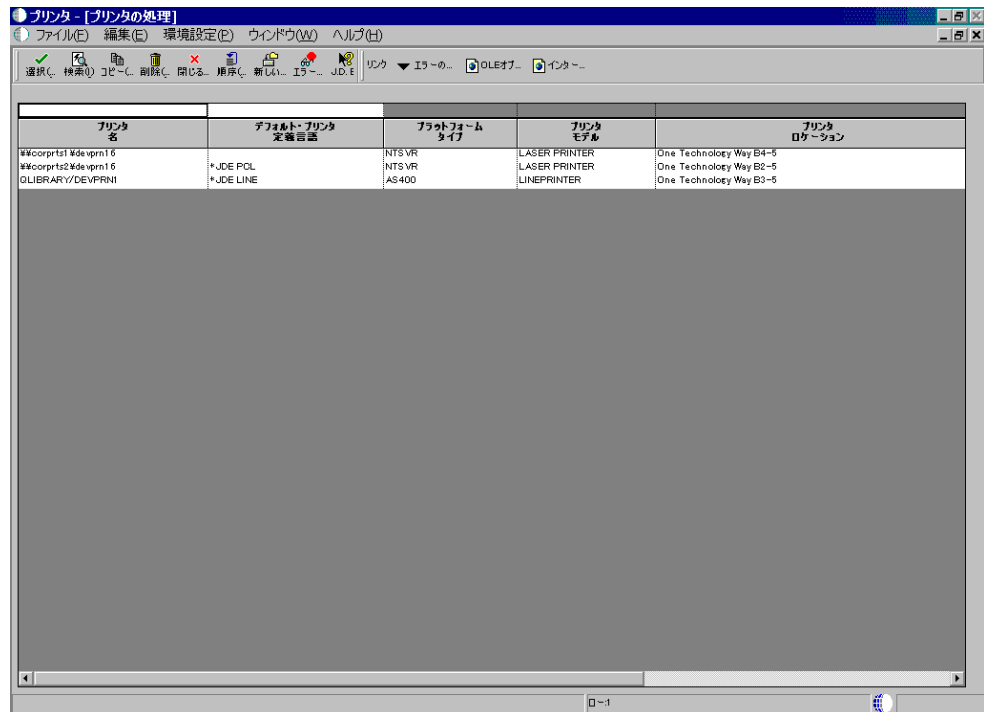
別のプリンタが既にアクティブなデフォルト・プリンタとして指定されていると、エラーが発生します。元のデフォルト・プリンタを非アクティブに変更するには、プリンタを選んで[ロー]メニューから[変更状況]を選択してから、新規プリンタをデフォルトに設定します。

▶ 既存のプリンタを変更するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉プログラム(P98616)を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで[プリンタの変更]オプションを選択します。

〈プリンタの処理〉フォームが表示されます。このフォームには、使用可能なプリンタがすべてリストされます。



- 変更するプリンタを選んで[選択]をクリックします。

〈プリンタの設定〉フォームが表示されます。このフォームでは、プリンタ・モデル、プリンタの場所、プリンタ定義言語(PDL)、用紙タイプなどのプリンタ情報を指定します。

ロケーションとプリンタ・モデルを入力してください。

プリンタ名: OLIBRARY/DEVPRN1

プラットフォームタイプ: AS400

プリンタ・モデル: LINEPRINTER

プリンタ・ロケーション: One Technology Way B3-5

ローアウトしをダブルクリックして、プリンタがサポートする用紙タイプを選択してください。デフォルトで使用する用紙タイプを指定するには、デフォルト・タイプのフィールドに"1"を入力してください。新しい用紙タイプを追加するには、[フォーム]メニューから新しい用紙タイプを選択してください。

デフォルトタイプ	用紙タイプ	プリンタ用紙の幅	プリンタ用紙の高さ	計量単位
	A4	210.00	297.00	MM
	LEGAL	8.50	14.00	IN
	LETTER	8.50	11.00	IN
		0.00	0.00	

- 必要に応じて情報を変更して、[OK]をクリックします。

プリンタ名とプラットフォーム・タイプは変更できません。ライン・プリンタを選択した場合は、フォーム下部の用紙タイプ・グリッドが使用できなくなります。

プリンタ情報が保存され、〈プリンタの処理〉フォームに戻ります。

▶ 既存のプリンタをコピーするには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉プログラム(P98616)を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで[プリンタの変更]オプションを選択します。

〈プリンタの処理〉フォームが表示されます。このフォームには、使用可能なプリンタがすべてリストされます。

2. コピーするプリンタを選んで、[コピー]をクリックします。

〈プリンタの設定〉フォームが表示されます。

3. 次のフィールドに値を入力します。

- プリンタ名

サーバー・パスを含むプリンタ名を入力します。たとえば、サーバーcorprts1にあるdocprf2という名の Windows NT プリンタの場合は、¥¥corprts1¥docprf2 という名前になります。複数のプラットフォームを使用する場合、次の命名規則を使用して、各プラットフォームごとにプリンタを設定する必要があります。

- AS/400 の場合 : library name/outqueue name

AS/400 の場合、プリンタ名と出力待ち行列名は同じである必要があります。デフォルトの QGPL ライブラリを使用して出力待ち行列を保管する場合は、このフィールドに出力待ち行列名を入力するだけで済みます。入力は大文字で行う必要があります。

例: DEVDES3A

出力待ち行列がデフォルトの QGPL ライブラリ以外のライブラリにある場合は、このフィールドにライブラリ名と出力待ち行列名を入力する必要があります。

例: QUSERSYS/DEVDES3A

注:

出力待ち行列名をライブラリ名で修飾する場合は、レポートが予期しない出力待ち行列に投入されないように、固有の名前にする必要があります。

- Windows NT: ¥¥プリンタ・サーバー名¥プリンタ名

例: ¥¥corprts1¥docprf2

入力は小文字で行う必要があります。

- UNIX: printer name (スラッシュは使用しません)

例: devprn16

入力は大文字で行う必要があります。

- プラットフォーム・タイプ

AS/400 サーバーなど、印刷するサーバーのプラットフォームを入力します。

4. [詳細]タブで、必要に応じて情報を変更します。
5. [OK]をクリックします。

▶ プリンタを削除するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉プログラム(P98616)を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[プリンタの変更]を選択します。
〈プリンタの処理〉フォームが表示されます。このフォームには、使用可能なプリンタがすべてリストされます。
2. プリンタを選択して[削除]をクリックします。複数のプリンタを選択する場合は、[Ctrl]キーを押しながらクリックします。
これで、ERP 9.0 からプリンタ定義が削除されます。

▶ 用紙タイプを削除するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉プログラム(P98616)を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[プリンタの変更]を選択します。
〈プリンタの処理〉フォームが表示されます。このフォームには、使用可能なプリンタがすべてリストされます。
2. プリンタを選んで[選択]をクリックします。
〈プリンタの設定〉フォームが表示されます。
3. 〈プリンタの設定〉フォームで、[フォーム]メニューから[新しい用紙タイプ]を選択します。
〈用紙タイプの処理〉フォームが表示されます。
4. 用紙タイプを選んで、[削除]をクリックします。
5. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。
削除した用紙タイプがグリッドになくなったことを確認します。

▶ 不正なプリンタ・レコードを検索するには

プリンタ機能テーブル(F986163)を検索して、正しくないプリンタ情報を含む不完全なプリンタ・レコードをリスト表示します。このレポートは、印刷用レコードを修正するのに役立ちます。

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドに“R9861602”と入力して[検索]をクリックします。
バージョン XJDE0001 が表示されます。

2. バージョンを実行します。

注:

『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「レポートの投入」を参照してください。このレポートには、論理プリンタ名を持つレポートが表示されます。ERP 9.0 では論理プリンタ名と物理プリンタ名を使用しなくなったため、この情報を使用して既存のプリンタ設定を変更します。

「既存のプリンタを変更するには」を参照してください。このレポートを使って、プリンタ・レコードを検索して修正します。

▶ **バッチ処理に添付されている論理プリンタを決定するには**

次のバッチ処理により、プリンタに添付されているバッチ処理があればリストされます。

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー〈GH9011〉から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション] フィールドに "R9861601" と入力して [検索] をクリックします。

バージョン XJDE0001 が表示されます。

2. バージョンを実行します。

注:

『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「レポートの投入」を参照してください。レポートには、論理プリンタ名を持つレポートが表示されます。ERP 9.0 では論理プリンタ名と物理プリンタ名を使用しなくなったため、この情報を使用して既存のプリンタ設定を変更します。

3. レポート設計ツール (RDA) を使って、論理プリンタに添付されたバッチ処理に、有効なプリンタを添付します。

プリンタの添付は、RDA をよく理解しているユーザーだけが行ってください。

レポート・ログの生成および取込み

ERP 9.0 レポートの実行時には、レポートのログを作成するかどうかを指定できます。作成できるログには、jde.log および jdedebug.log があります。これらのログによって、レポートのサーバー上での処理方法を参照できます。これらのログ・ファイルは、サーバーの特定ディレクトリに保存されます。このディレクトリの指定は、jde.ini で行います。また、使用するプラットフォームによっては、jde.ini 設定が若干異なります。次に、jde.ini でのレポート・ログ保存ディレクトリの設定例をプラットフォーム別に示します。

AS/400

[INSTALL]

DefaultSystem=B9SYS

パスの例: B9SYS¥PRINTQUEUE

UNIX

[INSTALL]

B9=/usr/jdedwardsoneworld/output

パスの例: /usr/PeopleSoft/output/PrintQueue

Windows NT サーバー

[INSTALL]

B9=d:¥jdedwardsoneworld¥output

パスの例: d:¥PeopleSoft¥output¥PrintQueue

ログ・ファイルのデフォルト・ディレクトリは、jde.ini ファイルの[INSTALL]セクションで指定したディレクトリのサブディレクトリである PrintQueue です。デフォルト・ディレクトリは、必要に応じて変更可能です。

注:

また、これらの jde.ini 設定によって、処理後のレポート出力の保存ロケーションも確定されます。レポート出力を保存するように jde.ini を設定すると、レポートの PDF ファイルがレポート出力ディレクトリに保存されます。

▶ レポート・ログを作成するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉(P98305)を選択します。

〈バッチ・バージョンの処理〉フォームが表示されます。このフォームでは、レポートを検索および実行できます。また、バージョン詳細情報、データ選択、データ順序も修正できます。

1. [バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力して、[検索]をクリックします。

たとえば、〈One Line Per Address(1 つの住所につき 1 行)〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。

2. 実行するバージョンを選んで[選択]をクリックします。

〈バージョン・プロンプト〉フォームが表示されます。ここではデータ選択とデータ順序を変更でき、〈上級バージョン・プロンプト〉フォームにもアクセスできます。

3. [フォーム]メニューから[上級]を選択します。

〈上級バージョン・プロンプト〉フォームが表示されます。ここでは、レポートを処理するロケーションの変更、jde.log の記録開始、ログ詳細レベルの変更が指示できます。

4. 必要に応じて次の情報を変更して、[OK]をクリックします。

- ログ(JDE.log)の記録

このオプションをオンにすると、基本的なログが記録され、バッチ処理時に発生した問題を確定することができます。

- トレース(JDEDEBUG.log)の記録

このオプションをオンにすると、バッチ処理の詳細を含む上級 UBE ログが記録されます。

- UBE ログ記録レベル

エラー・メッセージからオブジェクト・レベル・メッセージおよび UBE 関数メッセージまでのバッチ処理ログの詳細レベル(0～6)を指定します。

注:

より技術的な情報を受け取るために高い値を選択すると、低い値に対する情報もすべて受け取ることになります。たとえば、ここに“6”(UBE 関数メッセージ)を入力すると、0～5を指定したときに表示される情報も記録されます。

5. 〈バージョン・プロンプト〉フォームで、[投入]をクリックしてレポートを実行し、ログを作成します。

フィールド記述

記述	用語解説
ログ(JDE.log)の記録	ユーザーがサーバーで実行されたジョブに対する JDE ログを表示することを可能にするコード。サーバーがログを表示するよう既に設定されている場合は、このコードにかかわらずログが表示されます。
トレース(JDEDEBUG.log)の記録	サーバーでバッチジョブを実行する時、このフィールドはジョブの実行についてトレースが可能かどうかを表示します。トレースを実行するようにサーバーがすでに設定されている場合、このフィールドの設定に関係なく、トレースは実行されます。
UBE ログ記録レベル	バッチジョブの実行時に発生するエラーログの詳細レベルを示します。次のリストでは異なるレベルを説明します。 <ol style="list-style-type: none"> 0. エラーメッセージ 1. 情報メッセージおよびログ入力 2. セクションレベルメッセージ 3. オブジェクトレベルメッセージ 4. イベントルールメッセージ 5. データベースマッピングメッセージ 6. UBE 内部関数コール、テキストアウト値

バーコード・フォントを使用するためのプリンタの設定

ERP 9.0 では、BC C39 3 to 1 Medium バーコード・フォントの使用がサポートされます。このバーコード・フォントは ERP 9.0 に組み込まれています。ERP 9.0 プリンタのセットアップ後に、レポートにバーコード・フォントを使用できるようにプリンタを割り当てることができます。

注:

バーコードをサポートする ERP 9.0 プリンタでは、プリンタ定義言語として PostScript または PCL を使用する必要があります。

▶ バーコード・フォントを使用するためのプリンタを設定するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコード・サポート〉プログラム(P986166)を選択します。

1. 〈バーコード・フォントの処理〉で、[追加]をクリックします。

〈バーコード・フォントの改訂〉フォームが表示されます。このフォームで、バーコード・フォントを使用するプリンタを指定します。

2. 次のフィールドおよびオプションを入力します。

- プリンタ名

このフィールドのビジュアル・アシストをクリックすると、ERP 9.0 プリンタのリストにアクセスできます。

- プリンタ定義言語

[プリンタ名]フィールドに入力したプリンタのプリンタ定義言語により、適切なオプションを選択します。

- TrueType フォント名

このボタンをクリックして、〈フォント〉フォームでバーコード・フォント[BCC393 to 1 Medium]を選択します。

- プリンタフォント名

- 記号設定 ID

(PCL のみ)。シンボル・セットの文字および文字マッピングを指定します。この情報が必要な場合は、PCL プリンタ・ベンダーに連絡してください。

3. バーコード出力が可能なプリンタの情報を入力したら、[OK]をクリックします。

情報が保存され、〈バーコード・フォントの改訂〉フォームがクリアされます。バーコードをサポートしている他の ERP 9.0 プリンタの情報入力続けるか、[キャンセル]をクリックしてフォームを終了できます。

▶ ERP 9.0 のバーコード・プリンタ情報を変更するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコード・サポート〉プログラム(P986166)を選択します。

1. 〈バーコード・フォントの処理〉で、[検索]をクリックします。
以前にバーコード・フォントのサポート用に設定したプリンタが、詳細域に表示されます。
2. 変更するプリンタを選んで、[選択]をクリックします。
〈バーコード・フォントの改訂〉フォームが表示されます。
3. 必要に応じて情報を変更し、[OK]をクリックします。

▶ 新規プリンタ用に ERP 9.0 バーコード・プリンタ情報をコピーするには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコード・サポート〉プログラム(P986166)を選択します。

1. 〈バーコード・フォントの処理〉で、[検索]をクリックします。
以前にバーコード・フォントのサポート用に設定したプリンタが、グリッドに表示されます。
2. 変更するプリンタを選んで[選択]をクリックします。
〈バーコード・フォントの改訂〉フォームが表示されます。
3. プリンタ名を変更します。その他の情報も、必要に応じて変更できます。
4. [OK]をクリックして、変更内容を保存します。

▶ ERP 9.0 プリンタからバーコード・サポート情報を削除するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコード・サポート〉プログラム(P986166)を選択します。

1. 〈バーコード・フォントの処理〉で、[検索]をクリックします。
以前にバーコード・フォントのサポート用に設定したプリンタが、グリッドに表示されます。
2. 削除するプリンタを選んで[削除]をクリックします。
3. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。

ERP 9.0 ライン・プリンタで実行するレポートの設計

ライン・プリンタでレポートを実行する場合は、レポートに含まれる情報が正常に印刷されるように、一定のガイドラインに従って操作する必要があります。このガイドラインには、レポートのフォント・ファミリ、フォント・サイズ、グリッド間隔、フィールド幅、用紙サイズ、およびラインのパラメータが含まれます。

ここでは、ERP 9.0 ライン・プリンタ・レポートの作成に必要な情報について説明します。

重要事項:

このセクションの情報は、ERP 9.0 レポートの作成と ERP 9.0 プリンタのセットアップを行ったことがあるユーザーを対象としています。

参照

- レポート設計ツールの処理については『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「Report Design Director(レポート設計ディレクタ)」
 - ERP レポートについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ERP 9.0 レポートの印刷」
- 『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの次のトピックを参照してください。
- AS/400 サーバーのプリンタの設定については「AS/400 用プリンタの設定」
 - UNIX サーバーのプリンタの設定については「UNIX 用プリンタの設定」
 - Windows NT サーバーのプリンタの設定については「Windows NT サーバー用プリンタの設定」

▶ ライン・プリンタで実行する ERP 9.0 レポートを設計するには

重要

〈バッチ・バージョン〉を使ってライン・プリンタだけに使用するレポート・バージョンを作成し、これに次の変更を加えます。レポート・レベルでの変更は行わないでください。レポート・レベルで変更すると、レポートが他のプリンタ・プラットフォームで正しく表示されなくなることがあります。

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 対象レポートのライン・プリンタ用に変更するバージョンを開きます。
2. [Layout(レイアウト)]メニューから[Alignment(グリッド配置)]を選択します。
〈Alignment Grid(グリッド配置)〉フォームが表示されます。このフォームでは、レポートの縦のグリッド間隔を変更します。
3. [Vertical(縦)]フィールドを“16”にして、[OK]をクリックします。
4. [File(ファイル)]メニューから[Report Properties(レポート・プロパティ)]を選択します。
〈Properties(プロパティ)〉フォームが表示されます。このフォームでは、レポートのフォント・プロパティを変更します。
5. [Font/Color(フォント/色)]タブで、次のフォント・プロパティを設定して、[OK]をクリックします。
 - フォントを Courier New に変更します。
Courier New フォントが最も見やすく出力されますが、固定ピッチ・フォントであれば、他のフォントも選択可能です。たとえば、日本語を表示するレポートであれば、固定ピッチの MS ゴシックを選択します。
 - フォント・サイズを 10 に変更します。

6. [Apply settings to all objects(この設定をすべてのオブジェクトに適用)]オプションをオンにして、すべてのオブジェクトにこの設定を反映させます。
7. フォント・プロパティを変更すると、フィールド幅を広げて文字がすべて表示されるように調整する必要がある場合があります。レポート上で情報の表示領域が十分に得られるように、必要に応じてフィールド幅を広げてください。レポート・オブジェクトがグリッドに表示されるように、レポートのセクションの位置を修正します。

注:

レポートのフォーマットについては、『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドを参照してください。

ステップ 7～10 は Group(グループ)セクションにのみ該当します。

8. 正しく整列されていないフィールドがある場合は、[Ctrl]キーを押したまま各フィールドをクリックします。
最後にクリックしたを基準に他のフィールドが整列されます。
9. [Layout(レイアウト)]メニューから[Align(整列)]を選択します。
〈Align Objects(オブジェクトの整列)〉フォームが表示されます。
10. [Apply To(対象)]ボックスで[Current Section(現在のセクション)]オプションを選ぶと、[Top to Bottom(上下)]ボックスが有効になります。
11. [Top to Bottom(上から下へ)]ボックスで[Top Edges(上端)]オプションを選んで、[OK]をクリックします。
12. レポートの変更が完了したら、レポート・バージョンを保存します。

▶ **ERP 9.0 ライン・プリンタを設定するには**

重要

次のステップには、ライン・プリンタの用紙サイズの設定値に関する説明が含まれています。各ステップは、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「プリンタ・アプリケーションの処理」の ERP 9.0 プリンタの設定手順の補足ステップとして使用する必要があります。

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉プログラム(P98616)を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[プリンタの追加]を選択します。
2. 〈プリンタ設定ディレクタ〉で、[次へ]をクリックします。
3. 〈プラットフォーム情報〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - プラットフォーム・タイプ
 - サーバー名
 - 共有名

4. [次へ]をクリックします。
5. [一般]タブで、次のフィールドに情報を入力します。
 - プリンタ・モデル
 - プリンタ・ロケーション
6. [詳細]タブで、プリンタ定義言語に[ライン・プリンタ]を選択します。
7. このフォームでは、1 インチあたりの文字数(CPI)、1 ページのカラム数(CPP)、1 インチあたりの行数(LPI)、1 ページの行数(LPP)を設定する必要があります。

この 4 つの値によって、ERP 9.0 レポートの印刷時にライン・プリンタで使用する用紙サイズが確定されます。8.5 インチ x 11 インチの用紙に印刷する場合は次の値を使用します。

- 1 インチあたりの文字数: 10
- 1 ページのカラム数 85
- 1 インチあたり行数: 6
- (縦)1 ページの行数: 66

注:

次の計算式を使用すると、用紙サイズを計算することができます。

$$CPP / CPI = \text{用紙の幅} (85 / 10 = 8.5 \text{ インチ})$$

$$LPP / LPI = \text{用紙の高さ} (66 / 6 = 11 \text{ インチ})$$

8. [終了]をクリックして、設定を保存します。

► **リモート AS/400 ライン・プリンタにレポートを複数部数印刷するには**

このタスクは、AS/400 ライン・プリンタでレポートの部数印刷がサポートされていない場合にのみ必要です。また、リモート出力待ち行列にのみ該当します。この操作はシステム管理者が行ってください。

1. 出力待ち行列が接続されているリモート・ライターを終了します。
2. 出力待ち行列の変更(CHGOUTQ)コマンドを使用して、値 XAIX が含まれるように表示オプション(DSPOPT)パラメータを変更します。
3. リモート・ライターを再スタートさせます。
4. 出力待ち行列は、リモート・プリンタへの部数印刷の送信が可能になります。

プロジェクト・プロモーションのライフ・サイクル

標準的なプロジェクトのプロモーション・サイクルは、次のとおりです。

11 > 21 > 26 > 28 > 38 > 01

それぞれの番号は次の状況を表します。

11 新規プロジェクト保留検討

21 - プログラミング

26 QA テスト/検討

28 QA テスト/検討

38 プロダクション

01 完了

標準的なプロジェクト・プロモーション・サイクルでは、開発者は開発パス・コードに対してオブジェクトをチェックアウトおよびチェックインした後、プロトタイプ・パス・コードにプロモートし、本稼働用パス・コードにプロモートしてから、「完了」を宣言します。

管理者は、次のように異なるプロモーション・サイクルを辿ることができます。

11 > 40 > 41 > 42 > 01

それぞれの番号は次の状況を表します。

11 新規プロジェクト保留検討

40 プロダクション開発

41 プロダクションをプロトタイプに転送

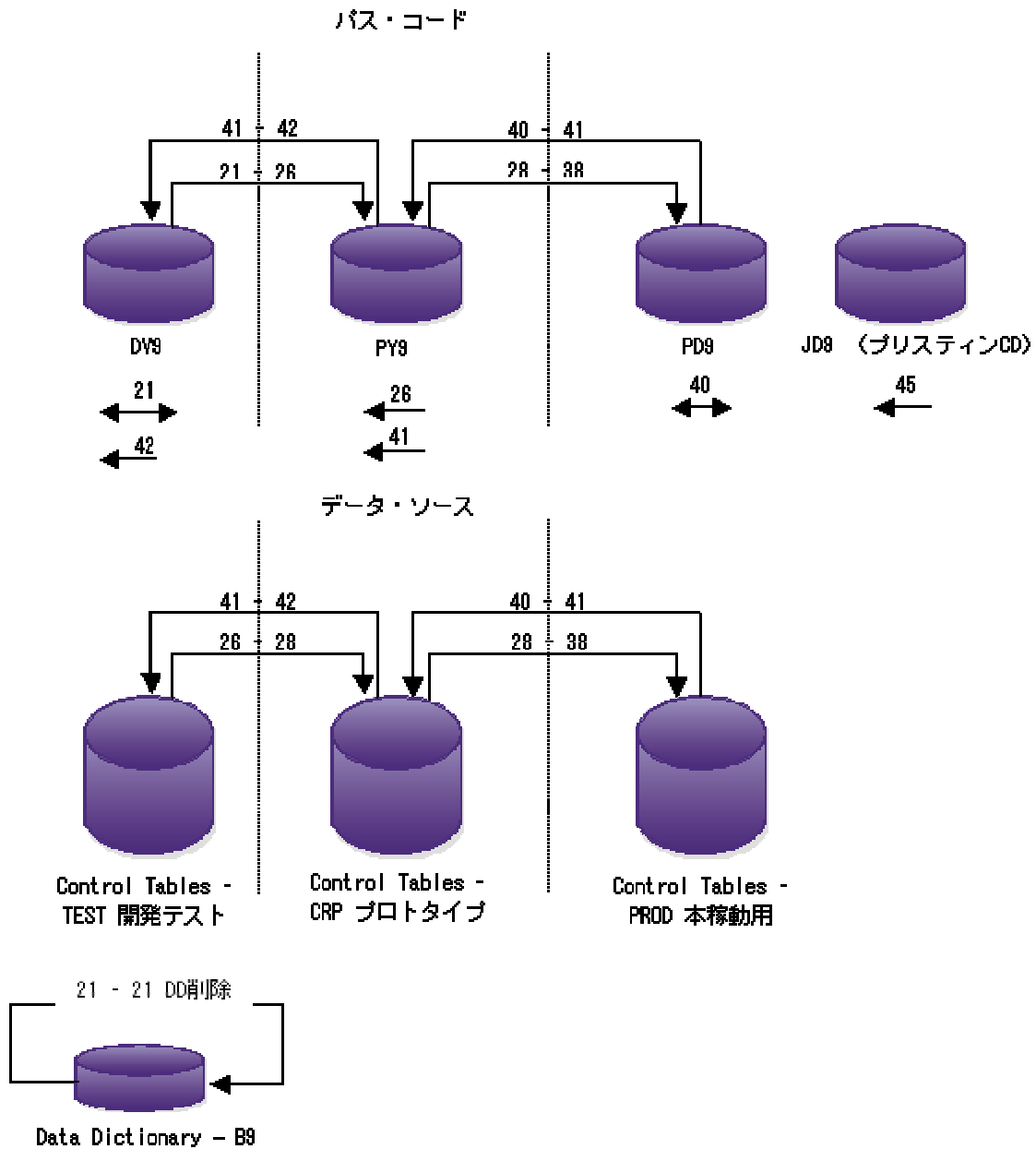
42 プロトタイプを開発に転送

01 完了

このプロモーション・サイクルでは、管理者は修正を適用するために本稼働用パス・コードに対してオブジェクトをチェックアウトおよびチェックインしてから、プロトタイプ・パス・コード、開発パス・コードへ逆方向にプロモートします。開発者はこのサイクルを使用しないでください。このサイクルを制限する状況アクティビティ・ルールは、(管理者のユーザーID を持つ)特定のグループに適用することをお勧めします。

次の図は、プロジェクト・プロモーション・ライフ・サイクルを表しています。

プロジェクト・プロモーションのライフ・サイクル



サーバーの処理

〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)は、システム管理者が次の監視および制御作業を行う上で、
の中心的存在です。

- サーバー・ジョブ
- ERP 9.0 サブシステム

システム管理者は、〈サーバーの処理〉プログラムを使用して、現在 ERP 9.0 サーバーの待ち行列に入っているすべてのジョブを印刷、表示、削除、終了、リリース、または保留にできます。また、ワークステーション・ユーザーは、自分が投入したジョブに限り制御できます。通常、このオプションは、自分のユーザーIDに関連付けられているジョブのみに限定されます。

〈サーバーの処理〉を使用すると、サブシステムの終了や停止、実行中またはジョブ処理を待機しているサブシステムの状況を表示することができます。

サーバー・ジョブの処理

システム管理者は、〈サーバーの処理〉アプリケーションを使用して、出力待ち行列からジョブ・レコードを印刷、表示、削除できます。また、任意の ERP 9.0 サーバーの待ち行列に現在常駐しているジョブを終了、リリース、または保留することもできます。同様に、ワークステーション・ユーザーは、〈投入済みレポート〉アプリケーションを使用して、通常は各自が投入したジョブに限り制御できます。

ERP 9.0 のセキュリティ機能を使用して、〈サーバーの処理〉アプリケーションへのアクセスを制限する必要があります。通常、このプログラムへのアクセスはシステム管理者レベルのユーザーに制限されています。これは、〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)の ZJDE0001 バージョンでは、すべてのユーザーのサーバー・ジョブが表示/制御できるためです。エンドユーザーのアクセスは、バージョン ZJDE0002 に限定する必要があります。このバージョンは投入済みレポートのアプリケーション(P986116)とも呼ばれます。このバージョンを使用すると、ユーザーは最初に自分の ID を使って投入したジョブしか表示や変更をできなくなります。これらのプログラムはどちらも、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)からアクセスできます。

〈サーバーの処理〉で、[ロー]メニューから[サーバー・ジョブ]を選択して、〈投入済みジョブの検索〉フォームにアクセスします。[ロー]メニューから次のオプションを選択してください。

- 印刷
状況が E または D のジョブを印刷できます。標準的な印刷フォームを使用して、デフォルト・プリンタまたは使用可能な他のプリンタに出力できます。
- PDF ジョブの表示
Adobe Acrobat Reader プログラムを起動してレポートをオンライン表示できます。レポートをオンラインで検討し、デフォルト・プリンタまたは使用可能な他のプリンタに出力できます。
- CSV ジョブの表示
カンマ区切り形式のファイルとしてレポートを出力します。Excel で開くことができます。
- OSA ジョブの表示
ユーザー定義出力タイプでレポートを出力します。最初に出力量変換を設定してください。

- ログの表示
jde.log と jdedebug.log を表示できます。
- 終了
処理中のジョブが終了します。ジョブは削除されませんが状況が E(エラー)になり、ユーザーがログを参照できるようになります。
- リリース
ジョブの H(保留)状況が解除され、待ち行列に送られます。
- 保留
再度リリースするまでジョブを停止できます。

レポートの状況チェック

レポートを投入したら、待ち行列にあるジョブの状況を確認できます。ジョブの状況に応じて、レポートの印刷、レポートのオンライン表示、レポートの削除、待ち行列におけるレポートの保留などのタスクを実行できます。

▶ レポートの状況をチェックするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

1. 〈サーバーの処理〉フォームで、サーバーを選択するか、QBE を使用してサーバーを検索します。
2. 処理するサーバーを選んで[選択]をクリックします。
3. 〈投入済みジョブの検索〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザーID

デフォルト・ユーザーID は、現在の ERP 9.0 セッションにサインオンしているユーザーです。他のユーザーによって投入されたレポートを処理する場合は、このユーザーID を変更できます。必要なユーザーを検索するために、ワイルドカード(*)も使用できます。

- ジョブ待ち行列

ジョブを表示するサーバー上の論理待ち行列の名称を入力します。

〈投入済みジョブの検索〉フォームから、ジョブを印刷、表示、削除、保留にできます。また、レポートの処理内容に関する詳細情報を含むログを参照することもできます。

このフォームのグリッドには、ジョブとその状況が表示されます。[状況]フィールドでビジュアル・アシストを使用すると、インストレーション内の状況コードを表す UDC を読み取ることができます。

優先度/ジョブ用プリンタの変更

待ち行列にあるジョブを移動させるには、ジョブの状況が W(待機中)の間にジョブの優先度を変更できます。優先度の高いジョブは、ジョブ待ち行列の上方に、低いものは下方に移動させます。ジョブを印刷するロケーションも一時変更できます。

▶ ジョブの優先度とプリンタを変更するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

1. 作業するサーバーを選んで、[ロー]メニューから[サーバー・ジョブ]を選択します。

〈投入済みジョブの検索〉フォームが表示されます。デフォルトでは、要求側ワークステーションのユーザーID のジョブが表示されます。アプリケーションのセキュリティ・レベルによっては、[ユーザーID]フィールドと[ジョブ待ち行列]フィールドを変更し、他のジョブを検索できます。

注:

優先順位を変更するには、ジョブが W(待機中)状況になっている必要があります。

2. 処理するジョブを選んで[選択]をクリックします。

〈ジョブ管理〉フォームが表示されます。このフォームで、バッチ・ジョブ情報を検討し、ジョブの優先順位を修正して出力先プリンタを変更できます。

3. 次の情報を修正して[OK]をクリックします。

- 優先度

フィールド記述

記述	用語解説
ユーザーID	ユーザー・プロファイルを識別するコード。
ジョブ待ち行列	ジョブが投入された論理待ち行列。
ジョブ優先度	投入されたジョブの優先順位。ジョブはこの優先順位に基づいて実行されます。有効な値は 0 から 9 までで、0 が最優先となります。

ジョブの印刷

状況が D(完了)および E(エラー)になっているジョブの場合は、PDF ファイルをオンライン表示せずに、デフォルト・プリンタに直接送信できます。状況 D は、ジョブの処理が正常に終了したことを意味します。状況 E は、処理中にエラーが発生したことを意味します。状況が E になっているジョブを印刷するときには、レポートのトラブルシューティング時に役立つエラー・ログを印刷してください。

▶ ジョブを印刷するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

1. 〈サーバーの処理〉フォームで、サーバーを選択するか、QBE を使用してサーバーを検索します。
2. [ロー]メニューから[サーバー・ジョブ]を選択します。

〈投入済みジョブの検索〉フォームが表示されます。デフォルトで、このフォームのグリッドには自分のユーザーID のジョブが表示されます。セキュリティ・レベルによっては、[ユーザーID]フィールドと[ジョブの待ち行列]フィールドを変更し、他のジョブを検索できます。

3. 印刷するジョブを選択し、[ロー]メニューから[印刷]を選択します。

〈プリンタ選択〉フォームが表示されます。このフォームには、プリンタ固有の情報とレポート様式に関する情報が表示されます。

4. [OK]をクリックしてジョブを印刷します。

レポートのオンライン表示

サーバー上でジョブの処理が完了した後に、レポート出力をオンラインで表示できます。ほとんどのジョブの場合、出力は Adobe Acrobat Reader で表示可能な PDF(ポータブル・ドキュメント・フォーマット)で生成されます。レポート出力をオンライン表示するときにも、ワークステーション上の次のディレクトリ内に PDF ファイルが作成されます。

¥b9¥PrintQueue

PDF ファイルは、電子メール・メッセージに添付したり、移動またはコピーできます。また、最新のほとんどの Web ブラウザでは PDF ファイルを読み取ることができるので、レポートを Web サイトにアップロードできます。さらに、Acrobat Reader からクリップボードにテキストをコピーし、それを他のアプリケーションに貼り付けることもできます。

はじめる前に

- レポートをオンライン表示する前に、Adobe Acrobat Reader がワークステーションにインストールされているかどうかを確認してください。

▶ レポートをオンラインで表示するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

〈サーバーの処理〉フォームが表示されます。このフォームで、バッチ・アプリケーションの処理に使用するサーバーのリストにアクセスできます。

1. リストからサーバーを選択するか、QBE を使用してサーバーを検索します。
2. [選択]をクリックするか、[ロー]メニューから[サーバー・ジョブ]を選択します。

〈投入済みジョブの検索〉フォームが表示されます。デフォルトで、このフォームには自分のユーザーID のジョブが表示されます。セキュリティ・レベルによっては、[ユーザーID]フィールドと[ジョブの待ち行列]フィールドを変更し、他のジョブを検索できます。

3. 表示するジョブを選んで、[ロー]メニューから[ジョブの表示]を選択します。

Adobe Acrobat Reader に、レポート出力のオンライン・バージョンが表示されます。Acrobat Reader の使用方法の詳細については、Adobe Acrobat Reader のオンライン・ヘルプを参照してください。

ジョブ・ログの表示

ジョブの処理経過を詳細に示すログを表示できます。〈投入済みジョブの検索〉フォームから、レポートの jde.log および jdedebug.log にアクセスできます。これらのログは、レポート・エラーの発生時のトラブルシューティングに役立ちます。これらのログは、ジョブを実行したマシン上に存在しますが、それがワークステーションと同じマシンであるとは限りません。

jde.log は、ERP 9.0 の処理によって生成されるエラー・メッセージをトラッキングするための汎用ログです。jde.log では、サインオンに成功したかどうかなど、ERP 9.0 内で発生する障害を記録します。起動エラーを調べる場合は、jde.log を先頭から順に読む必要があります。他のエラーの場合は、下から逆に読んでいってください。

The jdedebug.log には、API 呼出しと SQL 文、および他のメッセージが含まれています。このログを使用すると、通常の処理がいつ停止されたかがわかります。システムでは、jdedebug.log はエラーのトラッキング時には使われません。処理のタイミングをトラッキングするのに使用されます。

参照

- 投入済みジョブ・エラーのトラブル・シューティングについては『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「ワークステーション・ログ・ファイルの処理」と「エンタープライズ・サーバー・ログ・ファイルの処理」

▶ ジョブのログを表示するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

〈サーバーの処理〉フォームが表示されます。このフォームで、バッチ・アプリケーションの処理に使用するサーバーのリストにアクセスできます。

1. [検索]をクリックしてすべてのサーバーを検索するか、QBE ローを使用して特定のサーバーを検索できます。
2. 問題を解決するジョブを処理したサーバーを選んで[選択]をクリックします。
3. [選択]をクリックするか、[ロー]メニューから[サーバー・ジョブ]を選択します。

〈投入済みジョブの検索〉フォームが表示されます。デフォルトで、このフォームには自分のユーザーID のジョブが表示されます。セキュリティ・レベルによっては、[ユーザーID]フィールドと[ジョブの待ち行列]フィールドを変更し、他のジョブを検索できます。

4. ログを表示するジョブを選んで、[ロー]メニューから[ジョブの表示]を選択します。

〈ログの表示〉フォームが表示されます。このフォームで、jde.log と jdedebug.log を表示するように選択できます。

5. [OK]をクリックしてログを表示します。

注:

jde.log と jdedebug.log の両方を選択すると、ログは同じウィンドウに表示されます。2 つのログを別々に表示するには、個別に選択する必要があります。

ジョブの終了

処理中のジョブは手作業で終了することができます。ジョブを終了しても、そのジョブが削除されるのではなく、状況が E(エラー)に変更されます。状況が E になっているジョブの場合は、エラー・ログを印刷するか、そのジョブを削除できます。

▶ ジョブを終了するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

〈サーバーの処理〉フォームが表示されます。このフォームで、バッチ・アプリケーションの処理に使用するサーバーのリストにアクセスできます。

1. リストからサーバーを選択するか、QBE を使用してサーバーを検索します。
2. [選択]をクリックするか、[ロー]メニューから[サーバー・ジョブ]を選択します。

〈投入済みジョブの検索〉フォームが表示されます。デフォルトで、このフォームには自分のユーザーID のジョブが表示されます。セキュリティ・レベルによっては、[ユーザーID]フィールドと[ジョブの待ち行列]フィールドを変更し、他のジョブを検索できます。

3. 終了するジョブを選んで、[ロー]メニューから[終了]を選択します。
-

注:

終了するには、ジョブが P(処理中) 状況になっている必要があります。

4. [検索]をクリックしてグリッドを更新します。

ジョブの状況が E(エラー)に変更されます。

ジョブの保留とリリース

ジョブの状況が W(待機中)になっている場合は、そのジョブを保留できます。ジョブが処理中のサーバーのパフォーマンスに影響するほど大きい場合は、そのジョブを保留にるように選択できます。サーバーのパフォーマンスが問題とならない場合(営業時間後など)は、ジョブをリリースすることができます。

注:

状況が P(処理中)になっているジョブを停止する場合は、そのジョブを終了する必要があります。ジョブを終了しても、そのジョブが削除されるのではなく、状況が E(エラー)に変更されます。終了したジョブは再開できません。サーバーに再投入する必要があります。

▶ ジョブを保留にするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

〈サーバーの処理〉フォームが表示されます。このフォームで、バッチ・アプリケーションの処理に使用するサーバーのリストにアクセスできます。

1. リストからサーバーを選択するか、QBE を使用してサーバーを検索します。
2. [選択]をクリックするか、[ロー]メニューから[サーバー・ジョブ]を選択します。

〈投入済みジョブの検索〉フォームが表示されます。デフォルトで、このフォームには自分のユーザーID のジョブが表示されます。セキュリティ・レベルによっては、[ユーザーID]フィールドと[ジョブの待ち行列]フィールドを変更し、他のジョブを検索できます。

3. 保留にするジョブを選んで、[ロー]メニューから[保留]を選択します。
4. [検索]をクリックしてグリッドを更新します。

ジョブの状況が H(保留)に変更されます。

▶ ジョブをリリースするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

〈サーバーの処理〉フォームが表示されます。このフォームで、バッチ・アプリケーションの処理に使用するサーバーのリストにアクセスできます。

1. リストからサーバーを選択するか、QBE を使用してサーバーを検索します。
2. [選択]をクリックするか、[ロー]メニューから[サーバー・ジョブ]を選択します。

〈投入済みジョブの検索〉フォームが表示されます。デフォルトで、このフォームには自分のユーザーID のジョブが表示されます。セキュリティ・レベルによっては、[ユーザーID]フィールドと[ジョブの待ち行列]フィールドを変更し、他のジョブを検索できます。

3. リリースするジョブを選んで、[ロー]メニューから[リリース]を選択します。

リリースするジョブの状況は、H(保留)になっている必要があります。

4. [検索]をクリックしてグリッドを更新します。

ジョブの状況は、待ち行列内での位置を反映して W(待機中)、S(待ち行列内)、P(処理中)などに変更されます。

処理オプション:サーバーの処理プログラム(P986116)

セキュリティ

この処理オプションでは、サーバーの処理時に使用するセキュリティのレベルを指定します。処理オプションの詳細内容を見るには、フィールドを右クリックして[ポップ・ヒント]を選択します。または、処理オプションのフィールドをクリックして[F1]キーを押してください。

1. セキュリティ・フラグ

この処理オプションを使用して、投入済みジョブの表示方法を指定します。有効な値は次のとおりです。

ブランク セキュリティは適用されません。

- 1 ユーザーはジョブをグループ別に表示できます。
 - 2 ユーザーが表示できるのは自分のジョブのみです。
-

ERP 9.0 待ち行列の管理

各 ERP 9.0 サーバー・インスタンスは、オペレーティング・システム・プラットフォーム間でバッチ処理を管理する待ち行列カーネル・プロセスを起動します。このプロセスでは、投入されたジョブをすべてトラッキングし、ジョブの実行順序が制御されます。

ERP 9.0 では、次の 2 つのテーブルを使用して待ち行列レコードが管理されます。

- ジョブ・コントロール状況マスター(F986110)。待ち行列に投入された各ジョブの状況に関するレコードが管理されます。
- 待ち行列コントロール状況マスター(F986130)。各待ち行列の名称(QBATCH など)、待ち行列が実行されるサーバーの名称、サーバー・インスタンス用のポート番号、待ち行列の状況とタイプ、アクティブ・ジョブの最大許容数が保管されます。

注:

F986130 は、ERP 9.0 リリースで導入された新規システム・テーブルです。〈オブジェクト構成マネージャ〉(OCM)を使用してオブジェクトをマップするときには、このテーブルを考慮してください。

次に、ERP 9.0 では待ち行列カーネルを使用して起動した UBE をどのように管理するか概要を示します。

- サーバー・インスタンスの起動時に待ち行列カーネルが起動されます。
- ジョブが投入される待ち行列に対してレコードが F986130 テーブルにあることを確認します。ジョブが ERP 9.0 以外の待ち行列に対する場合は、ネイティブの待ち行列(AS/400 など)があることを確認します。
- ジョブ・コントロール状況マスター(F986110)にジョブ・レコードが挿入されます。
- 新規ジョブを示すメッセージが待ち行列カーネルに送信されます。
- ジョブが待機リストに追加されます。
- ジョブのスケジュールが設定されるか、ジョブがネイティブ待ち行列に投入されます。
- ジョブが起動されます。
- ジョブが実行されます。
- ジョブの完了を示すメッセージを UBE プロセスから受け取った時点で、ジョブ・コントロール状況マスター(F986110)内のジョブ・レコードが更新されます。
- ジョブがアクティブ・ジョブのリストから削除されます。

- 別のジョブのスケジュールが設定されます。

待ち行列カーネルでは、ジョブのスケジュール設定時に次のサブルーチンも実行されます。待ち行列カーネルで実行されるサブルーチンは、次のとおりです。

- 待ち行列に実行待機中のジョブがあるかどうかを検証されます。
- 実行待機中のジョブ数が、待ち行列の最大許容ジョブ数より少ないかどうかを検証されます。
- 最上位の優先順位を持つジョブが待機リストから選択され、その状況が S(投入済み)に更新されます。
- ジョブが待機リストから削除され、アクティブ・リストに追加されます。

ERP 9.0 アプリケーションの〈ジョブ待ち行列の処理〉プログラム(P986130)を使用すると、待ち行列を動的に管理できます。このアプリケーションでは、プラットフォームに関係なく、ジョブ待ち行列の作成、修正、コピー、削除、または状況の変更が可能です。

また、〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉アプリケーション(P98305)を使用すると、ジョブのバージョンに含まれる待ち行列情報も管理できます。たとえば、サーバー上でジョブが投入される待ち行列を変更できます。

参照

- 〈サーバーの処理〉アプリケーション(P986116)を使用して UBE を管理する方法については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サーバー・ジョブの処理」

待ち行列の管理

待ち行列を定義して管理するには、〈ジョブ待ち行列の処理〉アプリケーション(P986130)を使用します。たとえば、このアプリケーションで、待ち行列コントロール状況マスター(F986130)に待ち行列レコードを追加できます。また、既存の待ち行列レコードを改訂することもできます。たとえば、待ち行列で実行するジョブの最大数を変更するとします。待ち行列は別のサーバーにコピーできます。また、状況を変更して待ち行列を管理することもできます。

はじめる前に

- 待ち行列カーネルをアクティブ化するには、サーバーの jde.ini ファイルで次の設定を確認してください。

```
[JDENET_KERNEL_DEF14]

krnlName=QUEUE KERNEL

dispatchDLLName=jdekrnl.dll

dispatchDLLFunction=_DispatchQueueMessage@28

numberOfProcesses=1

numberOfAutoStartProcesses=0
```

```
[DEBUG]

QKLog=0
```


値 0 は、エラー・ログのみが生成されることを意味します。トラブルシューティング用にデバッグ・ログを生成する必要がある場合は、この設定を 1 に変更します。

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

QKActive=1

QKOnIdle=300

値 1 は待ち行列カーネルがアクティブであること、値 300 は待ち行列カーネルのアイドル時間が 300 秒に設定されていることを意味します。

- クライアントの jde.ini ファイルに次の設定を追加します。

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

QKActive=1

▶ 待ち行列を追加するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈ジョブ待ち行列〉プログラム(P98616)を選択します。

1. 〈ジョブ待ち行列の処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈ジョブ待ち行列の改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - ホスト
待ち行列が実行されるサーバーの名称を入力します。
 - ジョブ待ち行列
待ち行列名を入力します。
 - ジョブ待ち行列状況
待ち行列をアクティブにする場合は“01”、待ち行列をアクティブでない状況にする場合は“02”を入力します。
 - 待ち行列タイプ
待ち行列が ERP 9.0 待ち行列であるか、ERP 9.0 以外の待ち行列であるかを定義します。非 ERP 9.0 待ち行列は、AS/400 サーバー上でのみ動作します。
 - 最大バッチ・ジョブ数
待ち行列内で実行できるジョブの最大数を定義します。
 - ポート番号
待ち行列が実行されるサーバー・インスタンスのポート番号を指定します。
 - デフォルト・ジョブ待ち行列
デフォルト待ち行列にはチェックボックスをオンにし、デフォルトでない待ち行列にはブランクのままにします。

▶ 待ち行列を改訂するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈ジョブ待ち行列〉プログラム(P986130)を選択します。

1. 〈ジョブ待ち行列の処理〉で、改訂する待ち行列を検索して[選択]をクリックします。
2. 〈ジョブ待ち行列の改訂〉で、次のフィールドまたはオプションに値を入力して待ち行列を取込み、[OK]をクリックします。
 - ホスト
 - ジョブ待ち行列
 - ジョブ待ち行列状況
 - 待ち行列タイプ
 - 最大バッチ・ジョブ数
 - ポート番号
 - デフォルト・ジョブ待ち行列

▶ 待ち行列をコピーするには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈ジョブ待ち行列〉プログラム(P986130)を選択します。

1. 〈ジョブ待ち行列の処理〉で、コピーする待ち行列を検索して[コピー]をクリックします。
2. 〈ジョブ待ち行列の改訂〉で、次のフィールドに値を入力して待ち行列をコピーし、[OK]をクリックします。
 - ホスト
 - ジョブ待ち行列
 - ジョブ待ち行列状況
 - 待ち行列タイプ
 - 最大バッチ・ジョブ数
 - ポート番号
 - デフォルト・ジョブ待ち行列

▶ 待ち行列の状況を変更するには

〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈ジョブ待ち行列〉プログラム(P986130)を選択します。

1. 〈ジョブ待ち行列の処理〉で、状況を変更する待ち行列を検索します。
2. [ロー]メニューから[状況変更]を選択します。

変更前の状況に応じて、待ち行列の状況が Active(アクティブ)から Inactive(非アクティブ)に、または Inactive から Active に変更されます。

ジョブ待ち行列一時変更

UBE の投入準備中に、ジョブ待ち行列を一時変更して、投入先を定義するパラメータの値を変更できます。ジョブ待ち行列を一時変更すると、サーバー上でジョブが投入されるジョブ待ち行列が変更されます。

バッチ・バージョンのジョブ待ち行列を一時変更するには、〈バッチ・バージョン〉アプリケーション (P98305) を起動し、バッチ・バージョンを選択し、〈上級バージョン・プロンプト〉フォーム (W98305I) にアクセスします。そのサーバーとポートに使用可能な一時変更待ち行列を指定する必要があります。

〈上級バージョン・プロンプト〉フォームで操作中にジョブ待ち行列を一時変更できるのは、待ち行列カーネルがアクティブで、かつバッチ・バージョンがサーバー上で実行するようにマップされている場合のみです。バッチ・バージョンがローカルで実行するようにマップされている場合は、待ち行列カーネルがアクティブであっても、[一時変更ロケーション] オプションをオンにしない限り、ジョブ待ち行列を一時変更できません。

注:

ジョブのロケーションを一時変更すると、UBE を実行するマシンが変更されます。たとえば、UBE はデフォルトでローカルにて実行されます。処理ロケーションはサーバーに一時変更でき、その場合は UBE がサーバー上で実行されます。逆に、処理ロケーションをサーバーからワークステーションに変更することもできます。

ジョブがローカルで実行されており、処理ロケーションを一時変更していない場合は、〈ジョブ待ち行列一時変更の確認〉フォームが表示されます。

待ち行列カーネルの状況と、UBE のデフォルトの処理ロケーションによって、〈上級バージョン・プロンプト〉フォームの [ジョブ待ち行列一時変更] オプションの表示状態が確定されます。次の表は、待ち行列カーネルの状況と処理ロケーションに考えられる組合せと、それぞれが [ジョブ待ち行列一時変更] オプションに及ぼす影響を示しています。

待ち行列カーネルの状況	UBE の処理ロケーション	[ジョブ待ち行列一時変更] オプションの状況
非アクティブ	ローカルまたはサーバー	非表示
アクティブ	Local	表示されるが使用不可
アクティブ	ローカルだが [ロケーション一時変更] オプションを選択済み	使用可能
アクティブ	サーバー	使用可能

► ジョブ待ち行列を一時変更するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈バッチ・バージョン〉 (P98305) を選択します。

〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームが表示されます。

1. 投入するジョブのバージョンを検索し、[選択] をクリックします。

〈バージョン・プロンプト〉フォームが表示されます。

2. [フォーム] メニューから [上級] を選択します。

〈上級バージョン・プロンプト〉フォームが表示されます。

3. [ジョブ待ち行列一時変更]オプションをクリックして[OK]をクリックします。

注:

待ち行列カーネルがアクティブでない場合、このオプションは表示されません。

4. 〈バージョン・プロンプト〉フォームで、次のオプションの両方を選択するか、どちらも選択せずに、[投入]をクリックします。
 - データ選択
 - データ順序設定
5. 〈ジョブ待ち行列の検索〉で、ホストとポート名に使用可能な待ち行列名を検索します。
6. 一時変更する待ち行列を選んで[選択]をクリックします。
7. ジョブの投入に必要なデータ選択、順序設定、処理オプションを設定し、必要に応じてプリンタを選択します。

ERP 9.0 サブシステムの処理

ERP 9.0 では、エンタープライズ・サーバーでの処理による負荷を軽減するために、さまざまなサブシステムを使用します。

ERP 9.0 サブシステムの理解

サブシステムでは、ERP 9.0 アプリケーションに依存せずに絶えずバッチ・ジョブが実行されます。一部の ERP 9.0 アプリケーションは、サブシステムを使用して必要な処理を完了します。システム・リソースの消費量を最小限に抑えるために、ERP 9.0 サブシステムは手動で起動する必要があります。

ERP 9.0 サブシステム

「サブシステム」は汎用的な用語であり、通常はオペレーティング・システムのサブプロセスであるシステムを示します。AS/400 サーバー・プラットフォーム上では、サブシステムとは、ERP 9.0 のジョブであるか他のアプリケーションのジョブであるかないかに関係なく、システムのジョブを実行するために使用される論理プロセスです。UNIX の場合、ERP 9.0 サブシステムはデーモンと同じ機能を持っています。UNIX と Windows NT サーバー・プラットフォームでは、システム・ジョブは待ち行列で処理されます。これらの待ち行列は AS/400 のサブシステムと機能的に同じです。

ERP 9.0 では、サブシステムは、ERP 9.0 アプリケーションから独立して非同期で絶えず実行されるバッチ・ジョブとして定義されています。これらの ERP 9.0 サブシステムのジョブは、サーバー・プラットフォームに対して定義されているオペレーティング・システムの論理プロセスまたは待ち行列内で機能します。ERP 9.0 は、1 つまたは複数のサブシステムを使用するように構成できます。

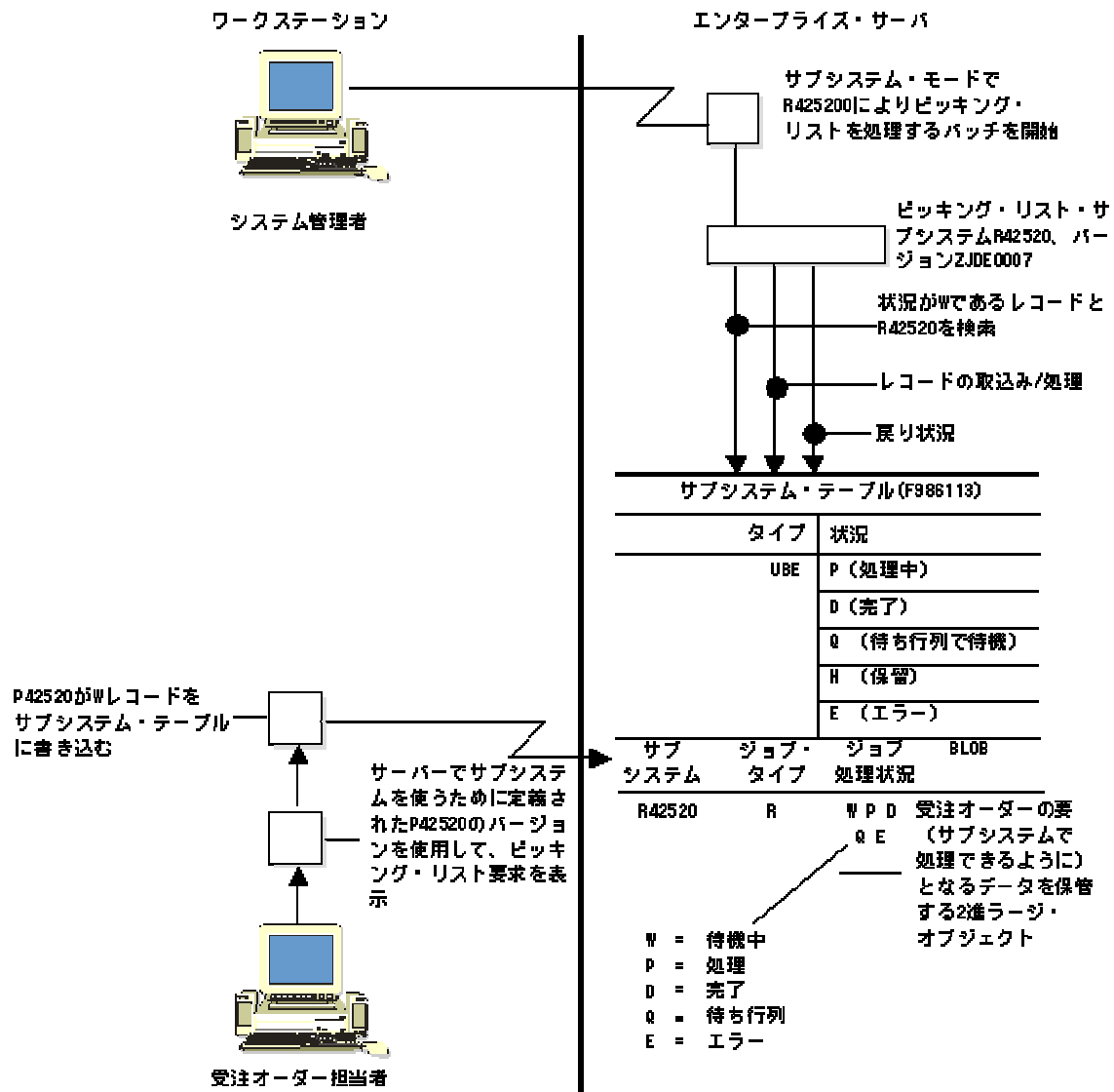
ERP 9.0 でのサブシステムの使用

一部の ERP 9.0 アプリケーションは、サブシステムを使用するように設計されています。たとえば、〈受注オーダー入力〉では、ERP 9.0 サブシステムを介してピッキング・リストを印刷するように指示できます。サブシステムをアクティブ化するには、対話型アプリケーションの処理オプションを使用します。これにより、対話型アプリケーションの特定バージョンを作成し、サブシステム・モードで実行できます。ERP 9.0 サブシステムは、起動後は ERP 9.0 アプリケーションからの要求を検索しながら、絶えず処理されています。サブシステムは、終了するまで実行されています。

通常は、ワークステーションにかかるプロセッサ・リソースの負荷を軽減するために、エンタープライズ・サーバー上で実行中のサブシステム・ジョブを使用します。要求を待ち行列に入れて指定した時刻にバッチで実行する代わりに、要求をサブシステムに直接渡してリアルタイムで処理できます。たとえば、〈受注オーダー入力〉アプリケーションをワークステーション上で実行する間に、ピッキング・リストを印刷する場合を考えます。サブシステム・ジョブの機能が使用可能になっているピッキング・リストのバージョンを使用している場合、要求は ERP 9.0 サブシステム・ジョブによって実行されます。ピッキング・リスト要求は、定義したエンタープライズ・サーバーのサブシステム・ジョブに送られ、処理されます。その結果、ワークステーション・マシンでは、その処理用リソースを必要とせずに実際にピッキング・リストを印刷できます。

アプリケーションからサブシステム内で実行するジョブの要求が発行されると、サブシステム・ジョブ・マスター(F986113)にレコードが書き込まれます。これらのレコードは、サブシステム・ジョブ名によって識別され、状況と処理識別子が含まれています。また、このレコードには、要求側アプリケーションとの情報のやりとりがなくとも ERP 9.0 サブシステムでレコードを処理できるように、キー情報が埋め込まれています。絶えず実行される ERP 9.0 サブシステムによって、このテーブル内のレコードが監視されます。サブシステムでは、プロセス ID と該当する状況識別子を持つレコードが検出されると、そのレコードが処理され、それに応じて状況が更新されます。

次の図は、サブシステムに関連するイベントのロジックの流れを示しています。



ERP 9.0 サブシステムの有効化

サーバー起動時の過剰な処理オーバーヘッドの発生を防ぎ、使用中の ERP 9.0 サブシステム・ジョブのプロセッサ・リソースが必要以上に使用されないようにするために、ERP 9.0 サブシステムは手作業で起動する必要があります。通常、システム管理者または管理者レベルのユーザーがこのタスクを行います。ERP 9.0 サブシステムを手作業で開始するには、処理オプションでサブシステムの使用を有効にした ERP 9.0 バッチ・プロセスのバージョンが実行されます。

次の表のように、これらのサブシステムと待ち行列の作成と起動を最初に制御する方法は、サーバー・プラットフォームに応じて異なります。

プラットフォーム(サブシステムまたは待ち行列)	説明
-------------------------	----

AS/400(JDENET)	
----------------	--

AS/400(JDENET)	1 つの AS/400 サブシステムが ERP 9.0 に使用されます。このサブシステムは、ERP 9.0 の起動コマンド STRNET を発行すると自動的に起動されます。サブシステム名はバージョン固有です。たとえば、リリース B73.1 の場合、サブシステム名は JDEB731 です。
----------------	--

AS/400(JDENET)	ERP 9.0 サブシステム宛の要求を処理するには、JDENET サブシステムで実行される特定のジョブ待ち行列を定義する必要があります。たとえば、ジョブ待ち行列名として QBATCH を指定できます。
----------------	--

AS/400(JDENET)	ERP 9.0 サブシステムで定義されたバッチ・ジョブに対するユーザー要求は、AS/400 のユーザー・プロファイルへの定義に基づいてジョブ待ち行列で実行されます。
----------------	--

UNIX(jdequeue)	
----------------	--

UNIX(jdequeue)	ERP 9.0 には待ち行列が 1 つまたは複数存在します。これらの待ち行列名は、同じでも別々でもかまいません。待ち行列は、起動シェル・スクリプト RunOneWorld.sh 内のパラメータで定義します。
----------------	---

UNIX(jdequeue)	ERP 9.0 サブシステム宛の要求を処理するには、それらの待ち行列を定義する必要があります。たとえば、jdequeue 名として QBATCH を指定できます。
----------------	---

UNIX(jdequeue)	ERP 9.0 サブシステムで定義されたバッチ・ジョブに対するユーザー要求は、そのプロセス ID に基づいてジョブ待ち行列で実行されます。
----------------	---

NT(jde.ini 設定)	
----------------	--

NT(jde.ini 設定)	ERP 9.0 には待ち行列が 1 つまたは複数存在します。これらの待ち行列には、同じ名称を使用する必要があります。待ち行列は、jde.ini ファイル内の設定を使用して定義します。
----------------	---

NT(jde.ini 設定)	ERP 9.0 サブシステム宛の要求を処理するには、jde.ini ファイルの[NETWORK QUEUE SETTINGS]セクション内で、待ち行列の名称と数を定義する必要があります。たとえば、jdequeue 名として QBATCH を指定できます。
----------------	---

NT(jde.ini 設定)	ERP 9.0 サブシステムで定義されたバッチ・ジョブに対するユーザー要求は、そのプロセス ID に基づいてジョブ待ち行列で実行されます。
----------------	---

システム管理者は、〈サブシステムの処理〉アプリケーション(P986113)を実行して、サーバーで実行されている ERP 9.0 のすべてのサブシステムを表示できます。このアプリケーションの用途は、次のとおりです。

- サーバー上で実行中の ERP 9.0 サブシステム・リストの検索
- 未処理の ERP 9.0 サブシステム・レコード・リストの検索 (AS/400 サーバーには使用できません。)
- ERP 9.0 サブシステムで処理中の現在のレコードの検索 (AS/400 サーバーには使用できません。)
- ERP 9.0 サブシステムの停止または削除

サーバーで実行する ERP 9.0 サブシステムの検索

〈サブシステムの処理〉を使用すると、特定のサーバーで現在実行または待機している ERP 9.0 サブシステムを指定することができます。実行しているサブシステムは、レポート番号とバージョンで識別されます。

▶ サーバー上で実行中または待機中の ERP 9.0 サブシステムを検索するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を選択します。

1. 〈サブシステムの処理〉フォームで、サーバーを選択するか、QBE を使用してサーバーを検索します。
2. [ロー]メニューから[サブシステム・ジョブ]を選びます。



3. 〈サーバーの処理〉で、次の 2 つのオプションのどちらか一方をクリックします。

- プロセス(&P)

プロセスは、処理を待機中のサブシステムです。これは、[ジョブ・タイプ]フィールドの値 S(サブシステム・ジョブ)で識別されます。

- 待機中のジョブ(&W)

待機中のジョブとは、サブシステムの待ち行列内にあるレポート・ジョブです。これは、[ジョブ・タイプ]フィールドの値 R(サブシステム・レコード)で識別されます。

現在実行中のすべての ERP 9.0 サブシステムが表示されます。各サブシステムの状況は、次のフィールドにコード表示されます。

- ジョブタイプ

このフィールドは、サブシステム・レコードの状況であるか、サブシステム・ジョブの状況であるかを示します。有効な値は次のとおりです。

- R(サブシステム・レコード)
- S(サブシステム・ジョブ)

- ジョブ状況

このフィールドは、サブシステム・ジョブの状況であるかレコードの状況であるかを示します。有効な値は次のとおりです。

- W:待機中のサブシステム・レコード
- P:処理中のサブシステム・レコード
- E:ジョブを終了するサブシステム・レコード
- R:実行しているサブシステム・ジョブ

ERP 9.0 サブシステムのジョブ・レコードの検討

サブシステム・ジョブ・マスター(F986113)には、さまざまな ERP 9.0 プロセスによってレコードが書き込まれます。各レコードは、サブシステム要求のタイプと操作状況を示す状況コードで識別されます。〈サーバーの処理〉を使用すると、このテーブル内のレコードを表示できます。

はじめる前に

- ERP 9.0 サブシステム・ジョブを検索します。『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サーバーで実行する ERP 9.0 サブ・システムの検索」を参照してください。

▶ ERP 9.0 サブシステムのジョブ・レコードを表示するには

1. 〈サブシステムの処理〉で、[検索]をクリックします。
2. グリッドのレコードをハイライトして[ロー]メニューから[ジョブ表示]を選択します。
3. 〈ジョブの表示〉で、[検索]をクリックします。

サブシステム・ジョブ・マスター(F986113)内で、ジョブ・タイプ R(実行中のサブシステム・ジョブ)を持つすべてのサーバー・ジョブのリストが表示されます。

ERP 9.0 サブシステムの終了

ERP 9.0 サブシステムを終了するには、〈サーバー・ジョブの処理〉を使用できます。次の 2 とおりの終了方法があります。

- サブシステム・ジョブを停止すると、現在のレコードの処理を完了した後に終了します。サブシステム・ジョブ・マスター(F986113)の他の未処理レコードは処理されず、新しいレコードは書き込まれません。未処理のレコードは失われます。そのレコードを作業した処理にはレコードが処理されなかったことが通知されません。

- サブシステム・ジョブを終了すると、既存のすべてのサブシステム・レコードの処理が完了してから終了します。サブシステム・ジョブ・マスター(F986113)には、新しいレコードは書き込まれません。

▶ ERP 9.0 サブシステムを停止するには

〈サブシステムの処理〉で、実行中のサブシステムを検索します。

1. 停止する実行中のサブシステムを選択します。
2. [ロー]メニューから[サブシステムの停止]を選択します。

注:

〈サーバーの処理〉から〈待機中のジョブ〉を表示するか、〈サーバーの処理〉で[ジョブの表示]を選択してサブシステム・ジョブを表示した場合、[ロー]メニューからは[サブシステムの停止]項目が使用不可になっています。

3. 〈サブシステム・ジョブの終了〉で、[OK]をクリックします。

▶ ERP 9.0 サブシステムを終了するには

〈サブシステムの処理〉で、実行中のサブシステムを検索します。

1. 終了する実行中のサブシステムを選択します。
2. [ロー]メニューから[サブシステム・ジョブの終了]を選択します。

注:

〈サブシステムの処理〉から[待機中のジョブ]を表示した場合、[ロー]メニューの[サブシステム・ジョブの終了]項目は使用不可になっています。

3. 〈サブシステム・ジョブの終了〉で、[OK]をクリックします。

ユーザー・プロフィール

ユーザー・プロフィールは ERP 9.0 のロールに特定のユーザーを定義します。プロフィールでは、ユーザーが属するグループ、ユーザーまたはロールが ERP 9.0 へのサインオン時に選択できる環境のリスト、およびユーザーまたはグループの使用言語などの情報を扱っています。ユーザー・プロフィールを設定するには、〈ユーザー・プロフィールの改訂〉アプリケーション(P0092)を使用します。このアプリケーションでは、ユーザーにロールを割り当てることもできます。ロールにより、エンドユーザーの Solution Explorer に表示されるタスクが定義されます。

ユーザー・プロフィールの理解

〈ユーザー・プロフィール〉アプリケーション(P0092)を使用すると、特定のユーザーまたはグループを ERP 9.0 に対して定義できます。この定義には次の内容が含まれます。

- ユーザーが属するロール。売掛管理担当者は AP ロールの役目を果たします。ロールは、ERP 9.0 の重要な側面です。システム管理者は、ユーザーをロールに割り当て、個々のユーザーではなくロールごとに、ユーザー優先情報やセキュリティをまとめて設定できます。
- ユーザーが ERP 9.0 の起動時に選択できる環境
- ERP 9.0 のメニュー、フォーム、および国特有のアプリケーションに表示されるテキストの言語と国別コード

プロフィール化を容易にするロール・プロフィールの使用

ロール優先情報によって、個々のユーザー・プロフィールに優先情報を設定する必要がなくなります。個々のユーザーをロールに割り当て、そのロールへの割当てを実行すると、その設定はそのロールに属する個々のユーザーに適用されます。

ユーザーごとに異なる優先情報を指定することもできます。ロール設定は個々のユーザー設定によって個別に上書きされますが、ユーザー・プロフィール情報が存在しなければ、ロール・プロフィールからの情報が取り込まれます。

ERP 9.0 では、次の用途にロールが使用されます。

- 環境
- ユーザー一時変更
- アプリケーション・セキュリティ
- サインオン・セキュリティ・レコードの作成

ユーザー・プロフィールの改訂アプリケーションで使用されるテーブル

〈ユーザー・プロフィール〉アプリケーション(P0092)で使用されるテーブルは、次のとおりです。

- ライブラリ・リスト - ユーザー(F0092)
- ユーザー表示設定(F00921)
- ユーザー表示設定タグ・ファイル(F00922)

- ユーザー・アクセス定義(F00925)
- ライブラリ・リスト管理(F0093)
- ライブラリ・リスト・マスター(F0094)
- 匿名ユーザー・アクセス・テーブル(F00926)

新規ユーザーの追加

ユーザー・プロファイルは、〈ユーザー・プロファイルの改訂〉アプリケーション(P0092)を使用して1つずつ作成する方法と、バッチ処理を使用して一度に複数を作成する方法があります。ユーザー・プロファイルを初めて作成する準備を完了した時点では、多数のプロファイルの作成を必要とする場合があります。その場合は、バッチ処理を使用して作成してください。2、3人のユーザーを追加する場合は、〈ユーザー・プロファイルの改訂〉アプリケーションを使用します。

この項は、新規ユーザーを追加するために必要な全ステップのチェックリストです。これらのステップには、ワークステーションにERP 9.0をインストールするタスクや、ネットワーク・ユーザーIDの割当てのようなサードパーティのセットアップ事項は含まれていません。

個々のユーザーの追加

ここでは、ユーザー・プロファイルを1つずつ追加するときに実行する必要があるステップについてチェックリスト形式で説明します。

参照

- 住所録レコードの追加については『住所録』ガイドの「住所録の管理」
- マシン・テーブルの自動入力については『パッケージ管理ガイド』の「マシンの定義」

『システム・アドミニストレーション』ガイドで、次のトピックを参照してください。

- ロール・プロファイルの追加については「ユーザー/ロール・プロファイルの作成と変更」
- サインオン・セキュリティの追加については「サインオン・セキュリティの理解」
- セキュリティ・ワークベンチの一時変更については「セキュリティ・ワークベンチの理解」

▶ 個々のユーザーを追加するには

1. 追加するユーザー用に新規ロールを作成する場合は、検索タイプ・コード(従業員の場合はEなど)を指定して、住所録レコードを追加します。
2. この新規ユーザーに既存のロール・プロファイルが当てはまらない場合は、ロール・プロファイルを追加します。
3. 新規ユーザー用の住所録レコードを追加します。
4. ユーザー・プロファイルを追加します。
5. ユーザーのサインオン・セキュリティ・レコードを追加します。
6. ユーザーがロールとは異なるセキュリティを必要とする場合は、そのユーザー用のセキュリティ・ワークベンチ一時変更を追加します。
7. ユーザーのマシンの情報をマシン・テーブルに入力します。

8. ユーザーがロールとは異なるユーザー一時変更を必要とする場合は、そのユーザー用に新規ユーザー一時変更を追加します。

複数ユーザーの追加

ここでは、バッチ処理を使用して同時に複数のユーザー・プロファイルを追加するときに実行すべきステップのチェックリストを示します。このバッチ処理によって、ユーザー・プロファイルの作成処理が自動化されます。

ユーザー・プロファイルの処理オプションを設定して住所番号を確認する場合は、手順 1 から開始します。処理オプションを有効にしていない場合は、2 から始めます。

注:

住所番号の確認については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ユーザー・プロファイル用処理オプションの理解」を参照してください。

ユーザーに割り当てるロールを決定する場合は、次の理由によりアプリケーション・セキュリティが最も重要なロールとなります。

- アプリケーション・セキュリティは最も広範囲に及ぶ設定です。
- ロール・セキュリティに関する一時変更の管理は、デプロイメントの環境設定を一時変更するよりも複雑です。

注:

各ユーザーがそれぞれ ERP 9.0 パスワードを持っているため、サインオン・セキュリティはロール単位にはなりません。ロール別に個々のセキュリティ・レコードを手早く作成するには、サインオン・セキュリティと共にプログラムを使用できますが、レコードの作成後はセキュリティはユーザー別に割り当てることになります。『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サインオン・セキュリティの処理」を参照してください。

参照

『システム・アドミニストレーション』ガイドで、次のトピックを参照してください。

- 「ユーザー・プロファイル/ロール・プロファイルの作成と変更」
- 「バッチ処理を使用したプロファイルの作成」
- 「ユーザー・プロファイルの設定」
- ロール・プロファイルの要約については「ユーザー・プロファイルの要約 (R900921) を実行するには」
- セキュリティ・ワークベンチ・レコードの作成については「セキュリティ・ワークベンチの処理」
- サインオン・セキュリティの追加については「サインオン・セキュリティの理解」

▶ 複数ユーザーを追加するには

1. 〈住所録の改訂〉アプリケーション(P010102)を使用して、ユーザー・プロファイルに使用するグループの住所録レコードを作成します。
2. 〈ユーザー・プロファイル〉アプリケーション(P0092)を使用して、ロール・プロファイルを追加します。
3. 各種の住所録テーブルに情報を入力します。

ERP 9.0 以外のシステムからデータを移行する場合は、テーブル変換を使用してデータ・テーブルを自動入力できます。それ以外の場合は、住所録テーブルにデータを手作業で追加できます。

4. 〈ユーザー・プロファイルの作成〉プログラム(R0092)を実行して、既存の住所録レコードからユーザー・プロファイル・レコードを作成します。

通常、このレポートの基礎には、検索タイプ E(従業員)の住所録レコードが使用されます。デフォルト・ロールを 1 つ選択してそこに全員を所属させるか、レポートを何度か実行して各ユーザーを異なるロールに所属させるかを選択できます。

5. 各ユーザーのロール割当てを調整します。

ユーザーを所属させるロールを確定し、各ユーザーをロールに手作業で割り当てます。そのロールの標準でない場合は、ユーザーの環境を変更します。

次の設定をロール別に指定します。

- 環境
- ユーザー一時変更
- アプリケーション・セキュリティ

6. 〈ユーザー・プロファイルの要約〉レポート(R00921)を実行し、新しいユーザー・プロファイルを表示します。
7. すべてのロールと、そのロールに対する個々の一時変更について、セキュリティ・ワークベンチ・レコードを作成します。
8. サインオン・セキュリティ・レコードを作成します。

グループのレコードを 1 つ入力すると、そのロール内のユーザー全員のサインオン・セキュリティ・レコードを作成できます。

9. マシン/グループ識別テーブル(F009650)に情報を手作業で入力します。

このテーブルは、マシンが ERP 9.0 にサインオンするたびに自動入力されます。ただし、スケジュール・パッケージを使用する場合は、このテーブルに手作業で情報を入力する必要があります。

10. ロール用のユーザー一時変更を作成します。

通常、ユーザーはソフトウェアの使用時に独自の一時変更を容易に作成できるので、ユーザー用の一時変更を作成することはありません。

ユーザー・プロファイルのセットアップ

ユーザー・プロファイルを設定するには、〈ユーザー・プロファイルの改訂〉アプリケーション(P0092)を使用します。システム管理者としてプロファイルを設定する場合は、システム内のユーザーごとにグループ・プロファイルとユーザー・プロファイルを作成します。また、各グループとユーザーが使用可能な環境を確定し、言語などの表示優先情報を設定します。

▶ ユーザー・プロファイルを設定するには

1. 社内のすべてのユーザー・プロファイルを作成します。
2. 各ユーザーのユーザー・プロファイルを作成します。
3. 各ロールまたはユーザーに次の優先情報を割り当てます。
 - 環境。各ロールまたはユーザーが使用可能な環境を確定します。
 - 表示優先情報。言語、日付形式、国コードなど、ERP 9.0 の表示特性を確定します。表示優先設定は、〈ユーザー・プロファイルの改訂〉フォームで制御します。

注:

インストール・プロセス中にユーザー・プロファイルを設定する場合は、デプロイメント環境を使用してデプロイメント・サーバーにログオンする必要があります。インストール・プロセスの完了後は、デプロイメント・サーバー以外の任意のマシンからユーザー・プロファイルを追加または修正できます。

ユーザー・プロファイル/ロール・プロファイルの作成と変更

システム管理者は、各ユーザーのユーザー・プロファイルを作成する必要があります。ユーザー・プロファイルでは、特定の設定および表示機能(略式コマンドへのアクセス、言語、日付形式、国コードなど)を定義します。管理者は、まず社内に必要なすべてのロール・プロファイルを作成する必要があります。これにより、特定の環境、パッケージ、およびマシン構成をユーザーごとに定義するのではなく、ロールごとに定義できるため、プロファイルの作成が容易になります。ロール内のユーザーに異なる設定が必要な場合は、ユーザー・レベルでそのユーザーに対して設定すると、ロールの設定が一時的に変更されます。

ユーザーまたはロール用に国コードを選択すると、ERP 9.0 のメニュー・フィルタ・プロセスでは、そのユーザーまたはロールに対して、選択した国別コード固有の特殊なメニュー項目が表示されます。たとえば、国コードを“CA”(カナダ)と入力した場合、そのユーザーには〈Canadian Tax Information (カナダ税情報)〉アプリケーションを持つメニューが表示されますが、それ以外のユーザーには表示されません。

▶ ロール・プロファイルを作成/変更するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉フォームで、次のいずれかの操作を実行します。
 - 新しいロールを作成する場合は、[フォーム]メニューから[ロールの追加]をクリックします。

- 既存のプロファイルを修正する場合は、[ロールのみ]を選択して[検索]をクリックし、グリッドでロールを選んで[選択]をクリックします。

2. 〈ロールの改訂〉フォームで、次のフィールドのいずれかに値を入力します。

- **ロール**
ロール名を入力してください。(例: ACCOUNTING)
ロール・プロファイルを変更する場合は、このフィールドにロール名が表示されます。

注:

ロールの修正時には、このフィールドに新規情報は入力できません。

- **ロールの記述**を入力します。
- **住所番号**
ロールがワークフローで使用される場合は住所番号を入力します。
- **順序番号**
- 順序番号は自分で入力することも、システムにより自動的に追加することもできます。
順序番号により、このロールが属するロールの階層が決定されます。
- **メニューID**
- **デフォルト・アイコン・ファイル**

3. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
ユーザーID	ユーザー・プロファイルを識別するコード。
システム・ロール	<p>セキュリティを目的とし、ユーザーをグループに分類するために使用されるプロファイル。グループ・プロファイルは、グループ・メンバーに特定のプログラムへのアクセス権を与えるのに使用します。</p> <p>ユーザー・クラス・グループの作成ルールは次のとおりです。</p> <p>クラス・グループ・プロファイルは、他のシステム・プロファイルとの衝突を避けるため、*で始めます。</p> <p>ユーザー・クラス・グループ・フィールドは、新しいグループ・プロファイルの入力時にはブランクにします。</p>
住所 No.	住所番号は、住所録システムのエントリを識別する番号です。従業員、応募者、参加者、顧客、仕入先、テナント、保管場所などを識別するために使用します。
メニューID	<p>9 文字まで指定できるメニュー名。J.D. EDWARDS 標準は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メニュー番号のプレフィックスは G ・プレフィックスの後の 2 文字はシステムコード ・これらに続く文字はメニューを識別 ・4 番目の文字は特定の技能レベルを指定 ・5 番目の文字は、同じ技能レベルで同じシステムの 2 つのメニューを区別 <p>たとえば、メニュー識別 G0911 は、次を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> G 接頭辞 09 システムコード 1 表示レベル／スキルレベル 1 1 番目のメニュー
デフォルト・アイコン・ファイル	<p>パス・フィールドには、クライアント基本メニューに使用するパスが含まれます。パスによって、ユーザーのコンピュータかネットワークのどちらをアプリケーションの常駐場所にするかを記述します。</p> <p>パスは、ドライブ、フォルダ、および実行するアプリケーションを含むサブフォルダを含みます。</p>
言語	<p>フォームおよびレポートで使用する言語を指定するユーザー定義コード (01/LP)。指定する言語は、システム・レベルまたはユーザー使用言語に設定されている必要があります。</p>

日付フォーマット	データベースに保管される日付のフォーマット。
	<p>OneWorld では、有効な日付フォーマットには YMD、MDY、DMY、EMD があります。フィールドをブランクにすると、ワークステーションのオペレーティング・システムの設定に基づいて日付が表示されます。NT では[コントロール・パネル]の[地域]で設定することができます。</p> <p>World ソフトウェアでは、有効な日付フォーマットには、DMY、MDY、YMD があります。EMD は有効な日付フォーマットではありません。</p>
日付区切り文字	区切られた日付の月、日、および年を区分けするのに使用される文字。アスタリスク(*)を入力すると、日付の区切り文字にブランクが使用されます。フィールドをブランクのままにすると、日付の区切り文字にはシステム値が使用されます。
10 進数形式の文字	小数点の右の位置番号。ブランクにすると、システム日付が使用されます。

ユーザー/ロール・プロファイルのコピー

ユーザー・プロファイルの全体または一部をコピーできます。ユーザーまたはロール・プロファイル全体(表示および環境優先情報)をコピーすることで、他のプロファイルからの情報を使用して新しいユーザー・プロファイルを作成できます。ユーザー・プロファイルの一部をコピーする場合は、環境優先情報を他のプロファイルから既存のユーザー・プロファイルにコピーします。

▶ ユーザー・プロファイルを作成/変更するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉フォームで、次のいずれかの操作を実行します。
 - プロファイルを新規作成する場合は、[追加]をクリックします。
 - 既存のプロファイルを修正する場合は、[検索]をクリックし、グリッドでユーザー・プロファイルを選んで[選択]をクリックします。

2. 〈ユーザー・プロフィールの改訂〉フォームのヘッダー領域で、次のどちらかの方法でユーザー・プロフィールまたはロール・プロフィールを作成します。

- ユーザー・プロフィールを作成するには、次のフィールドに値を入力します。
 - [ユーザーID]フィールドに、個々のユーザーのユーザーIDを入力します。
ユーザー・プロフィールを変更する場合は、このフィールドにユーザーIDが表示されます。

注:

プロフィールの修正時には、このフィールドに新規情報は入力できません。

3. このフォームのヘッダー領域の残りのフィールドに値を入力します。
 - 住所 No.
 - メニューID
 - デフォルト・アイコン・ファイル
4. ユーザー・プロフィールを作成する場合は、[表示設定]で次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - 言語
 - 日付フォーマット

- 日付区切り文字
- 10 進数形式の文字

▶ ユーザー・プロフィールまたはロール・プロフィールをコピーするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロフィール〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロフィールの処理〉フォームで、ユーザー・プロフィールを検索して次のいずれかの操作を実行します。
 - プロファイル全体(表示、環境、デプロイメントの優先情報)をコピーするには、[コピー]をクリックします。
 〈ユーザー・プロフィールの改訂〉フォームが表示されます。これにより新しいプロフィールが作成されるため、ERP 9.0 内の既存のユーザー・プロフィールは作成できません。
 - 環境優先情報をコピーするには、[ロー]メニューから[環境のコピー]を選択します。
 〈ユーザー環境の改訂〉フォームが表示されます。これにより、ユーザー・プロフィール間で環境優先情報をコピーできます。コピー先には、既存のユーザー・プロフィールを指定する必要があります。
2. [ユーザーID]フィールドにプロフィールのコピー先となるユーザーID またはロール名を入力し、他の情報を変更します。
3. 終了したら[OK]をクリックします。

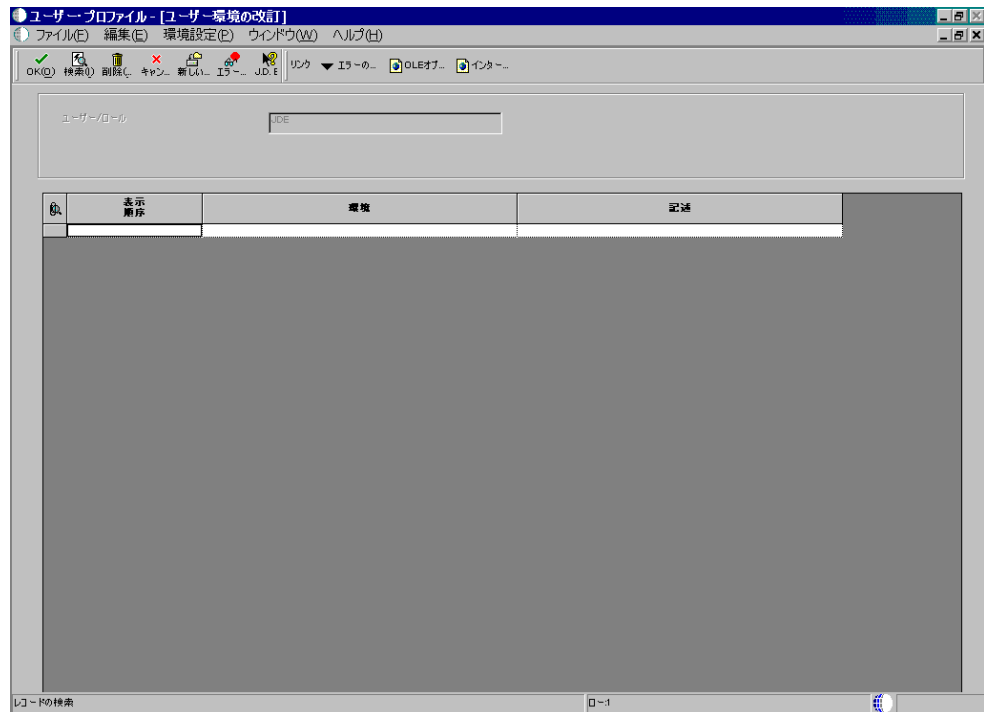
ユーザー・プロフィール/ロール・プロフィールへの環境の追加/削除

ERP 9.0 の起動時に各ユーザーまたはロールが選択できる環境のリストを割り当てることができます。ユーザーにユーザー・プロフィール固有の環境割当てがない場合、ERP 9.0 を起動するたびに、ユーザーはユーザー・ロールから割り当てられた環境から選択することができます。環境は複数割り当てることができます。環境がユーザーに適用されなくなった場合は削除できます。

▶ 環境を割り当てたり削除するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロフィール〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロフィールの処理〉で、[検索]をクリックしてユーザー・プロフィールを選択します。
2. [ロー]メニューから[環境]を選択します。
 〈ユーザー環境の改訂〉フォームが表示されます。このフォームには、特定のロールに使用可能な環境のリストが表示されます。



3. 新しい環境を追加するには、最終ローの次の各フィールドに値を入力します。
 - 表示順序
 - 環境
4. リストから環境を削除するには、その環境を選択して[削除]をクリックします。
5. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
表示順序	情報の順序を指定する番号。
環境	<p>特定のライブラリ・リストと関連した名前。J98INITIA 初期プログラムは、これらのライブラリ・リスト名を使用してユーザーがサインオンできる環境を制御します。ライブラリ・リストのこれらの構成は、ライブラリ・リスト・マスター(F0094)で管理されています。</p> <p>J.D. Edwards の場合、J.D. Edwards の実行に使用する有効な環境がこのフィールドに示されます。環境は、パスコード(オブジェクト)とデータ・ソース(データ)を含んでいます。その 2 つが共に機能してシステム内での作業が可能となります。</p>

ユーザー/ロール・プロファイルへのビジネス優先情報への割当て

ユーザー・プロファイルにビジネス優先情報を割り当てて、ERP 9.0 ワークフロー・アプリケーションと連動するようにカスタマイズされたプロセスを作成できます。優先情報のコードは、産業、ビジネス・パートナー、または得意先に基づいて定義してください。ユーザー・プロファイルに特定のコードが含まれているかどうかに基づいて開始する Workflow プロセスを作成する必要があります。

たとえば、得意先のビジネス優先情報を表すコード CUS を割り当てて、CUS ビジネス優先情報で始まるユーザー・プロファイルによって受注オーダーが入力されると開始される Workflow プロセスを作成します。このワークフロー・プロセスでは、メッセージの送信、データベースの更新、他のアプリケーションの起動などを実行することができます。

参照

- ワークフロー処理については『エンタープライズ・ワークフロー管理』ガイドの「ワークフロー処理の作成」

▶ ユーザー・プロファイル/グループ・プロファイルにビジネス優先情報を割り当てるには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉フォームが表示されます。
2. ユーザー・プロファイル選んで[選択]をクリックします。
〈ユーザー・プロファイルの改訂〉フォームが表示されます。
3. [ロー]メニューから[ビジネス環境設定]を選択します。
〈ビジネス設定〉フォームが表示されます。
4. 次の一部またはすべてのフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - 産業コード
このフィールドでは、ユーザー・プロファイルを製造業などの特定産業に関連付けます。
 - ビジネス・パートナー・コード
このフィールドでは、ユーザー・プロファイルを特定のビジネス・パートナーに関連付けます。
 - カスタムコード
このフィールドでは、ユーザー・プロファイルを特定の得意先に関連付けます。

注:

〈ビジネス設定〉フォームで[キャンセル]をクリックすると、現在のビジネス設定の追加を取り消すことができます。

処理オプション:ユーザー・プロファイル

〈ユーザー・プロファイル〉アプリケーション(P0092)には、次の処理オプションが用意されています。

The image shows a Windows-style dialog box titled "Processing Options". It has a tab labeled "住所録確認" (Address Book Confirmation). Inside the dialog, there is a text label: "F0101 に対する住所番号を編集するには '1' を入力します。" (To edit the address number for F0101, enter '1'). To the right of this text is an empty rectangular input field. At the bottom of the dialog, there are three buttons: "OK(O)" with a green checkmark icon, "ヘルプ(H)" (Help), and "キャンセル" (Cancel) with a red X icon.

〈Processing Options (処理オプション)〉フォームの[住所録確認]で、住所録確認を有効にするには"1"を、無効にするには"0"を入力するか空白のままにします。

- この処理オプションを 1 (有効) にすると、ユーザー・プロファイルの作成時に、〈User Profile〉によって新しい各ユーザーID が住所録マスター(F0101)と比較検証されます。この結果、住所録マスターで既に定義されているユーザーのユーザー・プロファイルは作成できません。〈ワーク・センター〉が正しく機能するよう、この設定を有効にすることをお勧めします。〈ワーク・センター〉には有効な住所番号が必要です。
- この処理オプションを空白のままにすると、住所録マスター(F0101)に存在しない住所番号でも、ユーザー・プロファイルを作成できます。

参照

- ロールについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ユーザー・ロールの設定」

バッチ処理を使用したプロフィールの作成

従業員用の住所録レコードが既に存在する場合は、バッチ処理を実行して各住所録レコードからユーザー・プロフィールを自動的に作成できます。このプロセスにより時間を節約でき、住所録レコードとユーザー・プロフィール・レコード間の整合性が保証され、ERP 9.0 を本稼働用に移行する作業も容易になります。

〈ユーザー・プロフィールの自動入力〉レポート(R0092)を実行してユーザー・プロフィールを作成できます。この処理では、ユーザーに表示および環境の優先情報を割り当てることができます。また、多数の新規ユーザー・プロフィールを一度に作成できます。

注:

2、3 人のユーザーを追加する場合は、〈ユーザー・プロフィール〉アプリケーション(P0092)を使用します。

ユーザーとロールのリスト、およびロール・ユーザー・プロフィール定義のリストを検討する場合は、〈環境、パッケージ、プロフィールの要約〉レポート(R00921)レポートが役立ちます。このレポートには、ロールに割り当てられた環境、ロール内のユーザーのリスト、個々のユーザーに特別に割り当てられている他の環境に関する注記の要約が印刷されます。すべてのロールまたは特定のロールを要約できるように、2 つのデフォルト・バージョンが用意されています。

はじめる前に

- 〈ユーザー・プロフィール〉アプリケーションを使用してすべてのロール・プロフィール情報を作成してください。
- 次の内容を定義します。
 - ロール・プロフィール
 - ロールがアクセスできる環境

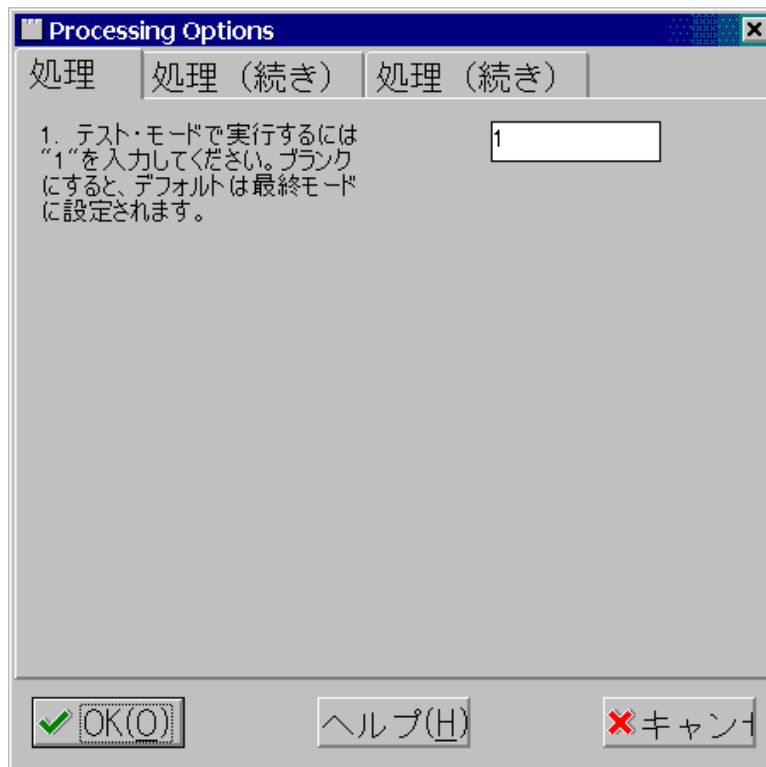
▶ 〈住所録からユーザー・プロフィールを作成〉レポート(R0092)を実行するには

〈上級操作〉メニュー(GH9012)で、〈住所録レコードからユーザー・プロフィールを作成〉レポート(R0092)を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理〉フォームで、J.D. Edwards のデフォルト・バージョン(XJDE0001)またはインストール状況によってはそれと同等のバージョンを選んで[選択]をクリックします。
2. 〈バージョン・プロンプト〉フォームで[データ選択]をクリックし、[投入]をクリックします。
3. 〈データ選択〉フォームで、プロフィールを作成するユーザーの集合を記述する条件文を作成します。

このフォームには、ユーザーが従業員であることを想定して、既に検索タイプ E(従業員)が自動入力されています。特定範囲の従業員だけを指定して投入すると、この選択をさらに限定できます。

フォームに値を入力すると、〈Processing Options〉フォームが表示されます。



4. 〈Processing Options〉フォームで、次の情報を入力します。

- オプション 1: 次の値のうち 1 つを入力します。
 - このレポートをテスト・モードで実行するには、1 を入力します。これにより、最終モードで実行した場合の結果の例を示すレポートが示されます。
 - このレポートを最終モードで実行するには、ブランクにします。これにより、指定したユーザー・プロファイルが作成され、その結果を示すレポートが作成されます。
- オプション 2: 次の値を 1 つ入力して、各ユーザー用に作成するユーザー・プロファイル・レコードを定義します。
 - [ユーザーID]フィールドにユーザーの住所番号とイニシャルを自動入力するには、1 を入力します。

注:

通常、ユーザー・プロファイルは、住所番号が続くユーザーのイニシャルを使用して作成されます。

- 住所番号のみを使用するには、このフィールドをブランクにします。

オプション 2 を選択した場合は、次のフィールドに値を入力してください。

- 略式コマンド
- 言語
- 日付フォーマット
- 日付区切り文字

- 日付フォーマット文字
- 国
- オプション 3: 所属ロール用に既に設定されている環境の代わりに、ユーザーにアクセスを許可する追加の環境を入力します。

▶ 〈ユーザー・プロフィール情報の概要〉レポート(R00921)を実行するには

〈上級操作〉メニュー(GH9012)で、〈グループ・プロフィール情報の概要〉レポート(R00921)を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理〉フォームで、バージョンを選んで[選択]をクリックします。
J.D. Edwards のデフォルト・バージョン XJDE0001 を選択すると、社内のすべてのロール・プロフィールに関するレポートが作成されます。J.D. Edwards のデフォルト・バージョン XJDE0002 を選択すると、指定した特定のロール・プロフィールに関するレポートが作成されます。
2. 〈バージョン・プロンプト〉フォームで、[データ選択]をクリックして[投入]をクリックします。
3. 〈データ選択〉フォームで、まとめるロール・プロフィールを特定する条件文を作成します。
4. [OK]をクリックします。

ユーザー・ロールの設定

ユーザー・ロールを設定した後に、組織内のユーザーにロールを割り当てることができます。ルールはユーザーが Solution Explorer のタスク・ビューで作業する際に表示されるタスクを定義します。ロールは、ユーザーの許可を定義するときにも使います。各ロールをカスタマイズして、ERP の機能に適切なレベルでアクセスできるように設定できます。

次の目的でロールを割り当てます。

- ユーザーには、担当業務に関連するタスクのみを表示し、関連アクティビティのみを実行させます。たとえば、買掛管理担当者のロールであるユーザーには、管理者のようにすべてのタスクを表示する必要はありません。この 2 つのロールを作成し、各自がアクセス権を持つタスク・セットを別々に定義できます。
- ユーザーは複数のロールを実行することができます。組織では、1 人のユーザーが多数の職責を持ち、そのいずれも 1 つのロールでは定義できない場合があります。複数のロールが割り当てられているユーザーは、必要な作業に応じてロールを切り替えることができます。
- 管理者は、ユーザー・ロールに基づいて ERP 9.0 のセキュリティを設定できます。アプリケーション、フォーム、テーブルのカラム、データ・ソースなどへのユーザーのアクセス権は、各自に割り当てられた 1 つまたは複数のロールに基づいて確定されます。

管理者がユーザー・ロールを設定するには次の表に示す手順が必要です。

管理上の設定	使用するアプリケーション	使用するフォーム	使用するテーブル
ロール・フェーズ 1 において UDC (H95/RL) に保管されるルールをユーザー・プロフィール・テーブルに入力する。	R89959211, R89959212	なし	F00926, F0092

UBE を実行して、ロール・リレーションシップ・テーブルに自動入力する。	R8995921	なし	F0092, F95921
ロールを定義する。	R0092(ユーザー・プロファイルの改訂)	ユーザー・プロファイルの改訂(W0092A)、ユーザー・プロファイルの処理(W0092D)のフォーム・エグジット	F0092
ロールの順序を設定する。	P0092	ロール順序の処理(W0092L)、ユーザー・プロファイルの処理のフォーム・エグジット	F00926
ロール・リレーションシップを作成する。	ロール・リレーションシップ(P95921)	ロール・リレーションシップの処理(W95921A)	F95921
ロールにセキュリティを追加する。	セキュリティ・ワークベンチ(P00950)	各ロールに適用されるセキュリティ・タイプによって異なる。	F00950

Portal、Solution Explorer、ERP 9.0 クライアント・ワークステーションでは、ロール・リレーションシップ / テーブル(F95921)にあるロール・リレーションシップとさまざまな API を使用してデータを取り込み、割り当てられたロールを実行することができます。

ERP 9.0 へのロールの移行

クライアント・マシンでは、ERP 9.0 で〈バッチ・バージョン〉アプリケーションを開いて UBE を実行すると、一般ロールを ERP 9.0 環境に移行することができます。

ロールの設定

UBE(R89959212)の実行

UBE(R89959212)を実行すると、前にユーザー定義コード(H95/RL)で設定されたロールと記述から、ライブラリ・リスト - ユーザー・テーブル(F0092)と匿名ユーザー・アクセス・テーブル(F00926)が自動入力されます。この UDC はフェーズ 1 で使用され、現在は削除されています。

処理オプション

なし

パフォーマンス

この UBE の実行は、UDC(H95/RL)にあるユーザー定義コード・テーブル(F0005)、ユーザー定義コード - 代替言語記述テーブル(F0005D)のレコード数によって異なります。完了は短時間で済みます。

完了すると、レポート(通常約 2 ページ)が作成されます。UDC(H95/RL)は手作業で削除してください。

TC(R89959211)の実行

TC(R89959211)は、ライブラリ・リスト(ユーザー)テーブル(F0092)にある UGRP フィールドのすべての現在のグループについて実行され、匿名ユーザー・アクセス・テーブル(F00926)にそれらのグループの記述レコードが追加されます。ロールと記述のどちらにも、グループ名(OWTOOL など)が入力

されます。順序番号は、匿名ユーザー・アクセス・テーブル(F00926)にも追加されます。この順序番号は 1500 から始まり、レコードが書き込まれるたびに 5 つずつ増加します。

処理オプション

なし

パフォーマンス

この UBE のパフォーマンスは、ライブラリ・リスト(ユーザー)テーブル(F0092)にある*GROUP レコードの数によって異なります。完了は短時間で済みます。

完了

このテーブル変換(TC)では PDF は作成されません。テーブル変換が完了したかどうかを確認するには、ユニバーサル・テーブル・ブラウザ(UTB)を開いてライブラリ・リスト(ユーザー)テーブル(F0092)で定義されたグループの匿名ユーザー・アクセス・テーブル(F00926)を確認してください。たとえば、OWTOOL の USER フィールド、OWTOOL の ROLEDESC フィールド、1500 以上の順序番号の SEQNO フィールドを確認してください。

TC(R8995921)の実行

TC(R8995921)は、F0092 テーブルにあるすべての現在のユーザー・プロファイルについて実行され、ユーザーID(F0092.USER)およびグループ(F0092.UGRP)に基づいて、ユーザー/ロール・リレーションシップ・レコードが挿入されます。ロール・リレーションシップ・テーブル(F95921)に追加されたレコードには、ユーザー、ロール(ライブラリ・リスト・ユーザー・テーブル(F0092)ではグループ)および有効/失効日付が含まれます。これらの値には、処理オプションの値に基づくものもあります。

処理オプション

推奨する処理オプションの値は次のとおりです。

- テスト/最終モード

テーブル変換はまずテスト・モードで実行してください。このモードでは、ロール・リレーションシップ・テーブル(F95921)にレコードが挿入されますが、グループはユーザー・プロファイルから削除されません。テスト・モードで UBE が完了すると、レコードが追加されたかどうかロール・リレーションシップ・テーブル(F95921)にあるレコードをいくつか確認してください。テーブル変換は、同じ処理オプションを使って最終モードで再実行できます。有効日付が前に実行されたテーブル変換の有効日付と同じ場合、新しいレコードはユーザー用に挿入されません。ユーザー用には F0092.UGRP フィールドからグループ・データを削除するだけで済みます。

- 有効/開始日付

ロール・リレーションシップの開始日付。現在の(ライブラリ・リスト・ユーザー・テーブル(F0092)にある)ユーザーには、テーブル変換が実行された日付を使用することをお勧めします。最終モードで実行する場合、テスト・モードで実行されたテーブル変換の日付を使用すると、ロール・リレーションシップ・テーブル(F95921)に新しいレコード・セットが挿入されずに済みます。このフィールドは、後でロール・リレーションシップ・レコードで変更しないでください。

- 失効/終了日付

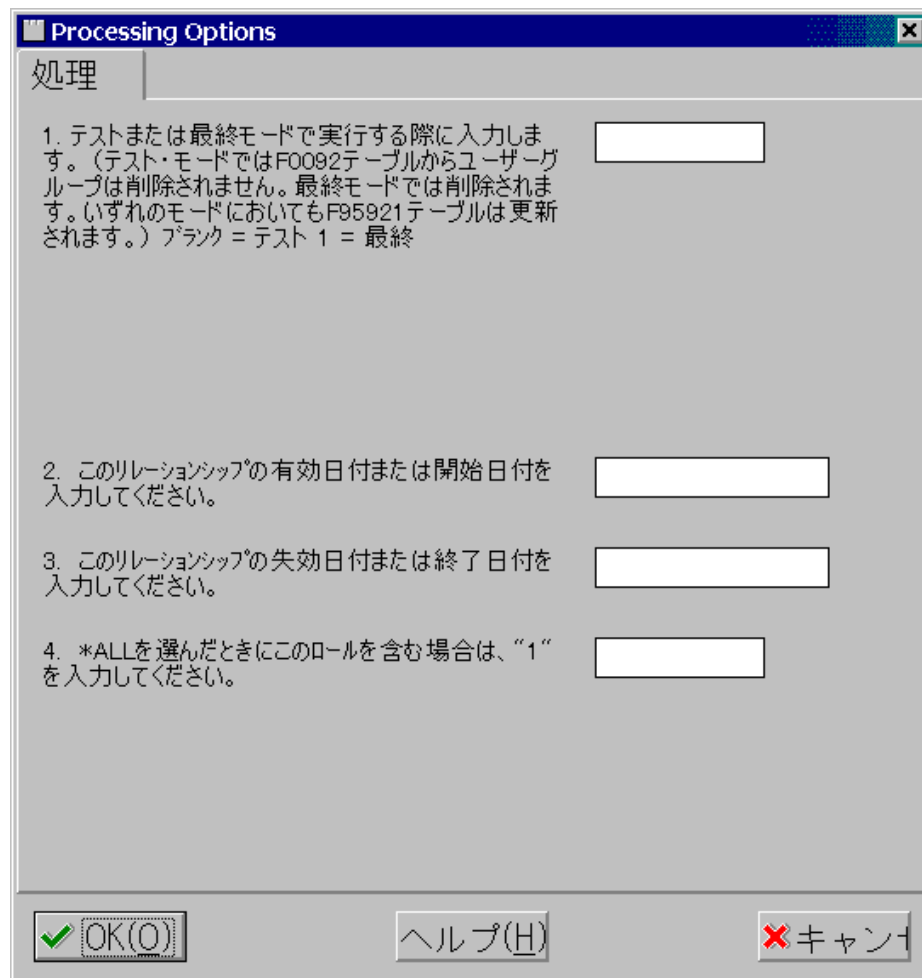
ロール・リレーションシップの終了日付。この日付がブランクの場合、リレーションシップは有効なままです。現在の(ライブラリ・リスト・ユーザー・テーブル(F0092))にあるユーザーには、

ブランクのままにして現在のグループやロールの有効期限が切れないようにすることをお勧めします。

このフィールドは、後でロール・リレーションシップ・レコードで変更することができます。

- *ALL を選んだときにこのロールを含む

このフラグを使用する場合、ユーザーが*ALL のロールで ERP 9.0 にサインオンする際にこのロールのセキュリティが適用されます。ユーザーをセキュリティ・レベルの高いロール（給与計算や PVC など）に追加する場合に使用してください。このフィールドは、後でロール・リレーションシップ・レコードで変更することができます。



The image shows a Windows-style dialog box titled "Processing Options". It has a tab labeled "処理" (Processing). The dialog contains four numbered instructions, each followed by a text input field:

1. テストまたは最終モードで実行する際に入力します。(テスト・モードではF0092テーブルからユーザーグループは削除されません。最終モードでは削除されます。いずれのモードにおいてもF95921テーブルは更新されます。) ブランク = テスト 1 = 最終
2. このリレーションシップの有効日付または開始日付を入力してください。
3. このリレーションシップの失効日付または終了日付を入力してください。
4. *ALLを選んだときにこのロールを含む場合は、“1”を入力してください。

At the bottom of the dialog are three buttons: "OK(O)" with a green checkmark icon, "ヘルプ(H)" (Help), and "キャンセル" (Cancel) with a red X icon.

- パフォーマンス

この UBE の実行は、ライブラリ・リスト・ユーザー・テーブル(F0092)にあるユーザー・レコード数によって異なります。完了は短時間で済みます。

- 完了

この処理オプションはテーブル変換のため PDF は作成されません。テーブル変換がテスト・モードで完了したかどうかを確認するには、ユニバーサル・テーブル・ブラウザ(UTB)を開いてライブラリ・リスト(ユーザー)テーブル(F0092)で定義されたユーザーについてロール・リレーションシップ・テーブル(F95921)を確認してください。この古いグループ(F0092.UGRP)は、

現在ロール F95921.RLFRROLE となっています。テーブル変換が最終モードで完了したかどうかを確認するには、ライブラリ・リスト・ユーザー・テーブル(F0092)の UGRP フィールドにデータがないことを確認してください。

ロールの順序

ロールにはセキュリティ用に順序を設定します。前述の UBE とテーブル変換を実行するとロールに順序が設定されますが、使用する順序ではない場合があります。〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉アプリケーション(P0092)で、フォーム・エグジットから[ロールの順序]を選択すると〈ロール順序の処理〉が表示されます。このアプリケーションではすべての現在のロールが親/子ツリー形式で表示されます。ツリーを展開して現在の順序番号を表示します。これらのロールはドラッグ&ドロップして使用する順序に並び替えることができます。[順序の設定]をクリックしてロールの順序をデータベースに反映させてください。

環境の追加

環境は、グループに追加した場合と同じようにしてロールに追加できます。ユーザーがサインオン時に特定のロールを選択すると、ロールに関連付けられた環境が〈環境の選択〉フォームに表示されます。ユーザーが環境に*ALL を選択すると、すべてのユーザー・ロールに関連付けられた環境がすべて表示されます。すべての環境はユーザーのパス・コードに対して検証されます。

JDE.INI/JAS.INI ファイルの設定

jde.ini と jas.ini ファイルを開いて次の設定を確認してください。

注:

この設定には追加や変更を行わないでください。

```
[SECURITY]
DefaultRole=*ALL
[REPLICATION]
DefaultRole=*ALL
[SIGNON]
LastRole=<Users Last Role>
This value is populated when a user signs into ERP 9.0.
[DB_SYSTEM SETTINGS]
DefaultRole=*ALL
```

サーバーの実行オブジェクト

PortTest を実行します。

セキュリティの設定

次のユニバーサル・バッチ・エンジン(UBE)を実行して、ユーザー・セキュリティを設定します。

UBE R98OWPU の実行

UBE(R98OWPU)を実行すると、OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)でプロキシ(システム)ユーザーおよびデータ・ソースのすべての固有な組合せが検索されます。これらのレコードが検索されると、UBE により OneWorld システム・ユーザー・テーブル(F98OWPU)に挿入されます。レコードには、プロキシ・ユーザー、データ・ソース、パスワード、および監査情報が含まれます。

注:

ビジネス関数はクライアント・マシンにのみ保管されているため、この UBE はローカルで実行してください。

処理オプション

なし

パフォーマンス

この UBE のパフォーマンスは、OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)にあるユーザー・レコードに関連付けられているプロキシ・ユーザーの数によって異なります。完了は短時間で済みます。

完了

UBE の実行が完了したかどうかを確認するには、ユニバーサル・テーブル・ブラウザ(UTB)を開いて OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)にあるプロキシ・ユーザーを OneWorld システム・ユーザー・テーブル(F98OWPU)で確認してください。

利点

プロキシ・ユーザーのパスワードを変更する場合は、各プロキシ・ユーザーについて 1 度変更すれば、プロキシ・ユーザーを含む OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)の各レコードについて変更せずに済みます。

UBE R98OWUP の実行(任意)

R98OWUP(UBE)を実行すると、OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)の現在のレコードが更新されます。この更新は、次の処理オプションの選択内容に基づきます。この UBE を実行すると、現在のユーザーの新しいフィールドが自動入力されます。これは、現在のユーザーの OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)レコードには次のオプションの値が含まれていないためです。

- パスワードの変更頻度
- 許可するサインオン試行回数
- ユーザーの有効/無効化
- パスワードの回数上限
- パスワードの強制変更

処理オプション

- テストまたは最終
テストまたは最終モードのどちらで実行するかを指定します。テスト・モードではレコードをコミットしません。
- パスワードの変更頻度
システムによりパスワードの変更を要求されるまでの最大日数です。
- 再試行回数
ERP 9.0 アカウントが無効になるまでに再試行できる回数です。
- ユーザーの有効/無効化
ユーザー・アカウントの有効/無効を示します。無効にされたアカウントでは ERP 9.0 を使用できません。
- パスワードの回数上限
パスワードを 1 日に変更できる回数です。ユーザーが前回までに使用した 10 個のパスワードは BLOB (2 進ラージ・オブジェクト) に保管されているため、パスワードが何度も変更できる状態にしておくことはセキュリティ上問題があります。ユーザーが現在のパスワードを保存する場合は、最初のパスワードに戻らないよう、1 日に 11 回まで変更できます。
- パスワードの強制変更
パスワードをすぐに変更します。このオプションはすべてのユーザーには設定しないことをお勧めします。

Processing Options

処理

1. 最終モードで実行するには、“1”を入力してください。ブランクの場合はテスト・モードがデフォルトとなります。

2. ユーザー別にレコードを更新するには、“1”を入力してください。
ロール別にレコードを更新するには、ブランクのままにしてください。

3. パスワード変更頻度を入力してください。

4. 許可されるサインオン試行回数を入力してください。

5. ユーザーを有効または無効するか指定してください。
01 - 有効化
02 - 無効化

6. 新規ユーザーの日次パスワード変更を入力してください。

7. ユーザーにすぐにパスワードを変更させるには、“1”を入力してください。

OK(O) ヘルプ(H) キャンセル

パフォーマンス

この UBE のパフォーマンスは、OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)にあるユーザー・レコードに関連付けられているプロキシ・ユーザーの数によって異なります。完了は短時間で済みます。

完了

UBE の実行が完了したかどうかを確認するには、〈ユーザー・セキュリティ〉アプリケーション (P98OWSEC)を実行してレコードが変更されているはずのユーザーやロールを検索してください。値が正しいかどうか確認してください。

ロールの定義

システム・セットアップの一部として、組織内のユーザーが担うロールを定義する必要があります。これらのロールは、Solution Explorer で作業するときに表示されるタスクを定義してユーザーの権限を決定します。定義したロールにユーザーを関連付けて、セキュリティを適用できます。

ロール記述は F00926 テーブルに格納されます。以前にユーザー定義コード(UDC)テーブル (H95/RL)を使用してロールを定義した場合は、〈ロール記述の自動入力〉レポート(R89959211)を実行して、匿名ユーザー・アクセス・テーブル(F00926)に自動入力できます。

参照

- タスクの関連付けとロールとのタスク・リレーションシップについては『Solution Accelerator Suite Implementation Guide (Solution Accelerator スイート・インプリメンテーション・ガイド)』の「Task Setup and Applying Roles (タスクの設定とロールの適用)」
- ロールへのセキュリティの設定については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「セキュリティ・ワークベンチの処理」

▶ ロールを定義するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[ロールの追加]を選択して[検索]をクリックします。

注:

〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉フォームのツールバーで[追加]ボタンをクリックしても、ロールは追加できません。

2. 〈ロールの改訂〉フォームで、次の必須フィールドに値を入力します。

- **ロール**

ロール名と記述を入力します。

- **順序番号**

他のロールに対してのロールの順序を指定します。

複数のロールを割り当てられているユーザーの場合、異なるロール間でセキュリティが衝突した場合、どちらのロールを選択するかが順序番号によって決定されます。

3. 残りの一部またはすべてのフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

ロールの改訂

〈ユーザー/ロール・プロフィールの処理〉フォームを使用して、定義済みのすべてのロールを検索できます。これにより、ロールを選択し、〈ロールの改訂〉フォームを使用してプロパティを修正できます。〈ロールの改訂〉フォームでは、記述、住所番号、メニューID など、ロールのプロパティを変更できます。

▶ ロールを改訂するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロフィール〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロフィールの処理〉で、[ロールのみ]を選択します。
2. 改訂するロールを選んで[選択]をクリックします。
3. 〈ロールの改訂〉フォームで、必要な変更を行って[OK]をクリックします。

ロールの順序設定

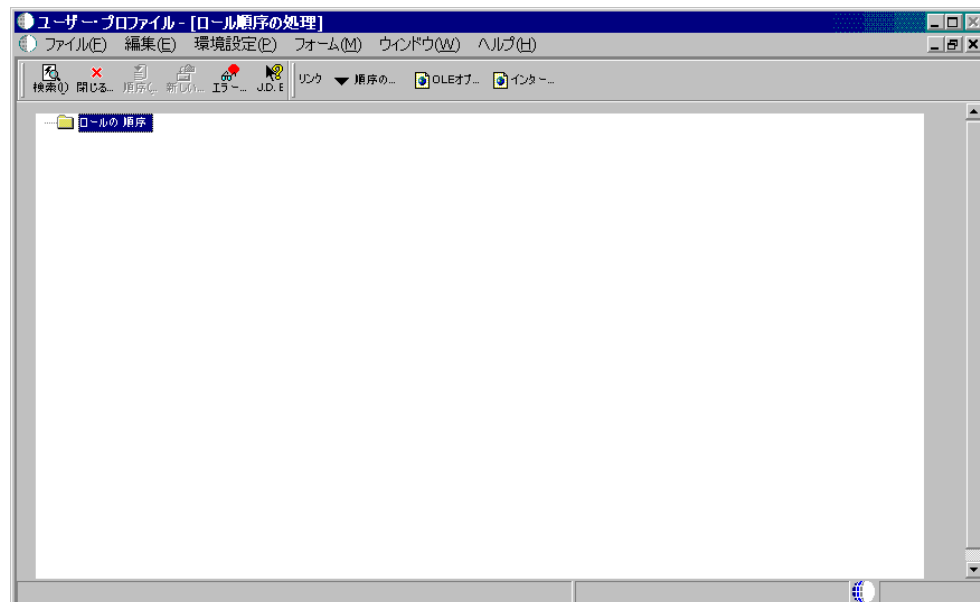
〈ロール順序の処理〉フォームには、定義したロールがすべて含まれており、各ロールに順序を割り当てることができます。順序によって、ロールの階層が決定され、ユーザー・ロール間でセキュリティに衝突があった場合どちらのロールを選択するかが決定されます。

ロールの順序を設定するには、〈ユーザー・プロファイルの処理〉アプリケーション(P0092)を使用します。

▶ ロールの順序を設定するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. [フォーム]メニューから[ロールの順序]を選択します。



2. 〈ロール順序の処理〉フォームで、ツリー構造からロールを選択し、ロール順序内の必要な位置にドラッグします。
3. 必要な順序の設定後に、[フォーム]メニューから[順序の設定]を選択して[閉じる]をクリックします。
4. 順序を変更しない場合は、[フォーム]メニューから[設定せずに閉じる]を選択して[閉じる]をクリックします。

ロールへの環境の追加

各ロールは、〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)でロールを設定する際に定義します。このアプリケーションでは、各ロールに複数の環境を割り当てることができます。ユーザーが ERP 9.0 にサインオンした場合、環境およびロールの選択フィールドには有効なロールと環境が表示されます。

〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉フォームを使用して、ロールに新しい環境を割り当てるか、ロール用の既存の環境を変更します。

参照

- ロールと環境については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サインオン時に表示するロールの選択」

▶ ロールに環境を追加するには

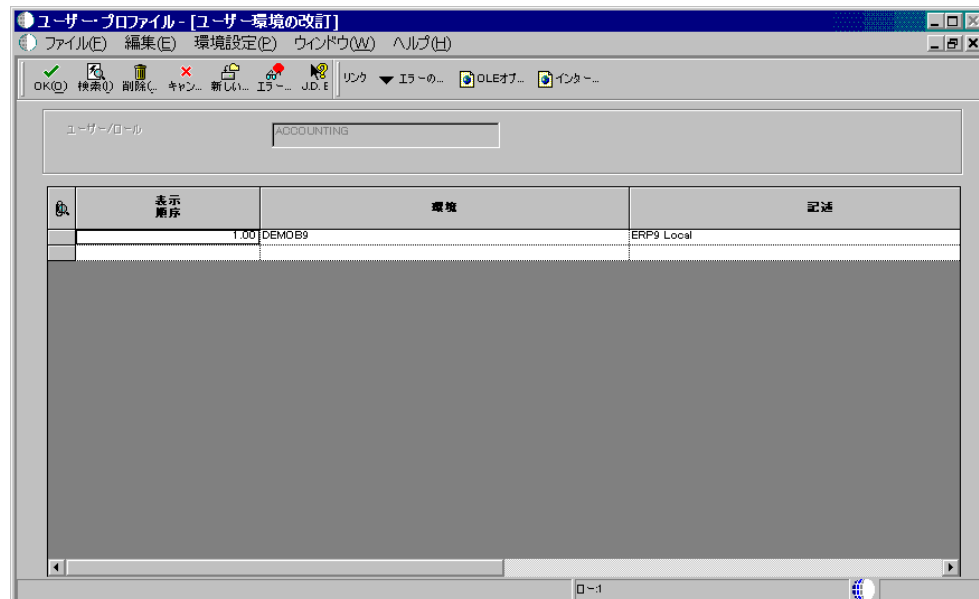
〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉で、[ロールのみ]を選択して[検索]をクリックします。

注:

[ユーザーとロール]オプションを選択しても、同じタスクを実行できます。[ロールのみ]オプションを選択すると、さらに簡単に環境を追加できます。

2. グリッドからロールを選択し、[ロー]メニューから[環境]を選択します。



3. 〈ユーザー環境の改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - 表示順序
ERP 9.0 へのサインオン時に環境選択フィールドに環境が表示される順序を指定します。

- 環境

ビジュアル・アシストをクリックすると有効な値のリストが表示され、値を選択できます。

注:

ロールの環境を変更する場合は、環境選択フィールドに新しい値を入力して[OK]をクリックします。

ロール・リレーションシップの設定

ロール・リレーションシップによって、ユーザーが定義済みロールに連結されます。1つのロールに複数のユーザーを割り当てたり、1人のユーザーに複数のロールを割り当てることができます。ロール・リレーションシップを確立するには、〈ロール・リレーションシップ〉アプリケーション(P95921)を使用します。〈ロール・リレーションシップ〉では、ユーザーのロール・リレーションシップを追加、削除、または改訂できます。

ロール・リレーションシップの作成

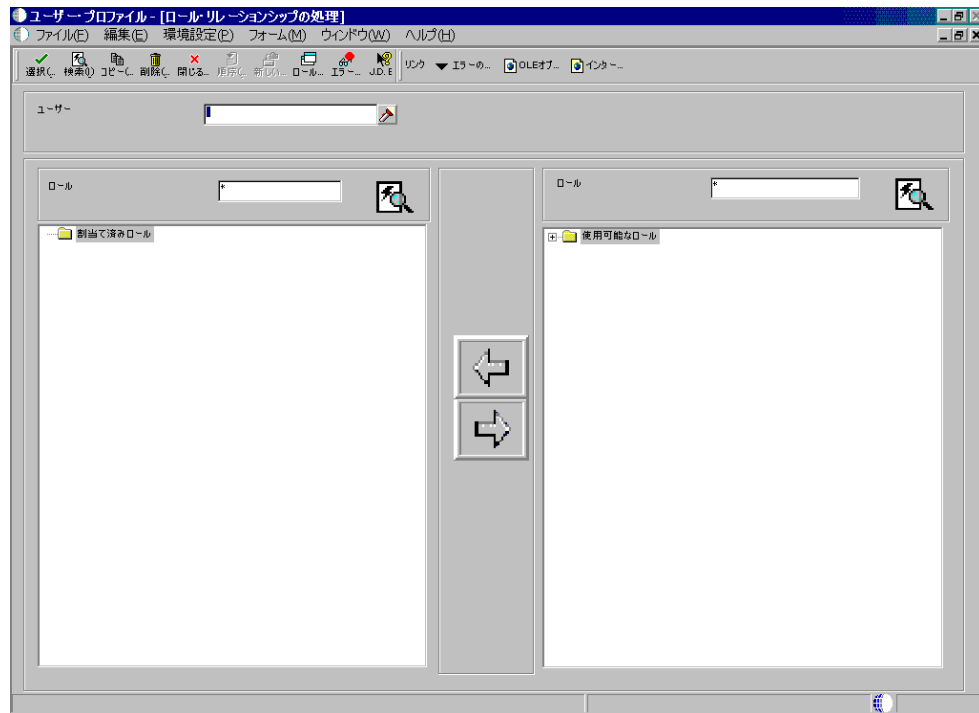
ロールを定義した後に、〈ロール・リレーションシップの処理〉フォームを使用して、ユーザーとロール間のリレーションシップを作成します。ユーザーの割当済みロール・リストにロールを追加すると、そのユーザーは[ロール]オプションを使用してサインオン時にロールを選択できるようになります。[ロール]オプションは ERP 9.0 サインオン画面上のコンボ・ボックスであり、ユーザーに割り当てられているロールが表示されます。[ロール]オプションを無効にすることで、ユーザーによるロールの選択を制限できます。[ロール]が無効になっている場合、ユーザーは ERP 9.0 で実行する割当て済みのロールをすべて入力する必要があります。

注:

ユーザーは、[ロール]オプションで選択するか、“*ALL”と入力してすべてのロールを表示してから選択することもできます。

▶ ロール・リレーションシップを作成するには

Solution Explorer で、〈ロール・リレーションシップ〉アプリケーション(P95921)を実行します。



1. 〈ロール・リレーションシップの処理〉で、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

ユーザーに割り当てられているロールと選択可能なロールが、別のツリー・コントロールに表示されます。

2. [使用可能なロール]ツリー・コントロールからロールを選択し、[ロールの追加]ボタンをクリックして、割当て済みロールのリストに追加します。

3. 〈ロールの改訂〉フォームで、今日の日付とは異なる有効日付が必要な場合は、その日付を入力します。

今日の日付が[有効日付]フィールドのデフォルト値です。デフォルト値を使用しない場合は、今日より前の日付を入力しないと、エラー・メッセージが戻されるので注意してください。

4. 必要な場合は有効期限を入力します。

[有効期限]フィールドに日付を入力しなければ、ロールは無期限に有効となります。

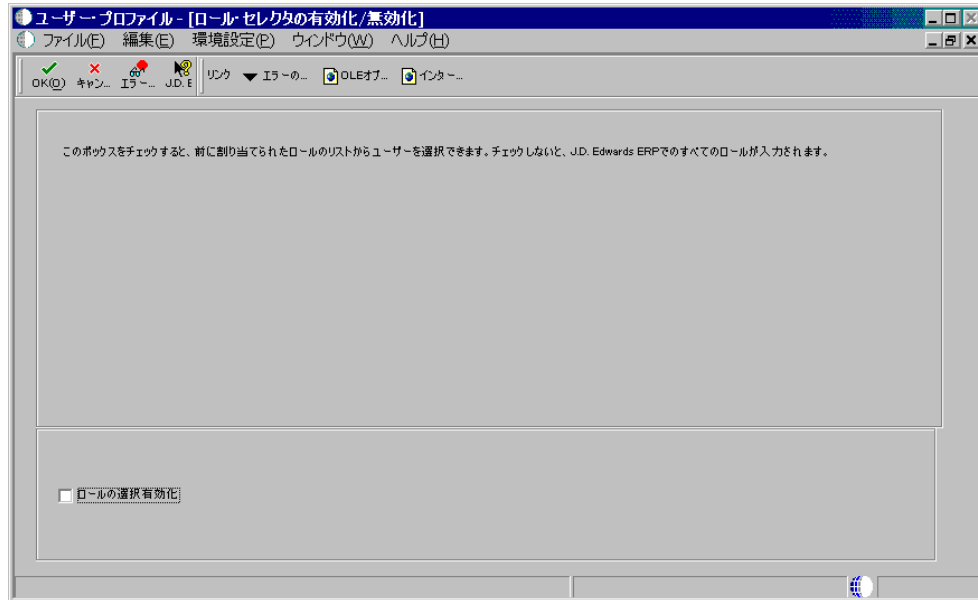
5. *ALL を使用してユーザーが ERP 9.0 にサインオンしたときにそのロールを実行できるようにする必要がある場合は、[*ALL に含む]オプションを有効にして[OK]をクリックします。

[*ALL に含む]を選択しないと、ユーザーが*ALL で ERP 9.0 にサインオンした場合、このロールはアクティブなロールの一部にはなりません。*ALL に含まれないロールを有効にするには、システムにログオンする際に特定のロールを選択する必要があります。そのセッション中では、選択したロールのみ有効となります。

▶ ロール・オプションを有効にするには

Solution Explorer で、〈ロール・リレーションシップ〉アプリケーション(P95921)を実行します。

1. 〈ロール・リレーションシップ〉で、[フォーム]メニューから[ロールの選択の有効化]を選択します。



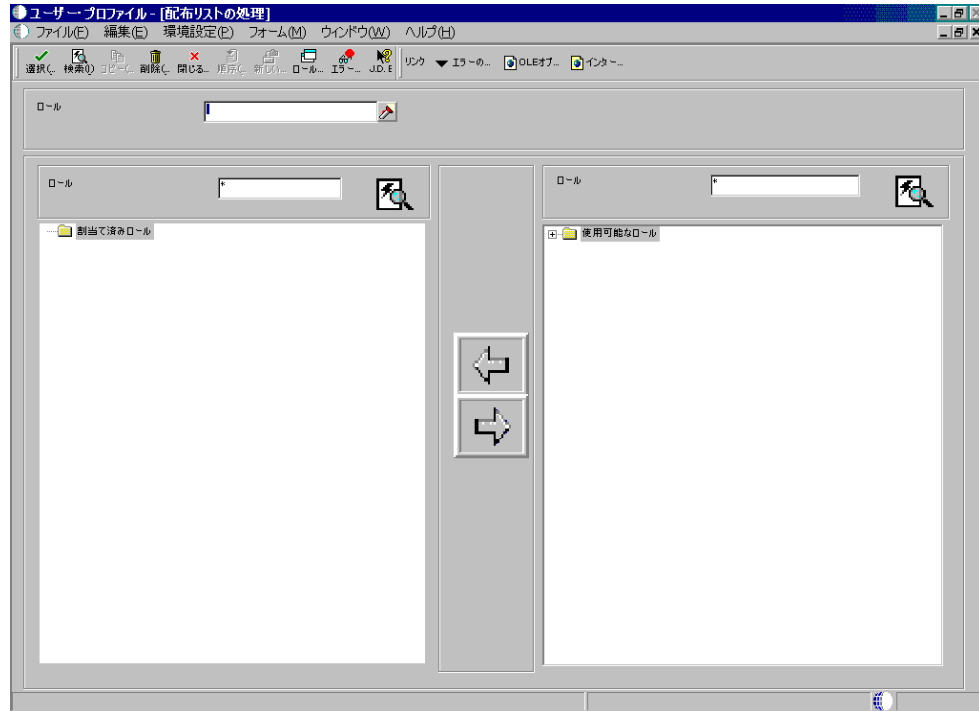
2. ユーザーがサインオン時にすべての割当済みロールのリストから新規ロールを選択できるようにする場合は、〈ロール・セレクタの有効化/無効化〉で、[ロールの選択有効化]オプションを有効にして[OK]をクリックします。

このオプションをオンにしない場合は、ユーザーは ERP 9.0 で実行する割当て済みのロール(*ALL)をすべて入力する必要があります。

▶ ロール間のリレーションシップを作成するには

Solution Explorer で、〈ロール・リレーションシップ〉アプリケーション(P95921)を実行します。

1. [フォーム]メニューから[配布リスト]を選択します。



2. 〈配布リストの処理〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
3. 配布リストにロールを追加するには、[使用可能なロール]ツリー・コントロールからロールを選択し、[ロールの追加]ボタンをクリックします。
4. 〈ロールの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して、[OK]をクリックします。
 - 有効日付
現在の日付以外に委任を行いたい場合に値を入力します。
 - 有効期限
5. ユーザーがすべてのロールで ERP 9.0 に入った場合に、特定のロールを果たせるようにする必要がある場合は、[*ALL に含む]オプションをオンにします。
ロールが[割当て済みロール]ツリー・コントロールに追加されます。
6. ロールを配布リストから削除するには、[割当て済みロール]ツリー・コントロールからロールを選択し、[ロールの削除]ボタンをクリックします。

注:

ERP 9.0 では複数レベルのロールはサポートしていません。

ロール・リレーションシップの改訂

ユーザーについて1つまたは複数のロール・リレーションシップを作成後は、〈ロール・リレーションシップの処理〉フォームと〈ロール・リレーションシップ〉フォームを使用してリレーションシップを改訂できます。ロール・リレーションシップは、割当て済みロールを削除するか、ロール割当ての有効期限を変更して改訂できます。割当て済みロールを*ALL から除外したり、除外されていたロールを*ALL に追加することもできます。

▶ ロール・リレーションシップを改訂するには

Solution Explorer で、〈ロール・リレーションシップ〉アプリケーション(P95921)を実行します。

1. [ユーザー]フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
2. 割当て済みのロールを削除するには、[割当て済みロール]ツリー・コントロールからロールを選択し、[ロールの削除]ボタンをクリックします。
3. 既存のロール・リレーションシップを改訂するには、[割当て済みロール]ツリー・コントロールからロールを選んで[選択]をクリックします。
4. 〈ロールの改訂〉フォームで、次の一方または両方を変更して[OK]をクリックします。
 - 有効期限
 - *ALL に含む

ワークステーション初期化ファイル・パラメータ

ERP 9.0 サインオン時に、割り当てられた数によってユーザーはロールを1つまたは複数選択することができます。ユーザーが*ALL を選択した場合は、ERP 9.0 では割り当てられたロールすべてを行います。ロールに関連する2つのパラメータは、ワークステーションの jde.ini ファイルにあります。次の表では、パラメータ、ワークステーション、.INI ファイルの該当セクション、およびデフォルト設定を説明しています。

jde.ini パラメータ	Jde.ini セクション	デフォルト設定
LASTROLE	[SIGNON]	*ALL
Default Role	[DB SYSTEM SETTINGS]	*ALL

LASTROLE パラメータの値によって、ERP 9.0 の実行時にサインオン画面に表示されるロールが定義されます。

注:

詳しくは『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サインオン時に表示するロールの選択」を参照してください。

サインオン時に表示するロールの選択

システム管理者がロールを定義してロール・リレーションシップを作成すると、ユーザーは[ロール・セクタ]が有効になっている場合、このオプションを使って ERP 9.0 にサインオンできます。ユーザーは ERP 9.0 のサインオン・フォームで、ユーザーID とパスワードを入力します。ERP 9.0 に入る前に、有効な環境とロールを入力する必要があります。

ユーザー・ロールと割り当てられた環境は相互に依存します。ユーザーは、環境を選択して[ロール・セクタ]に表示されるロールを指定したり、ロールを選択して[環境セクタ]に表示される環境を指定することができます。

次の表は、サインオン時に[環境]フィールドと[ロール]フィールドが表示された場合に考えられるシナリオと、各シナリオにおける ERP 9.0 の動作を示しています。

サインオンの例	ERP 9.0 の動作
[環境]および[ロール]フィールドの両方に値を入力する。	環境に対してロールを検証します。ロールが無効な場合は、〈環境セクタ〉が表示され、ロールに有効な環境を選択するようプロンプトが表示されます。
[ロール]フィールドにのみ値を入力する。	〈環境セクタ〉が表示され、選択したロールに有効な環境のみが表示されます。
[環境]フィールドにのみ値を入力する。	〈ロール・セクタ〉が表示され、ユーザーと選択した環境に有効なロールのみが含まれます。
[環境]および[ロール]フィールドのいずれにも値を入力しない。	〈ロール・セクタ〉が表示され、jde.ini ファイルで定義されたユーザーおよびデフォルト環境に有効なロールのみが含まれます。次に〈環境セクタ〉が表示され、選択したロールに有効な環境のみが表示されます。 環境を入力しない場合は、jde.ini ファイルで定義されたデフォルト環境に割り当てられたロールが〈ロール・セクタ〉で表示されます。

ロールの委任

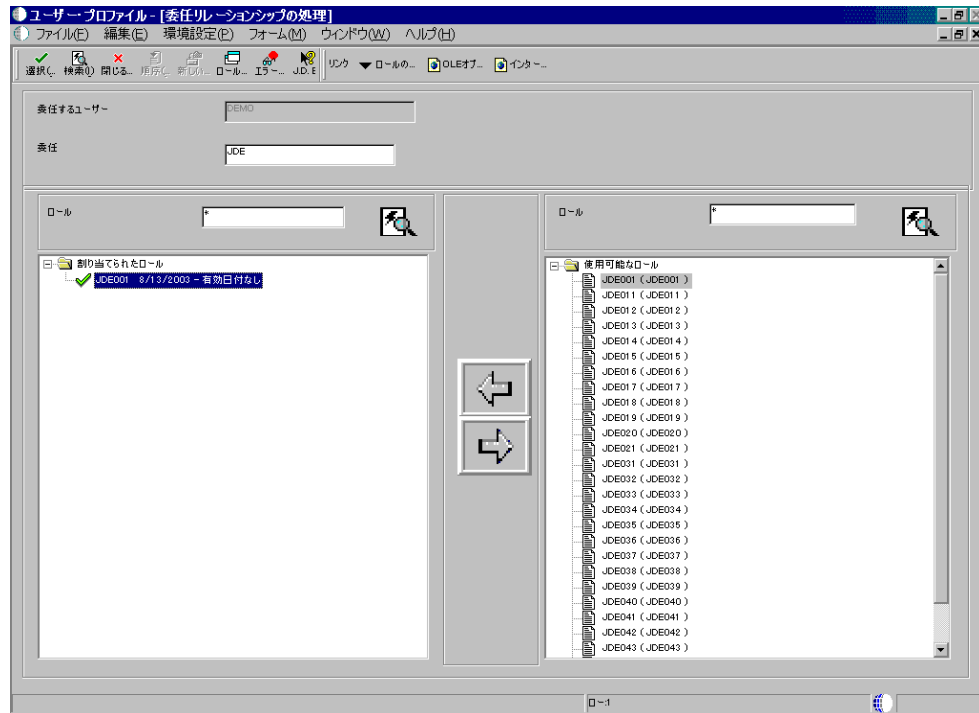
〈委任リレーションシップの処理〉フォームを使用すると、ロール・リレーションシップ・レコードを他のユーザーに委任できます。出張する予定があり、不在中も担当作業を進める必要がある場合は、1 つまたは複数のロールを他のユーザーに委任する必要があります。

ロール・リレーションシップ・レコードを委任する場合は、既存のレコードを他のユーザーにコピーします。ロール・リレーションシップは、リレーションシップが自分に割り当てられていない限り、別のユーザーには追加できません。

▶ ロールを委任するには

Solution Explorer で、〈ロール・リレーションシップ〉アプリケーション(P95921)を実行します。

1. [フォーム]メニューから[ロールの委任]を選択します。



2. 〈委任リレーションシップの処理〉フォームで、[委任]フィールドに代理人のユーザーIDを入力して[検索]をクリックします。

委任者のロールが[使用可能なロール]ツリー・コントロールに表示されます。代理人となるユーザーのロールが[使用可能なロール]ツリー・コントロールに表示されます。

3. ロールを委任するには、[使用可能なロール]ツリー・コントロールからロールを選択し、[ロールの追加]ボタンをクリックします。
4. 次のフィールドに値を入力して、[OK]を選択します。

- 有効日付

現在の日付以外に委任を行いたい場合に値を入力します。

- 有効期限

5. ユーザーがすべてのロールで ERP 9.0 に入った場合に、特定のロールを果たせるようにする必要がある場合は、[*ALL に含む]オプションをオンにします。

委任したロールが、〈委任リレーションシップの処理〉フォームの[割り当てられたロール]ツリー・コントロールに追加されます。

注:

〈委任リレーションシップの処理〉フォームで[削除]ボタンを使用して削除できるのは、他のユーザーに委任したロールだけです。

委任していないロールを削除しようとすると、操作が無効であることを示すダイアログ・ボックスが表示されます。

ロール間のリレーションシップの作成

〈配布リストの処理〉フォームを使用すると、他の大きなロールに含まれるロールのリストを作成できます。たとえば、ADMIN というロールを作成し、最大数の管理上の職責と ERP 9.0 のアプリケーションに対する最も広範囲のアクセス権を持つユーザーを含めることができます。また、他に複数のロールを作成し、さらに限定的な管理上の職責と少数の ERP 9.0 アプリケーションに対するアクセス権を持つユーザーを含めることもできます。ロールに基づいて配布リストを作成すると、管理上の複数の職責レベルに属するすべてのロールをリストに含めることができます。配布リストに含まれるロールを持つユーザーは、ADMIN ロール宛のメッセージを受け取ります。

〈配布リストの処理〉フォームを使用すると、必要に応じて配布リストのロールを追加または削除できます。

ロールの管理

ERP 9.0 を使用して、ロール・リレーションシップ・レコードを作成した定義済みロールを管理します。多数のロールを 1 人のユーザーにすばやく追加したり、多数のユーザーを 1 つのロール・リレーションシップ・レコードに追加できます。また、ERP 9.0 を使用すると、新規ロールの記述に使用する言語も指定できます。

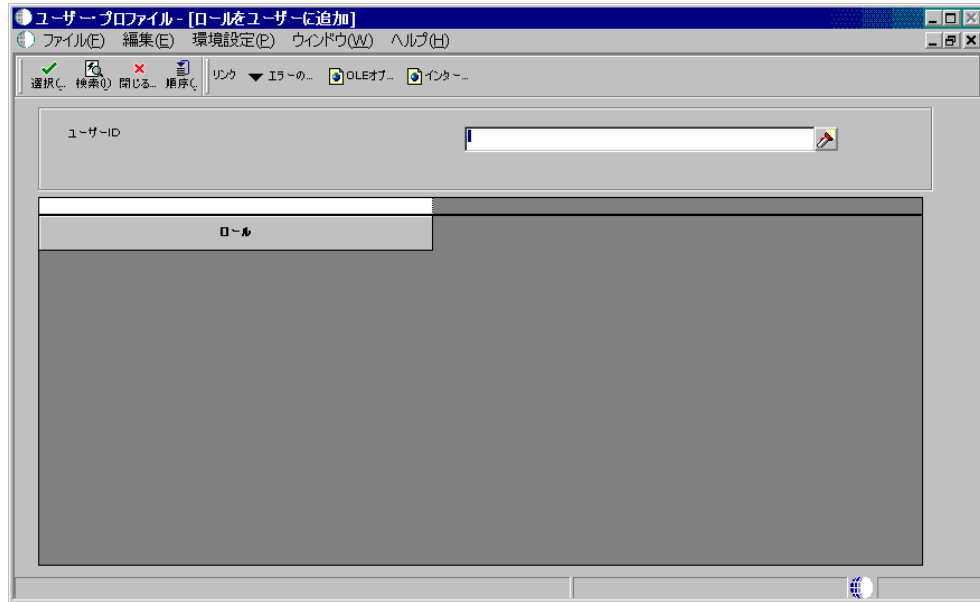
ユーザーへのロールの追加

〈ロールをユーザーに追加〉フォームを使用すると、1 つまたは複数のロール・リレーションシップ・レコードを単一ユーザーにコピーできます。この機能は、一度に必要な数のレコードをコピーできるので、ユーザーに多数のロールを実行させる場合に特に役立ちます。

▶ ユーザーにロールを追加するには

Solution Explorer で、〈ロール・リレーションシップの処理〉アプリケーション(P95921)を実行します。

1. フォーム・エグジットから[ユーザーにロールを追加]を選択します。



2. [ユーザーID]フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
3. ユーザーに追加するロールを選んで[選択]をクリックします。
追加対象として複数のロールを選択するには、[Ctrl]キーを押しながら各ロールをクリックします。
4. 〈ロールの改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。
 - 有効日付
現在の日付以外で有効にする日付を指定します。
 - 有効期限
5. ユーザーがすべてのロールで ERP 9.0 に入った場合に、特定のロールを実行させる必要がある場合は、[*ALL に含む]オプションをオンにします。
6. [OK]をクリックします。
7. 複数のロール・リレーションシップ・レコードを追加する場合は、対象レコードごとに〈ロールの改訂〉フォームに情報を入力します。

ロールへのユーザーの追加

〈ユーザーをロールに追加〉フォームを使用すると、1人または複数のユーザーを1つのロール・リレーションシップ・レコードに追加できます。この機能は、1つのロールに多数のユーザーを割り当てる場合に特に役立ちます。

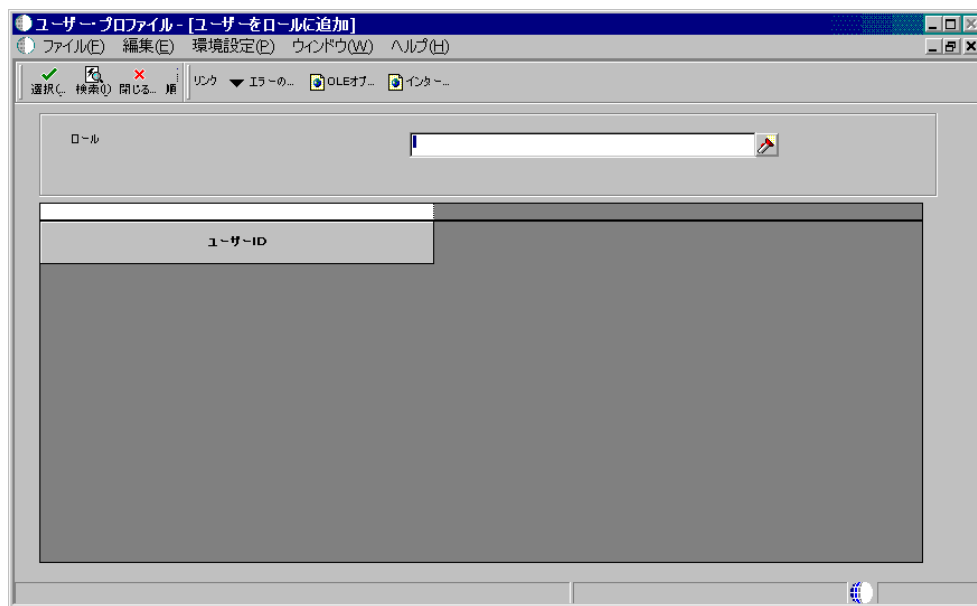
ユーザー・ロールのコピー

〈ロール・リレーションシップの処理〉プログラム(P95921)を使用すると、ロール・リレーションシップ・レコードをユーザー間でコピーできます。レコードをコピーして追加すると、そのレコードがユーザーの既存のレコードに追加されます。また、コピーして置換すると、コピーしたレコードによってユーザーの既存のレコードが置換されます。

▶ ロールにユーザーを追加するには

Solution Explorer で、〈ロール・リレーションシップの処理〉アプリケーション(P95921)を実行します。

1. [フォーム]メニューから[ロールにユーザーを追加]を選択します。

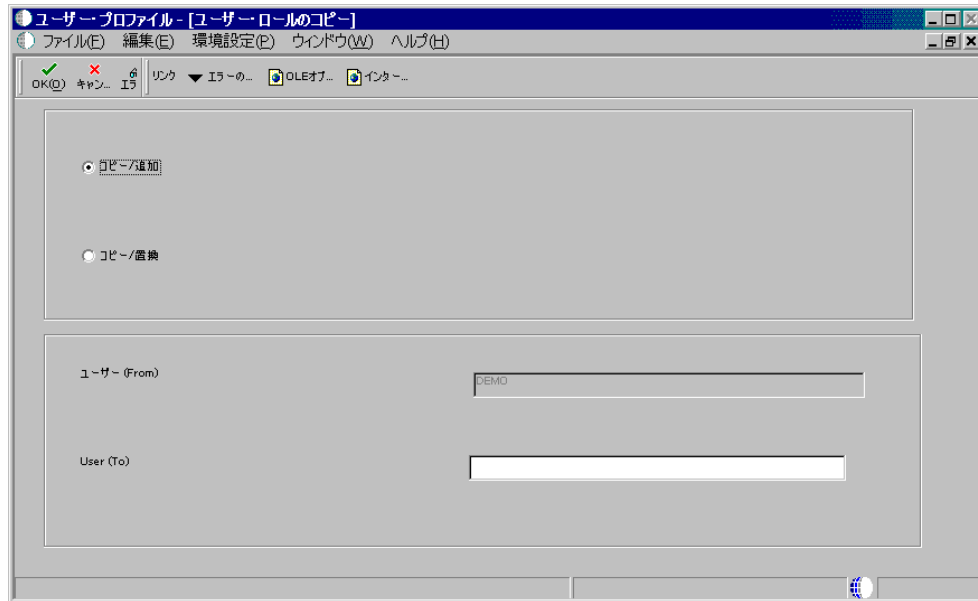


2. [ロール]フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
3. ロールを追加するユーザーを選んで[選択]をクリックします。
追加対象として複数のユーザーを選択するには、[Ctrl]キーを押しながら各ロールをクリックします。
4. 〈ロールの改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。
 - 有効日付
現在の日付以外で有効にする日付を指定します。
 - 有効期限
5. ユーザーがすべてのロールで ERP 9.0 に入った場合に、特定のロールを果たせるようにする必要がある場合は、[*ALL に含む]オプションをオンにします。
6. [OK]をクリックします。
7. 複数のユーザー・レコードを追加する場合は、対象レコードごとに〈ロールの改訂〉フォームに情報を入力します。

▶ ユーザー・ロールをコピーするには

Solution Explorer で、〈ロール・リレーションシップの処理〉アプリケーション(P95921)を実行します。

1. [ユーザー]フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
ユーザーのロールが[割り当て済みロール]ツリー・コントロールに表示されます。
2. [コピー]をクリックします。



3. 〈ユーザー・ロールのコピー〉フォームで、次のオプションを 1 つ選択します。
 - コピー/追加
 - コピー/置換
4. [ユーザー(To)]フィールドに値を入力してレコードをコピーするユーザーを指定します。
5. [OK]をクリックします。

言語のロール記述の改訂

〈言語ロール記述の改訂〉フォームを使用すると、定義済みロールの翻訳を設定したり、任意の言語のロール記述を変更できます。

翻訳対象となるすべての言語でロールの記述を表示するには、〈言語ロール記述の処理〉フォームを使用します。

▶ **ロールに言語翻訳を追加するには**

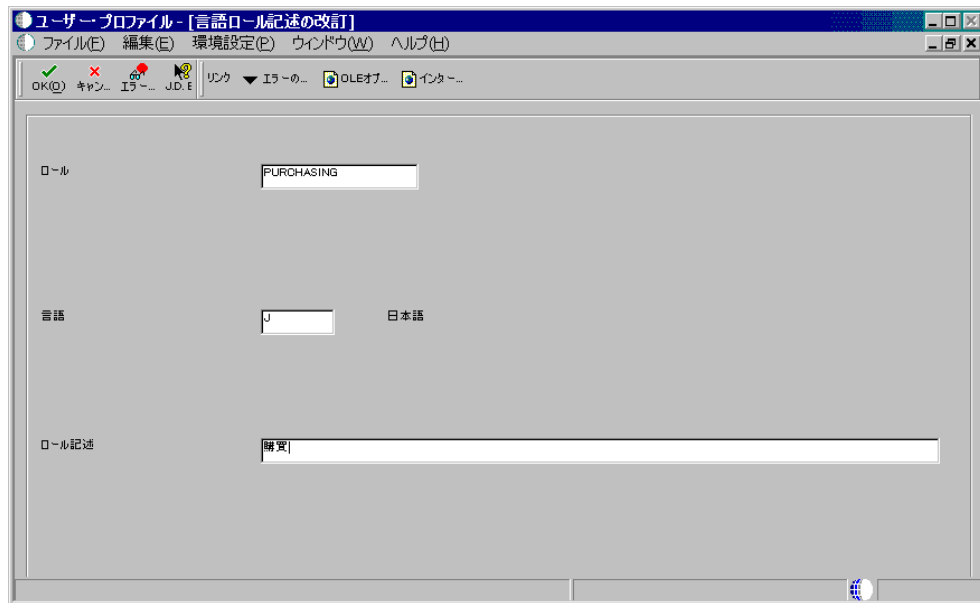
〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉で、[ロールのみ]を選択します。

注:

[ユーザーとロール]オプションを選択してもこのタスクを実行できます。

2. グリッドからロールを選んで、[ロー]メニューから[ロールの記述]を選択します。
3. ロールに言語を追加するには[追加]をクリックします。



4. 〈言語ロール記述の処理〉で、次のフィールドに値を入力して、[OK]をクリックします。
 - **ロール**
言語を追加するロールの名称を入力します。
 - **使用言語**
ビジュアル・アシストを使用して、各サポート言語を表すユーザー定義コードのリストを表示します。
 - **ロール記述**

▶ ロール記述を変更するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉フォームで、[ロールのみ]を選択します。
2. グリッドからロールを選んで、[ロー]メニューから[ロールの記述]を選択します。
3. 〈言語ロール記述の処理〉フォームで[検索]をクリックします。
4. グリッドからロールを選択して[選択]をクリックします。
5. 〈言語ロール記述の改訂〉フォームで、次のフィールドに記述を入力して[OK]をクリックします。

初期化ファイルの変更

ERP 9.0 サインオン時に、割り当てられた数によってユーザーはロールを 1 つまたは複数選択することができます。*ALL を選択した場合は、「*ALL に含む」というフラグの付いたすべてのロールを実行することになります。jde.ini ファイルではロールに関係する 2 つのパラメータがあります。次の表では、パラメータ、.INI ファイルのセクション、およびデフォルト設定を説明しています。これらの設定は、ERP 9.0 を初めて構成するときにシステム管理者によって定義されます。通常の管理タスクを行う場合にはこの設定を行わないでください。

jde.ini パラメータ	Jde.ini セクション	デフォルト設定
LASTROLE	[SIGNON]	*ALL サインオン時に選択するロールを定義します。
Default Role	[DB SYSTEM SETTINGS]	*ALL

参照

- サインオン時のロールの選択については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サインオン時に表示するロールの選択」

セキュリティ

ERP 9.0 のセキュリティ機能を使用すると、セキュリティ管理者は個々のユーザーやユーザー・グループのセキュリティを管理できます。セキュリティ管理者は、ユーザーとグループの管理(セキュリティの適用または解除)に次の機能を使用します。

- アプリケーション・セキュリティ
特定のアプリケーションへのアクセスやインストールを管理します。
- アクション・セキュリティ
追加、変更、削除、選択、コピーなど、特定のアクションの実行を許可するかどうかを管理します。
- テーブル・ロー・セキュリティ
テーブル内の特定のリストや特定範囲のレコードへのアクセスを管理します。
- カラム・セキュリティ
テーブル内の特定のカラムへのアクセスを管理します。ERP 9.0 では、カラムはフォームやレポート上ではフィールドとして表示されます。テーブル、フォーム、アプリケーションで設定できます。
- 処理オプション・セキュリティ
関連付けられているアプリケーションの機能に影響する処理オプションの値について、ユーザーが参照または変更できるかどうかを管理します。また、そのアプリケーションのバージョンを確認するプロンプトにユーザーが応答できるかどうかも管理します。
- タブ・セキュリティ
フォーム上のタブへのアクセスを制御します。
- エグジット・セキュリティ
フォーム上のメニュー・バー・エグジットへのアクセスを制御します。
- 排他的アプリケーション・セキュリティ
単一の排他的アプリケーションを使用して保護されている情報へのアクセスを制御します。
- 外部コール・セキュリティ
外部コール・アプリケーションへのアクセスを制御します。
- Solution Explorer のセキュリティ
Solution Explorer 機能へのアクセスを制御します。
- その他のセキュリティ
読取専用レポートを制御し、ワークフロー状況をモニタリングします。
- ユーザー・サインオンおよびデータベース・セキュリティ

ERP 9.0 外部からデータベースへのユーザー・アクセスを防止します。

- ポータル・セキュリティ

ポータル・コンポーネントへのアクセスを制御します。

〈セキュリティ・ワークベンチ〉アプリケーション(P00950)では、セキュリティ・ワークベンチ・テーブル(F00950)が使用されます。

〈ユーザー・セキュリティ〉アプリケーション(P98OWSEC)では、OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)が使用されます。

〈セキュリティ・ワークベンチ〉アプリケーションは、ポータルの 8 つの機能に対するセキュリティの設定にも使用します。セキュリティを正しく設定すると、システム内のユーザーは各自のジョブの完了に不可欠な操作の実行のみが許可されることになります。

セキュリティ・ワークベンチの理解

〈セキュリティ・ワークベンチ〉アプリケーション(P00950)を使用すると、ユーザー、ロール、*PUBLIC のセキュリティを設定できます。ERP 9.0 では、セキュリティ情報がセキュリティ・ワークベンチ・テーブル(F00950)に格納され、各ワークステーションのメモリにキャッシュされます。管理者としてセキュリティに対して行った変更は、ユーザーがログアウトして再びログインした後に、各ワークステーションで適用されます。

セキュリティはさまざまなタイプを適用できます。たとえば、データベース・テーブル内の 1 つのローヤ、ERP 9.0 アプリケーションの処理オプションにセキュリティを適用できます。また、ERP 9.0 内のオブジェクトにセキュリティを適用して、一部のユーザーによるフォームやテーブルへのアクセスを制限したり、オブジェクト・レベルのセキュリティをユーザー別に適用できます。

ユーザー、グループ、および*PUBLIC の理解

ERP 9.0 のセキュリティ管理者は、次の要素に対するセキュリティを設定できます。

- 特定のユーザー

特定の ERP 9.0 ユーザーID を使用してセキュリティを管理します。

- ユーザー・ロール

ロール別にセキュリティを管理します。これによって、同じジョブ条件に基づいてユーザーをグループ化できます。たとえば、買掛管理担当者を 1 つのロール(AP)にまとめることができます。

- すべてのユーザー

[ユーザーまたはロール]フィールドで ID タイプとして*PUBLIC を指定し、ユーザー全員のセキュリティを管理します。*PUBLIC を指定すると、ERP 9.0 内の特定の ID にユーザー全員が自動的に組み込まれます。この ID を使用すると、特にユーザー・プロフィール内でレコードを設定していなくても、セキュリティを適用できます。

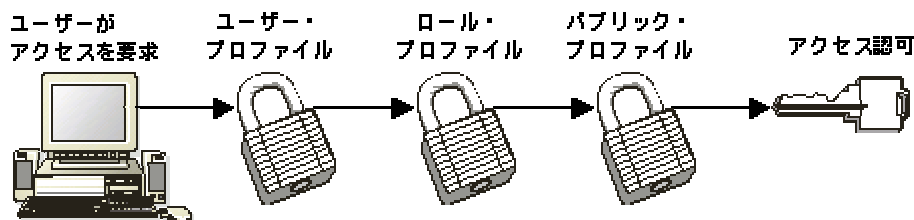
ERP 9.0 のセキュリティ・チェックの理解

ユーザーがアプリケーションへのアクセスや操作を実行しようとしたときに、特定のユーザーID に対するセキュリティがチェックされます。そのユーザーにセキュリティが設定されている場合は、続行できないというメッセージが表示されます。

ユーザーID にセキュリティがない場合は、(ユーザーが特定のロールの一部であれば)ロール・プロファイル、*PUBLIC の順にチェックされます。どのレベルでもセキュリティが設定されていないければ、ユーザーは操作を続けることを許可されます。

また、ERP 9.0 では、権限コードを通じてソフトウェア・ライセンス・セキュリティが提供され、サインオン時と新規データ・ソースへのアクセス時にユーザー検証が要求されます。

ERP 9.0によるセキュリティ・チェックの理解



キャッシュ・セキュリティ情報の理解

ERP 9.0 のキャッシュは、セキュリティ・ワークベンチ・テーブル(F00950)からセキュリティ情報をキャッシュします。この情報は、ワークステーションのメモリにキャッシュされます。システム管理者がセキュリティ・ワークベンチ・テーブル(F00950)に変更を加えても、その内容がログオンしているワークステーション上でそのつど反映されることはありません。このようなワークステーションでは、一度ログオフしてからログインし直してセキュリティの変更を有効にする必要があります。

セキュリティ・タイプの理解

特定のオブジェクト・レベルで、ユーザーとグループに対して次のレベルのセキュリティを単独で、または組み合わせて設定できます。

セキュリティ・レベル	説明
アプリケーション・セキュリティ	特定のアプリケーション、またはアプリケーション内の特定のフォームについて、ユーザーによる実行やインストールにセキュリティを適用します。
アクション・セキュリティ	レコードの追加、削除、改訂、照会、コピーなど、ユーザーによる特定のアクションの実行にセキュリティを適用します。
ロー・セキュリティ	テーブル内の特定範囲のレコードまたはレコード・リストへのユーザー・アクセスにセキュリティを適用します。 たとえば、ビジネスユニット 1 から 10 に関するデータへのユーザー・アクセスにセキュリティを適用すると、ユーザーはこれらのビジネスユニットに関するレコードを参照できなくなります。

カラム・セキュリティ	<p>ユーザーによる特定フィールドの表示や、その値の変更にセキュリティを適用します。これは、データ辞書で定義されているデータベース・フィールドでも、処理/計算フィールドなどの非データベース・フィールドでもかまいません。</p> <p>たとえば、〈従業員マスター〉アプリケーションの[給与]フィールドのユーザー表示にセキュリティを適用すると、そのユーザーがこのアプリケーションにアクセスしても、フォームに[給与]フィールドは表示されません。</p>
処理オプション・セキュリティ	<p>ユーザーによる特定アプリケーションの処理オプション値の変更、またはバージョン・プロンプトと値プロンプトへの応答に、セキュリティを適用します。</p> <p>たとえば、ユーザーによる〈住所録の改訂〉の処理オプションの変更 にセキュリティを適用すると、処理オプションは表示されますが(値プロンプトにセキュリティを適用していない場合)、値は変更できなくなります。</p> <p>バージョン・プロンプトへのユーザー応答にセキュリティを適用すると、特定のアプリケーションのバージョンが表示されなくなります。これは、管理者によって割り当てられたバージョン以外は選択できなくなることを意味します。</p>
タブ・セキュリティ	<p>ユーザーによる特定フォーム上のタブ表示や変更にセキュリティを適用します。</p>
エグジット・セキュリティ	<p>ERP 9.0 フォーム上のメニュー・バー・エグジットにセキュリティを適用します。これらのエグジットによってアプリケーションが呼び出され、ユーザーがデータを操作できます。エグジット・セキュリティを適用すると、同じメニュー・オプションの使用にも制限が適用されます。</p>
排他的アプリケーション・セキュリティ	<p>アプリケーションに設定されているロー・セキュリティを一時変更します。ユーザーに排他的アプリケーション・セキュリティを設定している場合、そのユーザーが指定したアプリケーションでアクセスされる各テーブルのロー・セキュリティが一時変更されます。他のすべてのセキュリティも、引き続き適用されます。</p>
外部コール・セキュリティ	<p>ERP 9.0 の外部に存在するスタンドアロン実行プログラムへのユーザー・アクセスにセキュリティを適用します。これらの外部実行プログラムには設計ツール、システム・モニタ、およびデバッグ・ツールなどがあり、ERP 9.0 に固有です。</p>
Solution Explorer のセキュリティ	<p>Solution Explorer の次の機能にアクセスしたり変更できないようにします。Solution Explorer Portal、タスク・ドキュメンテーション、ファインカット、お気に入り、Solution Explorer、ラフカット、およびユニバーサル・ディレクタなどがあります。</p>
その他のセキュリティ	<p>その他のセキュリティでは、2 つの別の機能を制御します。読取専用レポートを制御し、ワークフロー状況をモニタリングします。読取専用レポートを実行すると、テーブル I/O とビジネス関数にアクセスできず、テーブルに書き込むことができません。[ワークフロー状況]セキュリティを実行すると、ワークフローをモニタリングしてワークフロー状況へのアクセスを制御します。</p>

ERP 9.0 オブジェクト・レベルのセキュリティの理解

ERP 9.0 のセキュリティは、オブジェクト・レベルで適用されます。つまり、ERP 9.0 内で特定のオブジェクトにセキュリティを適用できるため、柔軟なセキュリティ設定と共に整合性が得られます。たとえば、ユーザーがそのフォームにアクセスする方法(メニュー経由、またはそのフォームを呼び出すアプリケーション経由)に関係なく、特定のフォームへのユーザー・アクセスにセキュリティを適用し、そのフォームへのアクセスを禁止できます。適切なセキュリティを設定するのは簡単ではありませんが、ERP 9.0 では特定のメニュー上ですべてのオブジェクトにセキュリティを適用したり、特定のシステム・コードを持つすべてのオブジェクトにセキュリティを適用することで、一度に多数のオブジェクトのセキュリティを設定できるようにして、このプロセスを簡単にします。ただし、ERP 9.0 では、セキュリ

ティの適用対象はオブジェクトであり、メニュー自体やシステム・コード自体のセキュリティはサポートされないので注意してください。オブジェクトのセキュリティによって整合性はさらに向上します。つまり、特定のメニューにセキュリティを適用し、そのメニュー上のアプリケーションへのユーザー・アクセスを禁止したとしても、そのユーザーは他のメニューや、そのアプリケーションにアクセスする他のアプリケーションから引き続きアクセスできる可能性が残ってしまうためです。

セキュリティの対象となるユーザーとオブジェクトの識別

セキュリティを設定するには、まずセキュリティを適用するユーザーとオブジェクトを識別する必要があります。

▶ セキュリティの対象となるユーザーとオブジェクトを識別するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ユーザー・プロファイル〉プログラム(P0092)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・プロファイルの処理〉で、セキュリティを設定するユーザーおよびグループ ID を検索します。



2. セキュリティ・レベルを識別します。

- セキュリティを適用する場合はすべて、対象となるアプリケーション、フォーム、レポート、またはテーブルを識別します。これは、住所録マスターを表す F0101、〈住所録〉アプリケーションを表す P0101、またはすべてのオブジェクトを表す *ALL など、オブジェクト名です。
- ロー・セキュリティとカラム・セキュリティのみを適用する場合は、対象となるカラム(データ項目)を識別します。これは、[Business Unit/Branch Plant(ビジネスユニット/事業所)]フィールドの場合は Cost Center、[Company Name(会社名)]の場合は Company など、データ辞書項目名です。カラム・セキュリティは、データベース・テーブルに含まれていない辞書項目にも適用できます。

セキュリティ・ワークベンチの処理

〈セキュリティ・ワークベンチ〉アプリケーション(P00950)を使用すると、アプリケーション、操作、処理オプションのセキュリティを設定できます。ユーザーまたはグループのセキュリティを設定できます。

参照

- QBE ローにセキュリティを適用する方法については、『CNC インプリメンテーション』ガイドの「オブジェクト構成マネージャの処理」
- 略式コマンド・ツールにセキュリティを適用する方法については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ユーザー・プロファイルの設定」

アプリケーション・セキュリティの管理

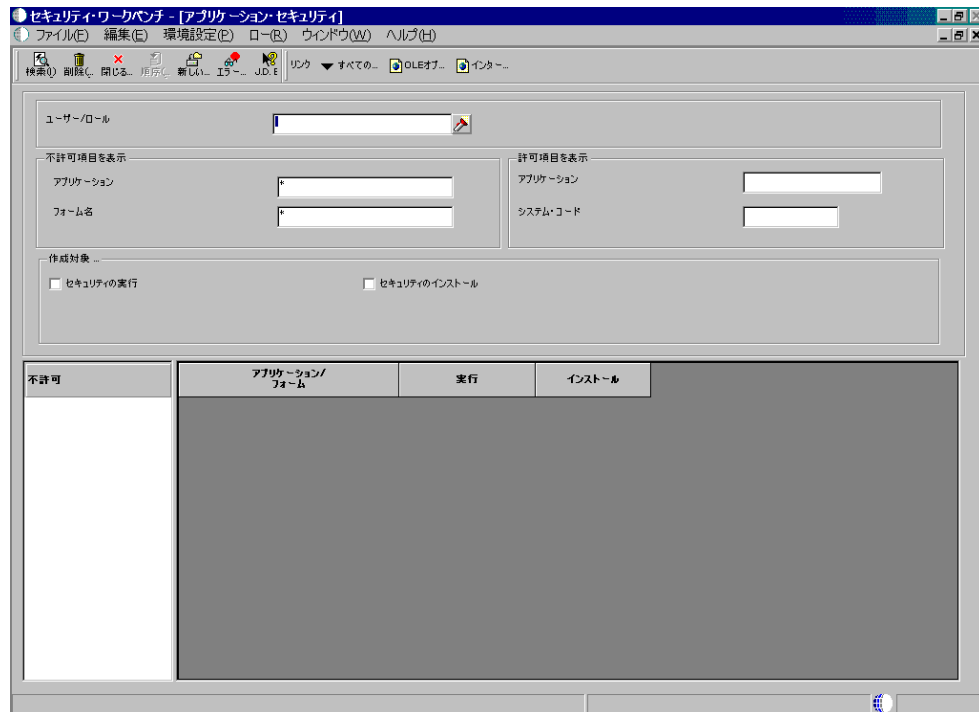
ここでは、アプリケーション・セキュリティを追加、改訂、解除する方法について説明します。特定のアプリケーション、またはアプリケーション内の特定のフォームについて、ユーザーによる実行やインストールにセキュリティを適用します。また、*ALL オブジェクトを追加する方法、特定のユーザーまたはロール用のすべてのアプリケーションをセキュリティ対象外から対象に変更する方法、および、アプリケーション内で1つを除く全フォームのセキュリティを設定する方法について説明します。

たとえば、〈データ辞書〉アプリケーション(P92001)に対して実行セキュリティを設定するには、[セキュリティの実行]オプションをクリックし、メニュー設計ノードを[Unsecured(許可)]ノードから[Secured(不許可)]ノードにドラッグします。グリッドには、このアプリケーションに設定した実行セキュリティが反映されます。これにより、設定したユーザーが〈データ辞書〉アプリケーション(P92001)を実行できなくなります。

▶ アプリケーション・セキュリティを設定するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、[フォーム]メニューから[アプリケーション]を選択します。



2. 〈アプリケーション・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

P0101 などのアプリケーション名を入力します。*ALL を使用すると、すべてのアプリケーションを表示できます。

- フォーム名

W0101G などのフォーム名を入力します。アスタリスク(*)を単独で入力して、すべてのフォームを表示することもできます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。セキュリティが適用されている個々のアプリケーションとフォームを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているアプリケーションとフォームもグリッドに表示されます。

3. [許可項目を表示]で、次のフィールドのいずれかに値を入力して[検索]をクリックします。

- アプリケーション

このフィールドに“*ALL”と入力すると、すべての ERP 9.0 オブジェクトを選択できます。

グリッドには、この特殊オブジェクトは*ALL として表示され、[セキュリティの実行]や[セキュリティのインストール]など、オブジェクトに対して定義されているセキュリティが表示されます。*ALL オブジェクトは他の任意のオブジェクトとして機能し、[ロー]メニューから[セキュリティの改訂]および[すべてを削除]オプションを使用できます。

- システム・コード

このステップは、新しいセキュリティを追加する前に実行する必要があります。このステップを実行すると、選択できるアプリケーションとフォームのリストが表示されます。

検索結果(アプリケーション、システム・コード、またはメニュー)は、UnSecured ノードの下に表示されます。まだセキュリティが設定されていない個々のアプリケーションとフォームを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、個々のアプリケーションとフォームもグリッドに表示されます。

4. 次の操作のいずれかを実行し、必要に応じてアプリケーション・セキュリティを追加、変更、または解除します。

- 追加
- 変更
- 削除

▶ アプリケーションにセキュリティを追加するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[アプリケーション]を選択します。
2. 〈アプリケーション・セキュリティ〉フォームで、[作成対象]にある次のオプションのいずれかまたは両方をクリックします。

- セキュリティの実行
- セキュリティのインストール
[インストール・セキュリティ]オプションは、ジャスト・イン・タイム・インストール専用です。

3. 次のいずれかを実行します。

- アプリケーションとフォームを UnSecured ノードから Secured ノードにドラッグします。
- [ロー]メニューから[すべてのオブジェクト]を選択し、すべてのアプリケーションを Secured ノードに移動します。
- [ロー]メニューから[すべてを不許可]を選択し、UnSecured ノードの下のすべてのオブジェクトを Secured ノードに移動します。

これで、アプリケーションまたはフォームは、適切なセキュリティと共に Secured ノードの下に表示されます。

▶ アプリケーションのセキュリティを変更するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[アプリケーション]を選択します。
2. 〈アプリケーション・セキュリティ〉で、[不許可項目を表示]でアプリケーションまたはフォームを選択します。
3. 次のオプションのいずれかまたは両方をクリックします。
 - セキュリティの実行
 - セキュリティのインストール

注意:

[インストール・セキュリティ]オプションは、ジャスト・イン・タイム・インストール専用です。

それに応じて、グリッドの[実行]および[インストール]フィールドの下の値が変更されます。

4. [ロー]メニューから[セキュリティの改訂]を選択します。

▶ アプリケーションのセキュリティを解除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [アプリケーション]を選択します。
2. 〈アプリケーション・セキュリティ〉フォームで、次のいずれかを実行します。
 - Secured ノードの下で、アプリケーションまたはフォームを選択して[削除]をクリックします。
 - Secured ノードの下にあるアプリケーションまたはフォームを、Unsecured ノードにドラッグします。
 - [ロー]メニューから[すべてを許可]を選択して、すべてのアプリケーションとフォームを Secured ノードから Unsecured ノードに移動します。

フィールド記述

記述	用語解説
ユーザー/ロール	ユーザー・プロファイルを識別するコード。

オブジェクト名	<p>システム・オブジェクトを識別する名前。J.D. Edwards ERP アーキテクチャはオブジェクト指向です。ソフトウェアの個々のオブジェクトはすべてのアプリケーションのビルディング・ブロックとなっており、複数のアプリケーションでオブジェクトを再使用できます。各オブジェクトは、オブジェクト・ライブラリアンで管理されます。オブジェクトの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ バッチ・アプリケーション(レポートなど) ○ 対話型アプリケーション ○ ビジネス・ビュー ○ ビジネス関数 ○ ビジネス関数データ構造体 ○ イベント・ルール ○ メディア・オブジェクト・データ構造体
オブジェクト記述	ユーザー定義名称または備考。
セキュリティタイプ	<p>ONEWORLD のセキュリティタイプオプションは次のとおりです。</p> <p>アクションセキュリティ。追加、変更、削除、およびコピーなど特定機能のユーザー使用を制御します。</p> <p>アプリケーションセキュリティ。特定のアプリケーション／レポートをユーザーが表示／使用することを制御します。</p> <p>カラムセキュリティ。特定のデータフィールドを非表示または読取り専用にします。</p> <p>ローセキュリティ。データベースのレコードをユーザーが追加、変更、削除、または表示することを制御します。</p> <p>処理オプションセキュリティ。処理オプションの値の表示／変更を制御します。あるいは特定アプリケーションのバージョンをプロンプトします。</p> <p>ロー／フォームエグジット タブエグジット 外部コール 排他的アプリケーション ACTIVERA</p>
記述	ユーザー定義名称または備考。
データ項目	<p>情報の単位を参照したり、定義する識別子。32 英文字フィールドで、ブランクや¥ % & , . + などの特殊文字は使用できません。</p> <p>データ項目は変更できません。</p> <p>ビジネス関数、データ構造体およびイベントルールなどで使用される、C 言語コードのデータ名(例、ADDRESSNUMBER)にもなります。</p> <p>また、エイリアス名や名称記述でもデータ項目を識別することができます。</p>
開始値	FROM(開始)データ値は、セキュリティ・ルーチンにより、特定のテーブル内のデータ項目の下限を指定するために使用されます。セキュリティを適用するデータの範囲を定義するために TO(終了)データと共に使用されます。
終了値	TO(終了)データ値はローセキュリティ・ルーチンに使われ、特定のテーブルのデータ項目の上限が使用されます。FROM(開始)データ値と共に、セキュリティが適用されるデータ範囲を定義するために使用されます。

エイリアス	情報単位を識別および定義するコード。8 文字のアルファベット順によるコード。ブランクおよび次の特殊文字(%、&、+など)は使用できません。システム・コード 55 から 59 を使用する新しい項目を作成します。エイリアスは変更できません。
追加	<p>このコードは、特定のアプリケーションまたはフォーム(処理とカラムのセキュリティ)上で、あるいは特定のテーブルおよびデータ項目(ローセキュリティ)に対して追加を行う権限がユーザーにあるかを指定します。</p> <p>このコードは、セキュリティが必要な各テーブル、アプリケーションまたはフォームに対し、ユーザーまたはグループ別にセキュリティワークベンチにより設定されます。 *ALL を使用して、すべてのテーブルまたはアプリケーションを指定できます。</p>
変更	<p>このコードは、特定のアプリケーションまたはフォーム(処理および処理オプション、およびカラムのセキュリティ)上で、あるいは特定のテーブルおよびデータ項目(ローセキュリティ)に対してユーザーに変更の権限があるかどうかを指定します。このコードはセキュリティが要求される各テーブル、アプリケーション、またはフォームに対してユーザーやグループがセキュリティワークベンチを使用して設定します。*ALL を使用すると、すべてのテーブルまたはアプリケーションを指定できます。</p>
削除	<p>特定のアプリケーションやフォーム(アクション・セキュリティ)、または特定のテーブルとデータ項目(ロー・セキュリティ)に対して削除する権限があるかどうかを指定します。</p> <p>〈セキュリティ・ワークベンチ〉を使用して、権限を設定する必要がある各テーブル、アプリケーション、フォームに対してユーザー別またはグループ別にこのコードを設定します。*ALL はすべてのテーブルまたはアプリケーションを示します。</p>
OK/選択	<p>このコードは、ユーザーが特定アプリケーションまたはフォーム上の OK ボタンまたは選択ボタンと関連する操作を実行する権限があるかどうかを指定します。 (アクション・セキュリティ)</p>
コピー	<p>このコードは、ユーザーが特定アプリケーションまたは特定フォーム上のコピー・ボタンと関連する操作を実行する権限があるかどうかを指定します。 (アクション・セキュリティ)</p>
最後までスクロール	<p>このコードにより、ユーザーが選択したデータの最後までをスクロール表示することが可能なのか、1 ページごとの表示のみが可能なのかが指定されます。このオプションは、アプリケーションやフォームごとに固有です(アクションセキュリティ)。</p>
バージョン・リストの表示	<p>このコードにより、メニュー項目から実行するアプリケーションのバージョンを、ユーザーがプロンプト表示することが可能かどうかを確定します。 このオプションは、アプリケーションに固有で、ユーザーが設定します。</p>
処理オプションの表示	<p>アクションコード・セキュリティを使用するプログラムのレコードに対し、オペレータはアクセス権を持つかどうかを指定するコードです。このコードは、アクションコードのセキュリティを必要とする全プログラムに対し、ユーザごとに、アクションコード・セキュリティの改訂(P0003)で設定されます。</p>
実行	<p>このコードは、ユーザーが特定のアプリケーションを実行する権限を持つかどうかを指定します。</p>
インストール	<p>このコードは、ユーザーが特定アプリケーションをジャスト・イン・タイムインストール(JITI)する権限があるかどうかを指定します。</p>
システムコード	システム・コードを示すユーザー定義コード(98/SY)

アプリケーションのフォームへのセキュリティの適用

ユーザーにアプリケーションの特定フォームにしかアクセスさせないようにする場合があります。この場合、これらのユーザーは、そのアプリケーションでセキュリティ対象外のフォームにはアクセスできません。

そのためには、ユーザーにアクセスを許可するフォームのセキュリティ・レコードを作成してから、アプリケーションの他のフォームへのアクセスを禁止するセキュリティ・レコードを作成します。

▶ アプリケーションのフォームにセキュリティを適用するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、[ユーザー/ロール]フィールドのユーザーまたはロール ID を入力して[検索]をクリックします。
2. [記述]カラムでアプリケーション・セキュリティと表示されているローを選んで、[フォーム]メニューから[アプリケーション]を選択します。
〈アプリケーション・セキュリティ〉フォームが表示されます。
3. [許可項目を表示]で、[アプリケーション]フィールドにアプリケーション名を入力して[検索]をクリックします。
4. UnSecured ノードと子ノードを展開し、アプリケーションのフォームを表示します。
アプリケーション・フォーム名が表示されます。
5. 表示するフォームの名称をクリックし、Secured ノードにドラッグします。

注:

ユーザーがフォームを表示できなくなるため、[セキュリティの実行]および[セキュリティのインストール]は選択しないでください。

6. [検索]をクリックします。
7. UnSecured ノードを展開し、セキュリティを適用するアプリケーションを選択します。
8. [セキュリティの実行]オプションをオンにします。これで、セキュリティ対象外のフォームを実行する場合を除き、ユーザーはアプリケーションにアクセスできなくなります。

注意:

[セキュリティのインストール]オプションはオンにしないでください。オンにすると、アプリケーションに必要なコンポーネントのジャスト・イン・タイム・インストール(JITI)を実行できなくなります。

これらの手順を完了すると、セキュリティが適用されているユーザーは、アプリケーション内のセキュリティ対象外フォームにしかアクセスできなくなります。ユーザーがアプリケーションのセキュリティ対象フォームにアクセスしようとすると、エラー・メッセージが表示されます。

アクション・セキュリティの管理

ここでは、アプリケーション・セキュリティを追加、改訂、解除する方法について説明します。レコードの追加、削除、改訂、照会、コピーなど、ユーザーによる特定のアクションの実行にセキュリティを適用できます。この項の最後に、*ALL オブジェクトを追加する方法と、特定のユーザーまたはロール用のすべてのアプリケーションを、セキュリティ対象外から対象に移動する方法について説明しています。

▶ アクション・セキュリティを設定するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定]を選択し、[実行]を選択します。
2. 〈アクション・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

完全なユーザーまたはロール名を入力してください。*PUBLIC は入力できますが、ワイルドカードは入力できません。

次の 2 つのフィールドは、どちらか一方しか使用できません。

- アプリケーション

P0101 などのアプリケーション名を入力します。*ALL と入力するとすべてのアプリケーションが表示されます。

- フォーム名

W0101G などのフォーム名を入力します。アスタリスク(*)を入力すると、すべてのフォームが表示されます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。セキュリティが適用されている個々のアプリケーションとフォームを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されている個々のアプリケーションとフォームもグリッドに表示されます。

3. セキュリティを適用するアプリケーションとフォームを検索するには、[許可項目を表示]見出しの下に表示されるフィールドのうち 1 つに値を入力し、[検索]をクリックします。

このステップを実行すると、選択できるアプリケーションとフォームのリストが表示されるので、新しいセキュリティを追加する前に完了する必要があります。

- アプリケーション

P0101 などのアプリケーション名を入力します。*ALL と入力するとすべてのアプリケーションが表示されます。

- システム・コード

検索結果(アプリケーションやシステム・コード)は、UnSecured ノードの下に表示されます。個々のアプリケーションとフォームを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、個々のアプリケーションとフォームもグリッドに表示されます。

4. 必要に応じてアクション・セキュリティを追加、変更、または解除します。

▶ アクション・セキュリティを追加するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、オブジェクトを選んで[フォーム]メニューからから[セキュリティの設定] - [実行]を選択します。
2. 〈アクション・セキュリティ〉で、[作成対象]から次のいずれかのオプションを選択します。
 - 変更
 - 追加
 - 削除
 - OK/選択
 - コピー
 - 最後までスクロール
3. オプションを 1 つ選択した後に次のいずれかを実行します。
 - アプリケーションとフォームを UnSecured ノードから Secured ノードにドラッグします。
 - [ロー]メニューから[すべてのオブジェクト]を選択し、すべてのアプリケーションを Secured ノードに移動します。
 - [ロー]メニューから[すべてを不許可]を選択し、UnSecured ノードの下にすべてのオブジェクトを Secured ノードに移動します。

たとえば、アプリケーションに削除セキュリティを設定するには、[削除]オプションをクリックします。次に、そのアプリケーションを UnSecured ノードから Secured ノードまでドラッグします。グリッドでは、セキュリティを設定したアプリケーションの削除セキュリティが反映されます。これは、設定対象のユーザーが Secured ノードに配置したアプリケーション上で削除アクションを実行できなくなったことを意味します。

これで、アプリケーションまたはフォームは、適切なアクション・セキュリティと共に Secured ノードの下に表示されます。

タブ・セキュリティの管理

ここでは、フォームのタブのセキュリティを追加、変更、解除する方法について説明します。タブ名の変更と、そのタブを使用して呼び出すフォームの表示にセキュリティを適用できます。

たとえば、変更セキュリティを設定するには、[変更]オプションをクリックします。次に、Unsecured ノードから Secured ノードまでタブを 1 つずつドラッグします。グリッドには、これらのタブに設定した変

更セキュリティが反映されます。このセキュリティは、入力したユーザーは、Secure ノードにドラッグしたタブを変更できないことを意味します。

注:

アプリケーションにセキュリティを適用すると、そのアプリケーションに含まれるフォーム固有のタブにはセキュリティを適用することはできません。この制限により、冗長な「2 重」セキュリティを防ぐことができます。同様に、タブにセキュリティを適用した場合、そのタブをもつアプリケーションにセキュリティを適用することはできません。

▶ アクション・セキュリティを変更するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、オブジェクトを選んで[フォーム]メニューからから[セキュリティの設定] - [実行]を選択します。
2. 〈アクション・セキュリティ〉で、Secured ノードでアプリケーションまたはフォームを選んで次のいずれかのオプションを選択します。
 - 変更
 - 追加
 - 削除
 - OK/選択
 - コピー
 - 最後までスクロール
3. [ロー]メニューから[セキュリティの改訂]を選択します。

それに応じて、グリッド内の[追加]、[変更]、[削除]、[OK/選択]、[コピー]、[最後までスクロール]の各フィールドの値が変更されます。

▶ アクション・セキュリティを解除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、オブジェクトを選んで[フォーム]メニューからから[セキュリティの設定] - [実行]を選択します。
2. 〈アクション・セキュリティ〉で次のうちのいずれかを実行します。
 - Secured ノードの下で、アプリケーションまたはフォームを選択して[削除]をクリックします。
 - Secured ノードの下にあるアプリケーションまたはフォームを、UnSecured ノードヘドラッグします。
 - [ロー]メニューから[すべてを許可]を選択して、すべてのアプリケーションとフォームを Secured ノードから Unsecured ノードに移動します。

▶ ロー・セキュリティを設定するには

〈データ辞書設計〉メニュー(GH591)から〈データ辞書項目の処理〉プログラム(P92001)を選択します。

1. 〈データ項目の処理〉で、[検索]をクリックします。
2. 不許可にするデータ項目を選んで[選択]をクリックします。

注:

[検索記述]フィールドと QBE ローに検索条件を入力して、検索対象を限定できます。

〈データ項目のスペック〉フォームが表示されます。

3. [項目スペック]で、[ロー・セキュリティ]を選択して[OK]をクリックします。
ロー・セキュリティを機能させるには、このオプションをオンにする必要があります。
4. [OK]をクリックします。
5. 〈データ辞書項目の処理〉を終了します。
6. 〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。
〈ユーザー/ロール・リレーションシップ〉フォームが表示されます。
7. [フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [ロー]を選択します。
8. 〈ロー・セキュリティの改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

9. 最初のブランクのグリッド・ロー(セキュリティを追加する場合)、または既存のグリッド・ロー(セキュリティを変更する場合)で、次の各フィールドに情報を入力します。

- テーブル

このフィールドには"*ALL"を入力できます。

- データ項目

このフィールドは必須フィールドです。

- 開始値

このフィールドは必須フィールドです。

- 終了値

- 追加

- 変更

- 削除

- 表示

10. [OK]をクリックしてセキュリティ情報を保存します。

ロー・セキュリティの管理

ここでは、ロー・セキュリティを追加および改訂する方法について説明します。テーブル内の特定の範囲のデータまたはデータ・リストへのユーザー・アクセスにセキュリティを適用できます。ロー・セキュリティはパフォーマンスを低下させることがあるので、控えめに使用してください。ロー・セキュリティを設定した各データ項目に対して、追加の処理が発生します。

ロー・セキュリティは次の 3 つのレベルで設定できます。

- ユーザー
- グループ
- *PUBLIC

ERP 9.0 では、まずユーザー・レベルでのロー・セキュリティが確認され、次にグループ・レベル、最後に*PUBLIC レベルで確認されます。ユーザー・レベルでセキュリティを設定すると、グループ・レベルや*PUBLIC で設定したセキュリティは無視されます。

テーブルの項目に対するロー・セキュリティを設定する前に、まずそのテーブルにその項目が実際にあるかどうかを確認する必要があります。たとえば、住所録マスター(F0101)には、データ項目 AN8 が含まれます。したがって、この項目のロー・セキュリティは設定できます。ただし、このテーブルにデータ項目 PORTNUM は含まれていません。住所録マスター(F0101)について、この項目のロー・セキュリティを設定しても効果はありません。

ロー・セキュリティは、ビジネス・ビューではなくテーブルに対して設定します。セキュリティの適用対象となるオブジェクトで、そのオブジェクトを含むテーブルのビジネス・ビューが使用されることを確認する必要があります。たとえば、〈環境の処理〉アプリケーション(P0094)では、OneWorld 環境詳細テーブル(F00941)についてビジネス・ビューV00941 が使用されます。データ項目 RLS(リリース)は OneWorld 環境詳細テーブル(F00941)に含まれているため、この項目にはセキュリティを適用できます。反対に、ライブラリ・リスト・マスター(F0094)には同じ項目はありません。ライブラリ・リスト・マスター(F0094)のデータ項目 RLS にセキュリティを適用しようとしても、この項目は保護されません。

注:

相互参照テーブル(F980011 と F980021)を作成した後、〈相互参照〉アプリケーション(P980011)を起動すると、データ項目を使用するテーブル、アプリケーション、フォーム、ビジネス・ビューなどを検索できます。

ロー・セキュリティを設定する前に、〈データ辞書の設計〉でロー・セキュリティをオンにしてください。

▶ 〈ロー・セキュリティの改訂〉フォームでロー・セキュリティを解除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、オブジェクトを選んで[フォーム]メニューからから[セキュリティの設定] - [ロー]を選択します。

2. 〈ロー・セキュリティの改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

注:

〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームで、特定のレコードから〈ロー・セキュリティの改訂〉フォームにアクセスした場合は、そのセキュリティ・レコードに関連付けられているユーザーまたはグループが[ユーザー/ロール]フィールドにデフォルトで表示されます。

3. グリッドで1つまたは複数のセキュリティ・レコードを選択し、[削除]をクリックします。
4. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。
5. ロー・セキュリティの解除を完了した後に[OK]をクリックします。

ロー・セキュリティ・レコードを削除した後に[OK]をクリックしなければ、削除結果は保存されません。

カラム・セキュリティの管理

ここでは、カラム・セキュリティを追加および改訂する方法について説明します。ユーザーによる特定フィールドの表示や、その値の変更にセキュリティを適用できます。これは、データベース・フィールドでも、データベースではなくデータ辞書に定義されているフィールドでもかまいません。

注:

相互参照テーブル(F980011とF980021)を作成した後、〈相互参照〉アプリケーション(P980011)を起動すると、データ項目を使用するテーブル、アプリケーション、フォーム、ビジネス・ビューなどを検索できます。

カラム・セキュリティは、テーブル、アプリケーション、またはフォームについて設定できます。

テーブルのカラム・セキュリティの設定

テーブルのカラム・セキュリティを設定する場合は、次の点に注意してください。

- 保護するオブジェクトが実際にテーブルに存在することを確認します。
- 保護するオブジェクトが、そのオブジェクトを含むテーブルのビジネス・ビューを使用するアプリケーションに属していることを確認します。
- 保護するオブジェクトで、そのオブジェクトを含むカラムを持つビジネス・ビューが使用されることを確認します。

たとえば、OneWorld 環境詳細テーブル(F00941)のデータ項目 RLS(リリース番号)にカラム・セキュリティを適用する場合は、そのテーブルに RLS が存在し、さらにそのテーブルのビジネス・ビューを使用するアプリケーションに属している必要があります。また、OneWorld 環境詳細テーブル(F00941)のビジネス・ビューには、データ項目 RLS を含むカラムが存在する必要があります。

これらの条件がすべて満たされていれば、そのデータ項目にカラム・セキュリティを適用できます。OneWorld 環境詳細テーブル(F00941)にカラム・セキュリティを設定すると、このテーブルを使用する他のアプリケーションでもそのデータ項目にセキュリティを設定したことになります。

アプリケーションのカラム・セキュリティの設定

アプリケーションにカラム・セキュリティを設定する場合は、次の点に注意してください。

- セキュリティを設定するオブジェクトが実際にアプリケーションに存在することを確認します。
- さまざまなデータ項目の記述は同一でなくても類似しているため、アプリケーション内の適切なデータ項目にセキュリティを適用することを確認します。

たとえば、〈オブジェクト構成マネージャ〉アプリケーション(P986110)のデータ項目 UGRP(UserGroup)にカラム・セキュリティを適用する場合は、まずその項目がアプリケーションに存在することを確認します。これにより、適切なデータ項目にセキュリティを適用できます。ただし、データ項目 UGRP、MUSE、USER および USR0 には、いずれも同じデータ記述である User ID が含まれていることに注意してください。項目を確認するときには、データ記述ではなくエイリアスを使用します。

アプリケーションにカラム・セキュリティを適用すると、アプリケーションで使用されるビジネス・ビューに適用対象となるデータ項目が含まれていなくても、その項目がアプリケーションのフォームに表示される限り、セキュリティを適用できます。

フォームのカラム・セキュリティの設定

フォームにカラム・セキュリティを設定する場合は、次の点に注意してください。

- フォームを設定するオブジェクトが実際にアプリケーションに存在することを確認します。
- さまざまなデータ項目の記述は類似しているため、フォーム内の適切なデータ項目にセキュリティを適用することを確認します。

フォームにカラム・セキュリティを適用すると、フォームで使用されるビジネス・ビューに適用対象となるデータ項目が含まれていなくても、その項目がフォームに表示される限り、セキュリティを適用できます。

▶ カラム・セキュリティを設定するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/グループ・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定]を選択し、[カラム]を選択します。
2. 〈カラム・セキュリティの改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

3. 新しいセキュリティを追加するには、グリッドの最終ローで、次のフィールドのうち 1 つにのみ情報を入力します。

- テーブル
- アプリケーション
- フォーム名

これらのフィールドには“*ALL”を入力できます。ただし、特定のデータ項目についてテーブル、アプリケーション、またはフォームに“*ALL”を入力した後は、そのデータ項目には“*ALL”を再度入力できません。

4. 次の各フィールドに値を入力します。
 - データ項目
 - 表示
 - 追加
 - 変更
5. セキュリティを変更するには、グリッドでローの値を変更します。
6. [OK]をクリックしてセキュリティ情報を保存します。

▶ **〈カラム・セキュリティの改訂〉フォームでセキュリティを解除するには**

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/グループ・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [カラム]を選択します。
2. 〈カラム・セキュリティの改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
 - ユーザー/ロール

注:

〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームで、特定のレコードから〈カラム・セキュリティの改訂〉フォームにアクセスした場合は、そのセキュリティ・レコードに関連付けられているユーザーまたはグループが[ユーザー/ロール]フィールドにデフォルトで表示されます。

3. グリッドで1つまたは複数のセキュリティ・レコードをハイライトし、[削除]をクリックします。
4. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。
5. カラム・セキュリティの解除を完了した後に[OK]をクリックします。
セキュリティ・レコードを削除した後に[OK]をクリックしなければ、削除結果は保存されません。

処理オプション・セキュリティの管理

ここでは、処理オプション・セキュリティを追加、改訂、解除する方法について説明します。特定の処理オプションの変更、表示、またはバージョン表示にセキュリティを適用できます。バージョン・プロンプトに対するユーザー応答を禁止するセキュリティを設定しただけでは、処理オプション値の変更は禁止されません。ユーザーに処理オプション値を変更させたくない場合は、表示とバージョン表示に対する応答が禁止されるようにセキュリティを設定します。

たとえば、処理オプション・セキュリティを設定するには[処理オプションの表示]をクリックします。これにより、変更セキュリティも自動的に設定されます。次に、UnSecured ノードから Secured ノードまでアプリケーションを 1 つずつドラッグします。グリッドには、これらのアプリケーションに設定した値プロンプト・セキュリティと変更セキュリティが反映されます。これは、入力したユーザーが、Secured ノードにドラッグしたアプリケーション上では、処理オプションを表示したり変更できなくなることを意味します。

ここでは、*ALL オブジェクトを追加する方法と、特定のユーザーまたはロール用のすべてのアプリケーションを、セキュリティ対象外から対象に移動する方法についても説明します。

▶ 処理オプションにセキュリティを追加するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[処理オプション]を選択します。
2. 〈処理オプション・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

P0101 などのアプリケーション名を入力します。"*ALL"と入力して、すべてのアプリケーションを表示することもできます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているアプリケーションもグリッドに表示されます。

3. [許可項目を表示]に表示される次のフィールドのうち 1 つに値を入力し、[検索]をクリックします。

- アプリケーション

- システム・コード

このステップは、新しいセキュリティを追加する前に実行する必要があります。このステップを実行すると、選択できるアプリケーションのリストが表示されます。

検索結果(アプリケーション、システム・コード、またはメニュー)は、UnSecured ノードの下に表示されます。アプリケーション(対話型およびバッチ)や、メニューと対話型アプリケーションまたはバッチ・アプリケーションを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、アプリケーションもグリッドに表示されます。

たとえば、システム・コード 00 内のアプリケーションにセキュリティを設定するには、[システム・コード]フィールドに“00”と入力して[検索]をクリックします。UnSecured ノードを展開すると、システム・コード 00 に属するすべてのアプリケーション(対話型およびバッチ)が表示されます。

4. [作成対象]で次の 1 つまたは複数のオプションをクリックし、アプリケーションを UnSecured ノードから Secured ノードまでドラッグします。

- 変更
- 処理オプションの表示
このオプションをクリックすると、[変更]オプションが自動的にアクティブになります。

- バージョンリストの表示
- OK/選択

5. 次のいずれかを実行します。

- アプリケーションを UnSecured ノードから Secured ノードにドラッグします。
- [ロー]メニューから[すべてのオブジェクト]を選択し、すべてのアプリケーションを Secured ノードに移動します。
- [ロー]メニューから[すべてを不許可]を選択し、UnSecured ノードの下のすべてにあるオブジェクトを Secured ノードに移動します。

これで、アプリケーションは、適切なセキュリティと共に Secured ノードの下に表示されます。

► 処理オプションのセキュリティを変更するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[処理オプション]を選択します。
2. 〈処理オプション・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール
*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。
- アプリケーション
P0101 などのアプリケーション名を入力します。“*ALL”と入力して、すべてのアプリケーションを表示することもできます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているアプリケーションもグリッドに表示されます。

3. Secured ノードで、アプリケーションを選択して次のオプションのいずれかをクリックします。

- 変更
- 処理オプションの表示

このオプションをクリックすると、[変更]オプションが自動的にアクティブになります。

- バージョンリストの表示
- OK/選択

それに応じて、グリッドの[変更]、[処理オプションの表示]、および[バージョン・リストの表示]フィールドの下値が変更されます。

4. [ロー]メニューから[セキュリティの改訂]を選択します。

▶ 処理オプションのセキュリティを解除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[処理オプション]を選択します。
2. 〈処理オプション・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

P0101 などのアプリケーション名を入力します。"*ALL"と入力して、すべてのアプリケーションを表示することもできます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているアプリケーションもグリッドに表示されます。

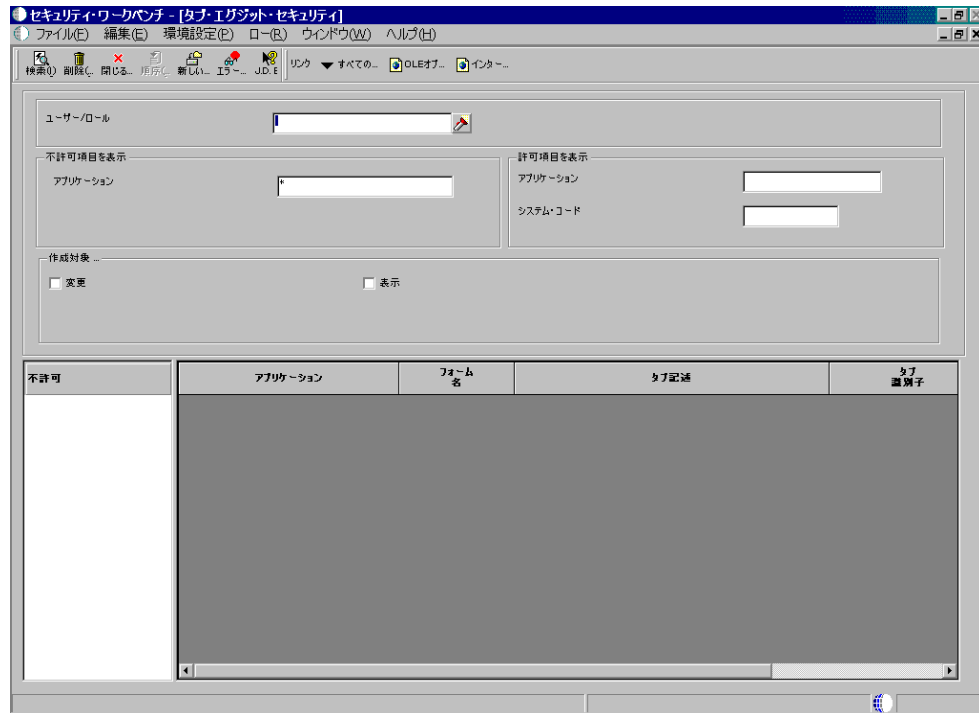
3. 次のいずれかを実行します。

- Secured ノードの下で、アプリケーションを選択して[削除]をクリックします。
- Secured ノードの下にあるアプリケーションを、UnSecured ノードへドラッグします。
- [ロー]メニューから[すべてを許可]を選択して、すべてのアプリケーションを Secured ノードから Unsecured ノードに移動します。

▶ タブにセキュリティを追加するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [タブ・セキュリティ]を選択します。



2. 〈タブ・エグジット・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

特定のアプリケーションのセキュリティを表示するか、“*ALL”と入力してすべてのアプリケーションを表示できます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。セキュリティが適用されているタブを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているタブもグリッドに表示されます。

3. [許可項目を表示]の次のフィールドのうち 1 つに値を入力し、[検索]をクリックします。

- アプリケーション

このフィールドに“*ALL”と入力すると、すべての ERP 9.0 オブジェクトを選択できます。

グリッドには、この特殊オブジェクトは*ALL として表示され、[セキュリティの実行]や[セキュリティのインストール]など、オブジェクトに対して定義されているセキュリティが表示されます。*ALL オブジェクトは他の任意のオブジェクトと同様に機能し、[ロー]メニューから[セキュリティの改訂]および[すべてのオブジェクト]オプションを使用できます。

- システム・コード

このステップは、新しいセキュリティを追加する前に実行する必要があります。このステップを実行すると、選択できるアプリケーションのリストが表示されます。

検索結果(アプリケーションやシステム・コード)は、UnSecured ノードの下に表示されます。アプリケーション(対話型およびバッチ)とその関連タブを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、アプリケーションまたはタブもグリッドに表示されます。

たとえば、システム・コード 00 内のアプリケーションのタブにセキュリティを設定するには、[システム・コード]フィールドに“00”と入力して[検索]をクリックします。UnSecured ノードを展開すると、システム・コード 00 に属するすべてのアプリケーション(対話型およびバッチ)が表示されます。

4. [作成対象]の下で、次のオプションの一方または両方をクリックします。

- 変更

タブ・ページ上の情報について、ユーザーまたはロールによる変更を禁止するには、このオプションをクリックします。

- 表示

ユーザーまたはロールに対してタブを非表示にするには、このオプションをクリックします。

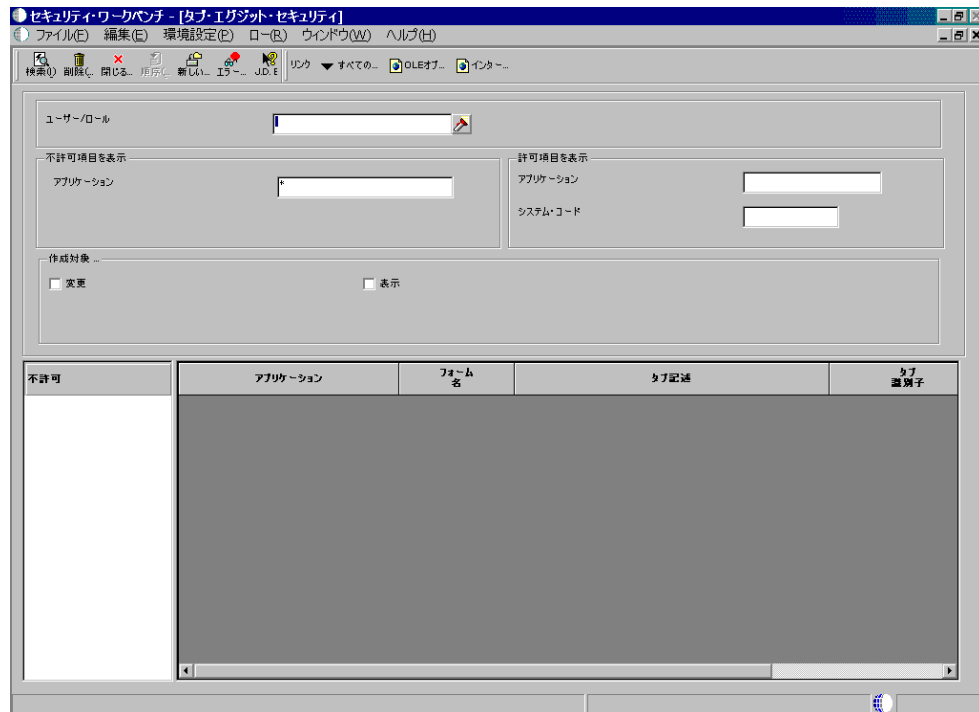
5. タブを UnSecured ノードから Secured ノードにドラッグします。

ドラッグしたタブが、Secured ノードの下に表示されます。

▶ タブのセキュリティを変更するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [タブ・セキュリティ]を選択します。



2. <タブ・エグジット・セキュリティ>フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

特定のアプリケーションのセキュリティを表示するか、“*ALL”と入力してすべてのアプリケーションを表示できます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。セキュリティが適用されているタブを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているタブもグリッドに表示されます。

3. Secured ノードで、アプリケーションを選択して必要な次のオプションをクリックします。

- 変更

タブ・ページ上の情報について、ユーザーまたはロールによる変更を禁止するには、このオプションをクリックします。

- 表示

ユーザーまたはロールに対してタブを非表示にするには、このオプションをクリックします。

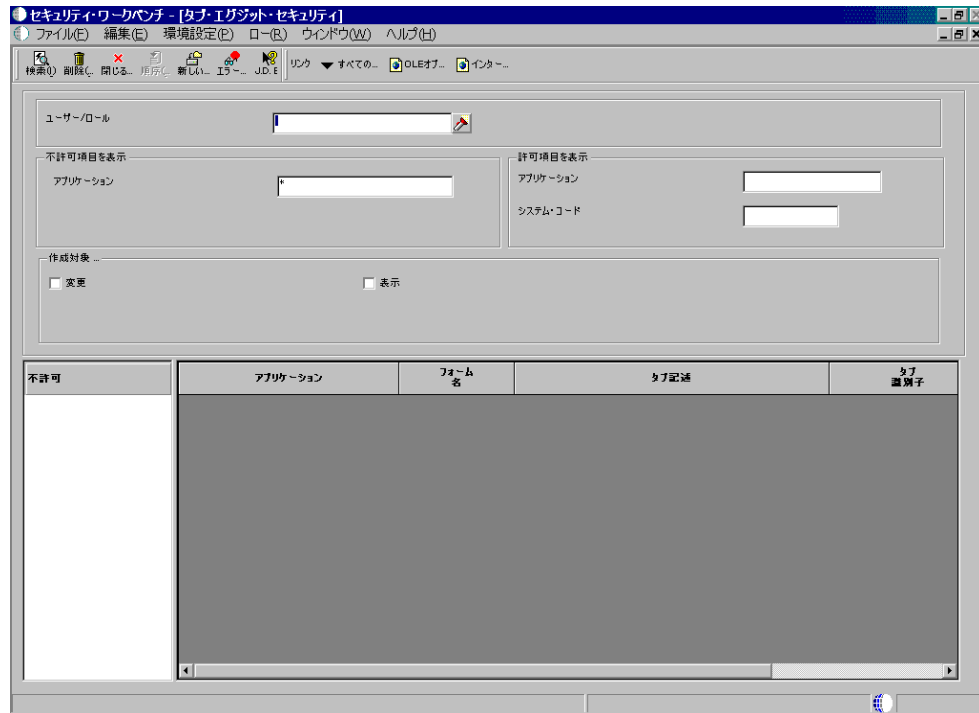
4. [ロー]メニューから[セキュリティの改訂]を選択します。

それに応じて、グリッドで[変更]および[表示]フィールドの下の値が変更されます。

▶ タブのセキュリティを解除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [タブ・セキュリティ]を選択します。



2. 〈タブ・エグジツト・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

特定のアプリケーションのセキュリティを表示するか、“*ALL”と入力してすべてのアプリケーションを表示できます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。セキュリティが適用されているタブを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているタブもグリッドに表示されます。

3. 次のいずれかを実行します。

- Secured ノードの下で、アプリケーションを選択して[削除]をクリックします。
- Secured ノードの下にあるタブを、UnSecured ノードヘドラッグします。
- [ロー]メニューから[すべてを許可]を選択して、すべてのタブを Secured ノードから Unsecured ノードに移動します。

エグジット・セキュリティの管理

ここでは、ERP 9.0 フォームのメニュー・バー・エグジットのセキュリティを追加、変更、削除する方法について説明します。これらのエグジットによってアプリケーションが呼び出され、ユーザーがデータを操作できます。エグジット・セキュリティを適用すると、メニュー・オプションにも制限が適用されます。

▶ エグジット・セキュリティを設定するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [エグジット・セキュリティ]を選択します。
2. 次の各フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

特定のアプリケーションのセキュリティが表示されます。*ALL を使用すると、すべてのアプリケーションを表示できます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。対話型やバッチなど、セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているハイパー・ボタン・エグジットもグリッドに表示されます。

3. [許可項目を表示]にある次のフィールドのうち 1 つに値を入力し、[検索]をクリックします。

- アプリケーション

このフィールドには“*ALL”を入力できます。

- システム・コード

このステップは、新しいセキュリティを追加する前に実行する必要があります。このステップを実行すると、選択できるアプリケーションのリストが表示されます。

検索結果(アプリケーション、システム・コード、またはメニュー)は、UnSecured ノードの下に表示されます。アプリケーション(対話型およびバッチ)とハイパー・ボタン・エグジットを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、ハイパー・ボタン・エグジットもグリッドに表示されます。

たとえば、システム・コード 00 内のアプリケーションのハイパー・ボタンにセキュリティを設定するには、[システム・コード]フィールドに“00”と入力して[検索]をクリックします。UnSecured ノードを展開すると、システム・コード 00 に属するすべてのアプリケーション(対話型およびバッチ)が表示されます。

4. 必要に応じてエグジット・セキュリティを追加、変更、または解除します。

▶ エグジットにセキュリティを追加するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[エグジット・セキュリティ]を選択します。
2. 次の各フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

特定のアプリケーションのセキュリティが表示されます。*ALL を使用すると、すべてのアプリケーションを表示できます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。対話型やバッチなど、セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているハイパー・ボタン・エグジットもグリッドに表示されます。

3. [許可項目を表示]にある次のフィールドのうち 1 つに値を入力し、[検索]をクリックします。

- アプリケーション

このフィールドには“*ALL”を入力できます。

- システム・コード

このステップは、新しいセキュリティを追加する前に実行する必要があります。このステップを実行すると、選択できるアプリケーションのリストが表示されます。

検索結果(アプリケーション、システム・コード、またはメニュー)は、UnSecured ノードの下に表示されます。アプリケーション(対話型およびバッチ)とハイパー・ボタン・エグジットを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、ハイパー・ボタン・エグジットもグリッドに表示されます。

たとえば、システム・コード 00 内のアプリケーションのハイパー・ボタンにセキュリティを設定するには、[システム・コード]フィールドに“00”と入力して[検索]をクリックします。UnSecured ノードを展開すると、システム・コード 00 に属するすべてのアプリケーション(対話型およびバッチ)が表示されます。

4. [作成対象]にある次のオプションをクリックします。

- セキュリティの実行

ドラッグしたエグジットが、Secured ノードの下に表示されます。

5. 次に、UnSecured ノードから Secured ノードまでエグジットを 1 つずつドラッグします。

グリッドには、これらのエグジットに設定したセキュリティが反映されます。このセキュリティは、入力したユーザーがエグジットを使用できないことを意味します。

▶ エグジットのセキュリティを変更するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[エグジット・セキュリティ]を選択します。
2. 次の各フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

特定のアプリケーションのセキュリティが表示されます。*ALL を使用すると、すべてのアプリケーションを表示できます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。対話型やバッチなど、セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているハイパー・ボタン・エグジットもグリッドに表示されます。

3. Secured ノードの下で、エグジットを選択して次のオプションをクリックします。

- セキュリティの実行

4. [ロー]メニューから[改訂]を選択します。

それに応じて、グリッドで[実行]フィールドの下の値が変更されます。

▶ エグジットのセキュリティを解除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[エグジット・セキュリティ]を選択します。
2. 次の各フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- アプリケーション

特定のアプリケーションのセキュリティが表示されます。*ALL を使用すると、すべてのアプリケーションを表示できます。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。対話型やバッチなど、セキュリティが適用されている個々のアプリケーション

を表示するには、このノードを展開します。ノードを展開すると、セキュリティが適用されているハイパー・ボタン・エグジットもグリッドに表示されます。

3. 次のいずれかを実行します。
 - Secured ノードの下で、エグジットを選択して[削除]をクリックします。
 - Secured ノードの下にあるエグジットを、UnSecured ノードヘドラッグします。
 - [ロー]メニューから[すべてを許可]を選択して、すべてのエグジットを Secured ノードから Unsecured ノードに移動します。

排他的アプリケーション・セキュリティの管理

ここでは、他の場合にはセキュリティが適用されている情報へ、1 つの排他的アプリケーションを通じてアクセス権限を与える方法について説明します。たとえば、ロー・セキュリティを使用して、特定のユーザーに対する給与情報の表示を禁止するが、そのユーザーは給与情報を含む給与計算レポートを実行する必要があるものと仮定します。排他的アプリケーション・セキュリティを使用すると、給与情報を含むレポートへのアクセス権限を与えることができます。ERP 9.0 では、このユーザーに対し、給与情報が表示される以外のすべてのアプリケーションには引き続きセキュリティを適用します。

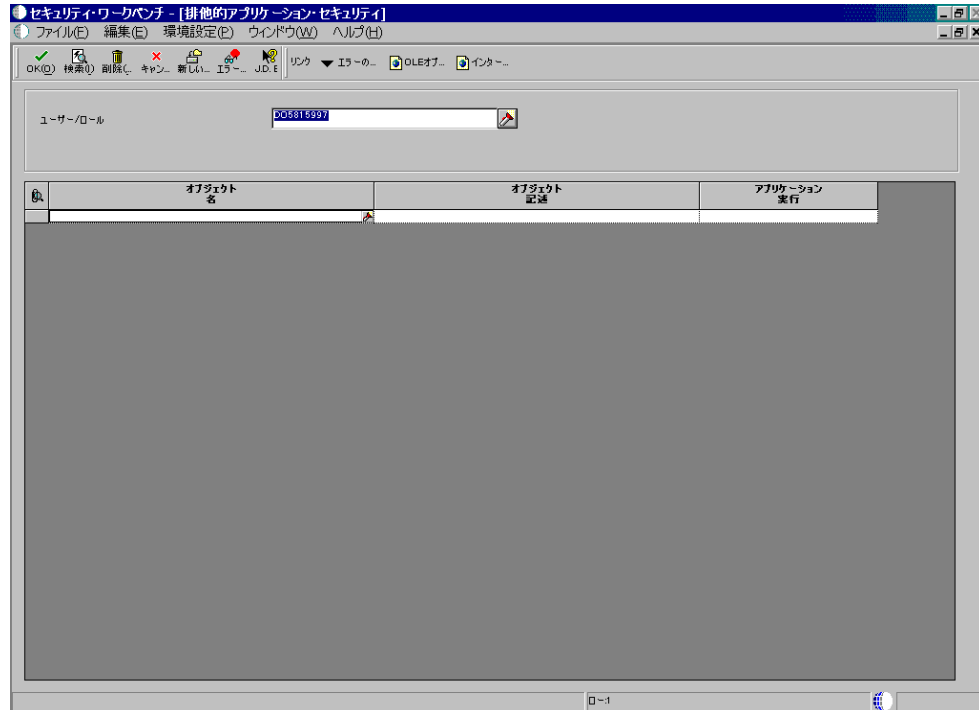
▶ 排他的アプリケーション・セキュリティでアクセスを追加するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [排他的アプリケーション]を選択します。
2. 次のフィールドに値を入力します。
 - ユーザー/ロール
*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。
3. グリッドの次の各フィールドに値を入力します。
 - オブジェクト名
アクセス(セキュリティ)を許可する排他的アプリケーションの名称を入力します。たとえば、〈用語一時変更〉アプリケーションのユーザーに対するセキュリティを変更するには、このフィールドに“P9220”と入力します。
 - アプリケーション実行
4. [OK]をクリックして情報を保存します。

▶ 〈排他的アプリケーション〉フォームでアクセスを解除するには

1. 〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。



2. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[排他的アプリケーション]を選択します。
3. 〈排他的アプリケーション・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

注:

〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームで、特定のレコードから〈排他的アプリケーション・セキュリティの改訂〉フォームにアクセスした場合は、そのセキュリティ・レコードに関連付けられているユーザーまたはグループが[ユーザー/ロール]フィールドにデフォルトで表示されます。

4. グリッドのセキュリティ・レコードをハイライトし、[削除]をクリックします。
5. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。
6. 排他的アプリケーション・セキュリティの解除を完了した後に[OK]をクリックします。

セキュリティ・レコードを削除した後に[OK]をクリックしなければ、削除結果は保存されません。

外部コール・セキュリティの管理

ここでは、ユーザーまたはロールによる外部コール・アプリケーションへのアクセスに対して、セキュリティを適用する方法について説明します。ERP 9.0 では、一部のアプリケーションは ERP 9.0 外部のスタンドアロン・プログラムとして存在しています。たとえば、〈レポート設計ツール〉は〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)にあるスタンドアロン・アプリケーションです。このアプリケーションは、RDA.exe を使用して外部から呼び出すこともできます。デフォルトでは、このファイルは %B9%SYSTEM%Bin32 ディレクトリにあります。

▶ 外部コールに対するセキュリティを設定するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [外部コール]を選択します。
2. 次の各フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはロール ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- 実行可能ファイル

debugger.exe など、許可されていない実行アプリケーション名を入力します。このフィールドに情報を入力すると、指定したアプリケーションのみが検索されます。

- 実行可能ファイル

許可された実行ファイル名を入力します。

そのユーザーまたはロールの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。debugger.exe など、セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。

3. 外部コール・セキュリティを追加、変更、削除します。

注:

セキュリティの追加については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「セキュリティにアプリケーションを追加するには」を参照してください。

セキュリティの変更については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「アプリケーションのセキュリティを変更するには」を参照してください。

セキュリティの削除については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「アプリケーションからセキュリティを削除するには」を参照してください。

▶ アプリケーションにセキュリティを追加するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. [フォーム]メニューから[外部コール]をクリックします。
2. 次の各フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
 - ユーザー/ロール
*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはグループ ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。
 - 実行可能ファイル
debugger.exe など、外部アプリケーション名を入力します。このフィールドに情報を入力すると、指定したアプリケーションのみが検索されます。

そのユーザーまたはグループの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。debugger.exe など、セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。

3. [作成対象]見出しの下で、次のオプションをクリックします。
 - セキュリティの実行
4. 次のいずれかを実行します。
 - アプリケーションを UnSecured ノードから Secured ノードにドラッグします。
 - すべてのアプリケーションを Secured ノードに移動するには、[ロー]メニューから[全オブジェクト]を選択します。

これで、外部コール・アプリケーションは、適切なセキュリティと共に Secured ノードの下に表示されます。

たとえば、〈ビジネス関数の設計〉アプリケーションに対して実行セキュリティを設定するには、[セキュリティの実行]オプションをオンにして、Business Function Design ノードを UnSecured ノードから Secured ノードにドラッグします。グリッドには、アプリケーションに設定した実行セキュリティが反映され、入力したユーザーが〈ビジネス関数設計〉アプリケーションを実行できないことを表しています。

▶ アプリケーションのセキュリティを変更するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [外部コール]を選択します。
2. 次の各フィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
 - ユーザー/ロール

*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはグループ ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- 実行可能ファイル

debugger.exe など、外部アプリケーション名を入力します。このフィールドに情報を入力すると、指定したアプリケーションのみが検索されます。

そのユーザーまたはグループの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。debugger.exe など、セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。

3. Secured ノードの下で、アプリケーションを選択して次のオプションをクリックします。

- セキュリティの実行

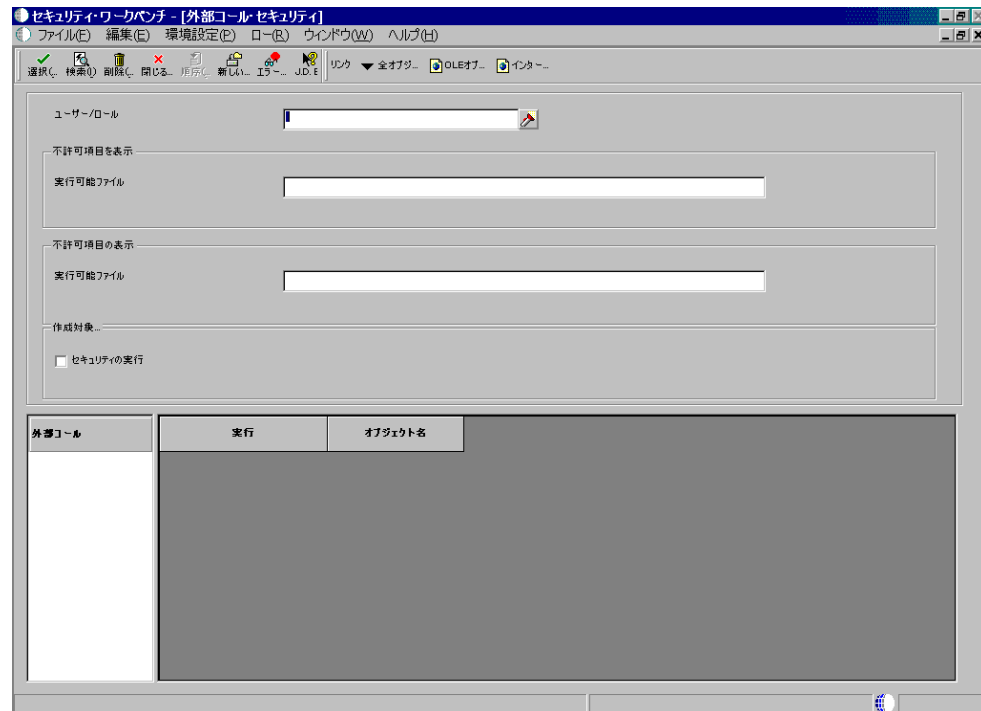
4. [ロー]メニューから[セキュリティの改訂]を選択します。

グリッドで[実行]フィールドの下値が変更されます。

▶ アプリケーションのセキュリティを解除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [外部コール]を選択します。



2. 〈外部コール・セキュリティ〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- ユーザー/ロール
*PUBLIC も含め、完全なユーザーまたはグループ ID を入力します。ワイルドカードは使用しないでください。

- 実行可能ファイル
debugger.exe など、外部アプリケーション名を入力します。このフィールドに情報を入力すると、指定したアプリケーションのみが検索されます。

そのユーザーまたはグループの現在のセキュリティ設定が、ツリーの Secured ノードの下に表示されます。debugger.exe など、セキュリティが適用されている個々のアプリケーションを表示するには、このノードを展開します。

3. 次のいずれかを実行します。
 - Secured ノードの下で、アプリケーションを選択して[削除]をクリックします。
 - Secured ノードの下にあるアプリケーションを、UnSecured ノードへドラッグします。
 - [ロー]メニューから[すべてを許可]を選択して、すべてのアプリケーションを Secured ノードから Unsecured ノードに移動します。

▶ ユーザーまたはロールの全セキュリティ・レコードをコピーするには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティ〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティのコピー]を選択します。
2. 次のオプションのいずれかを選択します。

- コピー/追加
セキュリティ設定をコピーして追加すると、ユーザーまたはロールの既存のセキュリティは上書きされません。

- コピー/置換
セキュリティ設定をコピーして置換すると、コピー先ユーザーまたはロールのセキュリティ情報が削除され、選択したユーザーまたはロールからの新しいセキュリティ情報がコピーされます。

3. 次のフィールドに値を入力して、[OK]を選択します。

- コピー元ユーザー/ロール
- コピー先ユーザー/

セキュリティ情報が保存され、〈ユーザー/グループ・セキュリティの処理〉フォームに戻ります。

ユーザー/グループのセキュリティのコピー

あるユーザーまたはロールのセキュリティ情報をコピーして、他のユーザーやロールに使用できます。セキュリティをコピーすると、コピー先ユーザーまたはロール現在のセキュリティを上書きしたり、既存のセキュリティ情報に新しいセキュリティ情報を追加できます。単一のユーザーまたはロールに関するセキュリティ・レコードをすべてコピーする方法と、一度に1つずつコピーする方法があります。

▶ ユーザー/グループの単一のセキュリティ・レコードをコピーするには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を選択します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、セキュリティ・レコードを検索します。
2. コピーするセキュリティ・レコードのローをハイライトし、ツールバーの[コピー]をクリックします。
3. 次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- コピー先ユーザー/ロール

セキュリティ情報が保存され、〈ユーザー/グループ・セキュリティの処理〉フォームに戻ります。

〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームでのセキュリティの解除

アプリケーション、ロー、外部コールなど、セキュリティ・タイプに特有のフォーム上でセキュリティ・レコードを削除するだけでなく、〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォーム上でもセキュリティ・レコードを削除できます。

▶ ユーザー・セキュリティを削除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム(P98OWSEC)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、ユーザーまたはロールを検索し、ツリー構造から該当するレコードを選択して[削除]をクリックします。

注:

グリッドからレコードを選択して[削除]をクリックすると、ユーザー・セキュリティではなく、そのユーザーのデータ・ソースが削除されます。

2. [OK]をクリックし、そのユーザーまたはロールのすべてのユーザー・セキュリティ・レコードを削除します。

▶ 〈ユーザー/グループ・セキュリティの処理〉フォームでセキュリティを削除するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム(P98OWSEC)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、[検索]をクリックしてグリッドのレコードを選択し、[削除]をクリックします。

注:

QBE ローに検索条件を入力すると、検索対象を限定できます。

2. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。

〈セキュリティ・ワークベンチ〉でセキュリティ・レコードが削除され、グリッドがリフレッシュされます。

サインオン・セキュリティの理解

ERP 9.0 のセキュリティは、ロジック・サーバー上の専用内部プロセスで実行されます。セキュリティ・テーブルはデータ・サーバー上に作成し、次のような情報を格納できます。

値	説明
ERP 9.0 ユーザー	ERP 9.0 へのサインオンに使用するユーザーID
ERP 9.0 パスワード	サインオン時に ERP 9.0 によって検証されるユーザーのパスワード
システム・ユーザーとシステム・パスワード	システム・ユーザーおよびパスワードは、すべてのデータベース管理システム(DBMS)への接続に使用される実際のユーザーとパスワードです。ERP 9.0 環境に複数の DBMS が含まれている場合は、データ・ソースごとに異なるシステム・ユーザーおよびパスワードを作成できます。
変更間隔	ERP 9.0 で要求されるパスワード変更間隔
前回変更	ERP 9.0 パスワードが前回変更された日付です

各 ERP 9.0 のセキュリティ・レコードを、グループ別またはユーザー別に定義する必要があります。複数の ERP 9.0 ユーザーを同じシステム・ユーザーにマップすることをお勧めします。たとえば、各ユーザーは、ERP 9.0 データベース管理システムへの接続に、ERP 9.0 で使用されるのと同じシステム・ユーザーを使用できます。この方法でセキュリティを設定すると、ユーザーとパスワードのデータベース管理作業を簡素化できます。

また、ERP 9.0 で汎用ログオンを設定して、サインオン・セキュリティを簡素化することもできます。ERP 9.0 用の汎用ログオンを設定すると、ERP 9.0 では Windows NT の認証を使用して ERP 9.0 セキュリティが検証されます。この検証により、ERP 9.0 サインオン・セキュリティでは、ユーザーが Windows へのサインオン時に入力するネットワーク・サインオン情報を使用できるようになり、ERP 9.0 へのサインオン時には他のユーザーID やパスワードの入力が不要になります。

セキュリティ・テーブルへのアクセス

システム・ユーザーとパスワードに常にセキュリティを適用している場合、ERP OneWorld9.0 セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)には誰も直接アクセスすることができません。ただし、セキュリティ情報を保守管理する ERP 9.0 システム管理者は例外です。ERP 9.0 セキュリティ・サーバーは、JDENet を介して ERP 9.0 OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)にアクセスしています。

ERP 9.0 パスワードのすべての検証と変更は、セキュリティ・テーブルを持つエンタープライズ・サーバーに対して JDENet メッセージ経由で実行する必要があります。ERP 9.0 パスワードの検証時には、入力したシステム・ユーザーとパスワードが JDENet メッセージによって戻されます。これらのメ

ッセージは、ネットワーク上で暗号化されます。内部的には、データベースへのすべての接続が、このシステム・パスワードを使用して実行されます。

ERP 9.0 OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)には、データベース管理システムを使用してデータベース・セキュリティを設定する必要があります。また、ユーザーがユーザー・パスワードの改訂テーブル(W98OWSEC)以外のオブジェクトにアクセスできないように、P98OWSEC に ERP 9.0 オブジェクト・セキュリティを割り当てる必要があります。

参照

- ユーザー・セキュリティの設定については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ユーザー・セキュリティの処理」

パスワード暗号化

ユーザーごとに、初期の ERP 9.0 サインオン・パスワードをさまざまな方法で入力できます。

- 手作業での入力
- サインオン・セキュリティの処理オプションを通じて設定したデフォルト・パスワードを使用
- ユーザー用のセキュリティ・レコードが既に作成されているので、ERP 9.0 で自動的に入力

パスワードを手作業で入力するか処理オプションのデフォルト・パスワードを使用すると、新規ユーザーのパスワードは確認できません。ただし、このレコードを後で改訂するときには、パスワードは暗号化されているので、その文字はすべてアスタリスク(*****)として表示されます。アスタリスクの数がパスワードの文字数を表すわけではありません。ユーザー・セキュリティ・アプリケーションでは、そのパスワードは認識されません。このアプリケーションには、パスワードが入力されたことを示すフラグが設定されます。実際のパスワードは、セキュリティ・サーバー上でバイナリ・オブジェクト内の ERP 9.0 OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)に格納されます。ユーザー・セキュリティ・アプリケーションから変更または照会が要求されると、ERP 9.0 はバイナリ・オブジェクトにアクセスします。

セキュリティの設定

ここでは、セキュリティの設定に必要なステップの概要を表すチェックリストを示します。

- 1 OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)がエンタープライズ・サーバー上のシステム・データ・ソースに保管されており、そのテーブルがオブジェクト構成マネージャを通じて正しいデータ・ソースにマップされているかどうかを確認します。

システム・データ・ソースがエンタープライズ・サーバーに常駐している場合は、セキュリティ・テーブルをシステム・データ・ソースに常駐させる必要があります。ただし、システム・データ・ソースがデプロイメント・サーバー(または他のサーバー)上にある場合は、セキュリティ・テーブルをエンタープライズ・サーバーのサーバー・マップ・データ・ソースに移動してください。

複数のロジック・サーバーが存在する場合は、そのうちの 1 つだけをセキュリティ・サーバーとして使用することをお勧めします。

- 2 DBMS 内で、ユーザーが〈ユーザー・パスワードの改訂〉を通じてパスワードを入力する以外は、このオブジェクトにアクセスできないように、このテーブルにデータベース・セキュリティを設定します。

- 3 ロジック・サーバーの jde.ini ファイルにセキュリティを設定します。この操作が必要なのは、ERP 9.0 サインオン・セキュリティ・テーブルへの DBMS ユーザーID とパスワードが、このファイルに保管されるためです。
- 4 個々のユーザーのセキュリティ・レコードを作成します。このステップの内容は、次のとおりです。
 - データ・ソース
 - システム・ユーザー
 - システム・パスワード
 - ERP 9.0 パスワード
 - ユーザー状況
 - 無効なサインオン試行の許容回数(任意)
 - 変更頻度(任意)

注:

汎用ログオンを使用する場合は、ERP 9.0 セキュリティ・データベース内の各ユーザーに固有のユーザーID が必要になります。

- 5 プラットフォーム環境の ERP 9.0 ロジック・サーバー上で、jde.ini ファイルを検証して修正します。

汎用ログオンを使用する場合は、通常の ERP 9.0 [SECURITY]の設定だけでなく、[SECURITY]セクション内でも、その設定を変更する必要があります。

- 6 汎用ログオンを ERP 9.0 のセキュリティと併用する場合は、各サーバー上で ERP 9.0 のインスタンスごとに汎用ログオン・サーバーをセットアップします。たとえば、NT サーバーに ERP 9.0 の複数リリースがインストールされている場合は、そのサーバー上のリリースごとに汎用ログオン・サーバーが必要になります。

汎用ログオン・サーバーでは、ERP 9.0 の各インスタンスがそのポート番号に基づいて区別されます。たとえば、ERP 9.0 のポート番号が 6104 であれば、それに関連する汎用ログオン・サーバーのポート番号も 6104 となります。他のインスタンスと汎用ログオン・サーバーには、異なるポート番号が使用されます。

- 7 サーバーのワークステーションに配布される jde.ini ファイルを検証して修正します。
- 8 すべてのマシンにサインオン・セキュリティが必要です。

ERP 9.0 サインオン・セキュリティのプロセス・フロー

ERP 9.0 では、ERP 9.0 および論理的に接続されるデータベース管理システムに対するユーザー・セキュリティを提供するように設計されたアーキテクチャによって、サインオン・セキュリティを提供しています。このセキュリティ・アーキテクチャによって、ERP 9.0 アプリケーションでデータの表示と変更についてデータベースまたはシステム・パスワード表示をバイパスさせることができます。

ここでは、標準的なサインオン・セキュリティのプロセス・フローについて説明します。

- 1 ERP 9.0 ワークステーションから、ERP 9.0 のユーザーID とパスワードを使用して ERP 9.0 にサインオンします。これらのワークステーションは、ネットワーク内のワークステーションでも、スタンドアロン・ワークステーションでも、ラップトップ・コンピュータでも、他の ERP 9.0 ホストでもかまいません。

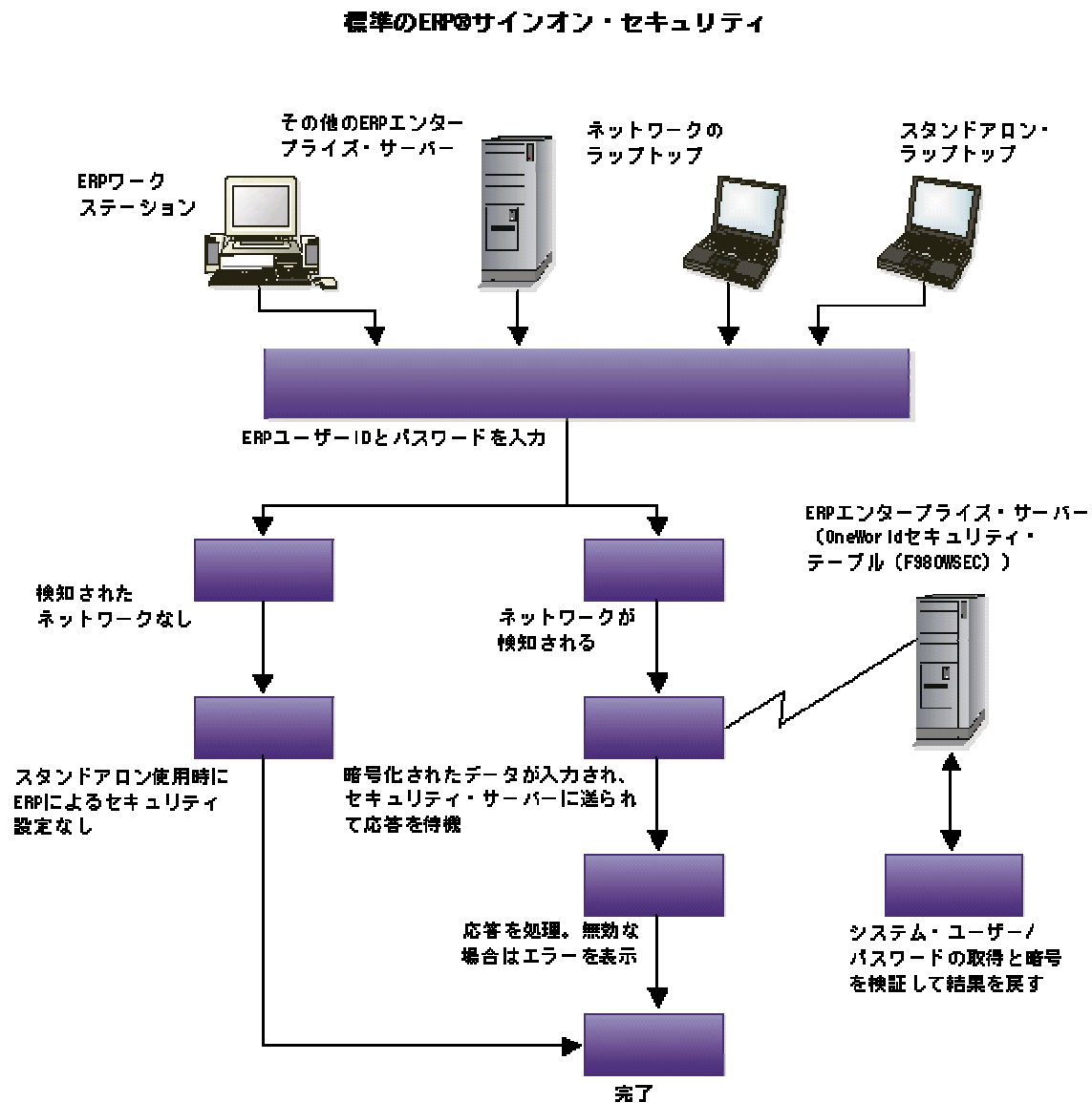
ユーザーID とパスワードを入力すると、ローカルの ERP 9.0 インストール内容に対して有効であれば、起動プロセスが進行します。

- 2 ERP 9.0 の起動時には、稼働中のネットワーク環境の検出が試行されます。

ネットワークが検出されなければ、オフライン・モードによるローカル操作が許可されます。ワークステーションやラップトップ・コンピュータはネットワークにも ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーにも接続されていないので、セキュリティ・テーブルとの比較検証は実行できません。したがって、セキュリティはローカル・ワークステーションやラップトップ・コンピュータから提供されるものに限られます。

ネットワークが検出されると、ERP 9.0 によってパスワード情報が暗号化され、ネットワーク経由で ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーに送信されます。エンタープライズ・サーバーでは、受信した検証要求が有効なユーザーとパスワードのテーブルと比較検証されます。ユーザーID およびパスワード情報が有効であれば、サインオン値が受け入れられ、接続されたデータベース・サーバーにシステム ID とパスワードが戻されます。また、この情報は、ネットワーク上で通信される前にエンタープライズ・サーバー上で暗号化されます。

次の図は、ERP 9.0 サインオン・セキュリティのプロセス・フロー・モデルを示しています。



ここでは、汎用ログオンによるサインオン・セキュリティのプロセス・フローについて説明します。

- 3 ユーザーがワークステーション上で ERP 9.0 を起動します。
- 4 ERP 9.0 によって汎用ログオンがアクティブかどうかを検証され、ドメイン・ユーザーID に基づいて汎用ログオン・サーバーに認証要求が送信されます。

注:

汎用ログオン・サーバーは実際のサーバーではなく、サインオン・セキュリティを Windows NT によって保守されるドメイン・サインオン・セキュリティと比較検証するデバイスです。

jdesnet の初期化中に、jdesnet によって汎用ログオン・サーバーのスレッドがアクティブ化されます。この汎用ログオン・サーバーは、jdesnet の終了時に自動的に終了します。

- 5 汎用ログオン・サーバーによって、ユーザー・リスト内でドメイン・ユーザーID と一致する項目が検索されます。一致する項目が見つかったら、このサーバーから ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーに検証要求が送信されます。
- 6 ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーによって、汎用ログオン・サーバーからの応答が OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)内のセキュリティ情報と一致しているかどうかを検証されます。
- 7 汎用ログオン・サーバー上のユーザー・リストからのセキュリティ情報が、エンタープライズ・サーバー上の F98OWSEC 内のセキュリティ情報と一致していれば、起動プロセスが進行します。
- 8 ユーザーが汎用ログオンを使用して ERP 9.0 に初めてサインオンするときには、〈環境の選択〉が表示されます。[環境]フィールドに環境を入力する必要があります。その環境をデフォルトとして設定し、後続のサインオン試行時には〈環境の選択〉フォームが表示されないように、オプションをクリックしてください。

注:

jde.ini ファイルの[SECURITY]セクション内で ShowUnifiedLogon 設定を使用すると、サインオン時に〈環境の選択〉フォームを表示するかどうかを再設定することができます。この機能により、ユーザーは後から環境を変更できます。次の例は、jde.ini ファイルの設定を示しています。

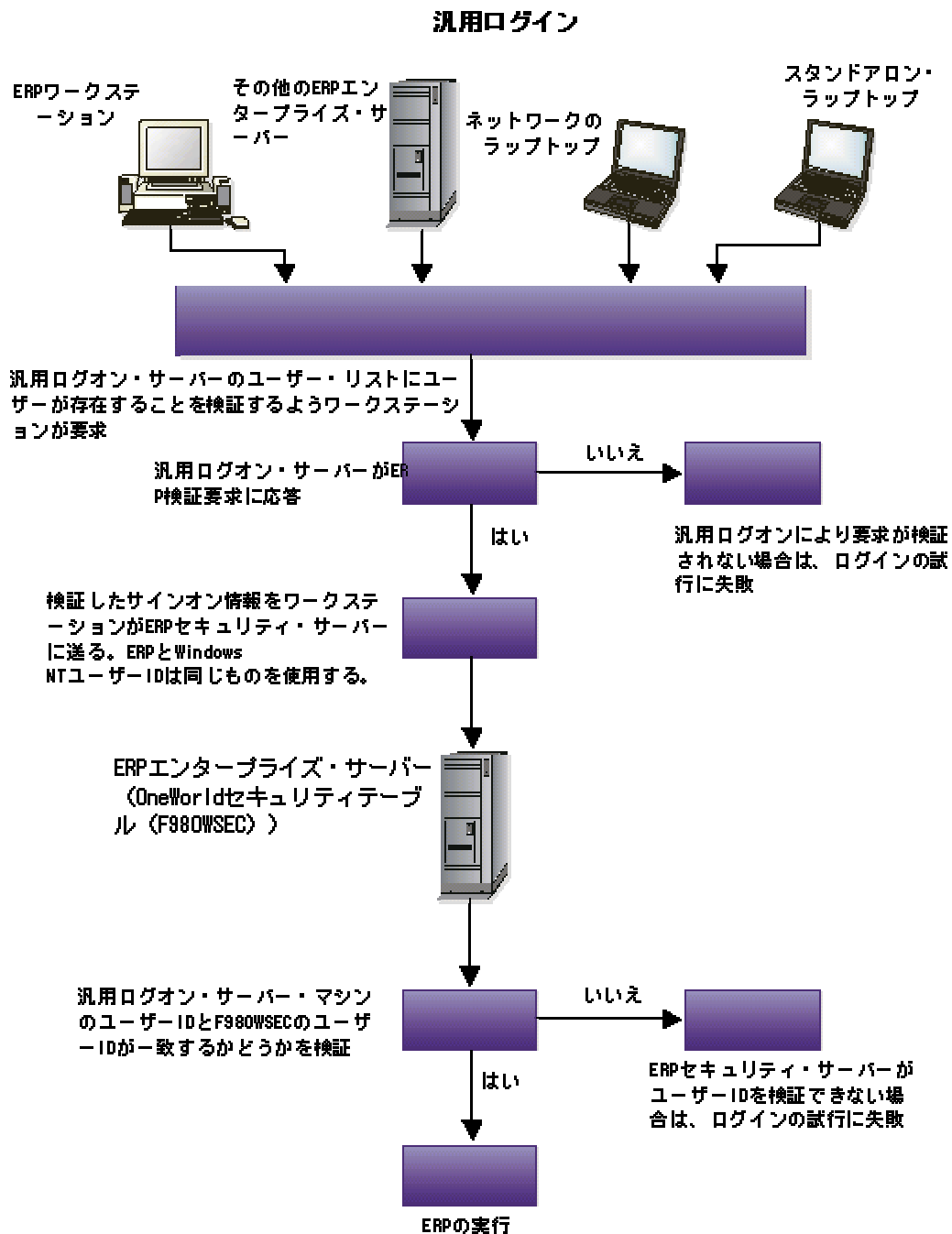
[SECURITY]

ShowUnifiedLogon=0 or 1

値	説明
---	----

- | | |
|---|---|
| 0 | ShowUnifiedLogon の値を 0 に設定すると、〈環境の選択〉フォームは無効になります。〈環境の選択〉フォーム上でチェックボックスをクリックしてデフォルト環境を設定する場合は、この値を 0 に設定してください。 |
| 1 | ShowUnifiedLogon の値を 1 に設定すると、〈環境の選択〉フォームが有効になります。ERP 9.0 へのサインオン時には〈環境の選択〉フォームが表示され、環境を選択できます。これは、ShowUnifiedLogon のデフォルト設定です。 |

次の図は、汎用ログインによるプロセス・フローを示しています。



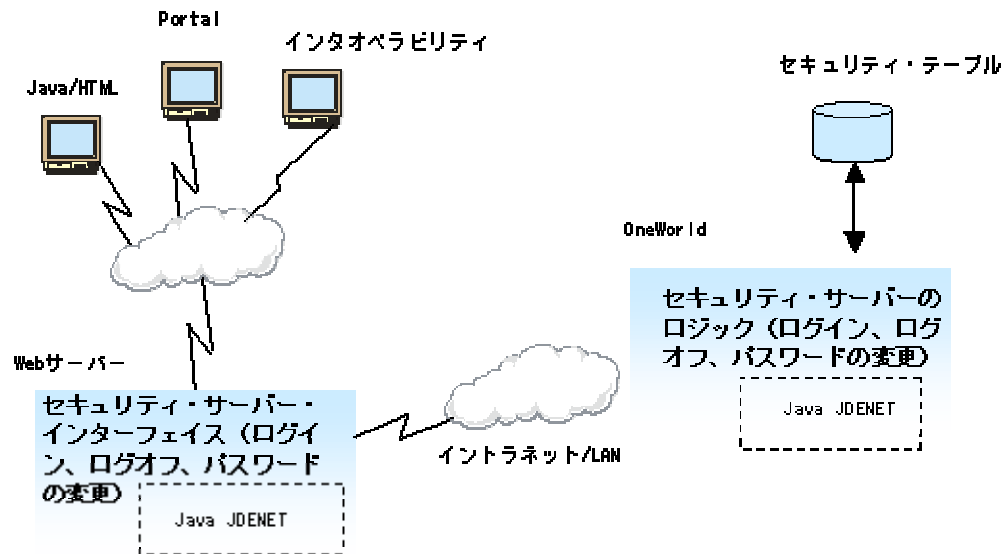
Web ユーザーのサインオン・セキュリティ

ERP 9.0 セキュリティ・サーバーと F98OWSEC テーブルにより、インターネットから JAS セキュリティ・サーバーにかけて ERP 9.0 にログインする Java/HTML、ポータル、インタオペラビリティ・ユーザーが認証されます。JAS セキュリティ・サーバーは、Web ユーザーのクライアント・ワークステーションと ERP 9.0 セキュリティ・サーバーとのインターフェイスとして機能します。

Web ユーザーがサインオン、サインオフ、またはパスワード変更を行うと、JAS サーバーから JDENET メッセージを介して ERP 9.0 セキュリティ・サーバーに要求が送信され、ERP 9.0 セキュリティ・サーバーは F98OWSEC テーブルにアクセスします。ERP 9.0 セキュリティ・サーバーは、JDENET メッセージを介して JAS セキュリティ・サーバーに認証を戻します。ユーザーが認証されると、セキュリティ情報が JAS セキュリティ・サーバーにキャッシュされます。

つまり、JAS セキュリティ・サーバーは、Java/HTML、Portal、およびインタオペラビリティ・クライアントと ERP 9.0 セキュリティ・サーバーの間で仲介する役割を果たします。

次の図は、Web サーバー用の汎用ログインによる ERP 9.0 サインオン・セキュリティのプロセス・フロー・モデルを示しています。



JAS セキュリティ・サーバーは、セキュリティの仲介として次のタスクを処理します。

- Web ユーザーのサインオン時に、ユーザー・セキュリティ認証とパスワードのために ERP 9.0 セキュリティ・サーバーに接続します。
- jas.ini 設定が適切に定義されている場合は、プライマリ・サーバーの停止時に、セカンダリ ERP 9.0 セキュリティ・サーバーにフェールオーバーします。
- ユーザー・パスワードの失効時に、Java/HTML、ポータル、およびインタオペラビリティのクライアント・ワークステーションに通知します。インタオペラビリティ・ユーザーのパスワードが失効すると、単にサインオンが失敗するだけで、原因は通知されません。

- Web ユーザーが ERP 9.0 へのサインオンに x 回失敗すると、ユーザー・ログにエラー・メッセージを送信します。この場合、x は F98OWSEC テーブル内で定義されているサインオン試行回数です。
- Java/HTML および Portal ユーザーに対して、ユーザー名とパスワードの変更を許可します。
- JAS セキュリティ・サーバーと ERP 9.0 セキュリティ・サーバーの間で送信される JDENET メッセージを暗号化します。
- ユーザーがサインオフするか、ERP 9.0 セッションが失効するまで、有効なユーザー・セッションを維持します。

ERP 9.0 Web ユーザーによるサインオンとサインオフは、Windows NT、UNIX、または AS/400 プラットフォーム上の ERP 9.0 ユーザーの場合と同じです。

ERP 9.0 セキュリティ・サーバーを介して Web ユーザーのセキュリティを設定するには、jas.ini ファイルの既存のパラメータに次のパラメータを追加します。

jas.ini ファイル内の [SECURITY]パラメータ	パラメータ値
NumServers	システムへのサインオン時に Web ユーザーが使用できる ERP 9.0 セキュリティ・サーバーの合計数。このパラメータを指定しなければ、デフォルト値は 1 で、サインオンはプライマリ・セキュリティ・サーバーによって処理されます。
SecurityServer	プライマリ・セキュリティ・サーバー名
SecurityServerN	セカンダリ・セキュリティ・サーバー名。値 N は、最初のセカンダリ・サーバーの場合は 1、2 番目のセカンダリ・サーバーの場合は 2 となります。このパラメータに値を割り当てるのは、ユーザーがプライマリ・サーバーにサインオンできないときに、サインオンをセカンダリ・サーバーにフェールオーバーする場合です。
UserLogonCookie=	この値が TRUE であれば、ユーザーはサインオン情報(ユーザー名、パスワード、および環境)をワークステーション上で暗号化されたクッキーに保存でき、次のサインオン時に入力する必要がなくなります。この値が FALSE の場合、この機能は無効になります。
#CookieLifeTime unit	Cookie の有効期間を示す時間単位。たとえば、パラメータ値 day は、Cookie の有効期間が日数単位であることを意味します。
Cookie LifeTime	Cookie が失効するまでの期間。単位は、#CookieLifeTime unit パラメータ値で定義します。この値が day で、Cookie LifeTime パラメータの値が 7 であれば、Cookie の有効期間は 7 日間となります。

次の例は、プライマリ・サーバーを 1 つ、セカンダリ・サーバーを 2 つ定義する場合の jas.ini ファイルの[SECURITY]設定を示しています。

```
NumServers=3
SecurityServer=JDED
SecurityServer1=JDEC
SecurityServer2=corowhp2
UserLogonCookie=TRUE
```

```
#CookieLifeTime unit is "day"
```

```
CookieLifeTime=7
```

1 つまたは複数のセカンダリ・サーバーを定義すると、プライマリ・サーバーの停止時には、サインオンはセカンダリ・サーバーにフェールオーバーします。プライマリ ERP 9.0 セキュリティ・サーバーと jas.ini ファイル内で定義されているセカンダリ・サーバーの両方に障害が起きると、JAS サーバーではユーザー・サインオンが失敗します。

次の例は、サーバー番号やセカンダリ・サーバーを定義しない場合の、jas.ini ファイルの [SECURITY] 設定を示しています。

```
[SECURITY]
```

```
SecurityServer=JDED
```

```
UseLogonCookie=TRUE
```

```
CookieLifeTime unit is "day"
```

```
CookieLifeTime=7
```

処理オプションの設定

〈ユーザー・セキュリティの処理〉アプリケーション(P98OWSEC)には、ユーザーまたはロールのユーザー・セキュリティの作成時にデフォルト・パスワードとそのデフォルトの変更頻度を設定できるように、次の処理オプションが用意されています。

デフォルト

1. ユーザーID を ONEWORLD のパスワードとしてデフォルト化するには、“1”を入力します。
2. デフォルトの変更頻度を入力します。
3. 使用不可になる前にユーザーに与えられるサインオン試行回数を入力してください。
4. 新しいユーザーに対して使用可能または使用不可のどちらをデフォルトとするか指定してください。
5. 新しいユーザーのパスワードをすぐに変更する場合は、“1”を入力してください。

パスワード

1. パスワードを変更する際にすべてのユーザーに適用されるパスワードの 1 日の最高変更回数を入力してください。フィールドがゼロまたはブランクの場合は、変更回数は制限されません。
2. ユーザーがパスワードを変更する際に使用される最小パスワード長を指定してください。フィールドがゼロまたはブランクの場合は、パスワードは制限されません。
3. パスワードで使用する最小文字数を指定してください。フィールドがゼロまたはブランクの場合は、文字数はチェックされません。
4. パスワードで使用する最小英数字数を指定してください。フィールドがゼロまたはブランクの場合は、最小英数字数は制限されません。

5. パスワードで使用する最大連続文字数を指定してください。フィールドがゼロまたはブランクの場合は、最大連続文字数は制限されません。

6. パスワードで使用する最小特殊文字数を指定してください。フィールドがゼロまたはブランクの場合は、最小特殊文字数は指定されません。

ユーザー・セキュリティの処理

ERP 9.0 および論理的に接続されているデータベース管理システムに対するユーザー・セキュリティを作成、テスト、変更するには、〈ユーザー・セキュリティの処理〉アプリケーション(P98OWSEC)を使用します。セキュリティ・アーキテクチャによって、ERP 9.0 アプリケーションでデータの表示と変更についてデータベースまたはシステム・パスワードの表示をバイパスさせることができます。J.D. Edwards は、ERP 9.0 セキュリティ以外のアプリケーションからは、ERP 9.0 ネットワーク経由で送信されるパスワードにアクセスできないことを保証するために暗号化アルゴリズムを使用しています。

また、ERP 9.0 サーバー用に汎用ログオン・サーバーをセットアップすることもできます。汎用ログオン・サーバーにより、ERP 9.0 ではドメイン・ログオン情報を使用して ERP 9.0 用のユーザー・セキュリティを判別することができます。ERP 9.0 の汎用ログオンのシナリオでは、ユーザーはネットワーク・ログオン時にユーザーID とパスワードを入力するだけで済みます。

ユーザー・セキュリティの作成と改訂

セキュリティ・レコードをユーザーごとに1つずつ作成する方法、ユーザー・グループのセキュリティを設定する方法、およびユーザー全員のセキュリティを設定する方法があります。この機能を使用して、最初にユーザー・セキュリティを設定する必要があります。〈ユーザー・セキュリティの処理〉アプリケーションには、個々のユーザーのセキュリティ・レコード作成を簡素化できるように、コピー機能が用意されています。

注:

コピーして他の ERP 9.0 ユーザーの作成に使用できるように、セキュリティ情報を指定してモデルとするユーザーを作成することをお勧めします。通常、特定のロールに所属する各ユーザーは、同様のセキュリティ情報を使用します。

ユーザー・セキュリティは、できるだけ簡単なものにしておいてください。ERP 9.0 のユーザーID とシステム(データベース)ユーザーID の管理は、短時間のうちに複雑化する可能性があります。ユーザー・セキュリティを設定する際に最も簡単な方法は、最初に〈セキュリティの改訂〉フォームでユーザーまたはロールのユーザー・セキュリティ・レコードを作成するときに、データ・ソース・フィールドをブランクにすることで、すべての ERP 9.0 データ・ソースに同じシステム・ユーザーID およびパスワードを共用させることです。

データ・ソース・フィールドをブランクにすると、このフィールドには“DEFAULT”が自動的に入力されます。これにより、ユーザー全員に対して1つのセキュリティ・レコードを作成できます。あるユーザーが ERP 9.0 アプリケーションを通じてあるテーブルにアクセスするたびに、そのユーザーのセキュリティ・レコードと、そのテーブルが常駐する特定のデータ・ソースが検索されます。特定のレコード

が見つからなければ、データ・ソース・フィールドを DEFAULT に設定して作成されたセキュリティ・レコードにより、デフォルトのデータ・ソースが使用されます。

データベースへのユーザー・アクセスを管理するにはシステム・ユーザーID を使用します。システム・ユーザーID 数はできるだけ少数に保つ必要がありますが、特定のユーザーや特定のテーブルに対する ERP 9.0 のオブジェクトおよびユーザー・セキュリティだけでなく、データベース・セキュリティの設定も必要になる場合があります。たとえば、通常のシステム・ユーザーより広範囲な権限を持つシステム・ユーザーの作成を必要とする場合があります。

参照

- エンド・ユーザー・レベルでパスワードを変更する方法の詳細については、『基本操作』ガイドの「ユーザー・オプションの変更」

はじめる前に

- ユーザー・プロファイルを作成します。ユーザー・プロファイルについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ユーザー・プロファイル」

▶ ユーザー・セキュリティを作成するには

ユーザー・セキュリティを作成する前に、〈住所録の改訂〉アプリケーション(P01012)を使用して、すべてのロールとユーザーのレコードを設定しておく必要があります。また、〈ユーザー・プロファイル〉アプリケーション(P0092)でユーザー・プロファイルを作成し、ユーザーまたはグループのプロファイルに正しい住所録レコードを添付する必要があります。さらに、初めて〈ユーザー・プロファイルの処理〉アプリケーション(P98OWSEC)を使用する前に、該当する処理オプションを検討して設定しておいてください。

注:

処理オプションについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サインオン・セキュリティ用の処理オプションを設定するには」を参照してください。

コピーして別のユーザーの作成に使用できるように、セキュリティ情報を指定してモデルとするユーザーを作成することをお勧めします。通常、特定のロールに所属する各ユーザーは、同様のセキュリティ情報を使用します。

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム(P98OWSEC)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで[追加]をクリックします。
2. 次の各フィールドのうちいずれか 1 つにのみ値を入力します。

- ユーザーID

既存のユーザーID を入力すると、そのユーザーのデータ・ソース情報を修正できます。そのユーザーID については、他のすべてのフィールドとオプションが無効になります。

- ロール

既存のロールを入力すると、フォームに情報を入力したときにセキュリティ・レコードが一時変更されます。

注:

この 2 つのフィールドの一方に情報を入力すると、他方のフィールドは使用禁止になります。たとえば、[ユーザーID/ロール]フィールドに“GROUP1”と入力すると、[ユーザーID]フィールドが淡色表示され、データを入力できなくなります。

3. 次のフィールドに値を入力してください。

- データ・ソース

このフィールドをブランクにした場合は、すべてのデータ・ソースのセキュリティを設定します。他のフィールドにタブ移動すると、このフィールドには DEFAULT と表示されます。

注:

データ・ソースの使用方法の詳細については、『CNC インプリメンテーション』ガイドの「データ・ソース」を参照してください。

- システム・ユーザー

- パスワード

少なくとも、[システム・ユーザー]および[パスワード]フィールドには値を入力することをお勧めします。

ロール別または全ユーザーのレコードを作成する場合は、選択した処理オプションに従って[パスワード]フィールドに自動入力されます。

4. [ユーザー状況]にある次のオプションのいずれかを有効にします。

- 有効

ユーザーがサインオンできます。このオプションは、ユーザー・セキュリティの作成時のデフォルト設定です。

- 無効

ユーザーがサインオンできなくなります。

注:

ユーザーが、パスワード試行の最大許容回数を超えるなどセキュリティに違反すると、[ユーザー状況]の値が自動的に[無効]に設定されます。システム管理者が、ユーザーのユーザー・セキュリティ・レコードにアクセスし、[ユーザー状況]を[有効]に設定しなければ、そのユーザーはログオンできません。また、システム管理者は、〈管理パスワードの改訂〉にアクセスし、そのユーザーのパスワードを再設定できます。これにより、ユーザー・プロファイルは[有効]である状況に復元されます。

5. ユーザーのパスワード入力に制限を設ける場合は、次の各フィールドに値を入力します。

- パスワード入力の試行
ユーザー・アクセスが禁止される前に許可されるパスワード入力の試行回数を入力します。
 - パスワード変更頻度数
ユーザーにパスワード変更が要求されるまでの日数を入力します。
6. [OK]をクリックして、現在のユーザー・セキュリティ情報を保存します。
 7. 入力が完了したら[キャンセル]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
ユーザーID	ユーザー・プロファイルを識別するコード。
ロール	<p>セキュリティを目的とし、ユーザーをグループに分類するために使用されるプロファイル。グループ・プロファイルは、グループ・メンバーに特定のプログラムへのアクセス権を与えるのに使用します。</p> <p>ユーザー・クラス・グループの作成ルールは次のとおりです。</p> <p>クラス・グループ・プロファイルは、他のシステム・プロファイルとの衝突を避けるため、*で始めます。</p> <p>ユーザー・クラス・グループ・フィールドは、新しいグループ・プロファイルの入力時にはブランクにします。</p>
データ・ソース	<p>ユーザーが保護されるデータソース。ブランクの場合、全データソースが対象となります。</p> <p>--- フォーム固有 ---</p> <p>有効なユーザーID およびシステムパスワードがレコードに存在しないかぎり、ユーザーがアクセスできないデータソース。ブランクにすると、すべてのデータソースが選択されます。</p>
システム・ユーザー	データソースとして指定したデータベース管理システム(DBMS)を接続するのに ONEWORLD が使用する実際のユーザーを識別します。ここで定義したシステムユーザーは DBMS で定義したユーザーの値と一致している必要があります。
パスワード	J.D. Edwards システムにサインオンする際に使用するパスワード。〈ユーザー・パスワードの改訂〉でユーザーが変更できる唯一のフィールドです。J.D. Edwards では、最初にユーザーを設定する際は、パスワードをユーザーID と同じに設定することをお勧めします。
パスワード入力の試行	ユーザー・プロファイルが使用不可となるまで、サインオンを試すことのできる回数。
パスワード変更頻度数	ユーザーの ONEWORLD パスワードの変更が必要となるまでの日数を識別します。

▶ ユーザー・セキュリティをコピーするには

注:

コピーして別のユーザーの作成に使用できるように、セキュリティ情報を指定してモデルとなるユーザーを作成することをお勧めします。通常、特定のロールに所属する各ユーザーは、同様のセキュリティ情報を使用します。

ユーザーのユーザー・セキュリティ・レコードを作成する前に、そのユーザーのユーザー・プロフィールが存在している必要があります。また、セキュリティ・レコードをユーザーにコピーする場合は、そのユーザーの既存のセキュリティ・レコードがないようにします。既存のユーザー・セキュリティ・レコードを持つユーザーにユーザー・セキュリティをコピーしようとすると、エラー・メッセージが表示されます。

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム(P98OWSEC)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、ユーザーを検索し、次のいずれかの操作を行います。
 - ユーザーまたはロールのすべてのユーザー・セキュリティ・レコードをコピーするには、ツリー構造から該当するユーザーまたはロールを選択して[コピー]をクリックします。
 - ユーザーまたはロールに関する単一のユーザー・セキュリティ・レコードをコピーするには、グリッドでセキュリティ・レコードのローを選んで、[ロール]メニューから[レコードのコピー]を選択します。
2. 〈ユーザー・レコードのコピー〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - ユーザー/ロール(コピー先)
このフィールドには有効なユーザーを入力します。

▶ ユーザー・セキュリティとロール・セキュリティを改訂するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム(P98OWSEC)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉で、次のいずれかのフィールドに値を入力します。
 - ユーザーID/ロール
2. [検索]をクリックします。
3. ツリー構造から該当するレコードを選び、[ロー]メニューから[セキュリティの改訂]を選択します。
4. 〈セキュリティ詳細の改訂〉で、必要に応じて次のフィールドに情報を入力します。

注:

ロールの場合は、[変更]ボックスから該当するオプションを選択して各フィールドを有効にします。

- ユーザー状況
[ユーザー状況]領域で、ユーザー・プロフィールを使用可能または使用不可にすることができます。
- パスワード変更頻度数
- パスワード入力の試行

5. [OK]をクリックします。

▶ 全ユーザー・セキュリティを改訂するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム(P98OWSEC)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[すべてを改訂]を選択します。
2. 〈セキュリティ詳細の改訂〉で、[変更]ボックスの次のいずれかのオプションをクリックして関連フィールドを使用可能にします。

- ユーザー状況
- 頻度
- 試行
- 変更限度

3. 次のうち必要なフィールドに値を入力し、[OK]をクリックします。

- ユーザー状況
このフィールドを使用すると、ユーザー・プロフィールを使用可能または使用不可にすることができます。
- パスワード変更頻度数
- パスワード入力の試行
- パスワードをすぐに変更
次のログイン時にパスワードを変更します。

▶ サインオン・パスワードを変更するには(管理者のみ)

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)メニューから〈管理パスワードの改訂〉プログラム(P980WSEC)を選択します。

注:

〈管理パスワードの改訂〉には、〈ユーザー・セキュリティ〉アプリケーションからもアクセスできます。〈ユーザー・セキュリティの処理〉で、ユーザーを検索し、ツリー構造からユーザーを選択し、[ロー]メニューから[パスワードの改訂]を選択します。

1. 〈管理パスワードの改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- ユーザーID

ユーザー・レコードをハイライトして[パスワードの改訂]をオンにすると、このフィールドにデフォルトのユーザーID が自動入力されます。

- 新パスワード

このフォームでは、パスワード選択に制限はありません。どんなパスワードでも指定することができます。

- 新パスワード(確認)

- パスワードをすぐに変更

次のログイン時のパスワードを変更します。

2. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
ユーザーID	ユーザー・プロファイルを識別するコード。
新パスワード	新しく使用するパスワードを入力します。新しいパスワードを設定する場合は、次の規則に従ってください。 新しいパスワードは前のパスワードとは異なるものを指定する。 ユーザーID と同じ値には使用しない。 パスワードには 6 文字以上を使用する。 システム管理者が〈システム管理パスワードの改訂〉を使用してユーザーのパスワードをリセットする場合、この規則は適用されません。たとえば、システム管理者は新しいパスワードを、ユーザーID と同じにしたり、“ password ”にしたりできます。いずれの場合も、新しいパスワードは次のサインオン時から有効になります。
新パスワード(確認)	[新パスワード]フィールドに指定した値を再度入力します。
パスワードをすぐに変更	選択すると、次にログオンする際にパスワードを変更するよう要求されます。

セキュリティ履歴の検討

特定のユーザーやグループがわかっている場合は、〈ユーザー・セキュリティ〉アプリケーション (P98OWSEC) を使用して、そのユーザーやグループのセキュリティ履歴を検討できます。また、ユーザー全員に関して特定の情報を検索することもできます。たとえば、特定の日に削除したユーザーを確認する場合は、[イベント・タイプ] に "06" (ユーザーの削除)、[イベント日付] に特定の日付を入力して検索できます。

はじめる前に

- セキュリティ履歴を記録するには、サーバーの jde.ini の [SECURITY] セクションに次の設定を組み込む必要があります。

[SECURITY]

History=1

▶ セキュリティ履歴を検討するには

〈セキュリティ管理〉メニュー (GH9052) から 〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム (P98OWSEC) を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉で、[フォーム] メニューから [セキュリティの履歴] を選択します。
2. 〈セキュリティ履歴の処理〉で [検索] をクリックします。
3. グリッドに表示されるセキュリティ履歴レコードを検討します。

▶ サインオン・セキュリティを要求するには

注:

この機能を使用して、すべてのマシンにサインオン・セキュリティを使用するように要求します。この手順では、この変更を行うためにサインオンしている環境の必須セキュリティのみが使用可能になります。

〈セキュリティ管理〉メニュー (GH9052) から 〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム (P98OWSEC) を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉で、[フォーム] メニューから [必須/任意] を選択します。
2. 〈サインオン・セキュリティ (必須/オプション)〉フォームで、ロック・アイコンをクリックしてセキュリティ・サーバーを必須または任意に変更します。

注:

セキュリティを「任意」に設定しても、エンタープライズ・サーバーの jde.ini ファイルでセキュリティがオンになっている場合、ワークステーションの jde.ini ファイルでサインオン・セキュリティがコメントとして設定されているユーザーは、システム・ユーザーID とパスワードを知らなければデータ・ソースにアクセスできないので注意してください。

セキュリティが適用されているデータ・ソース内のテーブルにユーザーがアクセスしようとすると、データベース・パスワード入力フォームが表示されます。システム・ユーザーID とパスワードが機密の場合、セキュリティが適用されているテーブルには誰もアクセスできません。

ユーザー・セキュリティのデータ・ソース管理

ユーザーとロールにデータベースへのアクセス権限を与えるには、ユーザー・セキュリティでユーザーおよびグループ・レコードにデータ・ソースを追加します。既存のデータ・ソースについて、システム・ユーザーおよびシステム・パスワードを改訂することもできます。

▶ ユーザー、ロール、または全ユーザーにデータ・ソースを追加するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム(P98OWSEC)を選択します。

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[データ・ソースを追加]を選択します。
2. 次のフィールドまたはオプションのうち 1 つに値を入力するか設定します。
 - ユーザーID
特定のユーザーにデータ・ソースを追加するには、このフィールドに入力します。
 - ロール
特定のロールにデータ・ソースを追加するには、このフィールドに入力します。
 - すべてのユーザー
全ユーザーにデータ・ソースを追加するには、このオプションを有効にします。
3. 次のフィールドに情報を入力して[OK]をクリックします。
 - データ・ソース
すべてのデータ・ソースのデータ・ソース情報を設定するには、このフィールドをブランクにします。これにより、このフィールドには“DEFAULT”が自動的に入力されます。
 - システム・ユーザー

▶ ユーザー、ロール、または全ユーザーのデータ・ソースを改訂するには

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、[データ・ソース]フィールドに情報を入力して[検索]をクリックします。

- データ・ソース

注:

値は[データ・ソース]と[ユーザーID/ロール]の両方に入力できます。データ・ソースのみを選択すると、変更はすべてのユーザーに影響します。

2. ツリー構造から該当するレコードを選択し、[ロー]メニューから[データ・ソースの改訂]を選択します。

〈データ・ソースの改訂〉フォームが表示されます。特定のユーザーまたはロールを選択した場合、このフォームにはデータ・ソース情報と共にそのユーザーのユーザーID またはロール名が表示されます。データ・ソースのみを選択した場合は、データ・ソース情報と共に[すべてのユーザー]オプションが表示されます。

3. 以下のフィールドに値を入力して、[OK]をクリックします。

- システム・ユーザー

ソフトウェア内のデータベースにアクセスするために入力します。〈ユーザー・セキュリティの処理〉でツリーから選択した内容に応じて、この情報が特定のユーザー、特定のロール、または全ユーザーに適用されます。

▶ ユーザー、ロール、または全ユーザーのデータ・ソースを削除するには

1. 〈ユーザー・セキュリティの処理〉フォームで、[データ・ソース]フィールドに情報を入力して[検索]をクリックします。

- データ・ソース

2. ツリー構造から該当するレコードを選択して[削除]をクリックします。

注:

対象がユーザーの場合は、グリッドでそのユーザーのローを選択し、[削除]をクリックすることもできます。

〈データ・ソースの削除〉フォームが表示されます。特定のユーザーまたはロールのデータ・ソースを選択した場合、このフォームにはデータ・ソース名と共にそのユーザーのユーザーID またはロール名が表示されます。データ・ソースのみを選択した場合は、データ・ソース名のみが表示されます。

注意:

特定のユーザーまたはグループを指定しないでデータ・ソースを検索した場合は、〈データ・ソースの削除〉で[OK]をクリックするとユーザー全員のデータ・ソースが削除されます。

3. [OK]をクリックしてデータ・ソースを削除します。

ユーザー・セキュリティのための jde.ini ファイルの変更

エンタープライズ・サーバーとワークステーションの jde.ini ファイルを修正し、両者間のセキュリティ設定を使用可能にして同期化する必要があります。

注:

ワークステーションの場合は、その jde.ini ファイルで設定を変更してセキュリティを使用可能にします。これらの変更は、パッケージのインストールを通じてワークステーションに配信されるデプロイメント・サーバー常駐の jde.ini ファイルで行う必要があります。

▶ ワークステーションの jde.ini ファイルのセキュリティ設定を変更するには

パッケージ・インストールの一部としてワークステーションに送信される jde.ini ファイルを検索します。このファイルは、デプロイメント・サーバーのリリース共有パスにあります。

¥¥Bxxx¥CLIENT¥MISC¥jde.ini

この場合、xxx はインストール済みリリース・レベル(B9 など)です。

1. メモ帳などのテキスト・エディタを使用して jde.ini ファイルを参照し、次の値が正確に設定されているかどうかを確認します。

[SECURITY]
SecurityServer=Enterprise Server Name
DefaultEnvironment=Default Environment

変数の値については、次の表を参照してください。

設定	値
SecurityServer	有効な値は、ERP 9.0 エンタープライズ・サーバー名です。ワークステーションからサインオンしてエンタープライズ・サーバー上でバッチ・レポートを実行するには、この値を両者間で一致させる必要があります。
DefaultEnvironment	有効な環境を識別します。ここで値を指定しなければ、そのワークステーションのセキュリティは使用可能になりません。

ワークステーションの JDE.INI での補助セキュリティ・サーバーの設定

ワークステーションの jde.ini ファイルの[SECURITY]セクションで、次のように最大 10 の補助セキュリティ・サーバーを設定できます。jde.ini ファイルは次のようになります。

[SECURITY]	
NumServers=	Numeric Value
SecurityServer=	Enterprise Server Name (primary)
SecurityServer2=	Enterprise Server Name (auxiliary)
SecurityServer3=	Enterprise Server Name (auxiliary)

設定	値
----	---

NumServers	この数値は、jde.ini ファイルの[SECURITY]セクションで設定するセキュリティ・サーバー（基本および補助）の合計数です。たとえば、基本サーバーを 1 つ、補助サーバーを 4 つ設定する場合、NumServers 値は 5 になります。NumServers は、1～10 の任意の値に設定できます。NumServers 設定を組み込まなければ、サーバーが 1 つしかないものと見なされます。
SecurityServern	J.D. Edwards エンタープライズ・サーバー名。基本および補助のセキュリティ・サーバー名は、すべて有効なエンタープライズ・サーバーに対応している必要があります。ワークステーションからエンタープライズ・サーバーにログオンしてバッチ・レポートを実行するには、この値を両者間で一致させる必要があります。 変数値 x には、1～10 の数値を指定できます。この数値は、補助セキュリティ・サーバーを定義します。

セキュリティ・サーバーの通信エラーによるタイムアウト値の変更

次のようなエラーが表示された場合は、ワークステーションの jde.ini ファイルで設定を変更する必要があります。

Failure to Communicate with Security Server (セキュリティ・サーバーとの通信に失敗)

次のセクションを変更してください。

[JDENET]
connectTimeout=30

▶ エンタープライズ・サーバーの jde.ini ファイルのセキュリティ設定を変更するには

エンタープライズ・サーバーの jde.ini ファイルのセキュリティ設定を変更するには、jde.ini ファイルの設定を確認する必要があります。これらの設定を使用して、内部のセキュリティ・パラメータ、有効なユーザーとパスワード、環境、およびデータ・ソースを指定します。

1. エンタープライズ・サーバーの jde.ini ファイルを検索します。
2. メモ帳などの ASCII テキスト・エディタを使用して jde.ini ファイルを参照し、次の値が正確に設定されているかどうかを確認します。

[JDENET_KERNEL_DEF4]
dispatchDLLName=name of host dll
dispatchDLLFunction=JDEK_DispatchSecurity
maxNumberOfProcesses=1
beginningMsgTypeRange=551
endingMsgTypeRange=580
newProcessThresholdRequests=0
[SECURITY]
Security Server=Enterprise Server Name
User=user ID

Password=user password
ServerPswdFile=TRUE/FALSE
DefaultEnvironment=default environment

変数の値については、次の表を参照してください。

設定	値
	エンタープライズ・サーバーのホスト・プラットフォームに有効な値は、次のとおりです。
	<ul style="list-style-type: none"> HP9000, libjdeknet.sl RS/6000, libjdekrnl.so Windows NT (Intel), jdekrnl.dll Windows NT (Compaq AlphaServer), jdekrnl.dll AS/400, JDEKRNL
dispatchDLLName	UNIX プラットフォームの場合は、値の大文字と小文字が区別されます。
SecurityServer	J.D. Edwards エンタープライズ・サーバー名。ワークステーションからエンタープライズ・サーバー上でバッチ・レポートを実行するには、この値を両者間で一致させる必要があります。
User	OneWorld サインオン・セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)へのアクセス権を持つユーザーの ID。DBMS との接続に使用する ID。ターゲット DBMS の値と一致する必要があります。
Password	OneWorld サインオン・セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)へのアクセス権を持つユーザーのパスワード。DBMS との接続に使用するパスワード。ターゲット DBMS の値と一致する必要があります。
ServerPswdFile	このパラメータは、UNIX オペレーティング・システムで動作する J.D. Edwards サーバーに有効です。
	このパラメータの設定によって、サーバー上で実行中のバッチ・レポートに、システムで特殊パ

スワード処理が使用されるかどうかを確認します。

この値を TRUE に設定すると、システムでパスワードの特殊処理が可能になります。

FALSE に設定すると、特殊処理は不能になります。

システムによってサーバー上でバッチ・レポートが実行されるときには、ユーザー・パスワードを含むコマンドとパラメータの文字列行が使用されます。UNIX オペレーティング・システム上では、ps コマンドを使用してジョブの状況をクエリーして、プロセスの開始に使用されたパラメータを確認できます。

セキュリティ措置として、ERP ソフトウェアによる特殊処理を有効にすることができます。有効にすると、ユーザー・パスワードはバッチ処理用のパラメータ・リストに組み込まれません。代わりに、ユーザー・パスワードを含むファイルの名称が組み込まれます。このファイルは、バッチ・レポートによってパスワードが読み取られた後に削除されます。

セキュリティ・テーブルへのアクセスに有効な環境名です。PD9 などがあります。

DefaultEnvironment

サーバーの JDE.INI での補助セキュリティ・サーバーの設定

サーバーの jde.ini ファイルの [SECURITY] セクションで、次のように 1～10 の補助セキュリティ・サーバーを設定できます。デフォルトのサーバー・レベルを設定するには、複数の補助セキュリティ・サーバーを設定します。たとえば、マシンから特定のセキュリティ・サーバーにアクセスできない場合、そのマシンは [SECURITY] セクションで定義されている次のセキュリティ・サーバーにアクセスしようとして、補助セキュリティ・サーバーの設定は次のようになります。

[SECURITY]	
NumServers=Numeric Value	
SecurityServer=Enterprise Server Name (primary)	
SecurityServer2=Enterprise Server Name (auxiliary)	
SecurityServer3=Enterprise Server Name (auxiliary)	

設定	値
NumServers	この数値は、jde.ini ファイルの [SECURITY] セクションで設定するセキュリティ・サーバー（基本および補助）の合計数です。たとえば、基本サーバーを 1 つ、補助サーバーを 4 つ設定する場合、NumServers 値は 5 になります。NumServers は、1～10 の任意の値に設定できます。NumServers 設定を組み込まなければ、サーバーが 1 つしかないものと見なされます。
SecurityServerx	J.D. Edwards エンタープライズ・サーバー名。基本および補助のセキュリティ・サーバー名は、すべて有効なエンタープライズ・サーバーでなければなりません。ワークステーションからエンタープライズ・サーバーにログオンしてバッチ・レポートを実行するには、この値を両者間で一致させる必要があります。 変数値 x には、1～10 の数値を指定できます。この数値は、補助セキュリティ・サーバーを定義します。

サーバーの JDE.INI でのセキュリティ・プロセスの検証

セキュリティ・ネットワーク用のプロセスは、1 つだけ定義することをお勧めします。複数のプロセスを設定することもできますが、その必要はありません。サーバーの jde.ini ファイルの [JDENET_KERNEL_DEF4] セクションで、次の設定を確認します。

[JDENET_KERNEL_DEF4]
maxNumberOfProcesses=1

セキュリティ・アナライザ・レポートの実行

この処理では、ERP/SCM 9.0 セキュリティの分析結果を示す 2 つのレポートを生成します。最初のレポートは、データ・ソース別セキュリティ・アナライザ(R98OWSECA)で、データ・ソース別に編成されています。データ・ソースがブランクの場合は、システム・ユーザーID のセキュリティがすべてのデータ・ソースに適用可能であることを意味します。〈データ・ソース別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECA)は、ERP 9.0 OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)から読み取られるデータに基づいています。

2 番目のレポートは、ユーザー/グループ別のセキュリティ・アナライザ(R98OWSECB)で、ユーザーまたはロールによって編成されます。〈ユーザー/グループ別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECB)もまた、ERP 9.0 OneWorld セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)から読み取られるデータに基づいています。

〈データ・ソース別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECA)の実行

このレポートには、データ・ソース、ユーザーID、およびロール別のセキュリティ分析情報が表示されます。このレポートは、データ・ソース順、次にユーザーID 順にソートされます。次のカラム・データが表示されます。

- データ・ソース
ユーザーにセキュリティが適用されているデータ・ソースが識別されます。ブランクは、すべてのデータ・ソースを示します。
- ユーザーID
- ユーザー/ロール
ユーザー・プロファイルの識別コードです。
- システム・ユーザーID
ERP 9.0 でデータ・ソースとして指定したデータベース管理システム(DBMS)への接続に使用される実際のユーザーを識別します。ここに表示されるシステム・ユーザーは、DBMS で定義されているユーザー値と一致する必要があります。
- 変更間隔
ERP 9.0 からユーザーに ERP 9.0 パスワードの変更が要求されるまでの日数を示します。この値は、個々のユーザーID 別またはロール別に設定できます。
- ソース・パスワードの変更

ユーザーのパスワードの前回変更日付を示します。

- 無効なサインオン

ユーザーによる無効なサインオンの試行回数を示します。再試行回数が許容回数を超えると、ユーザー・プロファイルが使用不可になります。

- 再試行回数

ユーザー・プロファイルが使用不可になる前に、そのユーザーに許されるサインオン試行回数を示します。

- ユーザー状況

ユーザーが ERP 9.0 にサインオンできるかどうかを示します。有効な値は、01 (可能) と 02 (不可) です。

- 状況

[ユーザー状況]フィールドの状況を表示します。

▶ **〈データ・ソース別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECA)を実行するには**

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)メニューから〈データ・ソース別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECA)を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、バージョンを選んで[選択]をクリックします。

デフォルトのバージョンは XJDE0001 です。すべてのデータ・ソースにあるすべてのユーザーID にレポートが作成されます。

2. 〈バージョン・プロンプト〉で、[投入]をクリックします。
3. 〈レポート出力先〉で、次のオプションのいずれかを選んで[OK]をクリックします。

- 画面
- プリンタ
- CSV へエクスポート

4. 必要に応じて次のオプションを設定して、表示されるボックスに該当する名前を入力してください。

- OSA インターフェイス名

5. [OK]をクリックします。

例: データ・ソース別セキュリティ・アナライザ・レポート(R98OWSECA)

この例は、〈データ・ソース別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECA)からの抜粋を示しています。

Data Source	User ID	User Group	System User ID	Change Frequency	Source Password Changed	Invalid Sign-Ons	Allowed Attempts	User Status	Status
	AM5906899	OWMANUF	JDEOW	0	9/11/98	0	0	01	Enabled
	AM583243	OWTOOL	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AMAZON	OWTOOL_RUN	AMAZON	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	ANTELOC	DSI	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AQ5610094	OWDATA	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AP1128244	JDEOW	JDEOW	0	8/12/98	0	0	01	Enabled
	AP1643489	OWDOCS	JDEOW	0	8/19/98	0	0	01	Enabled
	AP5724964	OWDOCS	JDEOW	0	8/12/98	0	0	01	Enabled
	AP5674946	OWDISTRIB	JDEOWQA	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AR5823461	OWMANUF	JDEOWQA	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AR5896424	JDEOW	JDEOW	0	6/15/98	0	0	01	Enabled
	AR5807956	OWTOOL_QA	JDEOWQA	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AR783949	OWFINAN	JDEOWQA	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	ARACEN	DSI	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AS2663115	OWHRM	JDEOW	0	7/27/98	0	0	01	Enabled
	AS5662723	OWTCHWRT	JDEOW	0	8/10/98	0	0	01	Enabled
	AS5600478	OWTOOL_RUN	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AS5712429	OWLOGIST	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AV4803573	OWAPDEV	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AW5662723	OWTOOL	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AW5888551	OWLOGIST	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AW5903516	OWDISTRIB	JDEOWQA	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	AY5600427	OWTOOL	JDEOW	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	B7321OWD1	OWCRP	JDEOWWER	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	B7321OWD2	OWCRP	JDEOWWER	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	B7321OWD3	OWCRP	JDEOWWER	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	B7321OWD4	OWCRP	JDEOWWER	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	B7321OWD5	OWCRP	JDEOWWER	0	10/7/98	0	0	01	Enabled
	B7321OWD6	OWCRP	JDEOWWER	0	10/7/98	0	0	01	Enabled

〈ユーザー/グループ別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECB)の実行

〈ユーザー/グループ別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECB)を実行すると、ユーザーID、グループ、データ・ソースのそれぞれの情報が表示されます。このレポートは、ユーザーID またはユーザー・グループ別にソートされます。ソート順序は処理オプションで制御します。次のカラム・データが表示されます。

- ユーザーID
- ロール
- パスワード変更頻度数

ユーザーにパスワードの変更が要求されるまでの日数を示します。この値は、個々のユーザーID 別またはグループ別に設定できます。

- データ・ソース

ユーザーにセキュリティが適用されているデータ・ソースが識別されます。ブランクは、すべてのデータ・ソースを示します。

- システム・ユーザー

ソフトウェアでデータ・ソースとして指定したデータベース管理システム(DBMS)への接続に使用される実際のユーザーを識別します。ここに定義されているシステム・ユーザーは、DBMS で定義されているユーザー値と一致させる必要があります。

▶ **〈ユーザー/グループ別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECB)を実行するには**

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈ユーザー/グループ別セキュリティ・アナライザ〉レポート(R98OWSECB)を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、バージョンを選んで[選択]をクリックします。

デフォルトのバージョンは XJDE0001 です。すべてのデータ・ソースにあるすべてのユーザーID にレポートが作成されます。

デフォルトでは、このレポートの XJDE0001 バージョンの処理オプションは 1 に設定されています。このオプションではユーザーID 別にレポートが生成されます。

ロール別に生成するには、処理オプションのプロンプトの[ユーザー・セットアップ]タブで値を 2 に変更します。

2. 〈バージョン・プロンプト〉で、[投入]をクリックします。
3. 必要に応じて処理オプションに値を入力して[OK]をクリックします。
4. 〈レポート出力先〉で、次のオプションのいずれかを選んで[OK]をクリックします。
 - 画面
 - プリンタ
 - CSV ヘエクスポート
5. 必要に応じて、次のオプションをクリックして、表示されるフィールドに該当する名前を入力してください。
 - OSA インターフェイス名
6. [OK]をクリックします。

汎用ログオンの管理

Windows NT エンタープライズ・サーバーを使用する構成の場合は、jde.ini ファイルの[SECURITY]セクションを修正するだけで汎用ログオンを設定できます。ユーザーのサインオン時には、これらの設定によって ERP 9.0/SCM は汎用ログオンを使用するように警告されます。

エンタープライズ・サーバーが Windows NT 以外のプラットフォーム上にある場合は、汎用ログオン用に Windows NT サービスを設定する必要があります。このサービスにより、ERP/SCM 9.0 用の汎用ログオン・サーバーが識別されます。また、jde.ini ファイル内の[SECURITY]セクションでも汎用ログオンのための設定を行う必要があります。

注意:

汎用ログオンを使用する場合は、Windows NT ドメインと ERP 9.0/SCM のレコードを同期化するために、両者に同じユーザーID を使用する必要があります。たとえば、Windows NT ドメインでユーザーのユーザーID が USER1 であれば、ERP/SCM 9.0 用のユーザーID も USER1 にしなければなりません。両者のユーザーID が一致しなければ、そのユーザーは汎用ログオンを使用できません。

▶ jde.ini 設定を修正して汎用ログオンを有効または無効にするには

サーバー上とワークステーション上で jde.ini ファイルを検索します。

1. サーバーの jde.ini ファイルで、[SECURITY]セクションに次の設定を追加します。

[SECURITY] SecurityMode=0, 1 or 2

値	説明
0	標準サインオン・セキュリティに設定されたユーザーのみを受け入れます。
1	汎用ログインに設定されたユーザーのみを受け入れます。
2	汎用ログオンおよび標準サインオン・セキュリティの両方に設定されたユーザーを受け入れます。

2. ワークステーションの jde.ini ファイルで、[SECURITY]セクションに次の設定を追加します。

[SECURITY] UnifiedLogon=0 or 1

値	説明
0	ワークステーションの汎用ログインが無効になります。これはデフォルト設定です。
1	ワークステーションの汎用ログインを設定します。
server_name	汎用ログオン・サーバーのデータが保管されているサーバーの名称を入力します。

▶ 汎用ログオン用のサービスを設定するには

エンタープライズ・サーバーが Windows NT サーバーでない場合は、デプロイメント・サーバー上で汎用ログオン用のサービスを設定することをお勧めします。デプロイメント・サーバーは、常に Windows NT サーバーです。

1. デプロイメント・サーバー上の Windows Explorer で、¥Unified Logon ディレクトリに移動してファイル UniLogonSetup.exe を実行します。

〈Unified Logon Server Setup (汎用ログオン・サーバーの設定)〉フォームが表示されます。このフォームで汎用ログオン・サーバー用の Windows NT サービスを定義します。また、これらのサービスをこのフォーム上で解除することもできます。

2. 次のフィールドに値を入力してください。

- Unified Logon Service Name (汎用ログオン・サービス名)

汎用ログオン・サーバー名を入力します。

- ERP 9.0 Port Number (ERP 9.0 ポート番号)

汎用ログオン・サーバーのポート番号は、汎用ログオンを設定する ERP 9.0 サーバーの ERP 9.0 ポート番号と一致させる必要があります。

- Service Executable Filename (サービスの実行可能ファイル名)

汎用ログオン・サービス・プログラムのディレクトリ・パスを入力します。

- Log Filename (ログ・ファイル名)

汎用ログオンのログ・ファイル名を完全ディレクトリ・パスとして入力します。

3. デフォルトのユーザー・リストには、認証済みのすべてのネットワーク・ユーザーが含まれています。カスタム・ユーザー・リストの作成を必要とする場合は、[Users or User Groups (ユーザーまたはユーザー・グループ)] ボックスにユーザーまたはグループを入力し、汎用ログオン・ユーザー・リストにユーザー情報を追加します。

注:

通常、Windows NT のデフォルトの認証済みネットワーク・ユーザー・リストには、ユーザーがグループ別に表示されます。

4. [Install Service (サービスのインストール)] ボタンをクリックし、汎用ログオン・サーバーのサービス情報を保存します。

▶ 汎用ログオン用のサービスを解除するには

1. UniLogonSetup.exe を実行します。

〈Unified Logon Server Setup (汎用ログオン・サーバーの設定)〉フォームが表示されます。

2. [Unified Logon Service Name (汎用ログオン・サービス名)] ドロップダウン・メニューで、汎用ログオン・サーバーを選択して [Uninstall Service (サービスのインストール削除)] ボタンをクリックします。

Solution Explorer のセキュリティ

〈セキュリティ・ワークベンチ〉アプリケーション(P00950)を使用して、Solution Explorer のセキュリティを設定します。セキュリティを正しく設定すると、システム内のユーザーは各自のジョブの完了に不可欠な操作の実行のみが許可されることになります。Solution Explorer のみでなく、次の機能に対するセキュリティも設定できます。

- インターネット
- ドキュメンテーション
- ファインカット
- お気に入り
- 有効日付(リリース日)
- 略式コマンド
- ラフカット
- ユニバーサル・ディレクタ

Solution Explorer のセキュリティ設定の理解

次の表は、Solution Explorer の多数の機能に使用できるセキュリティ設定と、それぞれの意味をまとめたものです。

セキュリティ設定	意味
不許可	機能へのユーザー・アクセスが制限されます。
表示	機能への読取専用アクセスが許可されますが、変更機能にはアクセスできません。
追加	システムへのデータの追加は許可されますが、データ削除は許可されません。
変更	ユーザーには、機能へのフル・アクセス権が与えられ、データの変更、追加、または削除は制限されません。

Solution Explorer のセキュリティ設定の表示

Solution Explorer でセキュリティ設定を表示すると、システム内の任意のユーザーについて各機能に対する許可をチェックすることができます。設定を表示するには、対象となるユーザーID で Solution Explorer にログインし、Solution Explorer ホーム・ページのステータス・バーの[セキュリティ]ボタンをクリックします。これにより、〈Solution Explorer セキュリティ〉フォームが表示されます。このフォームではセキュリティの設定は変更できません。

► Solution Explorer のセキュリティ設定を表示するには

1. Solution Explorer の任意のビューで、ステータス・バーの[セキュリティ]ボタン(ロック・アイコン)をダブルクリックします。



2. 〈Solution Explorer セキュリティ〉フォームで、各機能の許可を確認した後に[OK]をクリックしてフォームを閉じます。

Solution Explorer のセキュリティ設定

システムで、異なるグループや各ユーザーのセキュリティ・レベルを設定できます。

► Solution Explorer のセキュリティを設定するには

〈セキュリティ管理〉メニュー(GH9052)から〈セキュリティ・ワークベンチ〉プログラム(P00950)を実行します。

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉で、[フォーム]メニューから[セキュリティの設定] - [Solution Explorer]を選択します。
2. 〈セキュリティ改訂の処理〉フォームで、[ユーザー/ロール]フィールドでセキュリティを設定するユーザー/ロールを入力します。
ビジュアル・アシストを使用すると、〈ユーザー/ロールの検索/選択〉フォームにアクセスしてユーザーまたはロールを検索できます。
3. 機能ごとにセキュリティ設定オプションを選択し、[OK]をクリックします。
4. ロールまたはユーザーに設定を自動的に適用する場合は、[事前設定]ボタンを1つクリックします。
5. セキュリティを構成するユーザーまたはロールごとに、ステップ 2~4 を繰り返します。

注:

略式コマンド・パラメータにセキュリティを適用すると、ユーザーは検索機能を使用して ERP 9.0 オブジェクトを検索することができません。また、[新規タスクの挿入...]機能でお気に入りタスク・ビューに新規タスクを追加できなくなります。

Solution Explorer のデフォルト・セキュリティ設定の使用

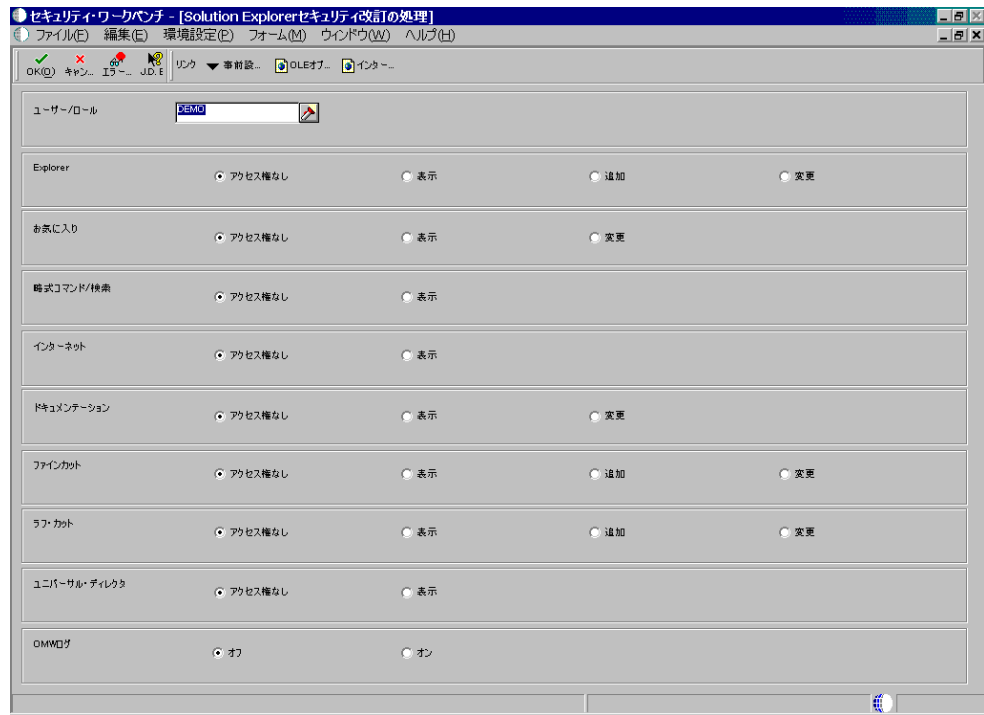
〈Solution Explorer セキュリティの改訂〉フォームでは、エグジット・バーに[事前設定]ボタンがあります。このボタンをクリックすると、システム内の各種ユーザーに関するデフォルトのセキュリティ設定が表示されます。これらのユーザー・タイプは、初級(事前設定 1)、中級(事前設定 2)、および上級ユーザー(事前設定 3)に対応します。[事前設定]ボタンを 1 つクリックすると、各機能の〈セキュリティ改訂〉のデフォルト設定が変更されます。

初級ユーザーには最も限定的なセキュリティ設定、上級ユーザーには最も制限の少ないセキュリティ設定が必要です。これらのデフォルト設定は特定のユーザーに関して微調整できますが、デフォルト設定を使用すると、個々のユーザーだけでなくグループにも適用できるため、システムでセキュリティ設定を手作業で個別に選択する煩雑な作業から解放されます。

▶ デフォルトのセキュリティ設定を使用するには

1. 〈ユーザー/ロール・セキュリティの処理〉フォームで、[追加]をクリックして新規ユーザー用のセキュリティを設定するか、タスクを検索して既存ユーザーを選んで[選択]をクリックします。
2. 〈Solution Explorer セキュリティ改訂の処理〉フォームで、[フォーム]メニューから次のいずれかのオプションを選択します。
 - 事前設定 1
 - 事前設定 2
 - 事前設定 3

クリックした[事前設定]ボタンに基づいて、デフォルトのセキュリティ・オプションが自動的に選択されます。



3. [OK]をクリックします。

用語一時変更

〈用語一時変更〉は、フォームとレポートに表示されるテキストを変更するためのアプリケーションです。フォームのカラム見出しやロー見出しの指定、複数言語や業界用語に合わせたカスタマイズ、および次の ERP 9.0 ソフトウェア・アップグレード時の一時変更の保持などが可能です。

〈用語一時変更〉アプリケーション(P9220)は ERP 9.0 全体のユーザー・インターフェイスに影響するため、このアプリケーションをほとんどのユーザーから保護することが重要になります。対話型またはバッチ・アプリケーションについて〈用語一時変更〉を実行するときには、オブジェクト管理ワークベンチを使用してアプリケーションをチェックアウトした場合と同様に、セントラル・オブジェクト・リポジトリからのアプリケーション・チェックアウトがシミュレーションされます。このため、〈用語一時変更〉アプリケーションの処理中には、他のユーザーはそのアプリケーションをチェックアウトできません。

注:

〈用語一時変更〉に関して〈オブジェクト管理ワークベンチ〉の行が書き込まれるときに、要求側ワークステーションにはスペックは取り込まれません。代わりに、このワークステーションはリレーショナル・データベース・テーブルに直接アクセスします。

用語一時変更の実行後に、更新パッケージを使用してこれらの変更をユーザーに配布(プッシュ)します。アプリケーションへの変更が用語一時変更のみによる場合は、パッケージをビルドする前にアプリケーションをリビルドする必要はありません。

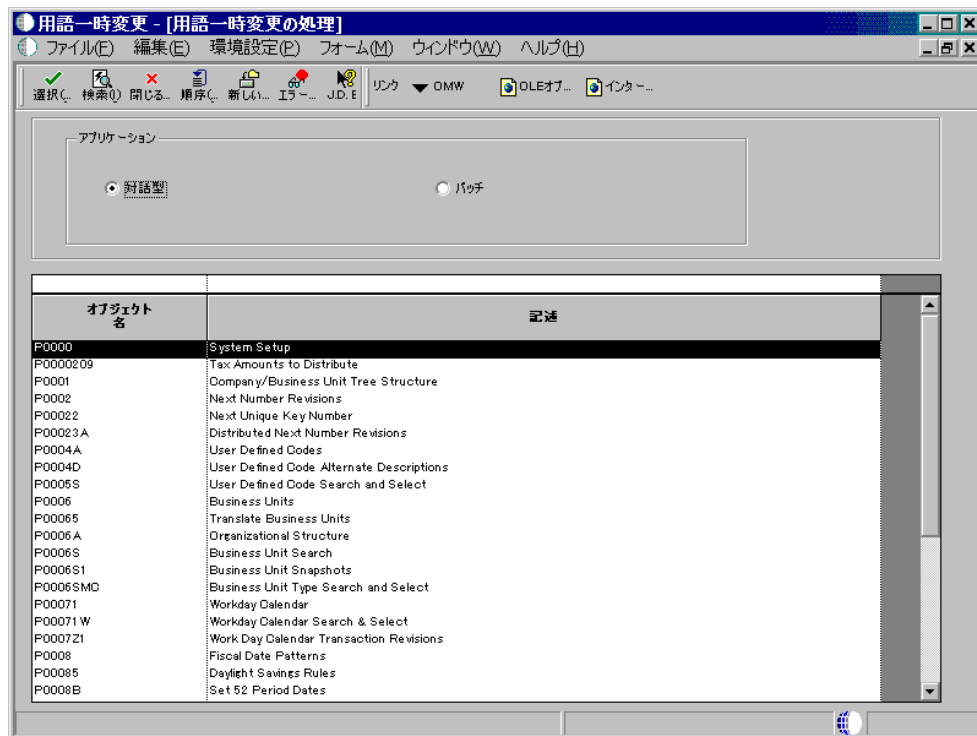
用語一時変更へのアクセス

〈用語一時変更〉アプリケーションには、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニューまたは〈オブジェクト管理ワークベンチ〉アプリケーションでアクセスできます。

▶ 〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニューから〈用語一時変更〉にアクセスするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)で、〈用語一時変更〉プログラム(P9220)を選択します。

1. 〈用語一時変更の処理〉で、[対話型]または[バッチ]を選択して[検索]をクリックします。
検索を絞り込むには QBE を使用できます。



2. アプリケーションを選んで[選択]をクリックします。

選択したアプリケーションがチェックアウトされている場合は、「このオブジェクトは現在、用語一時変更によって使用されています。チェックアウトできません」というエラー・メッセージが表示されます。

このアプリケーションの用語一時変更を後で作成するか、または、そのユーザーがチェックインできるか、あるいはチェックアウトを消去できるかを確認するためにアプリケーションのユーザーに連絡する必要があります。

3. 〈SAR 要求〉フォームが表示されたら、次のフィールドに値を入力します。

- SAR No.

SAR 番号を入力します。このフォームが表示されるのは、システム管理者が、一時変更の SAR 番号を要求するように〈用語一時変更〉の処理オプションを設定している場合です。

4. [OK]をクリックします。

〈対話型用語一時変更〉または〈バッチ用語一時変更〉フォームが表示されます。選択したアプリケーションに関連付けられている対話型フォームまたはバッチ・バージョンが、すべてグリッドに表示されます。左側にプラス記号(+)が付いているローは、どれでも展開できます。

〈用語一時変更〉アプリケーションは、オブジェクト管理ワークベンチでこのアプリケーションをチェックアウトし、〈用語一時変更〉でそのアプリケーションを作業している間はそのアプリケーションが別のユーザーによってチェックアウトされないようにします。一時変更の作成を完了した後は、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉からチェックアウトが消去されます。

フィールド記述

記述	用語解説
アプリケーション	<p>システム・オブジェクトを識別する名前。J.D. Edwards ERP アーキテクチャはオブジェクト指向です。ソフトウェアの個々のオブジェクトはすべてのアプリケーションのビルディング・ブロックとなっており、複数のアプリケーションでオブジェクトを再使用できます。各オブジェクトは、オブジェクト・ライブラリで管理されます。オブジェクトの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">○ バッチ・アプリケーション (レポートなど)○ 対話型アプリケーション○ ビジネス・ビュー○ ビジネス関数○ ビジネス関数データ構造体○ イベント・ルール○ メディア・オブジェクト・データ構造体

記述	自由形式の 80 桁の記述。
----	----------------

▶ 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉から〈用語一時変更〉にアクセスするには

[略式コマンド]に“OMW”と入力して[Enter]キーを押します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[検索]をクリックしてオブジェクトを選択します。
2. 対話型またはバッチ・アプリケーションを選択して、[設計]ボタンをクリックします。

〈対話型アプリケーション設計〉フォームまたは〈バッチ・アプリケーション設計〉フォームが表示されます。

3. [設計ツール]タブで[用語一時変更]を選択します。

「警告! 用語一時変更にアクセスしています。このアプリケーションは現在チェックインされているオブジェクトを一時変更します。変更するには権限が必要です。」という警告が表示されます。

4. 〈用語一時変更〉を変更する権限が与えられている場合は、〈用語一時変更の警告〉で[OK]をクリックします。

5. 〈SAR 要求〉フォームが表示されたら、次のフィールドに値を入力します。

- SAR 番号

SAR 番号を入力します。このフォームが表示されるのは、システム管理者が一時変更の SAR 番号を要求するように〈用語一時変更〉の処理オプションを設定している場合です。

6. 〈用語一時変更の処理〉で、[選択]をクリックします。

〈対話型用語一時変更〉または〈バッチ用語一時変更〉フォームが表示されます。アプリケーションに関連付けられている対話型フォームまたはバッチ・バージョンが、すべてグリッドに表示されます。左側にプラス記号(+)が付いているローは、どれでも展開できます。

〈用語一時変更〉アプリケーションは、オブジェクト管理ワークベンチでこのアプリケーションをチェックアウトし、〈用語一時変更〉でそのアプリケーションを作業している間はそのアプリケーションが別のユーザーによってチェックアウトされないようにします。一時変更の作成を完了した後は、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉からチェックアウトが消去されます。

用語一時変更の作成

用語一時変更を作成することで、ERP 9.0 の対話型アプリケーションとバッチ・アプリケーションをカスタマイズできます。用語一時変更の作成後に、更新パッケージを使用してこれらの変更をユーザーに配布（プッシュ）します。たとえば、〈OCM の確認〉レポートの用語一時変更を作成できます。用語一時変更の作成後に、〈更新パッケージ〉を使用してこれらの変更をユーザーに配布（プッシュ）します。

アプリケーションに対する変更が用語一時変更のみによるものであれば、パッケージをビルドする前にアプリケーションをリビルドする必要はありません。

注:

レポートの用語一時変更の作成時には、一時変更はバージョン・レベルで実行します。バージョンを実行すると、レポートにはデータ辞書記述の代わりに用語一時変更が表示されます。用語一時変更は、基本レポートのスペックやそのレポートの他のバージョンには影響しません。

▶ 対話型アプリケーションの用語一時変更を作成するには

注:

〈用語一時変更〉フォームへのアクセス方法については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「用語一時変更へのアクセス」を参照してください。

1. 英語以外の言語を処理するには、〈対話型用語一時変更〉で次のフィールドに情報を入力して[検索]をクリックします。
 - 言語
2. 言語コードを入力します。用語一時変更を英語で作成する場合は、このフィールドを空白にしてください。
3. グリッドに表示されたフォームの 1 つの横にある[+]アイコンをダブルクリックします。
そのフォームが展開され、検索/表示のテキスト、コントロールのテキスト、グリッド・カラムのテキスト、エグジットのテキスト、テキスト変数など、そのフォームで使用可能なテキストのタイプが表示されます。
4. テキスト・タイプの 1 つの[+]アイコンをダブルクリックします。
そのテキスト・タイプが展開され、一時変更できるすべてのテキストが表示されます。
5. 用語一時変更を作成するには、特定項目の[記述]カラムのテキストを変更します。一時変更を作成した後に[OK]をクリックします。

注:

データ項目の記述によっては、復帰と改行文字が含まれているものがあります。これらの記述(そのローの左に特殊なアイコンが表示されます)の用語一時変更を作成するには、データ項目ローを選び、[ロー]メニューから[長文テキストの改訂]を選択します。

6. 〈長文テキストの改訂〉で、フィールドのテキストを変更して[OK]をクリックします。

〈用語一時変更〉アプリケーションは、オブジェクト管理ワークベンチでこのアプリケーションをチェックアウトし、〈用語一時変更〉でそのアプリケーションを作業している間はそのアプリケーションが別のユーザーによってチェックアウトされないようにします。一時変更の作成を完了した後は、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉からチェックアウトが消去されます。

ただし、アプリケーションに適用された記述変更を実際に確認するには、最初にアプリケーションをローカル・クライアント・マシンにチェックアウトしてから実行する必要があります。そのためには、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉の[チェックアウト]または[取得]ボタンをクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
言語	フォームおよびレポートで使用する言語を指定するユーザー定義コード(01/LP)。指定する言語は、システム・レベルまたはユーザー使用言語に設定されている必要があります。
フォーム名	フォームを識別するための ID
記述	自由形式の 80 桁の記述。
一時変更	特定のテキスト項目のデフォルト値が一時変更されたかどうかを示すコード。一時変更は、開発者がデータ辞書の値や現在のテキストが適当でなかったり特定のアプリケーションに対して明確でないと判断した場合、対話型またはバッチ・アプリケーションの展開中に定義されます。対話型またはバッチ・アプリケーションが実行されると、テキストが変更されフラグが設定されます。 有効な値は次のとおりです。 0 テキストは当初の値です。データ項目に関連するフィールドで、データ辞書と同じです。 1 元のテキストを表します。ほとんどの場合、データ辞書のデフォルトは一時変更されています。
データ項目	情報単位を識別および定義するコード。8 文字のアルファベット順によるコード。ブランクおよび次の特殊文字(%、&、+など)は使用できません。システム・コード 55 から 59 を使用する新しい項目を作成します。エイリアスに変更できません。
テキストタイプ	ユーザー定義名称または備考。
可視	データ項目またはデータ項目のテキストがフォームまたはレポートで表示されるかどうかを示します。これは、フォームまたはレポートの開発時に開発者がデータ処理のためにデータ項目が必要でも、フォームやレポートに表示されるべきではないと判断した時に開発者が定義します。有効な値は、次の通りです。 1 データ項目またはデータ項目テキストをフォームまたはレポートで表示 0 データ項目またはデータ項目テキストをフォームまたはレポートで非表示

参照

- ERP 9.0 によるオブジェクトのチェックイン/チェックアウトについては、『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」と「チェックアウト・ログ」

▶ バッチ・アプリケーションの用語一時変更を作成するには

注:

〈用語一時変更〉フォームへのアクセス方法については、「用語一時変更へのアクセス」を参照してください。

1. 英語以外の言語を処理するには、〈バッチ用語一時変更〉で次のフィールドに情報を入力して[検索]をクリックします。
 - 言語
2. 言語コードを入力します。用語一時変更を英語で作成する場合は、このフィールドを空白にしてください。
3. グリッドに表示されたバージョンの 1 つの横にある[+]アイコンをダブルクリックします。
そのバージョンが展開され、ページ見出しやグループ・セクションなど、そのバージョンで使用可能なテキストのタイプが表示されます。
4. テキスト・タイプのいずれかの横にある[+]アイコンをダブルクリックします。
そのテキスト・タイプが展開され、一時変更できるすべてのテキストが表示されます。
5. 用語一時変更を作成するには、特定項目の[記述]カラムのテキストを変更します。
6. 一時変更を作成した後に[OK]をクリックします。

〈用語一時変更〉アプリケーションは、オブジェクト管理ワークベンチでこのアプリケーションをチェックアウトし、〈用語一時変更〉でそのアプリケーションを作業している間はそのアプリケーションが別のユーザーによってチェックアウトされないようにします。一時変更の作成を完了した後は、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉からチェックアウトが消去されます。

フィールド記述

記述	用語解説
言語	フォームおよびレポートで使用する言語を指定するユーザー定義コード(01/LP)。指定する言語は、システム・レベルまたはユーザー使用言語に設定されている必要があります。
バージョン	ソフトウェアのバージョン識別名。
セクション	ユーザー定義名称または備考。
記述	自由形式の 80 桁の記述。

一時変更	<p>特定のテキスト項目のデフォルト値が一時変更されたかどうかを示すコード。一時変更は、開発者がデータ辞書の値や現在のテキストが適当でなかったり特定のアプリケーションに対して明確でないと判断した場合、対話型またはバッチ・アプリケーションの展開中に定義されます。対話型またはバッチ・アプリケーションが実行されると、テキストが変更されフラグが設定されます。</p> <p>有効な値は次のとおりです。</p> <p>0 テキストは当初の値です。データ項目に関連するフィールドで、データ辞書と同じです。</p> <p>1 元のテキストを表します。ほとんどの場合、データ辞書のデフォルトは一時変更されています。</p>
データ項目	<p>情報単位を識別および定義するコード。8 文字のアルファベット順によるコード。空白および次の特殊文字(%、&、+など)は使用できません。システム・コード 55 から 59 を使用する新しい項目を作成します。エイリアスは変更できません。</p>
制御タイプ	<p>ユーザー定義名称または備考。</p>
表示可能	<p>データ項目またはデータ項目のテキストがフォームまたはレポートで表示されるかどうかを示します。これは、フォームまたはレポートの開発時に開発者がデータ処理のためにデータ項目が必要でも、フォームやレポートに表示されるべきではないと判断した時に開発者が定義します。有効な値は、次の通りです。</p> <p>1 データ項目またはデータ項目テキストをフォームまたはレポートで表示 0 データ項目またはデータ項目テキストをフォームまたはレポートで非表示</p>

用語一時変更の検討

〈用語一時変更〉を使用すると、ERP 9.0 で他のユーザーがデータ項目を一時変更した部分をすべて検討できます。フォームまたはレポートで一時変更箇所を表示できます。

▶ 用語一時変更を検討するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)で、〈用語一時変更〉プログラム(P9220)を選択します。

1. 〈用語一時変更の処理〉で、[フォーム]メニューから[データ項目の検索]を選択します。
2. 〈一時変更データ項目の検索〉で、次のフィールドに入力して[OK]をクリックします。
 - データ項目
検索するデータ項目を入力します。
3. 次のいずれかに値を入力してアプリケーション検索の対象を選択します。
 - 対話型アプリケーション
 - バッチ
 - 両方

4. 次のオプションのいずれかを選択します。

- 対話型

検索結果を対話型アプリケーションで表示するように選択した場合は、検索完了時に〈データ項目ロケータ〉フォームが表示されます。このフォームには、指定したデータ項目が表示されるすべてのアプリケーションのリストが表示されます。

- 印刷済みレポート

検索結果をレポートに表示するように選択した場合は、PDF ファイルが作成され、参照または印刷できます。

用語一時変更のリセット

用語一時変更はオリジナルのデータ辞書定義に再設定することができます。複数の用語一時変更をデフォルトのデータ辞書定義に再設定する作業が必要な場合に備えて、ERP 9.0 では一時変更を対話型フォーム・レベル、バッチ・バージョン・レベル、対話型およびバッチ・アプリケーション・レベルで再設定できるように自動化されたプロセスが用意されています。フォーム・レベルで再設定する場合は、すべての用語一時変更を〈住所録〉アプリケーションの〈住所録の処理〉フォーム(W01012B)のような特定のフォーム上で再設定します。アプリケーション・レベルで用語一時変更をリセットする場合は、〈住所録の改訂〉プログラム(P01012)や〈宛名ラベルの印刷〉レポート(R01401)などの対話型/バッチ・アプリケーション全体で、すべてのフォームやバージョンにわたってすべての用語一時変更をリセットしてください。

はじめる前に

- 〈用語一時変更〉アプリケーションにアクセスします。『システム・アドミニストレーション』ガイドの「用語一時変更へのアクセス」を参照してください。

▶ 用語一時変更を再設定するには

1. 〈用語一時変更の処理〉フォームで、次のどちらかのオプションをクリックして[検索]をクリックします。

- 対話型

- バッチ

2. アプリケーションを選んで[選択]をクリックします。

アプリケーションのタイプに応じて、次のどちらかのフォームが表示されます。

- 対話型アプリケーションを選択した場合は、〈対話型用語一時変更〉フォームが表示されます。このフォームのグリッドには、選択したアプリケーションの関連フォームが表示されます。

- バッチ・アプリケーションを選択した場合は、〈バッチ用語一時変更〉フォームが表示されます。このフォームのグリッドには、選択したアプリケーションの関連バージョンが表示されます。

3. グリッドのフォームまたはバージョンの 1 つでロー・ヘッダーの[+]アイコンをダブルクリックし、フォームの場合はテキスト・タイプ、バージョンの場合はセクション・タイプを表すロー・ヘッダーで[+]アイコンをダブルクリックします。

そのグリッドが展開され、テキスト・タイプまたはセクション・タイプに関連するデータ項目が表示されます。

4. 再設定するデータ項目を選択し、[ロー]メニューから[記述のリセット]を選択します。

注:

選択したデータ項目の用語一時変更が存在しなければ、[記述のリセット]メニュー・オプションは非アクティブになっています。

5. [OK]をクリックして〈用語一時変更の処理〉フォームに戻ります。

用語一時変更を再設定した後に[キャンセル]をクリックして〈用語一時変更の処理〉フォームに戻っても、処理は取り消されません。データ項目はデフォルトのデータ辞書定義のままになっています。

▶ **フォーム上のすべての用語一時変更を再設定するには(対話型)**

1. 〈用語一時変更の処理〉フォームで、[対話型]オプションをクリックして[検索]をクリックします。
2. アプリケーションを選んで[選択]をクリックします。
グリッドには、アプリケーションで使用するすべてのフォームが表示できます。
3. フォームを選択し、[ロー]メニューから[バージョンごとリセット]を選択します。
フォームからすべての用語一時変更がクリアされ、データ項目はデータ辞書の定義にリセットされます。

注意:

[フォームでリセット]を選択する場合は、確認ボックスやテスト・モードはありません。

▶ **バッチ・バージョン内のすべての用語一時変更をリセットするには**

1. 〈用語一時変更の処理〉フォームで、[バッチ]オプションをクリックして[検索]をクリックします。
2. アプリケーションを選んで[選択]をクリックします。
グリッドには、アプリケーションで使用するすべてのバージョンが表示できます。
3. バージョンを選択し、[ロー]メニューから[バージョンごとリセット]を選択します。
そのバージョンからすべての用語一時変更がクリアされ、データ項目が基本定義に再設定されます。データ項目の基本定義が存在しなければ、デフォルトのデータ辞書定義に再設定されます。

注意:

[バッチごとによりセット]を選択する場合は、確認ボックスやテスト・モードはありません。

▶ 対話型/バッチ・アプリケーション内のすべての用語一時変更をリセットするには

1. 〈用語一時変更の処理〉フォームで、次のどちらかのオプションをクリックして[検索]をクリックします。

- 対話型
- バッチ

2. アプリケーションを選んで[選択]をクリックします。

アプリケーションのタイプに応じて、〈対話型用語一時変更〉フォームまたは〈バッチ用語一時変更〉フォームが表示されます。グリッドには、対話型アプリケーションの場合はフォーム、バッチ・アプリケーションの場合はバージョンが表示されます。

3. [フォーム]メニューから対話型アプリケーションの場合は[アプリケーションによるリセット]、バッチ・アプリケーションの場合は[バッチごとによりセット]を選択します。

アプリケーション全体の用語一時変更がクリアされ、データ項目が基本定義にリセットされます。データ項目の基本定義が存在しなければ、デフォルトのデータ辞書定義にリセットされます。

注意:

[アプリケーションによるリセット]または[バージョンごとによりセット]を選択する場合は、確認ボックスやテスト・モードはありません。

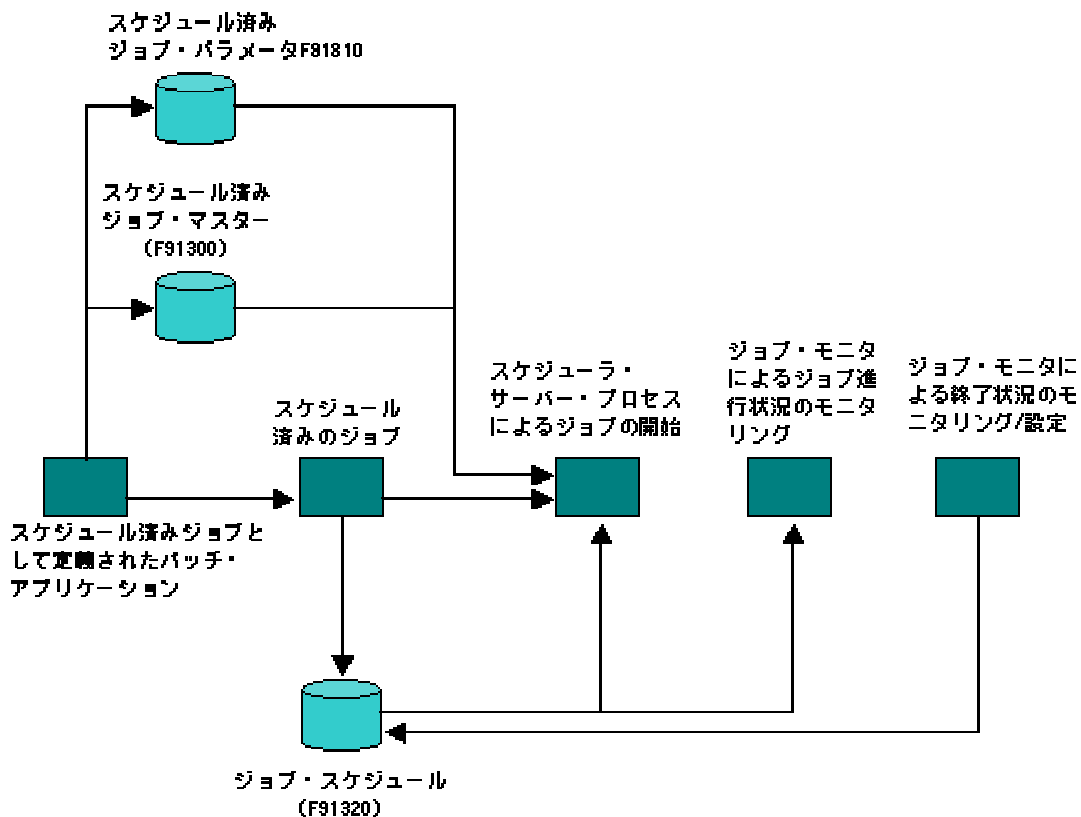
スケジューラ

大量のマシン・リソースを消費するバッチ・ジョブや、ユーザーをサインオフさせる必要があるバッチ・ジョブは、通常の業務時間の終了後に実行します。また、日中に予定した間隔で、あるいは月間や年間を通じて定期的に行うことができるような柔軟性が必要となる場合もあります。

〈スケジューラ〉アプリケーションを使用すると、定義したスケジュールに従って就業時間の終了後や、1日中定期的に実行するように、バッチ・ジョブのスケジュールを設定できます。ジョブのスケジュールは、特定の時刻、日次、週次、月次、年次、または指定した期間に基づいて設定できます。また、ジョブが異常終了した場合にそのジョブを再開するように、〈スケジューラ〉を設定することもできます。

さらに、ジョブを実行するサーバーやタイム・ゾーンは、地域設定に関係なく指定できます。〈スケジューラ〉システムでは、秒数ではなく分数に基づく協定世界時(UCT)の修正版が使用されます。

次の図は処理スケジュールを表しています。



スケジュールしたジョブを定義すると、そのジョブのパラメータがスケジュール・ジョブ・マスター (F91300)に保存されます。

ジョブのスケジュール設定後に、そのジョブを起動する各時刻を示すレコードがジョブ・スケジュール・テーブル(F91320)に書き込まれます。ジョブが実行される時には、〈ジョブ・モニタ〉がジョブの進行状況を監視します。

ジョブが終了すると、〈ジョブ・モニタ〉によってそのジョブに終了状況が割り当てられ、ジョブ・スケジュール・テーブル(F91320)でそのジョブのレコードが正常終了またはエラーによる異常終了を示すように更新されます。

ジョブのスケジュール

〈スケジューラ〉を使ってバッチ処理を実行するようにスケジュールを設定するときに、ジョブに対して定期的なパターンを追加することもできます。これは、週に1度、月に1度、年に1度というように、そのジョブが指定された間隔で再開されることを意味します。ジョブのスケジュールには、そのジョブが実行されるサーバーのローカル時間を使用します。

参照

『システム・アドミニストレーション』ガイドで、次のトピックを参照してください。

- ジョブの自動スケジュールについては「定期ジョブのスケジュール」
- ジョブ・プロパティの変更については「ジョブ・プロパティの処理」
- スケジューラ・オプションの変更については「スケジューラ用処理オプションの入力」

はじめる前に

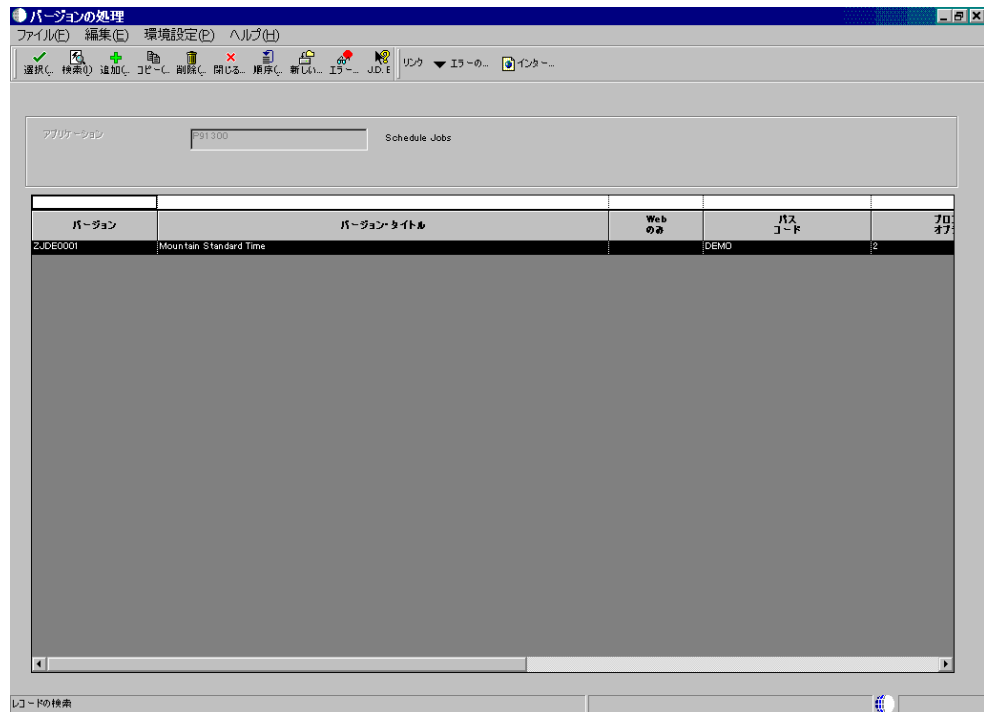
- サーバーのタイム・ゾーンを使用するには、最初に使用するタイム・ゾーンを指定する必要があります。そのためには、〈スケジューラ〉の処理オプション〈バージョンの処理〉フォーム上のバージョン ZJDE0001)をコピーし、それをニーズに合わせて修正します。複数のタイム・ゾーンを使用する場合は、〈ジョブのスケジュール〉アプリケーションを起動するたびに〈バージョンの処理〉フォームが表示されるように、処理オプションを修正する必要があります。これにより、ジョブのスケジュール設定に使用するタイム・ゾーンに合わせて適切なバージョンを選択できます。

ジョブのスケジュール設定

ジョブのスケジュールを設定するときには、そのジョブを実行するタイム・ゾーンが指定されている〈スケジューラ〉のバージョンを選択してから、ジョブのパラメータを定義します。たとえば、ジョブをドイツにあるワークステーションから投入し、オーストラリアにあるサーバー上で実行する場合は、そのジョブが指定の時刻に実行されるように、オーストラリアのタイム・ゾーンが指定されたバージョンを選択します。

▶ ジョブのスケジュールを設定するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ジョブ・スケジューラ〉メニュー(GH9015) - 〈ジョブのスケジュール〉プログラム(P91300)を選択します。〈バージョンの処理〉フォームが表示されます。



注:

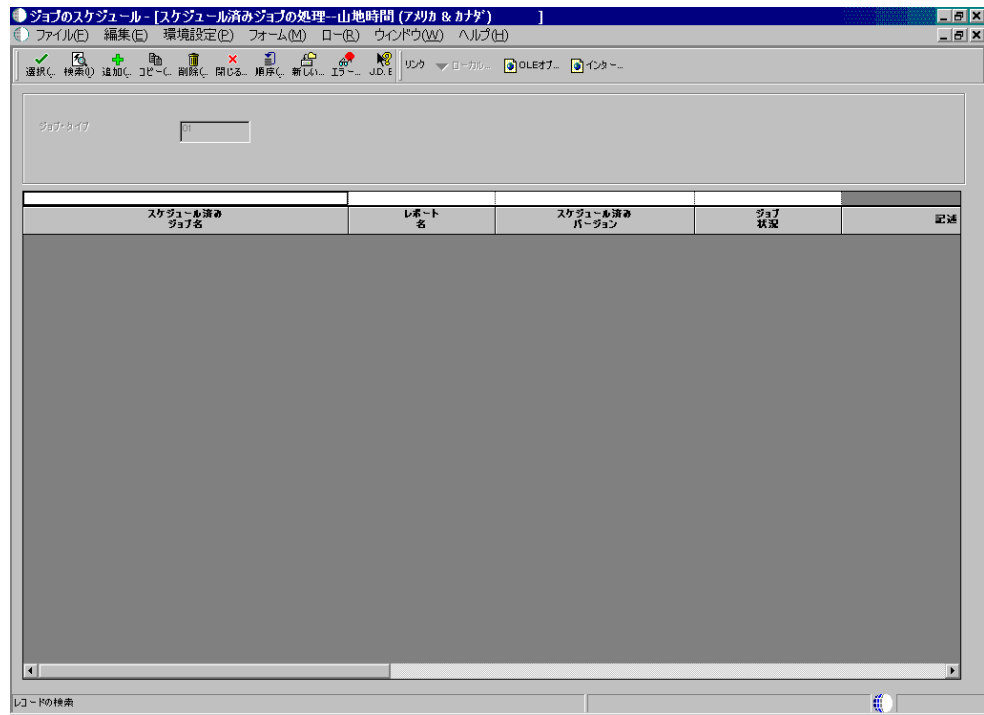
タイム・ゾーンを1つしか使用しない場合は、バージョンの選択を求めるプロンプトが表示されないことがあります。この場合、〈バージョンの処理〉フォームは表示されず、次のステップをスキップできます。〈ジョブのスケジュール〉プログラム(P91300)の〈バージョンの処理〉は、メニュー・プロパティで削除できます。GH9015/P91300 は、バージョン・プロンプトが表示される設定で出荷されます。

1. 〈バージョンの処理〉フォームで、スケジュール・ジョブを実行するタイム・ゾーンが指定されているバージョンを選択します。

たとえば、Eastern Time Zone(東部タイム・ゾーン)が指定されているバージョンを選択すると、ジョブを東部標準時(EST)に基づいて実行できます。

注:

バージョン ZJDE0001 を選択すると、〈スケジュール〉の処理オプションを入力できます。処理オプションの入力方法の詳細については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「スケジュール用処理オプションの入力」を参照してください。



2. 〈スケジュール済みジョブの処理〉で、[追加]をクリックします。

3. 〈スケジュール情報の追加〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- スケジュール済みジョブ名

- スケジュール済みジョブ状況
- スケジュール済みバッチ・アプリケーション
- スケジュール済みバージョン
- スケジュール済み開始日付/時刻

4. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
スケジュール済みジョブ名	スケジュール済みのジョブをシステムとユーザーに固有に識別します。月次締めや夜間のバックアップなどの機能を指示するのに使用できます。
スケジュール済みジョブ状況	スケジュールされたジョブの現在の状況。状況がアクティブであるかぎり、スケジューラは、ジョブをサーバーに投入するかどうか指定します。スケジュールされた終了日付になると、状況が無効に変更されます。スケジューラによるジョブの投入を停止するには、終了日付になる前に状況を無効(または一時停止)に変更します。ジョブを再度含める場合は、ジョブを再度有効にすることができます。この場合、有効にできるジョブは、終了日付が将来になっている場合のみです。
スケジュール済み開始日付/時刻	スケジュールされたジョブをサーバーに投入した次の日付
スケジュール済みバッチ・アプリケーション	スケジューラがサーバーに投入するレポートのオブジェクト名
スケジュール済みバージョン	実行するようスケジュールされたレポートのバージョン。特定のデータ選択やバッチジョブで使用される順序を識別します。

定期ジョブのスケジューリング

ジョブを複数回実行する場合があります。このような場合は、1 時間に 1 度、週に 1 度、2 週間に 1 度、または月に 1 度など、ジョブ間隔を設定できます。また、終了までのジョブの実行回数を指定したり、特定の日付以降は実行されないようにジョブの終了日付を定義することもできます。

▶ 定期ジョブのスケジュールを設定するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈ジョブ・スケジューラ〉メニュー(GH9015) - 〈ジョブのスケジュール〉プログラム(P91300)を選択します。

1. 〈バージョンの処理〉フォームで、スケジュール・ジョブを実行するタイム・ゾーンが指定されているバージョンを選択します。
2. 〈スケジュール済みジョブの処理〉で、[追加]をクリックします。
3. 〈スケジュール情報の追加〉フォームで、[フォーム]メニューから[定期]を選択します。

4. 〈定期スケジュール情報の改訂〉フォームで、次のオプションを1つ選択し、続いて表示される関連フィールドに値を入力します。

- 時刻

[日ごと]、または

[間隔(週ごと)]

ジョブは指定した時間間隔で実行されますたとえば、40 分間隔または 8 時間間隔で実行されます。

- 日

ジョブは指定した日数間隔、または各平日に実行されますたとえば、7 日間隔または各平日に実行されます。

- 週

[n 週間隔の特定曜日]

日、月、火、水、木、金、土

ジョブは、指定した週間隔で指定した曜日に実行されますたとえば、2 週間隔の月曜日に実行されます。

- 月

x 月間隔で n 日に

n 月間隔で 1 日または末日、特定の日付、日曜、金曜など

ジョブは x 月ごとの指定した日付に、または n 月ごとの特定の曜日に実行されます。たとえば、ジョブは 4 カ月間隔で 1 日に、または 2 カ月ごとの最後の金曜に実行されます。

- 期間

x 期間間隔で n 日に

n 期間間隔で、1 日または末日、特定の日付、日曜、金曜など

- 会社

- 年

毎月、日付

月の 1 日または末日、特定の日付、日曜、金曜など、または

第 1 期、最終期などの x 日、または

第 1 期、最終期などの 1 日または末日、特定の日付、日曜、金曜など

ジョブは年度中の指定した時点で実行されます。たとえば、ジョブを毎年 12 月の最終日 (31 日) に実行できます。ジョブを 1 月 1 日ごと、6 月の第 1 月曜ごと、最終期間の 15 日ごと、または第 4 期の第 2 火曜日ごとに実行するなど。

5. 次のオプションを 1 つ選択し、〈スケジューラ〉によるジョブの投入を停止する時期を指定します。

- 終了日なし

- 反復回数:

x は、期限切れまでにジョブを実行できる回数です。

- 終了日:

ジョブを期限切れにする月、日付、または年を入力します。

6. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
開始予定日付	スケジュールされたジョブをサーバーに投入した次の日付
時刻	スケジュールされたジョブを実行する間隔のタイプ。毎日、週ごと、月ごと、1 年ごとなど。
日	スケジュールされたジョブを実行する間隔のタイプ。毎日、週ごと、月ごと、1 年ごとなど。
週	スケジュールされたジョブを実行する間隔のタイプ。毎日、週ごと、月ごと、1 年ごとなど。

月	スケジュールされたジョブを実行する間隔のタイプ。毎日、週ごと、月ごと、1年ごとなど。
期間	スケジュールされたジョブを実行する間隔のタイプ。毎日、週ごと、月ごと、1年ごとなど。
年	スケジュールされたジョブを実行する間隔のタイプ。毎日、週ごと、月ごと、1年ごとなど。
終了日なし	これらのオプションによって、スケジューラがジョブをアクティブと認識する時間を制限します。ジョブを実行する回数、あるいはジョブを実行できる最終日時を指定することができます。終了日オプションが選択されない場合は、ジョブは常にアクティブであると認識されます。
反復回数:	これらのオプションによって、スケジューラがジョブをアクティブと認識する時間を制限します。ジョブを実行する回数、あるいはジョブを実行できる最終日時を指定することができます。終了日オプションが選択されない場合は、ジョブは常にアクティブであると認識されます。
終了日:	これらのオプションによって、スケジューラがジョブをアクティブと認識する時間を制限します。ジョブを実行する回数、あるいはジョブを実行できる最終日時を指定することができます。終了日オプションが選択されない場合は、ジョブは常にアクティブであると認識されます。

スケジュール・ジョブの改訂

ジョブに関する情報を改訂する場合があります。たとえば、ジョブ状況を[アクティブ]や[非アクティブ]に変更する場合などで、スケジュール済みジョブとして新しいバッチ処理を入力したり、ジョブ開始日付/時刻を変更することもあります。

► スケジュール・ジョブを改訂するには

〈ジョブ・スケジューラ〉メニュー(GH9015)から〈ジョブのスケジュール〉を選択します。

1. 〈バージョンの処理〉で、ジョブを実行するタイム・ゾーンが指定されているバージョンを選んで[選択]をクリックします。
2. 〈スケジュール済みジョブの処理〉で、改訂するジョブを選んで[ロー]メニューから[ジョブの改訂]をクリックします。

ジョブのスケジュール - [スケジュール情報の追加-Mountain Time (US & Canada)]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(E) フォーム(M) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

OK(O) キャンセル 終了 ヘルプ リンク 定期的 OLEDB インタラクティブ

スケジュールジョブ名 TOKYO JOB

スケジュールジョブ状況 01

スケジュール済みバッチ・アプリケーション R09801 General Ledger Post Report

スケジュール済みバージョン 2JDE0001 General Ledger Post

スケジュール済み開始日付/時刻 6/17/2003 12:00:00

3. <スケジュール情報の追加>で、必要に応じて次のフィールドを修正して[OK]をクリックします。
 - スケジュール済みジョブ状況
 - スケジュール済みバッチ・アプリケーション
 - スケジュール済みバージョン
 - スケジュール済み開始日付/時刻
4. スケジュール・ジョブから定期指定を削除する場合は、[フォーム]メニューから[定期的の削除]を選択します。
5. スケジュール・ジョブにカテゴリ・コードを追加する場合は、[フォーム]メニューから[カテゴリ・コード]を選択します。
フォームが表示されます。

ジョブのスケジュール - [スケジューラ・カテゴリ・コード]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(E) ウインドウ(W) ヘルプ(H)

OK(O) キャンセル エラー... JD(E) リンク ▼ エラーの... OLEオブ... インター...

スケジュールジョブ名

スケジュールジョブタイプ

カテゴリコード1

カテゴリコード2

カテゴリコード3

カテゴリコード4

カテゴリコード5

6. 〈スケジューラ・カテゴリ・コード〉で、このジョブの上級オプションを取り込む場合は、[フォーム]メニューからから[上級オプション]を選択します。
- 〈上級オプションのスケジュール〉フォームが表示されます。

ジョブのスケジュール - [上級オプションのスケジュール]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(E) フォーム(M) ウインドウ(W) ヘルプ(H)

OK(O) キャンセル デフォルト エラー... JD(E) リンク ▼ パラメータ... OLEオブ... インター...

一時変更の起動

スケジュール読み環境

スケジュール読み管理サーバー

スケジュール読みユーザー

スケジュール読みユーザー・ロール

スケジュール読みパスワード

注:

上級オプションの入力については『システム・アドミニストレーション』の「ジョブ・プロパティの処理」を参照してください。

また、〈スケジュール済みジョブの処理〉でジョブを選び、[ロー]メニューから[変更状況]を選択すると、ジョブをアクティブ化または非アクティブ化することもできます。

スケジュール用処理オプションの入力

〈スケジュール〉の処理オプションでは、タイム・ゾーン、ジョブの定期間隔、およびジョブ・タイプの優先情報とデフォルト値を指定できます。処理オプションを入力または変更するには、次の 2 つの方法があります。

- 〈バージョンの処理〉フォームでバージョン ZJDE0001 を選択します。
- 〈ジョブ・スケジュール〉メニュー(GH9015)から〈ジョブのスケジュール〉をハイライトし、マウスの右ボタンをクリックして[プロンプト] - [処理オプション...]を選択します。

〈スケジュール〉の処理オプション・フォームでは、次の 3 つのタブでさまざまなパラメータを変更できます。

表示

タイム・ゾーン情報を入力します。

現地時刻の表示

現地時刻

夏時間に時刻を調整するには、“1”を入力してください。調整しない場合は、“0”を入力してください。

夏時間に対して調整する場合は、この夏時間ルールを適用してください。

処理

スケジュール・レコードに関する情報を入力します。

最大ジョブ・スケジュールレコード数

デフォルト

ジョブ・タイプ、ジョブの発生、およびジョブの再投入に関する情報を入力します。

デフォルトのジョブタイプ

ジョブの発生回数

ジョブの最大再投入数

すべてのジョブまたはローカル・ジョブの検討

必要に応じて、すべてのタイム・ゾーンのすべてのジョブ、またはローカル・ジョブのみを検討できます。現在使用しているビューに応じて、他の選択肢は選択できなくなります。たとえば、現在、ローカル・ジョブを表示している場合、[すべてのジョブ]しか選択できません。

▶ すべてのジョブまたはローカル・ジョブを検討するには

1. 〈スケジュール済みジョブの処理〉で、[フォーム]メニューから[すべてのスケジュール]を選択します。
2. すべてのスケジュールまたはローカル・ジョブを選択します。

フィールド記述

記述	用語解説
ジョブ状況	スケジュールされたジョブの現在の状況。状況がアクティブであるかぎり、スケジュールは、ジョブをサーバーに投入するかどうか指定します。 スケジュールされた終了日付になると、状況が無効に変更されます。 スケジュールによるジョブの投入を停止するには、終了日付になる前に状況を無効(または一時停止)に変更します。ジョブを再度含める場合は、ジョブを再度有効にすることができます。この場合、有効にできるジョブは、終了日付が将来になっている場合のみです。
レポート名	スケジュールがサーバーに投入するレポートのオブジェクト名
スケジュール済みバージョン	実行するようスケジュールされたレポートのバージョン。特定のデータ選択やバッチジョブで使用される順序を識別します。

ジョブのプロパティの処理

[上級オプション]を使用すると、ジョブを実行するロケーションや環境など、ジョブのプロパティを一時変更したり、異常終了したジョブをシステムに再投入させるかどうかや、ジョブの有効期限を変更するかどうかを指定できます。

また、エラーをjde.log または jddebug.log に記録するかどうか、およびシステムにプリンタのロケーションとジョブ待ち行列を一時変更させるかどうかの定義も可能です。さらに、パラメータを渡す場合は、ジョブにレポート・インターコネクトを追加できます。

注:

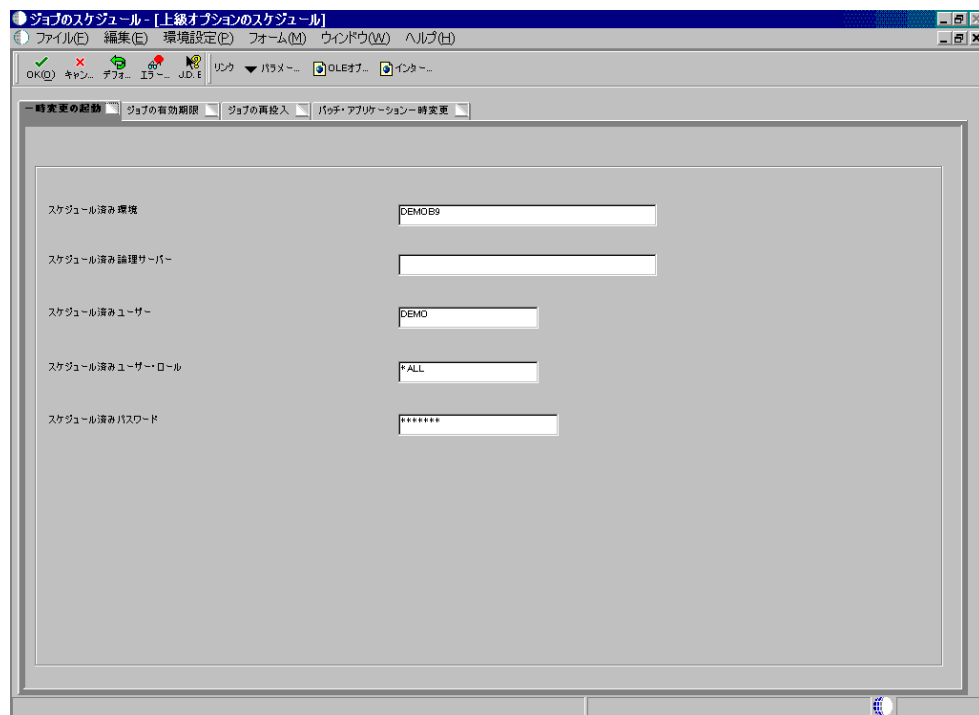
上級オプション・アプリケーションのデフォルト設定を復元するには、〈上級オプションのスケジュール〉で[フォーム]メニューから[デフォルト]を選択します。

環境の一時変更

環境は一時変更する場合があります。たとえば、ジョブを実行する環境が使用できない場合や、ジョブをスケジュールするときにログインした環境とは異なる場合は、環境を一時変更する必要があります。

▶ 環境を一時変更するには

1. 〈スケジュール済みジョブの処理〉フォームで、ジョブを選択します。
2. [ロー]メニューから[上級オプション]を選択します。



3. 〈上級オプションのスケジュール〉の、[一時変更の起動]タブで、必要に応じて次のフィールドに情報を入力します。

- スケジュール済み環境
- スケジュール済み論理サーバー
- スケジュール済みユーザー
- スケジュール済みユーザー・ロール
- スケジュール済みパスワード

スケジュール済みユーザーのパスワードを入力します。

フィールド記述

記述	用語解説
スケジュール済み環境	スケジュールされたジョブの実行環境を示します。
スケジュール済み論理サーバー	ジョブを投入する ONEWORLD の論理サーバー
スケジュール済みユーザー	ジョブを開始するユーザーID

記述	用語解説
スケジュール済みパスワード	ジョブを投入するスケジュールされたユーザーのパスワード。ジョブスケジュールマスターテーブルに保管される前にパスワードが暗化されています。

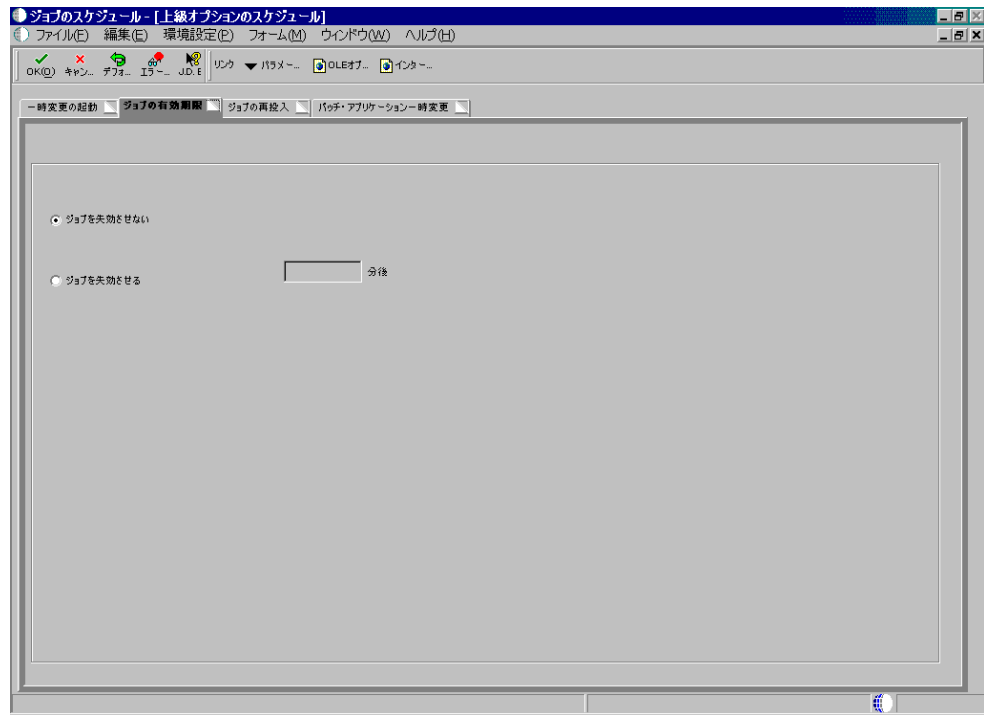
ジョブ有効期限スเปックの一時変更

ジョブの期限指定によって、失効しないジョブでサーバーが過負荷になることを防ぎます。必要であれば、ジョブが失効しないように、または一定時間後に失効するように、ジョブ実行の期限指定を一時変更できます。

たとえば、あるジョブを午前 0:00 に実行し、別のジョブを午前 1:00 に実行するようにスケジュールを設定したものの、サーバーが故障し、ジョブの実行予定時刻までに復旧しない場合を考えます。この場合は、サーバーが 30 分以内に復旧しなければジョブが期限切れになるように、午前 0:00 に予定していた最初のジョブの実行期限を 30 分後(午前 12:30)に指定できます。

▶ ジョブの期限指定を一時変更するには

1. 〈スケジュール済みジョブの処理〉フォームで、ジョブを選んで[ロー]メニューから[上級オプション]を選択します。
2. 〈上級オプションのスケジュール〉で、[ジョブの有効期限]タブをクリックします。



3. ジョブを実行期限なしにするか、または一定時間が経過した後に期限切れにするかを指定します。
4. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
ジョブを失効させる	<p>スケジュールされたジョブがいつ失効するかを示します。失効後はジョブは実行されません。次のいずれかを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/> ジョブは失効しない <input type="radio"/> ジョブはスケジュールされた開始時刻 X 分後に失効する
ジョブを失効させない	<p>スケジュールされたジョブがいつ失効するかを示します。失効後はジョブは実行されません。次のいずれかを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/> ジョブは失効しない <input type="radio"/> ジョブはスケジュールされた開始時刻 X 分後に失効する

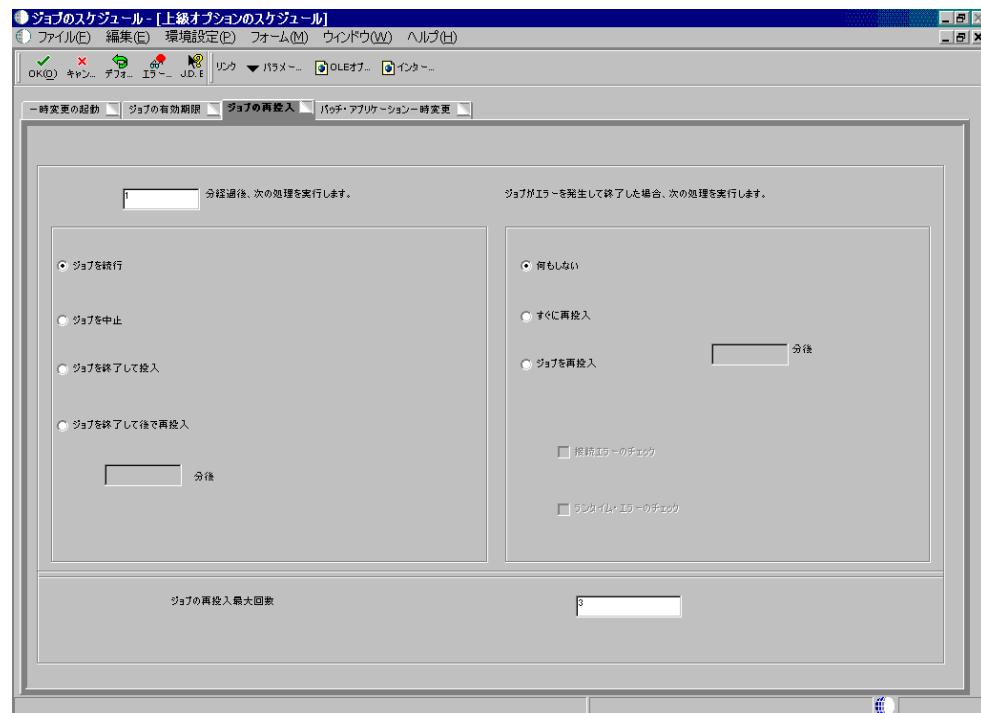
スケジューラによるジョブの再投入時期の定義

〈スケジューラ〉によってジョブが再投入される時期を定義できます。この機能は、〈スケジューラ〉によって一定時間後にジョブが投入されるため、ジョブが異常終了した場合などに役立ちます。

システム・リソースの過剰消費を防ぐために、ジョブの再投入回数を制限できます。また、ジョブの実行時に、〈スケジューラ〉に接続エラーやランタイム・エラーをチェックさせることもできます。接続エラーは、システムがジョブを投入するサーバーへの接続に失敗した場合に発生します。ランタイム・エラーは、ジョブが実行されるサーバーによってジョブがエラー状況にされた場合に発生します。システムは、この 2 つの状況をモニタリングするようにセットアップできます。

▶ システムによるジョブの再投入間隔を定義するには

1. 〈スケジュール済みジョブの処理〉フォームで、ジョブを選んで[ロー]メニューから[上級オプション]を選択します。
2. 〈上級オプションのスケジュール〉で、[ジョブの再投入]タブをクリックします。



3. ジョブが継続または終了するまでの経過分数を指定し、次のオプションを 1 つ選択します。
 - ジョブを続行
 - ジョブを中止
 - ジョブを終了して投入
4. ジョブを終了させて一定時間後に再投入する場合は、次のオプションを選択し、ジョブが再投入されるまでの経過分数を入力します。

- ジョブを終了して後で再投入
5. ジョブが異常終了した場合に適用する次のオプションを 1 つ選択します。
 - 何もしない
 - すぐに再投入
 - ジョブを再投入
 6. システムでのチェック対象として、接続エラーまたはランタイム・エラー、あるいはその両方を指定します。
 7. 次のフィールドに値を入力します。
 - ジョブの再投入最大回数
ジョブの再投入の最高回数を指定します。
 8. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
ジョブを続行	処理時間が長すぎるジョブの処理方法
ジョブを中止	処理時間が長すぎるジョブの処理方法
ジョブを終了して投入	処理時間が長すぎるジョブの処理方法
ジョブを終了して後で再投入	処理時間が長すぎるジョブの処理方法
何もしない	ジョブがエラー状況となった時に再投入する方法を示します。
すぐに再投入	ジョブがエラー状況となった時に再投入する方法を示します。
ジョブを再投入	ジョブがエラー状況となった時に再投入する方法を示します。
接続エラーのチェック	ジョブがエラー状況となった時に再投入する方法を示します。
ジョブの再投入最大回数	<p>ジョブスケジュールインスタンスが再投入できる最大投入数</p> <p>たとえば、ジョブ A が 4 月 2 日の午前 12 時に再投入されるようにスケジュールされているとします。スケジュールは、エラーが発生した場合はこのジョブを再投入するように指示されています。</p> <p>ただし、このフィールドは「3」に設定されています。この場合、ジョブは 3 回までしか再投入できません。4 回目もエラーが発生した場合は、スケジュールはそれ以上ジョブを投入しません。</p>

バッチ・アプリケーションのスペックの一時変更

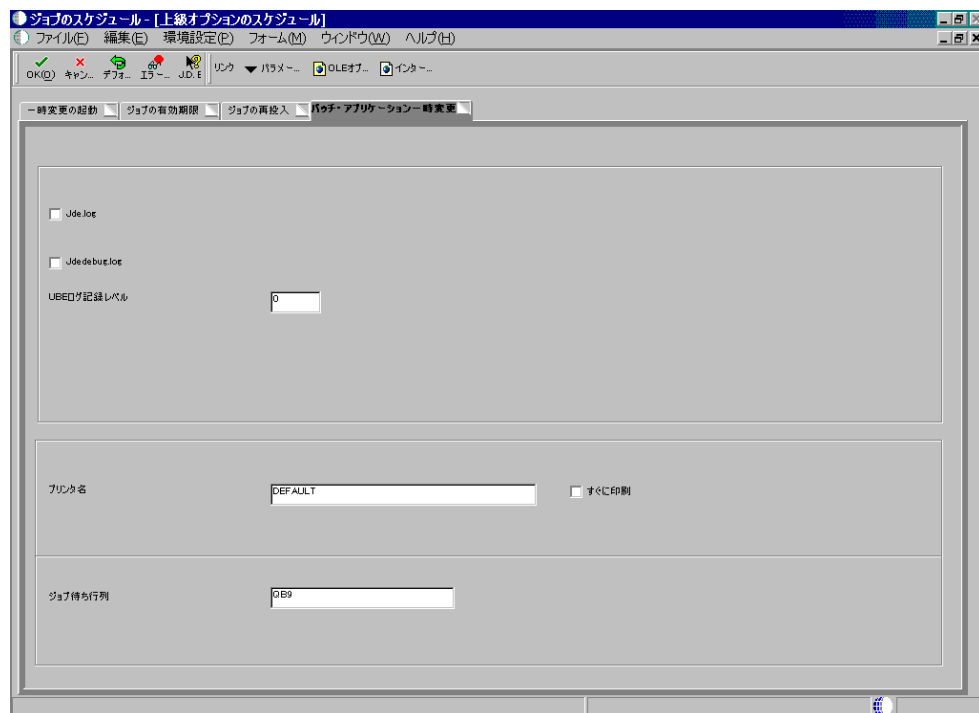
jde.log にエラーを書き込むかどうか指定できます。jdedebug.log にエラーを書き込む場合、トレース・レベルを設定してログに含むエラーのタイプを指定できます。

また、レポートの出力先プリンタを一時変更することもできます。この機能は、特定のプリンタが故障した場合や、レポートをデフォルト以外のプリンタで印刷する場合に役立ちます。ジョブを完了時にすぐに印刷するか、ジョブ待ち行列に入れて後で印刷するか指定することができます。

さらに、投入済みジョブの出力先となる待ち行列も一時変更できます。パラメータを特定のバッチ・ジョブに渡す場合は、〈バッチ・アプリケーションのスペック〉を通じてレポート・インターコネクトを添付することもできます。

▶ バッチ・アプリケーションのスペックを一時変更するには

1. 〈スケジュール済みジョブの処理〉フォームで、ジョブを選んで[ロー]メニューから[上級オプション]を選択します。
2. 〈上級オプションのスケジュール〉で、[バッチ・アプリケーション一時変更]タブをクリックします。



3. 次のオプションのうち 1 つまたは複数を選択します。
 - Jde.log
 - Jdedebug.log

[jdedebug.log]を選択した場合は、[jde.log]オプションも選択する必要があります。
4. 次のフィールドに値を入力してください。

- UBE ログ記録レベル

[jdedebug.log]を選択した場合は、一定レベルのエラーを記録するためにトレース・レベルを設定できます。

- プリンタ名

ジョブによって生成されたレポートの出力先のプリンタ名を入力します。デフォルト・プリンタを使用する場合は、DEFAULT と指定してください。

- すぐに印刷

ジョブをプリンタにすぐに送る場合に有効にします。

- ジョブ待ち行列

ジョブ出力の送り先となるジョブ待ち行列名を入力します。

5. [OK]をクリックします。

レポート・インターコネクトへの値の追加

バッチ処理の開始時に、そのバッチ処理にレポート・インターコネクトを介して渡す値を追加できます。そのバッチ処理には、最初にレポート・インターコネクトを組み込んでおく必要があります。

▶ レポート・インターコネクトに値を追加するには

1. 〈スケジュール済みジョブの処理〉フォームで、ジョブを選んで[ロー]メニューから[上級オプション]を選択します。
2. 〈上級オプションのスケジュール〉で、[フォーム]メニューから[パラメータ]を選択します。
指定したバッチ処理のパラメータを含む〈レポート・インターコネクト〉フォームが表示されます。

3. 実行時にバッチ処理に渡す値を入力します。
4. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
Jde.log	ユーザーがサーバーで実行されたジョブに対する JDE ログを表示することを可能にするコード。サーバーがログを表示するよう既に設定されている場合は、このコードにかかわらずログが表示されます。
Jdedebug.log	サーバーでバッチジョブを実行する時、このフィールドはジョブの実行についてトレースが可能かどうかを表示します。トレースを実行するようにサーバーがすでに設定されている場合、このフィールドの設定に関係なく、トレースは実行されます。
プリンター時変更	結果のレポートを印刷する印刷デバイス名
ジョブ待ち行列	ジョブが投入された論理待ち行列。

ジョブ・スケジュールの処理

定期パターンを含むジョブのスケジュールを設定するとき、そのジョブに関する一連のスケジュール・レコードまたはインスタンスが、ジョブ・スケジュール・テーブル(F91320)で作成されます。このジョブ・スケジュール・テーブルは、ジョブが実行される日時を示します。これらのインスタンスとその状況を検討でき、スケジュール・ジョブ情報を変更することもできます。たとえば、ジョブを処理するロケーションの変更、ジョブ・インスタンスの削除、または上級機能の一時変更を行うことができます。

注:

ジョブ・スケジュール・テーブルは監査情報にも使用されるため、修正や削除できるのはまだ実行していないジョブだけです。

すべてのジョブ・スケジュールの検討

すべてのジョブ・スケジュールを検討するときには、起動済みのジョブのすべてのインスタンスを表示できます。また、ジョブのインスタンスを選んで[ロー]メニューから[ジョブの改訂]を選択すると、ジョブを改訂できます。

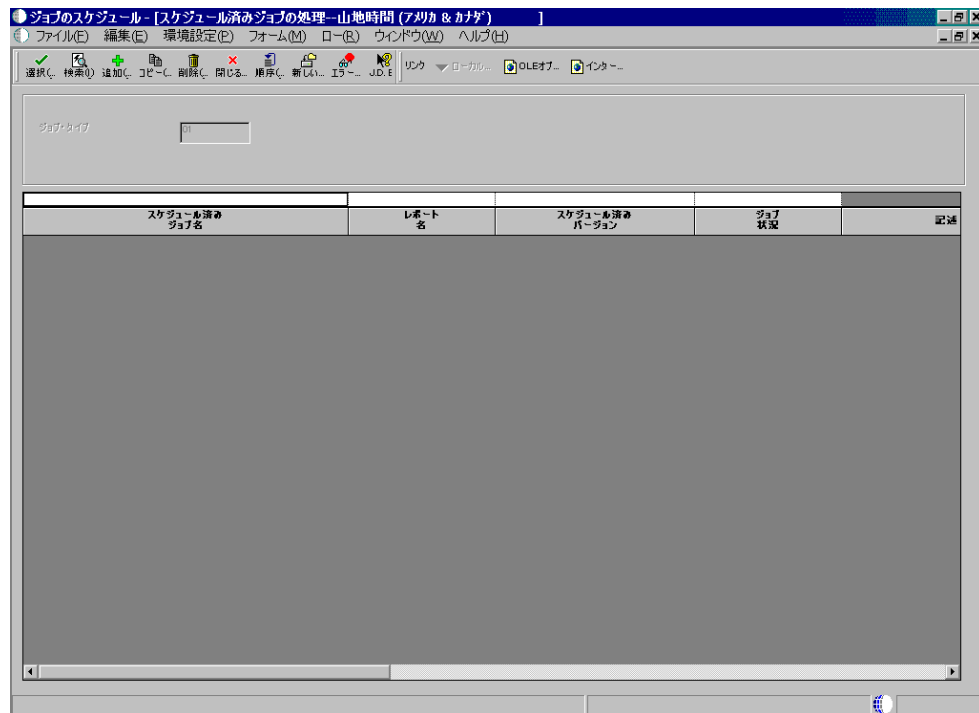
必要なジョブ・インスタンスにフィルタを適用し、起動日付別、開始日時別に検討できます。たとえば、[スケジュール済み開始日付]フィールドに現在の日付を入力すると、現在の日付のすべてのジョブのインスタンスを検討できます。[ジョブ開始日付]フィールドに日付を入力して、特定の日に起動されたすべてのジョブ・インスタンスを検討することもできます。スケジュール済みジョブ名、起動状況、レポート名、スケジュール済みバージョンで、ジョブ・インスタンスをフィルタ処理することもできます。

参照

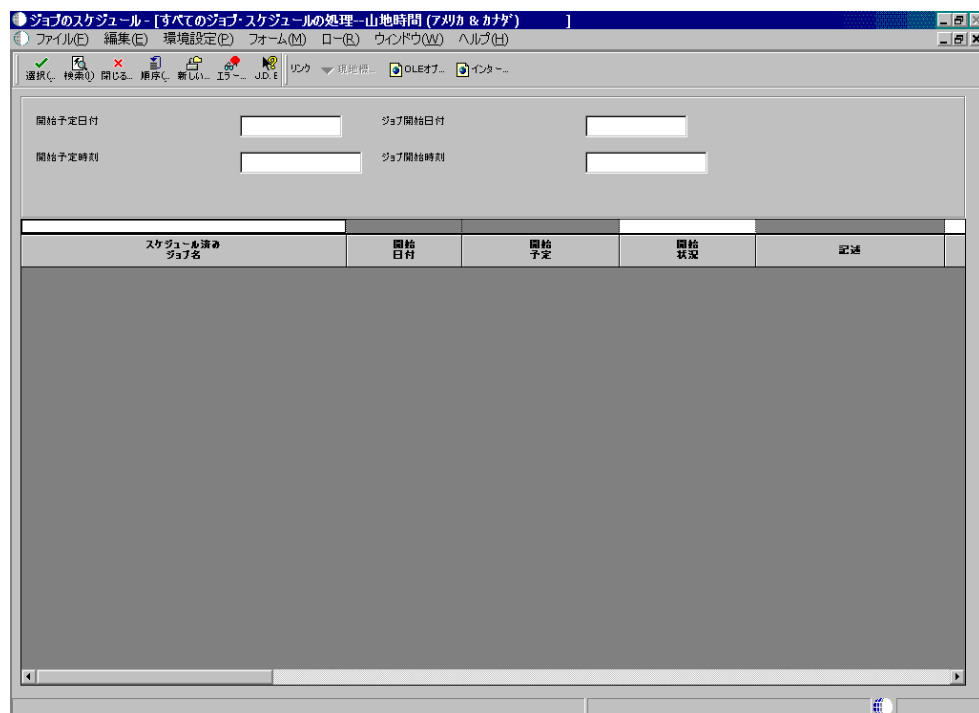
- ジョブ・スケジュールの改訂については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「スケジュール済みジョブの改訂」

▶ すべてのジョブ・スケジュールを検討するには

〈ジョブ・スケジューラ〉メニュー(GH9015)から〈ジョブのスケジュール〉を選択します。



1. 〈スケジュール済みジョブの処理〉で、[フォーム]メニューから[すべてのスケジュール]を選択します。



2. 〈すべてのジョブ・スケジュールの処理〉で、次のフィールドに値を入力して、開始日付または開始時刻別にフィルタを適用します。
 - 開始予定日付
 - 開始予定
3. 起動日付または起動時刻別にフィルタを適用するには、次のフィールドに値を入力します。
 - ジョブ開始日付
 - ジョブ開始時刻
4. ジョブ名、起動状況、レポート名、またはスケジュール対象バージョン別にフィルタを適用するには、次のフィールドに値を入力します。
 - スケジュール済みジョブ名
 - 開始予定状況
 - レポート名
 - スケジュール済みバージョン
5. すべてのタイム・ゾーンのすべてのスケジュール済みジョブを表示するには、[フォーム]メニューから[全標準時間]を選択します。
6. ローカル・タイム・ゾーンのすべてのスケジュール済みジョブを表示するには、[フォーム]メニューから[現地標準時間]を選択します。

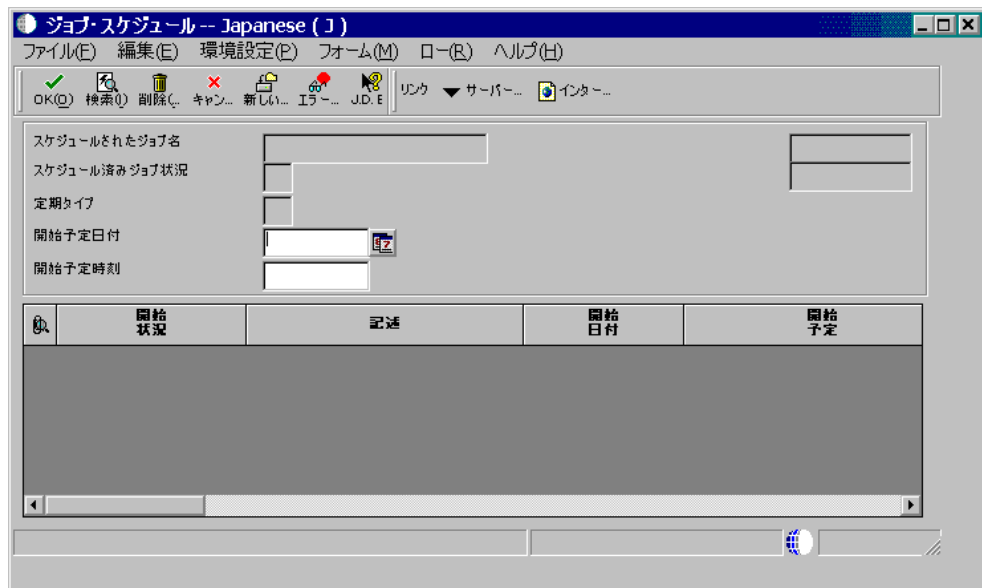
ジョブの起動状況の変更

ジョブの起動状況を変更できます。たとえば、ジョブを保留にするか、再スケジュールする場合があります。

▶ ジョブの起動状況を変更するには

〈ジョブ・スケジュール〉メニュー(GH9015)から〈ジョブのスケジュール〉を選択します。

1. 〈バージョンの処理〉で、ジョブを実行するタイム・ゾーンを選んで[選択]をクリックします。
2. 〈スケジュール済みジョブの処理〉で、変更するジョブを検索します。
3. [ロー]メニューから[ジョブ・スケジュール]を選択します。



4. 〈ジョブのスケジュール〉で、起動状況を変更するジョブ・インスタンスを選択して[開始状況]フィールドに新しい状況を入力します。
スケジュール済みには“1”、保留には“50”を入力します。
5. [OK]をクリックします。

ジョブ詳細の表示

〈ジョブ管理〉フォームでは、ジョブ待ち行列や実行するジョブの優先度、レポート・プリンタのロケーションの他に、ジョブの詳細も表示できます。このフォームからは、ジョブの優先度やレポートの出力先ロケーションを変更することもできます。

▶ ジョブ詳細を表示するには

1. 〈ジョブ・スケジュール〉フォームで、ジョブを選んで[ロー]メニューから[詳細表示]を選択します。

2. 〈ジョブ管理〉で、必要に応じて次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- ジョブ優先度
- プリンタ名

手作業によるジョブの状況設定

システム管理者は、〈スケジューラ〉によって起動状況が更新されない場合や、〈ジョブ・モニタ〉が使用不可になっている場合に、各ジョブの状況を変更できます。

注:

ジョブを停止する必要がある場合は、〈スケジュール済みジョブの処理〉フォームの[フォーム]メニューから[サーバーの処理]を選択します。

注意:

[状況設定]オプションは、他のユーザーがアクセスできないように保護する必要があります。このオプションは、ERP 9.0 管理者のみがアクセスしてください。

▶ ジョブの状況を手作業で設定するには

1. 〈スケジュール済みジョブの処理〉フォームで、ジョブを選んで[ロー]メニューから[ジョブのスケジュール]を選択します。

2. 〈ジョブのスケジュール〉で、ジョブの状況を手作業で設定するジョブ・インスタンスを選んで、[ロー]メニューから[状況設定]を選択します。



3. 手作業でジョブ状況を設定するには、次のフィールドに値を入力します。

- 開始予定状況

ジョブ・スケジュールのリセット

ジョブ・スケジュールにカスタム変更を加えた後に、変更が不要であることがわかった場合は、その変更内容を削除し、事前に定義しておいた定期パターンを使用してジョブ・スケジュールを再生成できます。ジョブ・スケジュールは、カスタム変更前の状態にリセットされます。

▶ ジョブ・スケジュールをリセットするには

1. 〈ジョブ・スケジュール〉フォームで、[フォーム]メニューから[スケジュールのリセット]を選択します。

次の警告メッセージが表示されます。「このジョブ・スケジュールへの変更が削除され、定期パターンを使用してスケジュールを再生成しようとしています。続行しますか?」

2. [はい]をクリックしてジョブ・スケジュールのリセットを確認します。

スケジューラ・サーバー

スケジューラ・サーバーは 2 つの機能を実行するプロセスです。すべてのジョブを予定時刻に起動する機能と、各ジョブの進行状況と終了状況をモニタリングする機能があります。この 2 つの機能は、jde.ini ファイルの次のカーネル・タイプで定義された JDENET メッセージによって起動されます。

```
[JDENET_KERNEL_DEF10]
dispatchDLLName=jdekrnl.dll
dispatchDLLFunction=_JDEK_DispatchScheduler@24
maxNumberOfProcesses=1
beginningMsgTypeRange=2001
endingMsgTypeRange=2256
newProcessThresholdRequests=0
numberOfAutoStartProcesses=1
```

〈スケジューラ〉は、スケジュール・ジョブ・マスター(F91300)の情報に基づいて、サーバー/環境/ユーザーの組合せでバッチ処理を起動します。〈スケジューラ〉の起動後は、アイドル・メッセージによって毎分ごとにスケジューラ・ディスパッチ機能がコールされ、JDENET は待機状況に保たれます。このアイドル・メッセージにより、スケジューラ・プロセスはジョブを起動するか、実行中のジョブをモニタリングするかをチェックできます。また、JDENET により、ワークステーションから送信されたメッセージ(新規ジョブ・スケジュールが追加されたことを示すメッセージなど)が〈スケジューラ〉に転送されます。

参照

- 『開発ツール』ガイドの「レポート・インターコネクトの作成」
- トレース・レベルの設定方法については、『開発ツール』ガイドの「デバッグ・トレース」

制御レコード

制御レコードは、スケジュール・ジョブ・マスター(F913100)のジョブ・レコードです。レコード名は *SCHEDULE で、ユーザーには表示されません。*SCHEDULE レコードには、サーバー上のスケジューラ・プロセスの状況が含まれており、このレコードが各プロセスとの通信に使用されます。

たとえば、起動ループがサーバー上で始めると、起動され実行中であることを示すフラグがこのレコードで設定されます。起動ループを終了するには、〈スケジューラ・サーバー・コントロール〉の[フォーム]メニューから、対応するプロセス終了フラグ(「ジョブ起動の状況」または「ジョブ・モニタの状況」)に切り替えます。次回に起動ループによって制御レコードが取り込まれるときに、そのフラグが検出され、両方のフラグがリセットされて終了します。

取り込むときに制御レコードが見つからなければ、〈スケジューラ・サーバー・コントロール〉フォームへの入力時に P91300 によってレコードが再作成されます。また、レコードが破損している場合も、上記の再作成機能がコールされます。ジョブ・モニタのスリープ時間は 15 分にリセットされ、ユーザー ID が SCHEDULER に設定され、このレコードの監査情報が更新されます。

ディスパッチ機能

ディスパッチ機能では、ワークステーションからの受信メッセージが処理され、要求されたプロセスが開始されます。JDENet プロセスは、〈スケジューラ〉を初期化するためのメッセージを送信するか、F91320 テーブルに変更があったことを示すシグナルを出すか、またはアイドル・メッセージを出します。アイドル・メッセージは、他のいずれかのメッセージが送信されない限り毎分ごとに送信されます。アイドル・メッセージが送信されると、起動ループまたはジョブ・モニタをコールする必要があるかどうかディスパッチ機能によってチェックされます。どちらも不要であれば、制御は JDENet に戻されます。

起動ループ

起動ループ機能によって、現在時刻までのすべてのジョブが選択されます。次に、選択された各レコードでループされ、期限切れでないアクティブ・ジョブが起動されます。すべての現在のジョブが起動された後に、起動ループによって開始時刻順にソートされた将来のすべてのジョブが取り込まれます。取込みに成功すると、次回選択時刻(NST)が、現行時刻と次のジョブの開始時刻との時間差に設定されます。取込みに失敗すると、NST はゼロに設定されます。値ゼロは、ジョブ・スケジュール・テーブル(F91320)によって次回にレコードが追加または更新されるときに、この機能を実行する必要があることを示します。起動ループでは、ジョブが起動されるだけでなく、制御レコードが定期的にチェックされ、終了する必要があるかどうかチェックされます。

また、取り込まれたすべてのスケジュール・インスタンス (F91320 レコード) とジョブ見出し (F91300 レコード) の更新も検査されます。起動ループでこれらのレコードの処理が完了した後に、変更がコミットされ、すべてのレコードがロック解除されます。

ジョブ・モニタ・ループ

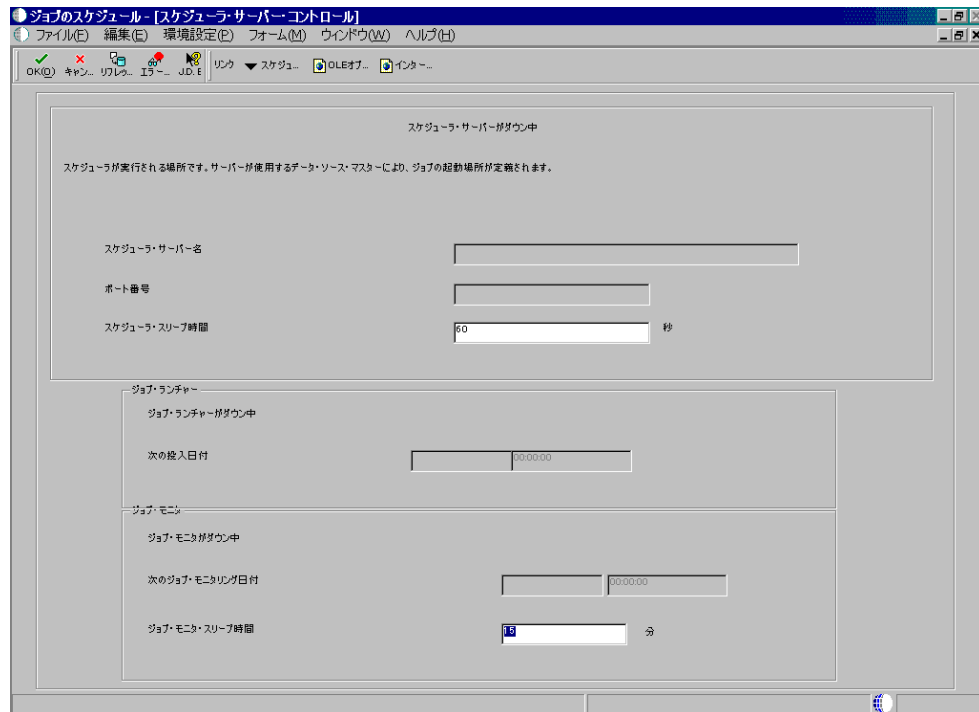
ジョブ・モニタ・ループでは、起動されたジョブの終了状況がモニタされ、ユーザーが要求した場合は、異常終了したジョブが再起動されます。このループは、ジョブ起動ループによって移入される内部ジョブ・リストを介して循環します。また、要求した場合は、実行時間が長すぎるジョブが終了させられます。ジョブは、そのジョブの F91300 レコードで指定した回数までしか再起動できません。

起動ループと同様にジョブ・モニタ・ループでも、制御レコードが定期的に取り込まれ、終了する必要があるかどうかチェックされます。

▶ スケジューラ・サーバーを停止または再起動するには

〈ジョブ・スケジューラ〉メニュー(GH9015)から〈ジョブのスケジュール〉プログラム(P91300)を選択します。

1. 〈バージョンの処理〉で、ジョブを実行するタイム・ゾーンが指定されているバージョンを選んで[選択]をクリックします。
2. 〈スケジュール済みジョブの処理〉で、[フォーム]メニューから[スケジューラ・サーバー]を選択します。



3. 〈スケジューラ・サーバー・コントロール〉で、次のどちらかの操作を行います。
 - サーバーを停止するには、[フォーム]メニューから[スケジューラの停止]を選択します。
 - サーバーを再起動するには、[フォーム]メニューから[スケジューラの開始]を選択します。
4. [OK]をクリックします。

▶ ジョブ・ランチャまたはジョブ・モニタを一時停止するには

注：

ジョブを投入するサーバーを停止し、それらのサーバーの停止中に発生するサーバー接続エラーを回避する場合など、ジョブ・ランチャやジョブ・モニタを一時停止する場合があります。ジョブ・ランチャを一時停止すると、スケジューラでは、起動するジョブが F91320 テーブルで検索されます。ジョブ・モニタを一時停止すると、スケジューラでは、起動済みジョブの状況のモニタリングが停止されます。

1. 〈スケジューラ・サーバー・コントロール〉で、[フォーム]メニューから[ジョブ・ランチャーの一時停止]を選択し、ジョブ・ランチャを一時停止します。
2. ジョブ・モニタを一時停止するには、[フォーム]メニューから[ジョブ・モニタの一時停止]を選択します。
3. [OK]をクリックします。

▶ スケジューラ・サーバーをリセットするには

注:

ジョブ・モニタまたはジョブ・ランチャの状況を変更した後は、スケジューラ・サーバーをリセットします。たとえば、ジョブ・モニタの状況を変更した場合は、[リセット]を選択してサーバー上の設定をリフレッシュします。

1. 〈スケジューラ・サーバー・コントロール〉で、[フォーム]メニューから[リセット]を選択します。
2. [OK]をクリックします。

▶ スケジューラ・サーバーの設定をリフレッシュするには

注:

スケジューラ・サーバーの設定をリフレッシュすると、サーバーによって起動されたジョブのキャッシュがリフレッシュされ、すべての環境およびテーブル・ハンドルがクローズされて再起動されます。つまり、サーバーの内部構造に対して、一種の内部リフレッシュが実行されます。サーバーの再起動が必要になった場合は、スケジューラ・サーバーの設定をリフレッシュできます。

1. 〈スケジューラ・サーバー・コントロール〉で、[フォーム]メニューから[リフレッシュ]を選択します。
2. [OK]をクリックします。

▶ スケジューラ・サーバーとモニタのスリープ時間を修正するには

注:

スリープ時間とは、スケジューラ・サーバーまたはモニタがアイドル状態になっている時間です。

1. 〈スケジューラ・サーバー・コントロール〉で、必要に応じて次のフィールドに情報を入力します。
 - スケジューラ・スリープ時間
 - ジョブモニタ・スリープ時間
2. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
スケジューラ・スリープ時間	このフィールドはスケジューラ・サーバーがアイドルしている秒数を示します。たとえば、このフィールドが 60 秒と設定されていたら、ジョブを進行あるいはモニタリングする必要があるスケジューラ・サーバーは 60 秒ごとにそれをチェックします。このデフォルト値は 60 で、ゼロより大きい数値を割り当てる必要があります。
ジョブモニタ・スリープ時間	このフィールドはジョブの状況チェックの間の、ジョブ・モニタが休止する時間(分)を示します。

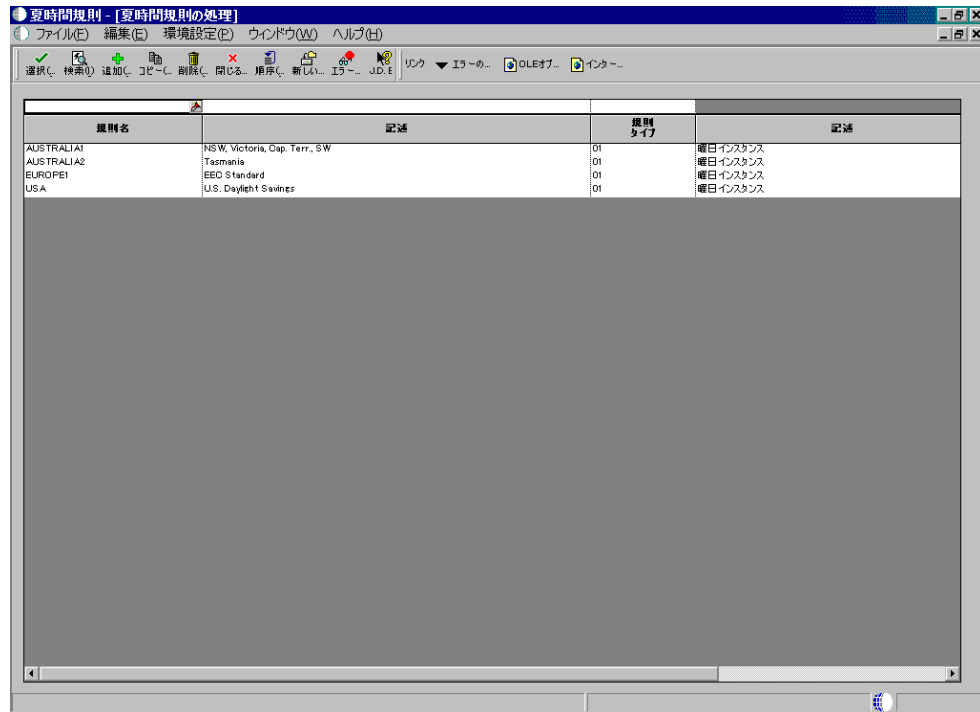
夏時間規則の修正

夏時間規則は、各現場で夏時間を導入する方法をシステムに対して指示します。〈スケジューラ〉では、これらの規則をタイム・ゾーン情報と併用して、特定のサーバー上でジョブを実行する時刻が決定されます。

新しい夏時間規則を追加するか、既存の規則を修正できます。

▶ 新規の夏時間規則を追加するには

〈ジョブ・スケジューラ〉メニュー(GH9015)から〈夏時間規則〉プログラム(P00085)を選択します。



1. 〈夏時間規則の処理〉で、[追加]をクリックします。

2. 〈夏時間規則の追加〉で、次の各フィールドに情報を入力します。

- 夏時間規則
- 記述

3. 次の規則タイプのうち 1 つを選択します。

- 曜日別
- 日付別

4. 夏時間の開始日付と終了日付を入力して、[OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
夏時間規則	夏時間規則の名称。夏時間規則は、地理や法律などの条件に合わせて時間を調整する際に使用します。
記述	記述、備考、名称、または住所
曜日別	<p>夏時間規則の決定方法を示すコード。</p> <p>曜日の場合、夏時間がある月のある曜日に開始および終了することを示します。 たとえば、4 月の第一週の日曜日から 10 月の第一週の日曜日までというような場合です。</p> <p>日付の場合、夏時間がある月のある日付に開始および終了することを示します。 4 月の 3 日から 10 月の 10 日までというような場合です。</p>

日付別

夏時間規則の決定方法を示すコード。

曜日の場合、夏時間がある月のある曜日に開始および終了することを示します。
たとえば、4月の第一週の日曜日から10月の第一週の日曜日までというような場合です。

日付の場合、夏時間がある月のある日付に開始および終了することを示します。
4月の3日から10月の10日までというような場合です。

▶ 既存の夏時間規則を修正するには

〈ジョブ・スケジュール〉メニュー(GH9015)から〈夏時間規則〉プログラム(P00085)を選択します。

1. 修正する規則を選んで[選択]をクリックします。

2. 〈夏時間規則の改訂〉で、必要に応じて[記述]フィールドに新規の記述を追加します。

- 記述

3. 次の規則タイプのうち1つを選択します。

- 曜日別
- 日付別

4. 夏時間の開始日時と終了日時を修正して、[OK]をクリックします。

スケジューラ・レポートの実行

スケジュール済みのジョブとその状況の要約を検討する場合は、〈スケジュールされたジョブの印刷〉レポートを実行します。処理オプションを使用すると、このレポートを協定世界時(UCT)に基づいて実行するか、現地時間に基づいて実行するかを指定できます。また、夏時間に合わせて調整することも可能です。

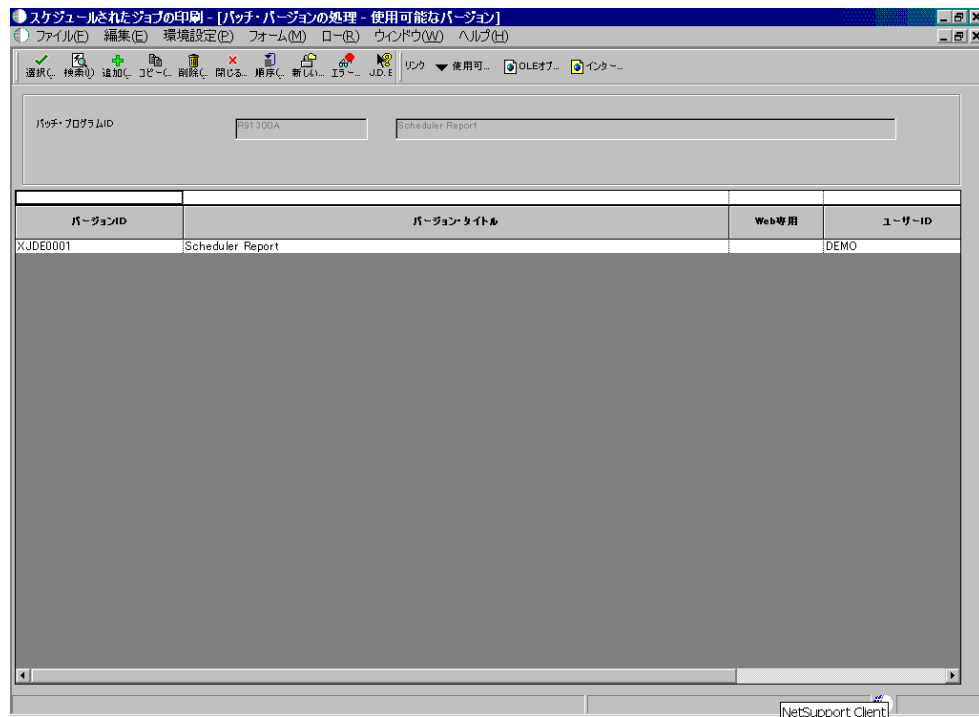
ジョブ・スケジュール・テーブル(F91320)からレコードを除去する場合は、〈スケジュールされたジョブの除去〉プログラムを実行します。この除去プログラムは、テスト・モードと最終モードで実行できます。

参照

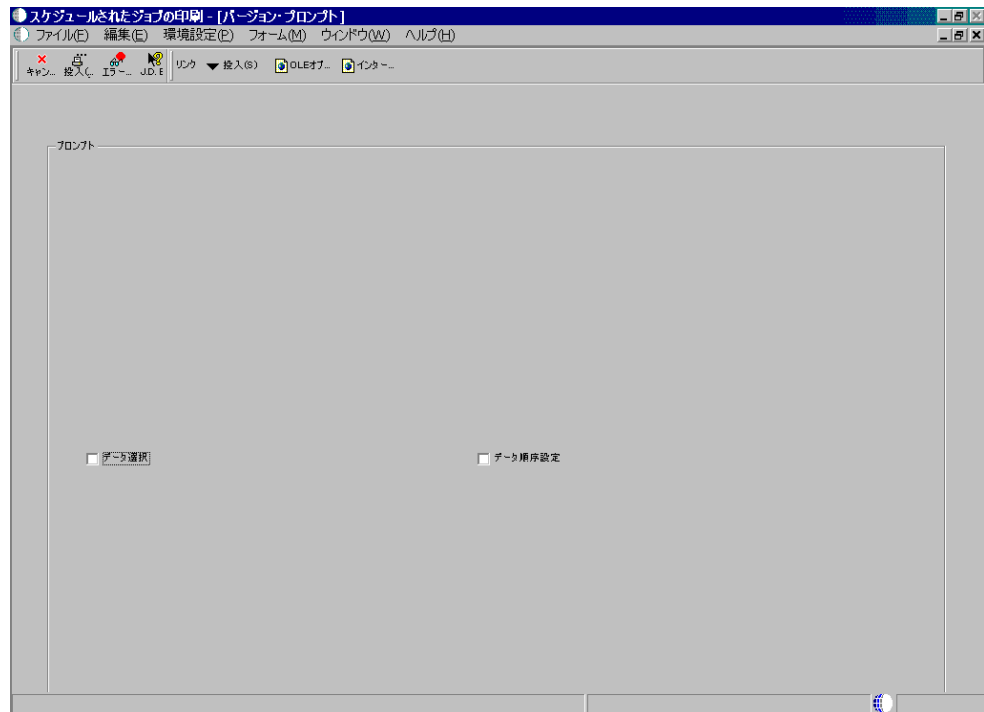
- レポートの投入については『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「レポートの投入」

▶ スケジュール済みジョブを印刷/除去するには

〈ジョブ・スケジュール〉メニュー(GH9015)から〈スケジュールされたジョブの印刷〉レポート(R91300A)または〈スケジュールされたジョブの除去〉レポート(R91300B)を選択します。



1. 〈バッチ・バージョンの処理〉フォームで、グリッドに表示されるバージョンを選んで[選択]をクリックします。



2. 〈バージョン・プロンプト〉で、次のオプションのいずれかを選択して[投入]をクリックします。
 - データ選択
 - データ順序設定
3. 〈レポート出力先〉で、次のどちらかのオプションを選択して[OK]をクリックします。
 - 画面
 - プリンタ

スケジューラ・サーバーの処理

スケジューラ・サーバーは停止、リセット、再起動、およびリフレッシュできます。たとえば、サーバーがオフラインになった場合は、リセットする必要があります。また、JDENet にスケジューラ・サーバーの初期化、つまり「ウェイクアップ」が必要かどうかをチェックさせるまでの待機秒数を指定して、サーバーとモニタのスリープ時間を修正できます。

ジョブ・ランチャやジョブ・モニタはオン/オフを切り替える場合があります。たとえば、ジョブを投入したサーバーを停止させる場合や、ジョブの投入時に不要な接続エラーを回避する場合などです。

さらに、jde.ini ファイルで、numberOfAutoStartProcesses 行を変更し、スケジューラを自動的に再起動させることもできます。この機能とサーバーを使用可能にした場合は、スケジューラ・サーバーが停止すると、稼働状態になった時点で自動的に再起動され、手作業で再起動する必要がなくなります。スケジューラ・サーバーが再起動すると、スケジューラによってジョブ・スケジュール・テーブル (F91320) がチェックされ、そのサーバー上で再起動する必要があるかどうか判別されます。再起動する必要がなければ、スケジューラはシャットダウンされます。

JDENet では、スケジューラ・サーバーを初期化するためのコールが処理されます。JDENet プロセスでは、F91320 に変更があったことを示すメッセージを受信した場合は、スケジューラを初期化してジョブを起動するためのメッセージが送信され、変更が検出されなければアイドル・メッセージが送信されます。応答時間を短縮するために、JDENet に F91320 に変更があったかどうかをチェックさせるまでの待機秒数を減らすことができます。

注:

このアプリケーションは ERP 9.0 管理者専用です。ユーザー・アクセスにセキュリティを設定する必要があります。

参照

- 自動起動機能については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「jde.ini ファイル」
- セキュリティ・ワークベンチについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「セキュリティ」

メディア・オブジェクトとイメージング

ERP 9.0 のメディア・オブジェクト機能とイメージング機能を使用すると、用紙に印刷されて存在している情報などをアプリケーションに添付できるようになります。メディア・オブジェクト機能を使用すると、情報を ERP 9.0 アプリケーション、フォームやロー、およびオブジェクト・ライブラリアン・オブジェクトに添付できます。イメージング機能は、メディア・オブジェクトに組み込まれており、情報をより効率的で柔軟に保管できるようにします。

メディア・オブジェクトとは

メディア・オブジェクトを使用すると、情報をアプリケーションにリンクできます。グリッドの個々のローにリンクする方法と、フォームにリンクする方法があります。グリッドやフォームに添付できる情報タイプは、次のとおりです。

- | | |
|-----------------------------------|--|
| テキスト | メディア・オブジェクトにはワード・プロセッシング機能があり、テキストの情報を添付できます。たとえば、テキスト添付により、フォームの記入方法やレコードに関する追加情報を添付することができます。 |
| イメージ | Windows のイメージ・ファイルには、.BMP、.GIF、および.JPG があります。これらは、作成された電子ファイルと紙の文書をスキャナで入力した画像の場合などがあります。 |
| OLE | <p>メディア・オブジェクトとして、OLE 規格に準拠するファイルを使用できます。OLE により、さまざまなプログラム間のリンクを作成できます。このリンクを使用して、あるプログラムのオブジェクトを別のプログラムに保存することができます。ERP 9.0 では、OLE オブジェクトの添付に必要なリンクが提供されます。</p> <p>OLE メディア・オブジェクトは、ベース・フォーム・レベルで添付します。フォームのベース・レベルにオブジェクトを添付する際には、オブジェクトはフォーム上に表示される 1 データではなくフォーム自体に添付されます。メディア・オブジェクトは、グリッドまたはフォームに添付できますが、ファイル自体は別のディレクトリに存在します。OLE オブジェクトのリンク先アプリケーションに組み込まれるファイル情報は、そのサポート・ファイルに対するパスのみです。</p> <p>使用できる OLE オブジェクトは、ERP 9.0 を通して適切に登録し、OLE オブジェクトとしてインストールしたものに限りです。</p> |
| JDE ショートカット | JDE ショートカットは、ERP 9.0 アプリケーションを開くためのリンクです。メディア・オブジェクトに添付できるのは、ERP 9.0 のショートカットのみです。メディア・オブジェクトに Windows のショートカットを添付することはできません。 |
| ユニバーサル・リソース・ロケータ(URL)/ファイル | メディア・オブジェクトは、Web ページの URL または他の関連ファイルにリンクできます。フォームで URL メディア・オブジェクトをコントロール・オブジェクトに添付すると、その Web ページがフォームの一部として表示されます。URL をフォームまたはオブジェクト・ライブラリアンのオブジェクトに添付すると、そのメディア・オブジェクトはその URL へのリンクとなります。 |

システム管理者はテンプレートを設定することもできます。テンプレートには、イメージやショートカットなど、それ自体の添付情報を組み込むことができます。たとえば、レターヘッドとメモ用の標準フォームを作成できます。また、テンプレートでショートカットを作成し、テンプレートに追加する情報に固有のデータを使用するアプリケーションへのアクセスを提供することも可能です。

イメージングとは

ERP 9.0 で使用可能なイメージング機能により、サードパーティのイメージング製品にリンクできます。イメージング・システムにより、印刷出力された情報をスキャンしてファイルに保管できます。たとえば、この情報には、受注オーダー、購買オーダー、仕入先請求書、製品構成の図面などの文書があります。ERP 9.0 のイメージング統合製品には、メディア・オブジェクト・ビューアと、イメージを検索して表示するためのスキャンおよび検索インターフェイスを提供するサードパーティ製品が含まれています。また、ERP 9.0 のイメージング・インプリメンテーションは、固有のイメージング製品のビューアを使用して統合されたイメージ表示を提供します。

ERP 9.0 のメディア・オブジェクト機能の有効化

ERP 9.0 でメディア・オブジェクトを使用するには、メディア・オブジェクトを処理するための一連のイベント・ルールが必要です。これには次の処理が含まれます。

- メディア・オブジェクト・ファイルの保管ロケーションをトラッキングする処理
- どのメディア・オブジェクトがどの ERP 9.0 オブジェクト(ロー、フォーム、レポート)に添付されているかをトラッキングする処理
- 添付情報を持つ ERP 9.0 オブジェクトを指定する処理
- 添付情報を作成または表示する処理

ERP 9.0 には、メディア・オブジェクトの操作に必要なすべてのイベント・ルールをバイパスできるように、標準メディア・オブジェクト処理が用意されています。フォームに必要な情報はすべて〈Form Design Aid(フォーム設計ツール)〉のフォームから収集され、イベント・ルールを定義する必要はありません。標準処理の内容は、次のとおりです。

- フォーム間でメディア・オブジェクトの使用方法が標準化されます。
- グリッドの場合は、ローに対してメディア・オブジェクトが定義されていれば、ロー見出しにペーパー・クリップ・アイコンが表示されます。
- フォームの場合は、そのフォームに対してメディア・オブジェクトが定義されていれば、ステータス・バーにアイコンが表示されます。
- フォームまたはグリッドのローにドキュメントを添付できます。
- ローのペーパー・クリップをダブルクリックすると、そのローのメディア・オブジェクトを表示できます。
- ステータス・バーのペーパー・クリップをクリックすると、そのフォームのメディア・オブジェクトを表示できます。

フォームの標準処理を使用しないように選択した場合も、既存のイベント・ルールまたは独自に開発したイベント・ルールを使用して、メディア・オブジェクトを処理するための独自システムを開発できます。

ERP 9.0 では、メディア・オブジェクト・テーブル(F00165)を使用して、メディア・オブジェクトとイメージングのリンク・レコードが保管されます。メディア・オブジェクト・テーブルにデータを正しく保管できるように、固有キー構造を使用してメディア・オブジェクト・データ構造体を定義する必要があります。このテーブルのレイアウトは、次のとおりです。

GT || F4211Keys || The media object text

次の条件があります。

GT(汎用テキスト)は、メディア・オブジェクトのデータ構造体を定義するときに使用される命名規則です。

F4211Keys 部分は、そのレコードの一意のメディア・オブジェクト添付情報にアクセスするために、システムで使用されます。キーは通常、受注明細テーブル(F4211)の各詳細行に格納される固有キーの内容と一致します。

media object text は、そのユーザーが入力した情報を保管する実際のテキスト添付です。

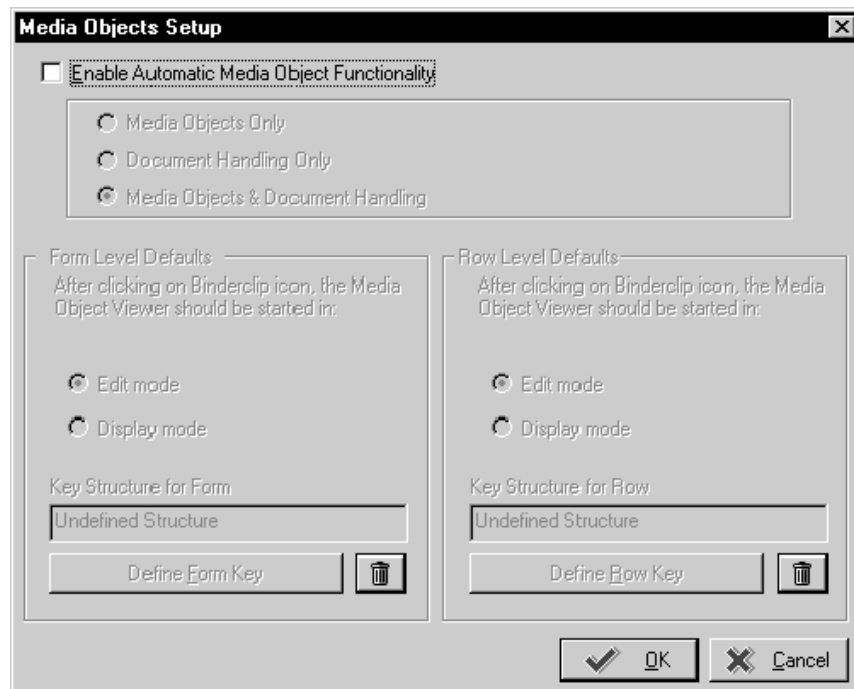
また、ERP 9.0 に用意されているメディア・オブジェクトのカテゴリに加えて、最大 40 までカテゴリを定義できます。ユーザーは、これらのカテゴリをメディア・オブジェクトに関連付けることで、特定のメディア・オブジェクトをグループ化したり、他のユーザーが特定のメディア・オブジェクトを検索できるように設定できます。ユーザー定義のカテゴリは、メディア・オブジェクト・カテゴリ・テーブル(F00166)に保管されており、各オブジェクトの固有キーを介して参照されます。各カテゴリのデフォルト・タイトルは、カテゴリ・コード 1~30、日付 1~5、および数値 1~5 です。

はじめる前に

- メディア・オブジェクトのペーパー・クリップ・カラムをフォームに表示するために、そのフォームの[グリッド]プロパティで[ロー見出しを非表示]オプションをオフにする必要があります。

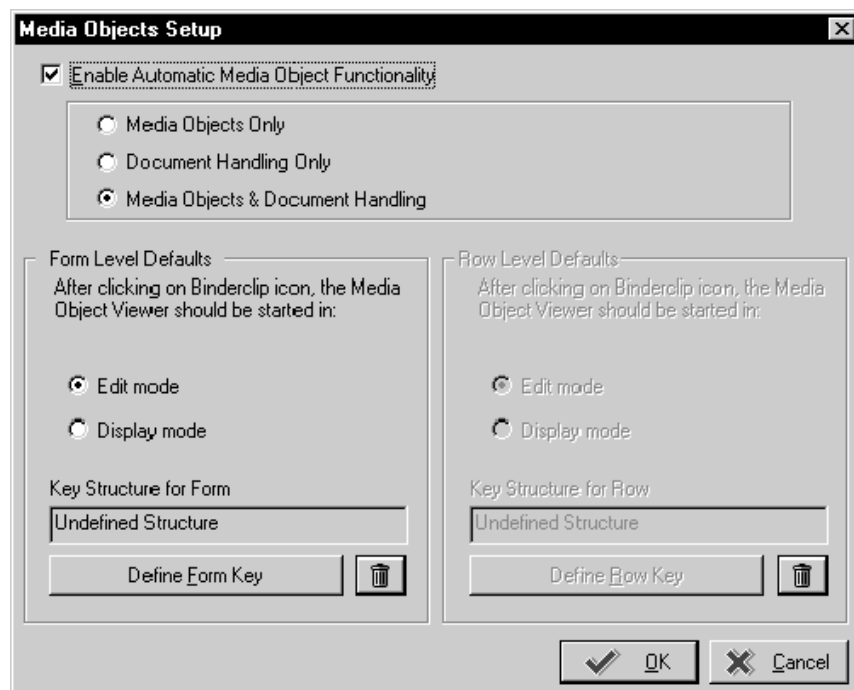
▶ ERP 9.0 のメディア・オブジェクト機能を有効化するには

1. 〈Form Design Aid(フォーム設計ツール)〉で、既存フォームまたは新規作成したフォームのグリッド部分を右クリックし、[Properties(プロパティ)]を選択します。
2. 〈Grid Properties(グリッドのプロパティ)〉で、[Advanced(上級)]タブの[Hide Row Headers(ロー見出しを非表示)]を有効にして、フォームのカラムにメディア・オブジェクト・ペーパー・クリップが表示されるようにします。
3. [Form(フォーム)]メニューから[Media Objects Setup...(メディア・オブジェクトのセットアップ)]を選択します。



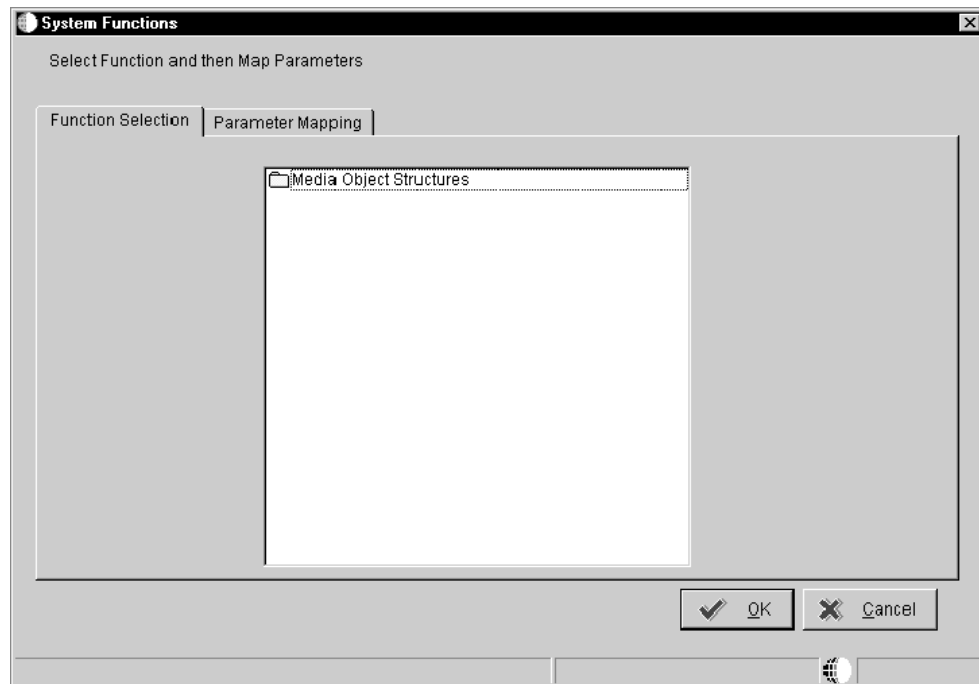
4. 〈Media Objects Setup(メディア・オブジェクトの設定)〉で、[Enable Automatic Media Object Functionality(自動メディア・オブジェクト機能の有効化)]オプションをクリックして、有効にします。

これによってイメージングが使用可能になり、フォーム上の他のフィールドが有効になります。

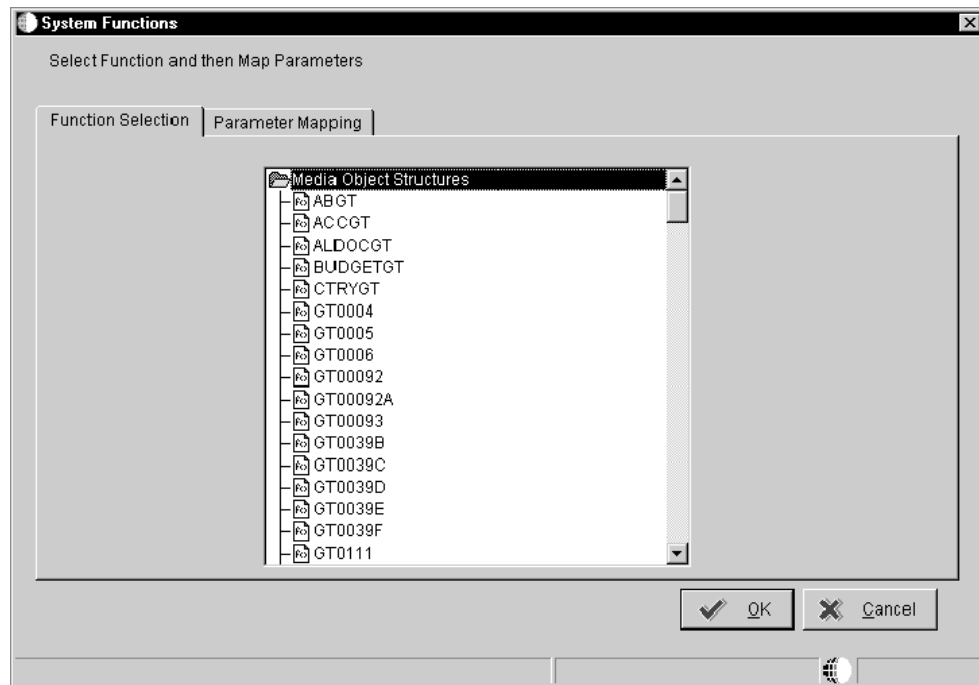


5. 〈Media Objects Setup〉で、次のいずれか 1 つをクリックします。

- Media Objects Only (メディア・オブジェクトのみ)
イメージングを含むサードパーティ製品を使用しない場合に選択します。このオプションを有効にすると、ERP 9.0 で定義され、サポートされているメディア・オブジェクトしか使用できなくなります。
 - Document Handling Only (ドキュメント処理のみ)
イベント・ルールの機能を介してメディア・オブジェクトを使用できるフォームを開発し、標準処理をバイパスする場合に使用します。
 - Media Objects & Document Handling (メディア・オブジェクトとドキュメント処理)
後で標準処理を有効にする場合に選択します。このオプションを選択する場合は、メディア・オブジェクトのすべてのイベント・ルールを削除してください。
6. [Edit mode (編集モード)] または [Display mode (表示モード)] をクリックします。
編集モードではユーザーが変更できますが、表示モードは読取専用です。
7. [Define Form Key (フォーム・キーの定義)] をクリックします。
〈System Functions (システム関数)〉フォームが表示されます。このフォームは、イベント・ルールのシステム関数を定義するためのパラメータ定義フォームと同じですが、[Media Object Structures (メディア・オブジェクト構造体)] ヘッダーのみが表示されます。



8. [Function Selection (関数の選択)] タブで、[Media Object Structures] フォルダをダブルクリックします。
メディア・オブジェクトに対して現在定義されているすべてのデータ構造体のリストが表示されます。



9. 適切なデータ構造体を選択して定義します。

メディア・オブジェクト待ち行列の処理

メディア・オブジェクト待ち行列を使用すると、物理ネットワーク・ロケーションではなく参照情報によってメディア・オブジェクトの保存ロケーションをトラッキングできます。これによって、メディア・ロケーションを管理しやすくなります。たとえば、サーバー上でメディア・オブジェクトのロケーションに変更があった場合も、その変更を ERP 9.0 の 1 か所に反映させるだけで済みます。

また、メディア・オブジェクト待ち行列は、実際のイメージ・ファイルや OLE オブジェクトが保存されているロケーションのポインタを識別するように定義する必要があります。メディア・オブジェクト待ち行列により、システム管理者は ERP 9.0 におけるメディア・オブジェクトの格納場所を容易に管理できます。ERP 9.0 でイメージング製品の管理対象でないイメージ(スキャンしたイメージなど)を使用するには、メディア・オブジェクト待ち行列を設定する必要があります。メディア・オブジェクト待ち行列は、次のタイプのオブジェクトについて設定できます。

- イメージ・オブジェクト(実際のファイル)
- OLE オブジェクト(ファイルへのリンク)
- URL(インターネット・アドレス)

イメージ・メディア・オブジェクト

イメージ・メディア・オブジェクトは、サードパーティのイメージング製品を使用してアクセス、および参照する個々のファイルです。これらのオブジェクトは、名前とネットワーク・パスにより定義されたロケーションに格納されます。たとえば、会計アプリケーションのすべてのイメージがネットワーク上のディレクトリ¥¥server1¥financials¥images に保管されている場合、イメージ・メディア・オブジェクト待ち行列は次のように定義できます。

- パス: ¥¥server1¥financials¥images
- 名称: FIN_IMAGES.BMP

OLE メディア・オブジェクト

OLE メディア・オブジェクトは、ERP 9.0 外部の OLE 準拠のアプリケーションを使用して作成され、表示される個々のオブジェクトです。ERP 9.0 では、ローまたはフォームに添付された OLE オブジェクトは、実際にはメディア・オブジェクト待ち行列に保管されている OLE オブジェクトへのリンクです。グラフィック・ファイルを除き、OLE 準拠でないオブジェクトを ERP 9.0 に添付することはできないため、OLE オブジェクトと非 OLE オブジェクトの違いが重要になります。有効な OLE オブジェクトの例には、Word、Excel、PowerPoint、Visio など、Microsoft Windows の OLE 準拠アプリケーションによるものがあります。また、サウンド・ファイルやビデオ・ファイル(拡張子.wav または.avi)も、このオブジェクトに含まれます。

URL メディア・オブジェクト

URL メディア・オブジェクトは、業界標準の URL(Uniform Resource Locations)で識別される Web サイトを指すインターネット・アドレスです。アドレスがメディア・オブジェクト・テーブルで定義されていれば、これらを使用してインターネット上のロケーションに接続できます。

メディア・オブジェクト・テーブル

通常、メディア・オブジェクト待ち行列は、OLE オブジェクトやイメージなど、ERP 9.0 のメディア・オブジェクト・ファイルのネットワーク・ディレクトリのロケーションを表します。メディア・オブジェクト・テーブルには、メディア・オブジェクト待ち行列テーブル(F98MOQUE)とイメージング固定情報テーブル(F98101)の 2 つがあります。

メディア・オブジェクト待ち行列は、メディア・オブジェクト待ち行列テーブル(F98MOQUE)に保管されます。このテーブルとイメージング固定情報テーブル(F98101)は、システム・データ・ソースに保管する必要があります。メディア・オブジェクト待ち行列テーブルには、メディア・オブジェクトの添付先となるデータ・レコード、イメージ参照、および OLE 参照の関連キー値が含まれます。イメージ参照と OLE 参照は、待ち行列名です。待ち行列名は、OLE オブジェクトやイメージのロケーションのメディア・オブジェクト待ち行列テーブルにアクセスするために使用されます。

メディア・オブジェクト・キーは、メディア・オブジェクト・テーブル(F00165)に格納されています。メディア・オブジェクトの特性プロパティは、メディア・オブジェクト・カテゴリ・テーブル(F00166)に保管されています。メディア・オブジェクト・カテゴリ固定情報テーブル(F00167)には、特定のデータ構造体に関して有効にされるカテゴリを示す情報が保管されます。

ERP 9.0 テキスト項目

テキスト項目とは、ERP 9.0 のメディア・オブジェクト・ワード・プロセッサを使用して作成する項目です。このテキスト項目には、メディア・オブジェクト待ち行列は不要です。メディア・オブジェクト・テーブル(F00165)には、テキスト・メディア・オブジェクトの添付先となるデータ・レコードの関連キー値と、テキスト自体が含まれています。ERP 9.0 外部のアプリケーション(Microsoft Word や Wordpad など)から作成されるテキスト項目は、OLE オブジェクトとして保管する必要があります。

メディア・オブジェクト待ち行列の処理には、次のタスクが含まれます。

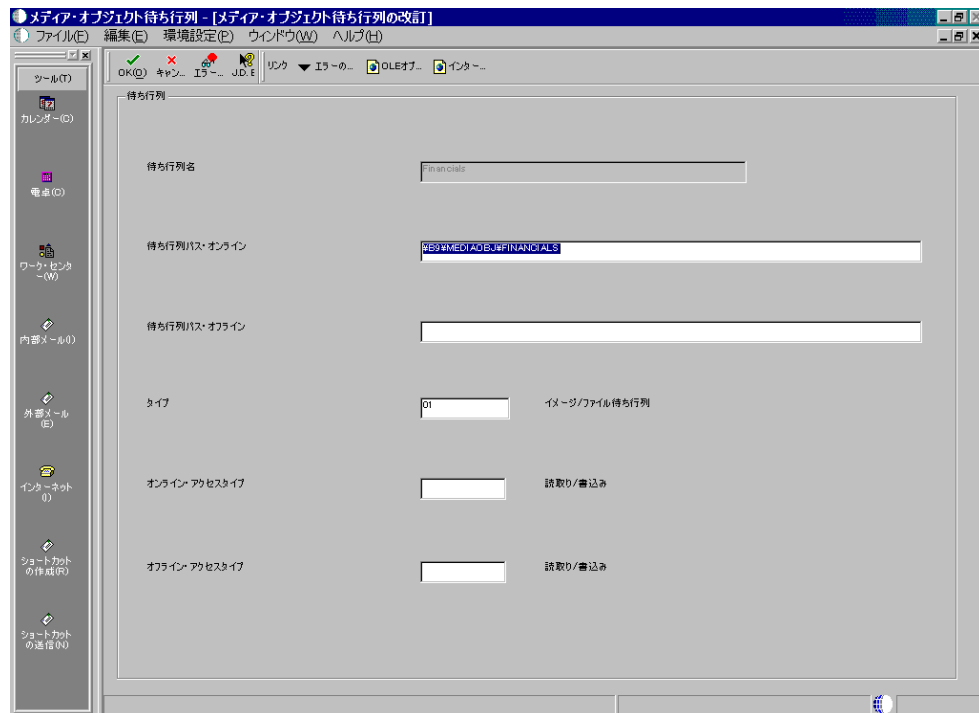
- メディア・オブジェクト待ち行列の追加

- メディア・オブジェクト待ち行列のロケーションの定義
- メディア・オブジェクト待ち行列の削除

▶ メディア・オブジェクト待ち行列を追加するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈メディア・オブジェクト待ち行列〉プログラム(P98MOQUE)を選択します。

1. 〈メディア・オブジェクト待ち行列の処理〉で、[追加]をクリックします。



2. 〈メディア・オブジェクト待ち行列の改訂〉フォームで、次のフィールドに情報を入力します。

- 待ち行列名
- 待ち行列パス・オンライン
- 待ち行列パス・オフライン
- タイプ
- オンライン・アクセスタイプ
- オフライン・アクセスタイプ

3. [OK]をクリックします。

フィールド記述

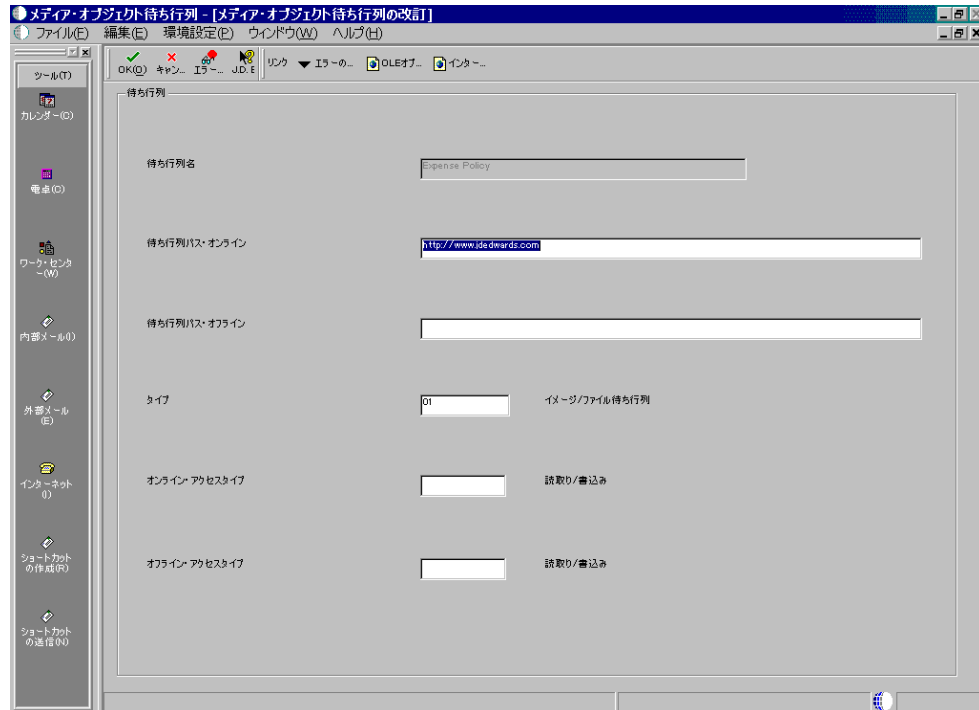
記述	用語解説
待ち行列名	<p>入力した値は、イメージが保管されるメディア・オブジェクト待ち行列名を定義するために使用します。待ち行列名は、記号として参照されるだけです。</p> <p>メディア・オブジェクト待ち行列名の半分は、正しく定義されたメディアオブジェクト待ち行列で、残りの半分はメディアオブジェクト・パスです。</p> <p>注: OLEQUE は予約された待ち行列名です。これは、メディア・オブジェクトの OLE オブジェクト添付モードでのデフォルト待ち行列名として使用されている名称を定義する必要があります。待ち行列名は OLE オブジェクト添付を使用する順序で定義してください。</p>
待ち行列パス・オンライン	<p>OLE オブジェクト、イメージ、または URL のロケーションを示すパス。待ち行列パスは、メディア・オブジェクトで定義された待ち行列の後半部分です。前半部分は、メディア・オブジェクトの名前です。ネットワーク・ロケーションの有効な待ち行列パスは¥¥server1¥share3¥images¥financial です。CD ROM の待ち行列を設定するには、パス名に“cd:”を指定すると、パスが解決されるときに該当するドライブの文字が自動的に置き換わります。</p> <p>待ち行列のパスおよび名前はメディア・オブジェクト待ち行列テーブル (F98MOQUE) に保管されます。オブジェクト構成マネージャは、このテーブルのロケーションを制御します。F98MOQUE テーブルが読み取られ、待ち行列名と関連付けられた OLE オブジェクト、イメージまたは URL のロケーション名が指定されます。</p>
待ち行列パスオフライン	<p>OLE オブジェクト、イメージ、URL のロケーションを指定するローカルパスを識別します。待ち行列パスは、メディア・オブジェクトに定義された待ち行列の後半部分です。前半部分は、メディア・オブジェクト名です。オフライン処理を実行中の待ち行列の有効なパスは、D:\$DATA\$MEDIA\$IMAGES などです。</p> <p>待ち行列のパスおよび名前は、F98MOQUE テーブルに保管されています。OCM (オブジェクト構成マネージャ) は、このテーブルのロケーションを制御します。F98MOQUE テーブルは、待ち行列名、関連する OLE オブジェクト、イメージ、または URL のロケーションを指定するのに読み取られます。</p>

▶ メディア・オブジェクト待ち行列のロケーションを定義するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から 〈メディア・オブジェクト待ち行列〉プログラム (P98MOQUE) を選択します。

- OLE 待ち行列が存在しない場合は、[追加] をクリックします。
 - 〈メディア・オブジェクト待ち行列〉フォームで、次のフィールドに情報を入力します。
 - 待ち行列名
 - 待ち行列パス・オンライン
 - 待ち行列パスオフライン
 - タイプ

- オンライン・アクセスタイプ
 - オフライン・アクセスタイプ
- b. [OK]をクリックします。
2. 既存のメディア・オブジェクト待ち行列を変更する場合は、[検索]をクリックし、待ち行列名とそのパスのリストを表示します。
 3. 修正する待ち行列名を選んで[選択]をクリックします。



4. 〈メディア・オブジェクト待ち行列の改訂〉で、[待ち行列パス・オンライン]フィールドの情報を変更して[OK]をクリックします。

▶ メディア・オブジェクト待ち行列を削除するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈メディア・オブジェクト〉 - 〈メディア・オブジェクト待ち行列〉プログラム(P98MOQUE)を選択します。

1. 〈メディア・オブジェクト・待ち行列の処理〉で、[検索]をクリックします。
2. 削除する待ち行列を選択します。
3. ツールバーから[削除]をクリックします。

メディア・オブジェクト待ち行列を削除すると、待ち行列の定義のみが削除され、関連するパスとオブジェクト自体は削除されません。

イメージングの設定

フォームやグリッド・ローにイメージを添付する方法の 1 つに、メディア・オブジェクト機能のイメージ機能があります。ただし、この方法には高度なドキュメント管理システムが必要です。J.D. Edwards と提携しているイメージング・ベンダーのリストについては、J.D. Edwards の Web サイトを参照してください。

ERP 9.0 では、サードパーティのドキュメント処理システムとのインターフェイスに、OLE クライアント/サーバー・モデルを使用しています。これには、OLE クライアント・インターフェイスと OLE サーバーが含まれます。現在サポートしているイメージング・システムについて、ERP 9.0 では次の最小限の設計目標を達成しています。

- 検索

検索メカニズムでは、ドキュメント処理システムのインデックス・システムに格納された文書を検索します。ドキュメント処理システムの記録構造にアクセスするため、ユーザーは特定の文書やその一式を容易に検索できます。

- リンク

検索操が終了すると、リンク・メカニズムによって ERP 9.0 に固有の文書 ID が戻されます。この ID は、トランザクションと共に保存されます。

- 表示

表示メカニズムにより、ユーザーが文書を表示できるように、固有の文書 ID が文書表示メカニズムに渡されます。

現時点で ERP 9.0 でサポートしていないサードパーティのイメージング・システムを必要とするカスタマーは、インターフェイスのためにカスタムの OLE オートメーション・サーバーを設計できます。OLE サーバーは、OLE 準拠のどの言語でも記述できます。J.D. Edwards では、互換性を備えたミドルウェア・アプリケーションを開発できるように、一連の API を用意しています。これらの API は、ERP 9.0 と共にインストールされる Windows ヘルプ・ファイルに記述されています。

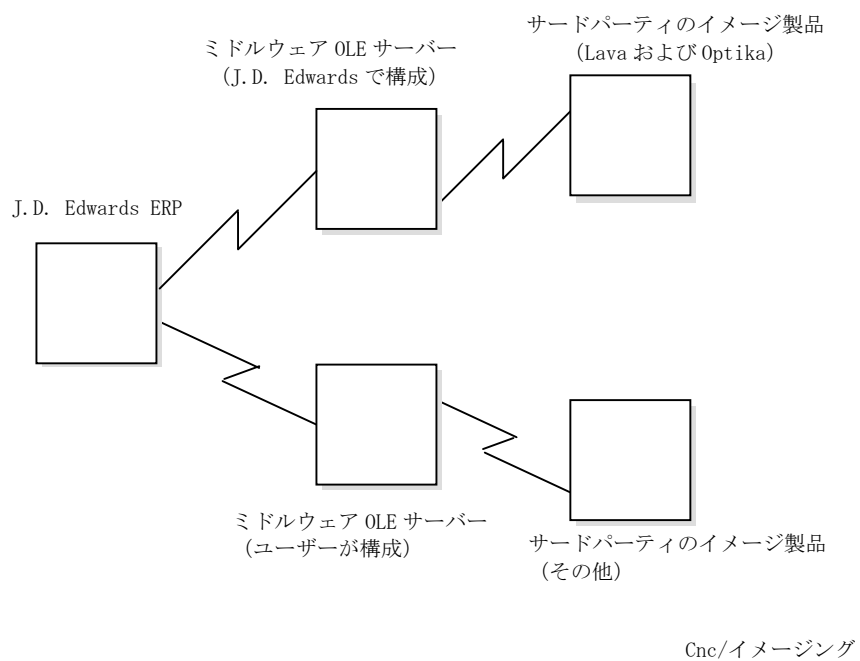
イメージング・システムのフローの理解

イメージングは、ドキュメント処理システムと併用できます。このシステムでは、文書を自動的にスキャンしてカタログ化できます。イメージにはシステムによりインデックスが設定されるため、固有の条件セットに基づいて再度呼出しできます。たとえば、イメージには、タイプ、部門、および日付に応じてインデックスを設定できます。イメージはいつでも呼出し、表示、および分析ができます。たとえば、トランザクション入力の場合は、データ入力担当者がイメージを呼び出してソース文書として使用できるように、文書を受け取った時点で紙ベースの書類をスキャンします。

ERP 9.0 には、ユーザー定義の選択条件に基づいて文書を取り出し、参照する機能があります。リンク・システムによって、後で取り出して参照できるように、ERP 9.0 トランザクションがその文書に連結されます。ユーザーがイメージからアプリケーションに直接アクセスできるように、ERP 9.0 のトランザクション ID を、ドキュメント処理システムでスキャンされたイメージに添付できます。

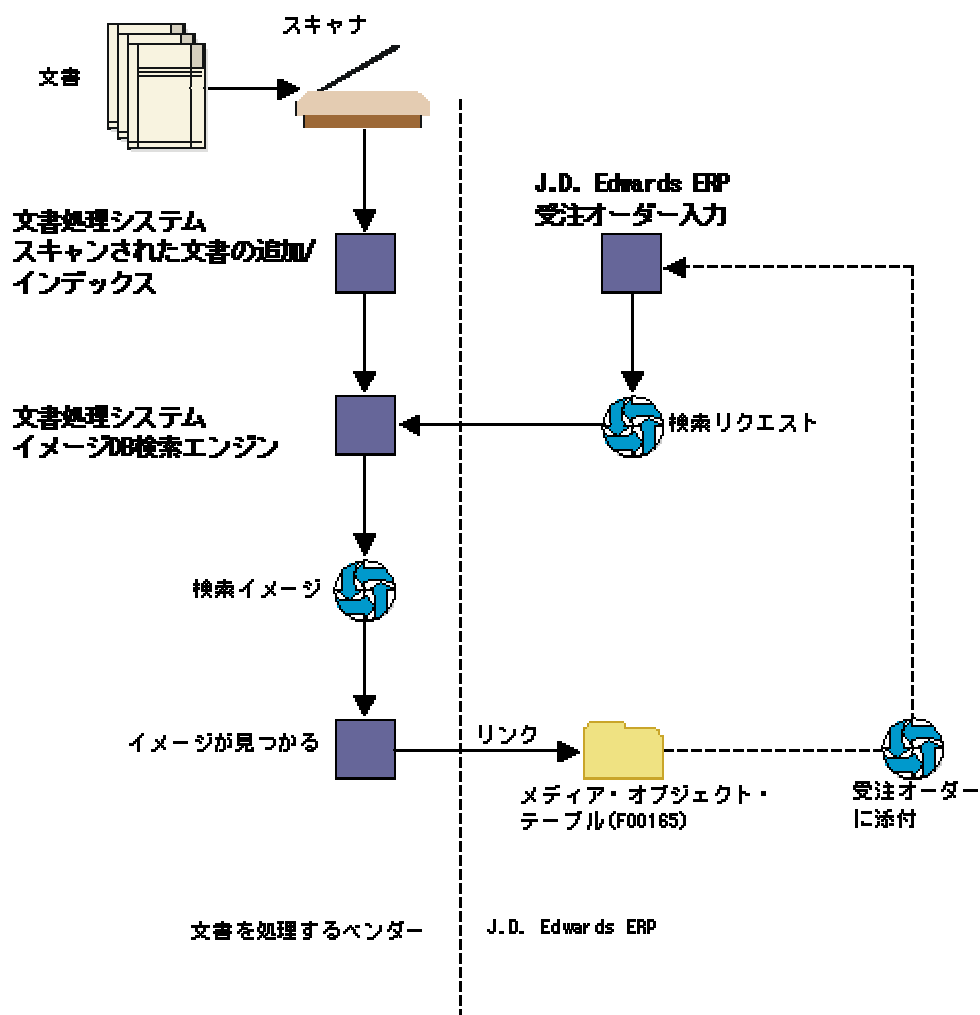
イメージングを設定するには、この機能をシステム・レベルで使用可能にします。イメージング・システムを使用可能にするには、イメージング固定情報テーブル(F98101)に登録レコードが必要です。

次の図は、ERP 9.0 でミドルウェア OLE サーバー・レイヤを介してサードパーティのイメージング製品がサポートされる流れを示しています。また、カスタマーは独自の OLE サーバーを作成して、イメージング・システムを追加サポートすることもできます。



イメージング・プロセス・フロー

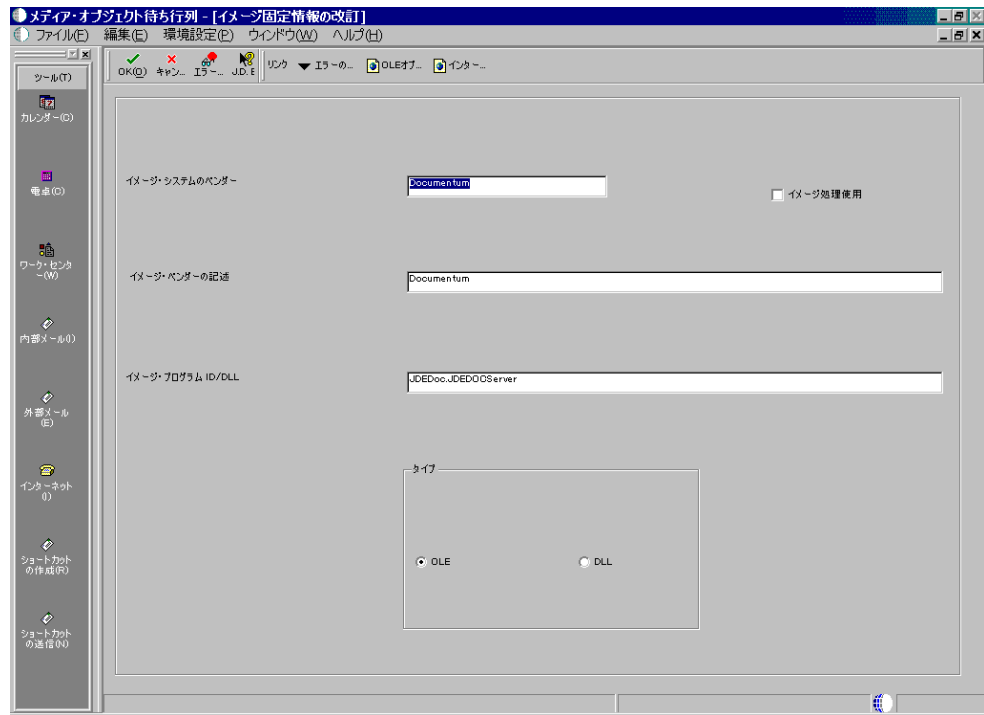
次の図は、標準的なイメージングの使用例を示しています。



▶ メディア・オブジェクトを使用可能にするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈メディア・オブジェクト〉-〈メディア・オブジェクト待ち行列〉プログラム(P98MOQUE)を選択します。

1. 〈メディア・オブジェクト待ち行列の処理〉で、[フォーム]メニューから[イメージ処理]を選択します。



2. 〈イメージング固定情報の改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。

- イメージシステムのベンダー
- イメージベンダーの記述
- イメージプログラム ID/DLL

3. 次のオプションを有効にします。

- イメージ処理使用
- OLE

フィールド記述

記述	用語解説
イメージシステムのベンダー	システムで使用するイメージ・システムのベンダー名
イメージベンダーの記述	システムで使用するイメージ・システムのベンダーの記述
イメージプログラム ID/DLL	イメージ・タイプが OLE の場合、システム・レジストリにおけるイメージ・システムを識別する際に使用されるプログラム ID を入力してください。 イメージ・タイプが DLL の場合、イメージ・システム DLL 名を入力してください。
イメージ処理使用	イメージ・システムがシステムで現在アクティブかどうかを示します。
OLE	イメージ・システムが使用するインターフェイスのタイプを示します。

ユニバーサル・テーブル・ブラウザ

異なるデータベースに保管されているテーブルのデータを参照する場合は、ERP 9.0 の〈ユニバーサル・テーブル・ブラウザ〉を使用できます。このツールでは、テーブルの構造だけでなく、テーブルにデータがあるかどうかを確認できます。〈ユニバーサル・テーブル・ブラウザ〉では、アクセスするデータベースから独立した状態で、JDEBASE API を使用してデータベースからデータを取り出します。

テーブルのデータ表示

異なるデータベースに保管されているテーブルのデータを参照する場合は、ERP 9.0 の〈ユニバーサル・テーブル・ブラウザ〉を使用できます。このツールでは、テーブルの構造だけでなく、テーブルにデータがあるかどうかを確認できます。〈ユニバーサル・テーブル・ブラウザ〉では、アクセスするデータベースから独立した状態で、JDEBASE API を使用してデータベースからデータを取り出します。

注:

〈セキュリティ・ワークベンチ〉を通じて設定したカラムとローのセキュリティは、すべて〈ユニバーサル・テーブル・ブラウザ〉に適用されます。

▶ テーブルのデータを参照するには

1. 〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈ユニバーサル・テーブル・ブラウザ〉を選択します。
2. 〈Universal Table Brower〉で、[File(ファイル)]メニューから[Open Table(テーブルを開く)]を選択します。



3. 〈テーブル/データ・ソースの選択〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - テーブル
 - データ・ソース
4. 次のオプションを有効にします。

- データのフォーマット

他の ERP 9.0 アプリケーションと同様に、QBE ローを使用できます。たとえば、[ABAN8]カラムの QBE に">50"と入力すると、50 より大きい住所番号を持つレコードが表示されます。また、[ABALPH]カラムの QBE に"*F*"と入力すると、名称が英字 F で始まるレコードを表示できます。

カラム順序やカラム幅調整機能も、他の ERP 9.0 アプリケーションと同様に使用できます。カラムの配置は変更できます。たとえば、使用頻度の高いカラムを末尾から先頭に移動したり、あるカラムを関連するカラムの隣に移動したりできます。また、カラムのサイズも設定できます。

フィールド記述

[illegible]

例:ユニバーサル・テーブル・ブラウザ(未フォーマット・データ)

次の例は、[データのフォーマット]オプションが選択されていない状態で開かれているデータベース・テーブルを示しています。テーブル F0101 の [ABAN8] カラムの情報の構造に注目してください。この情報はフォーマットされておらず、データベースに保管されているとおりに表示されています。

Universal Table Browser - [Address Book Master - F0101 - OneWorld Business Data]							
File Edit Records View Window Help							
	ABAN8	ABALKY	ABTAX	ABALPH	ABDGO	ABMCU	
4280				International Corporate Structure	INTERNATIONALCORPORATESTRU	1	\$200
4281				US Warehouse	USWAREHOUSE	1	\$200
4282				European Warehouse	EUROPEANWAREHOUSE	1	\$200
4283				Western Distributor	WESTERNDISTRIBUTOR	1	\$200
4284				Central Distributor	CENTRALDISTRIBUTOR	1	\$200
4285				Northern Distributor	NORTHERNDISTRIBUTOR	1	\$200
4286				Eastern Distributor	EASTERNDISTRIBUTOR	1	\$200
4287				Columbia Store	COLUMBIASSTORE	1	\$200
4288				Littleton Store	LITTLETONSTORE	1	\$200
4289				Hannover Store	HANNOVERSTORE	1	\$200
4302		HJA	20202262745	Javier Allende	JAVIERALLENDE	1	7000
4317			125235288	Appliance Parts and Supply	APPLIANCE PARTS AND SUPPLY	1	
4318			568569812	Appliance Pro	APPLIANCE PRO	1	
4319			687461552	Appliance Sales and Service	APPLIANCE SALES AND SERVICE	1	\$200
4320			559823423	NEI Systems	NEISYSTEMS	1	
4321			569823569	Worldwide Communications, Inc.	WORLDWIDECOMMUNICATIONSIND	1	
4322				Rotel Communications	ROTELCOMMUNICATIONS	1	
4323			585368851	DLB Energy	DLBENERGY	1	
4324				Colorado Water	COLORADOWATER	1	
4325				Chicago Water	CHICAGOWATER	1	
4326				The Parcels Store - Denver	THEPARCELSTOREDENVER	1	
4327				The Parcels Store - Chicago	THEPARCELSTORECHICAGO	1	
4341				International Supply Company	INTERNATIONALSUPPLYCOMPANY	1	7000
4342				SPD Freight Company	SPDFREIGHTCOMPANY	1	7000
4343			611483910	Parts Emporium	PARTSEMPORIUM	1	7000
4344			11-68791376	Universal Incorporated	UNIVERSALINCORPORATED	1	7000
4345				E&O World Wide Company	EOWORLDWIDECOMPANY	1	7000
4346				Travel Company, The	TRAVELCOMPANYTHE	1	7000
4347			554887654	S&J Contracting	S&JCONTRACTING	1	7000
4348				Port Authority	PORTAUTHORITY	1	7000
4349				Department of Taxation	DEPARTMENT OF TAXATION	1	
4350				Equitable Insurance Company	EQUITABLEINSURANCECOMPANY	1	7000
4351				Columbian Bike Design	COLUMBIANBIKEDSIGN	80	7000
4355				CHBank Officorp Center	CHIBANKOFFICORPCENTER	1	6000
4356				American Express Co	AMERICANEXPRESSCO	1	6000
4360			256566301	Allen Supplies	ALLENSUPPLIES	1	6000
4365			126574550	Evaluated Paint Supplies	EVALUATEDPAINTSUPPLIES	1	
4370				Maddox Industries	MADDOXINDUSTRIES	1	7000
4381		GRS	27168124894	Grisolia Rodriguez	GRISOLIA RODRIGUEZ	1	7000
4390		LUKY	20223335552	Lucas J. Allende	LUCAS J. ALLENDE	1	7000

Grid Rows Loaded: 417 Row Selected: 1

Ready

例:ユニバーサル・テーブル・ブラウザ(フォーマット済みデータ)

次の例は、[データのフォーマット]オプションが選択された状態で開かれているデータベース・テーブルを示しています。住所録マスター(F0101)の[ABAN8]カラムの情報の構造が、データ辞書スペックを使用してフォーマットされています。

Universal Table Browser - [Address Book Master - F0101 - OneWorld Business Data]							
File Edit Records View Window Help							
	ABAN8	ABALKY	ABTAX	ABALPH	ABDGO	ABMCU	
1			430788490	Financial/Distribution Company	FINANCIAL/DISTRIBUTIONCOMPA	1	6000
20				Marketing Company	MARKETINGCOMPANY	1	7000
27				Eastern Area Distribution Center	EASTERNAREA DISTRIBUTIONCENT	27	7000
28			10000	Prueba - Argentina - 28	PRUEBAARGENTINA28	1	7000
50				Project Management Company	PROJECTMANAGEMENTCOMPANY	1	7000
60				Financial Reporting Company	FINANCIALREPORTINGCOMPANY	1	6000
70				Luxe de France	LUXEDEFRANCE	1	7000
75				Cascades Ltd.	CASCADES LTD	1	7000
77				Canadian Company	CANADIANCOMPANY	1	7000
80				Colombian Company	COLOMBIANCOMPANY	1	7000
150			455788989	Property Management Company	PROPERTYMANAGEMENTCOMPANY	1	1500
151				Lessee Property Management Comp	LESSEEPROPERTYMANAGEMENTO	1	1500
152				Global Property Management Compan	GLOBALPROPERTYMANAGEMENTO	1	1500
200				Manufacturing/Distribution Company	MANUFACTURING/DISTRIBUTIONO	1	7000
249				Model Entry & Chemical Company	MODELENTRYCHEMICALCOMPAN	1	7000
281				Almacen Compania 28 - ESTE	ALMACENCOMPANIA28-ESTE	28	7000
283				Almacen Compania 28 - OESTE	ALMACENCOMPANIA28OESTE	28	7000
500				Gas Station A	GASSTATIONA	1	7000
506				Consignment Agent	CONSIGNMENTAGENT	1	\$200
610				Australian Payroll Company	AUSALIANPAYROLLCOMPANY	1	
630				New Zealand Payroll Company	NEWZEALANDPAYROLLCOMPANY	1	
700				Gas Station - ODP	GASSTATION-ODP	1	7000
705				Consignment Agent - ODP	CONSIGNMENTAGENT-ODP	1	\$200
801				Mexican Company	MEXICANCOMPANY	1	
1001			66595263000170	J.D. Edwards & Company	J.D. EDWARDS' COMPANY	1	
1234			225632546	Long Ben	LONG BEN	1	
1530				Edsco Ecan Outlet Store	EDSCOECANOUTLETSTORE	1	\$200
1531				Unlimited, The	UNLIMITED,THE	1	\$200
1532				GeoTek	GEOTEK	1	\$200
1533				Carbone & Carlinio	CARBONE&CARLINIO	1	\$200
1534				Rocky Mtn Promotion Group	ROCKYMTPROMOTIONSGROUP	1	\$200
1535				Arthur Mitchell, PC	ARTHURMITCHELL,PC	1	\$200
1536				RVC Architects/Planners	RVCARCHITECTS/PLANNERS	1	\$200
1537				Tattered Books	TATTEREDBOOKS	1	\$200
1538				Abernathy & Hitch	ABERNATHY&HITCH	1	\$200
1539				Auto Car Rental	AVISCARRENTAL	1	\$200
1540				De Anna's Deli	DEANNASDELI	1	\$200
1620				Birmingham Steel	BIRMINGHAMSTEEL	1	1000
1621				Birmingham Steel	BIRMINGHAMSTEEL	1	1000
2006			923785321	Walters, Annette	WALTERS,ANNETTE	1	

Grid Rows Loaded: 417 Row Selected: 1

Ready

▶ テーブルの列のプロパティを表示するには

1. 〈ユニバーサル・テーブル・ブラウザ〉で、「テーブルのデータ表示」で説明した手順でテーブルを表示します。
2. 必要な列を右クリックして[Column Properties(列のプロパティ)]を選択します。

フォーマット済みのテーブルを表示すると、〈Column Properties〉フォームの右上部分にデータ辞書のプロパティが表示されます。フォーマットなしのテーブルを表示している場合、データ辞書プロパティは表示されません。

例:列・プロパティ

この例は、ERP 9.0 のデータ辞書項目 USEQ の列・プロパティを示しています。この ERP 9.0 項目の SQL 列名は、DTUSEQ です。

The screenshot shows the 'Column Properties' dialog box with the following fields and values:

Field	Value
SQLColumnName:	DTUSEQ
Long Name:	UserDefinedCodeSequence
Alias:	USEQ
Size:	4
ID Dictionary:	USEQ
System Code:	00
Data Type:	EVDI_MATH_NUMERIC
Decimals Stored:	0
Decimals Displayed:	1
Currency Column:	0
Glossary Group:	
Can Have Security ?	
Next Number System:	
Search Form Name:	
Edit Rule:	
Display Rule:	CODE:4
C Driver Type:	JDEDB_C_DOUBLE
Offset in Buffer:	39
Actual Type:	8
Precision:	15
Scale:	0

An 'OK' button is located at the bottom left of the dialog.

フラット・ファイル・エンコーディングの処理

J.D. Edwards ソフトウェアは Unicode を使用していますが、すべてのサードパーティも Unicode を使用しているとは限らないため、すべてのフラット・ファイルについて事前/事後処理に関する中断があります。中断している間に、フラット・ファイルを Unicode 文字セットに変換したり元の文字セットに戻したりします。フラット・ファイルに適用する変換文字は、フラット・ファイルのエンコーディング・レコードを追加および有効にすることにより、ユーザーやロール、プログラム ID、プログラム・バージョン、および環境に基づいて割り当てることができます。

〈Unicode フラット・ファイル・エンコード構成〉プログラム(P93081)を使うと、ユーザーやロール、プログラム ID、プログラム・バージョン、環境に基づいて、プログラムに使用される文字セットを指定するテーブルのレコードを作成できます。事前/事後処理の中断が発生すると、中断したプログラムによりテーブルが呼び込まれて検索され、レコードが適用されます。検索は、詳細度の高いレコードから順に行われます。

〈Unicode フラット・ファイル・エンコード構成〉は、主にパワー・ユーザーおよびシステム管理者が使用します。ビジネス・マネージャは、サードパーティ製のフラット・ファイルをエンコード化するために文字セットを提供することができます。

フラット・ファイル・エンコード・レコードを設定する前に、転送するフラット・ファイルのエンコードを知っておく必要があります。ユーザーやロール、プログラム、プログラム・バージョン、フラット・ファイルを呼び出す環境を知っておく必要があります。

使用する主要な文字セットにすべてのファイルがエンコードされているかどうかを確認するには、主要な文字セットのデフォルト・フラット・ファイル・エンコード・レコードを設定して、例外を追加してください。システムでは特殊なレコードから一般的なレコードの順に適用され、デフォルト・レコードは、受信フラット・ファイルに適用されるレコードが他にない場合にのみ使用されます。フラット・ファイル・エンコード・レコードを追加/有効にしない場合、デフォルト・レコードは Unicode 文字セットの UCS2、UTF16_BE/UTF16_LS です。

次のリストでは、現在サポートされている UDC(H95/FE)からの文字セットを示しています。

コード	説明	Xe の.ini 設定
BIG5	中国語(繁体字)	TC_BIG5
CP1250	WIN-ラテン 2、中央ヨーロッパ言語	EE_CP1250
CP1251	WIN-キリル語	RS_CP1251
CP1252	WIN-ラテン 1、西ヨーロッパ言語	WE_ISO88591
CP1253	WIN-ギリシャ語	GR_CP1253
CP1254	WIN-ラテン 5、トルコ語	TK_CP1254
CP1256	Win-アラビア語	AR_CP1256
GB2312	中国語(簡体字)	SC_GB
IBM-1123	EBCDIC-キリル語	RS-EBCDIC
IBM-420	EBCDIC-アラビア語	AR_EBCDIC
IBM-933	EBCDIC-韓国語	KO_EBCDIC

IBM-935	EBCDIC-中国語(簡体字)	SC_EBCDIC
IBM-937	EBCDIC-中国語(繁体字)	TC_EBCDIC
IBM-939	EBCDIC-日本語	JA_EBCDIC
IBM-37	EBCDIC-ラテン 1 または西ヨーロッパ言語	US_EBCDIC
KSC-5601	韓国語	KO_KSC
SHIFT_JIS	WIN-日本語	JA_SJIS
UCS2	UTF16_BE/UTF16_LE	
UTF-16LE	UTF16_LE	
UTF-16BE	UTF16_BE	
UTF8	UTF8	
IBM-858	# PC ラテン 1 ヨーロッパ言語付き	

フラット・ファイル・エンコード・レコードの追加

事前/事後処理の中断中にフラット・ファイルに適用する文字セットを定義するには、フラット・ファイル・エンコード・レコードを追加します。フラット・ファイル・エンコード・ファイルは、ユーザーやユーザー・ロール、プログラム ID、プログラム・バージョン、および環境に基づいて適用できます。

フラット・ファイル・エンコード・レコードを追加した後は、そのレコードを有効にする必要があります。

▶ フラット・ファイル・エンコード・レコードを追加するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈Unicode フラット・ファイル・エンコード構成〉プログラムを選択します。

1. 〈フラット・ファイル・エンコードの処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈フラット・ファイル・エンコードの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- ユーザー/ロール

デフォルトのユーザー/ロールはすべてのユーザーを含む*PUBLIC です。ユーザーまたはロールを指定すると、フラット・ファイル・エンコードをそのユーザーまたはロールで実行しているプログラムにのみ制限できます。

- 環境

デフォルト環境は、すべての環境に文字セットを適用する*ALL です。環境を指定すると、フラット・ファイル・エンコードをその環境で実行しているプログラムのみ制限できます。

- プログラム ID

フラット・ファイル・エンコードを適用するバッチまたは対話型アプリケーションを識別します。デフォルトの値はフラット・ファイル・エンコードをすべてのプログラムに適用する*DEFAULT です。

- バージョン ID

バージョンは、バッチまたは対話型アプリケーションの実行方法を決定するユーザー定義のスペック・セットです。フラット・ファイル・エンコードを適用するバッチまたは対話型バージョンを識別します。デフォルトのバージョンはフラット・ファイル・エンコードをすべてのバージョンに適用する*DEFAULT です。

- エンコード名

受信/送信フラット・ファイルで使用する文字セットを識別します。エンコード名を指定してください。

参照

- 現在定義されているエンコード・ファイルのリストについては『テーブル・コンバージョン』の「API フラット・ファイル・コンバージョンの設定」

フラット・ファイル・エンコード・レコードの有効化

フラット・ファイル・エンコード・レコードを追加した後は、受信/送信フラット・ファイルに適用する前にそのレコードを有効にする必要があります。

▶ フラット・ファイル・エンコード・ファイルを有効化/無効化するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈Unicode フラット・ファイル・エンコード構成〉プログラムを選択します。

1. 〈フラット・ファイル・エンコードの処理〉で、[検索]をクリックして定義済みフラット・ファイル・エンコード・ファイルを表示します。
2. 有効化/無効化するフラット・ファイル・エンコードをハイライトします。
3. [ロー]メニューから[変更状況]を選択します。

フラット・ファイル・エンコードの状況が有効(AV)または無効(NA)になります。

例:フラット・ファイル・エンコード・レコードの設定

この例の会社では、フラット・ファイル・エンコードの文字セット CP1252、WIN-ラテン 1、西ヨーロッパ言語を使用しています。ただし〈受注オーダー入力〉プログラム(P4210)では、PDEVCLA 環境でユーザーJL5534221 がバージョン JDE0001 を実行して CP1250、WIN-ラテン 2、中央ヨーロッパの文字セットを使用する場合を除いては、UTF8、Unicode の文字セットが使用されます。同じプログラムでは、環境 PDEVASD2 に文字セット CP1254、WIN ラテン 5(トルコ語)が使われることがあります。

次の表では、例に出てくる会社がフラット・ファイル・エンコード・テーブルに必要なエンコード・レコードの情報を示しています。

ユーザー /ロール	アプリケーション名	アプリケーション・バージョン名	環境	エンコード名	状況
すべて	すべて	すべて	すべて	CP1252	アクティブ
すべて	P4210	すべて	すべて	UTF8	アクティブ
JL5534221	P4210	JDE0001	PDEVCLA	CP1250	アクティブ
すべて	P4210	すべて	PDEVASD2	CP1254	非アクティブ

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈Unicode フラット・ファイル・エンコード構成〉プログラムを選択します。

4. 〈フラット・ファイル・エンコードの処理〉で、[追加]をクリックします。
5. 〈フラット・ファイル・エンコードの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- ユーザー/ロール
*PUBLIC はすべてのユーザーとロールを含みます。
- 環境
*ALL はすべての環境を含みます。
- プログラム ID
*DEFAULT はすべてのプログラムを含みます。
- バージョン ID
*DEFAULT はすべてのプログラム・バージョンを含みます。
- エンコード名
次の情報を入力してください。CP1252

6. 手順 2 を繰り返し、テーブルに次のレコードを追加します。

ユーザー /ロール	環境	プログラム ID	バージョン	エンコード名
*PUBLIC	*ALL	*DEFAULT	*DEFAULT	CP1252
*PUBLIC	*ALL	P4210	*DEFAULT	UTF8
JL5534221	PDEVCLA	P4210	JDE0001	CP1250
*PUBLIC	PDEVASD2	P4210	*DEFAULT	CP1254

7. [キャンセル]をクリックして<フラット・ファイル・エンコードの処理>に戻ります。
8. [検索]をクリックして、すべてのフラット・ファイル・エンコード・レコードを表示します。
9. 最初のレコードをハイライトして、[ロー]メニューから[変更状況]を選択してレコードを有効にします。
10. 手順 6 を繰り返し、現在アクティブなレコードを有効にします。

次の表では最終構成を示しています。

ユーザー /ロール	環境	プログラム ID	バージョン	エンコード名	状況
*PUBLIC	*ALL	*DEFAULT	*DEFAULT	CP1252	AV
*PUBLIC	*ALL	P4210	*DEFAULT	UTF8	AV
JL5534221	PDEVCLA	P4210	JDE0001	CP1250	AV
*PUBLIC	PDEVASD2	P4210	*DEFAULT	CP1254	NA

ERP 9.0 の命名規則

ここでは、構成設定時に推奨する命名規則について説明します。名称には、英数字を使用する必要があります。サーバー・プラットフォームによっては、一部の文字を使用できない場合があります。

パス・コード

パス・コードの命名規則は、次のとおりです。

- 10 文字以内
- 大文字のみ使用可能

データ・ソース

データ・ソースの命名規則は、次のとおりです。

- 30 文字以内
- 大文字/小文字を区別

以下は、Client Access データ・ソースにのみ適用される命名規則です。

- 32 文字以内
- 1 文字目には英字を使用
- 次の文字は使用できません。

{ }

[]

()

?

*

=

!

@

;

注:

Client Access の ODBC ドライバを使用して AS/400 のデータにアクセスするには、データ・ソース名を入力する必要があります。

データ・ソース記述

- 80 文字以内

パッケージ名

パッケージの命名規則は、次のとおりです。

- 10 文字以内
- 大文字のみ使用可能
- 次の文字は使用できません。

/

¥

:

*

?

”

<

>

|

サーバー名

サーバーの命名規則は、プラットフォームごとに異なります。たとえば HP9000 と AS/400 では、サーバー名を定義するときに入力できる文字が異なります。また ERP 9.0 では、サーバー名に使用できる文字は、プラットフォームに関係なく 15 文字に制限されています。

ワークステーション名

ワークステーションの命名規則は、次のとおりです。

- 15 文字以内
- 各ワークステーションには固有名が必要です。
- Windows NT Server ドメインにワークステーションを追加する場合は、そのコンピュータ用にネットワーク管理者によって指定された名前を使用する必要があります。

ワークステーション名に対するコンピュータ・アカウントがドメインで設定されていないければ、そのドメインにサインオンできないか、ドメイン・ユーザー・アカウントにアクセスできません。

jde.ini ファイル

ここでは、jde.ini ファイル (AS/400 の場合は INI ファイル) の設定の一覧を示します。

jde.ini ファイルは、ERP 9.0 用のランタイム設定が含まれている初期化ファイルです。インストール時には、すべての ERP 9.0 ワークステーションとエンタープライズ・サーバーに、このファイルの特定バージョンが存在しなければなりません。

jde.ini は、見出しが付いたセクションに分かれています。各セクション見出しは、[JDENET]のように大カッコで囲まれています。各セクションには、1 つまたは複数のキーが含まれています。キー名は“=”記号の左辺、キー値は右辺です。

jde.ini ファイルにアクセスするには、次の 3 つの方法があります。

- Windows Explorer にアクセスして jde.ini ファイルを検索し、ダブルクリックして開きます。ファイルを参照するにはメモ帳を使用します。
- Windows の[スタート]ボタンを使用して、オプション・リストから[ファイル名を指定して実行]を選択します。[名前]フィールドに“jde.ini”と入力します。
- ERP 9.0 Explorer の[略式コマンド]に“jde.ini”と入力します。

この章の使用方法

記述を見つけやすいように、[CLUSTER]などのセクションはアルファベット順に掲載してあります。各セクションの設定は、jde.ini ファイルでの表示順になっています。

jde.ini ファイルのロケーション

jde.ini ファイル (AS/400 の場合は INI ファイル) のロケーションは、ERP 9.0 プラットフォームに応じて異なります。

注:

ワークステーションについては、『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「ワークステーション jde.log の設定」を参照してください。

エンタープライズ・サーバーについては、『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「エンタープライズ・サーバー jde.log の処理」を参照してください。

ワークステーションの jde.ini 設定の理解

ここでは、クライアント側の ERP 9.0 ワークステーションの jde.ini ファイルの設定の詳細を説明します。情報は、[DEBUG]などセクション別になっています。各セクションはアルファベット順になっていますが、セクションの設定はソフトウェアで表示される順に掲載してあります。

jde.ini ファイルは、ワークステーションのデフォルトの Windows ディレクトリにあります。このディレクトリの名称は、使用するオペレーティング・システムのタイプによって異なる場合があります。Windows

NT を使用している場合は、デフォルト・ディレクトリは Winnt40 となることがあります。Windows 95 を使用している場合は、デフォルト・ディレクトリは Windows となることがあります。

[DB SYSTEM SETTINGS]

このセクションの設定には、デフォルトの環境とパス・コードに関する情報が含まれています。ディレクトリは、jde.ini ファイルで指定されているデフォルトのパス・コードと同じ名称のワークステーションに常駐させる必要があります。また、このセクションにはサーバー名も含まれています。

設定	値	目的
Version=	43	jde.ini ファイルと実行中の ERP 9.0 のバージョンの不一致を防止するためのバージョン番号
Default User=	JDE	データベース・ブートストラップ・テーブルのユーザー・アカウント名
Default Env=	A9CLA	ワークステーションやエンタープライズ・サーバーのデフォルト環境
Default PathCode=	PROD	環境を選択する以前にサインオン情報の表示スペックを検索するために ERP 9.0 で使用される¥b9 の下のサブディレクトリ名
Base Datasource=	Access 32	ログオン情報の呼び込み元とデータベースを表すデータ・ソース
Object Owner=	object/owner	システム・データベース・テーブルの所有者
Server=	server name	データベースが常駐するサーバー
Database=	Access 32	システム・テーブルが常駐するデータベースの名前
Load Library=	JDBODBC.DLL (Oracle 以外) (デフォルト) JDBOCI9.DLL (Oracle のみ) JDBOCI80.DLL (Oracle のみ)	システム・テーブルが保管されているデータベースにアクセスするための JDE ドライバ。これは、使用するデータベースと ERP 9.0 を実行するシステムのタイプに応じて異なります。
Decimal Shift=	N (デフォルト) Y	数値データに小数点シフトを使用するかどうかを示すフラグ
Julian Dates=	N (デフォルト) Y	日付をユリウス暦で保管するか、データベース固有の書式で保管するかを示すフラグ
Use Owner=	N (デフォルト) Y	テーブル名に所有者名を含めるかどうかを示すフラグ
Secured=	N (デフォルト) Y	ユーザーおよびパスワード・ログインを必要とするセキュリティ・データベースかどうかを指示します。
Type=	A (デフォルト)	システム・テーブルを保持するデータベースのタイプを示す 1 文字。 A (Access)、B (Base)、C (CDB)、D (DDB)、E (EBC)、F (FDB)、G (GDB)、H (HDB)、I (IDB)、J (JDB)、K (KDB)、L (LDB)、M (MDB)、N (NDB)、O (ODB)、P (PDB)、Q (QDB)、R (RDB)、S (SDB)、T (TDB)、U (UDB)、V (VDB)、W (WDB)、X (XDB)、Y (YDB)、Z (ZDB)

	O S I	O(Oracle)、A(MS Access)、S(SQL Server)、または I(Client Access、AS/400)のいずれかです。
LibraryList=		AS/400 のみ。システム・テーブルを保持するデータベースサーバーです。
Default Pwd=		デフォルトのパスワード
Default Journal=	OW_JRNL	<p>AS/400 のみ。デフォルトのジャーナル名です。AS/400 上では、ロールバックによる回復のためにジャーナルが必要です。ジャーナルには 2 つのコンポーネントがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ジャーナル • ジャーナル・レシーバ <p>ジャーナルによって、変更前および変更後のデータベース・トランザクションを記録できます。この値は、10 文字以内の任意の文字列に設定できます。</p>
Default Journal LIBRARY=	journal library	AS/400 のみ。ジャーナルが保管されるライブラリ名で、値は有効な任意のライブラリ名に設定できます。ライブラリ名はリリースごとに異なります。
Default Journal Receiver	OW_JRNL000	AS/400 のみ。ジャーナル・レシーバー名で、値は 10 文字以内の任意の文字列に設定できます。
Default Journal Receiver LIBRARY=	journal library	AS/400 のみ。レシーバーが保管されるライブラリ名で、値は有効な任意のライブラリ名に設定できます。ライブラリ名はリリースごとに異なります。
Size of Journal Receiver=		AS/400 のみ
ThousandsSeparator=	,	<p>ThousandsSeparator のデフォルト文字を設定します。数値以外の任意の文字に設定できます。この値は、クライアントのオペレーティング・システムで指定された ThousandsSeparator と一致する必要があります。</p> <p>注:</p> <p>INI ファイルではスペースは使用できません。スペースや非ブロッキング・スペースの指定が必要な場合は、代わりに文字列 SPACE または NB_SPACE を使用します。</p>
DecimalSeparator=	.	<p>DecimalSeparator のデフォルト文字を設定します。数値以外の任意の文字に設定できます。この値は、クライアントのオペレーティング・システムで指定された DecimalSeparator と一致する必要があります。</p> <p>注:</p> <p>INI ファイルではスペースは使用できません。スペースや非ブロッキング・スペースの指定が必要な場合は、代わりに文字列 SPACE または NB_SPACE を使用します。</p>

[DB SYSTEM SETTINGS – SECONDARY]

このセクションはワークステーション専用です。各設定は、2 次データ・ソースで ERP 8.0 を起動するためのもので、基本データ・ソースは使用できません。これらの設定は、2 次データ・ソースのデータ・ソース・マスター(F98611)の値と同じにする必要があります。

設定	標準値	目的
Base Datasource=	Access32	ログオン情報の呼び込み元とデータベースを表すデータ・ソース
Object Owner=		システム・テーブルのデータベース所有者
Server=	server name	システム・テーブルが保管されているデータベースが常駐するサーバー
Database=	Access32	システム・テーブルが保管されているデータベースの名前
Load Library=	JDBODBC.DLL (デ フォルト)	システム・テーブルを保持するデータベースにアクセスするための JDE ドライバ
Decimal Shift=	N (デフォルト) Y	数値データに小数点シフトを使用するかどうかを示すフラグ
Julian Dates=	N (デフォルト) Y	日付をユリウス暦で保管するか、データベース固有の書式で保管するかを示すフラグ
Use Owner=	N (デフォルト) Y	テーブル名に所有者名を含めるかどうかを示すフラグ
Secured=	N (デフォルト) Y	ユーザーおよびパスワード・ログインを必要とするセキュリティ・データベースかどうかを示すフラグ
Type=	A (デフォルト) O S I	システム・テーブルが保管されているデータベースのタイプを示す 1 文字。O(Oracle)、A(MS Access)、S(SQL Server)、または I(Client Access、AS/400)のいずれかが使用されます。
Library List=		AS/400 のみ。システム・テーブルを保持するデータベース・サーバーです。
Library=		AS/400 のみ。システム・テーブルを保持するデータベース・ライブラリです。

[OFFLINE DB SYSTEM SETTINGS]

このセクションの設定は、オフライン・モードで ERP 9.0 を実行する場合にのみ使用されます。オフライン・モード・オプションを指定してワークステーションをインストールしていなければ、このセクションはワークステーションの JDE.INI ファイルに表示されません。このセクションの設定は[DB SYSTEM SETTINGS]セクションの場合と同じですが、値は次のように異なります。

設定	値	目的
Version=	43	jde.ini ファイルと実行中の ERP 9.0 のバージョンの不一致を防止するためのバージョン番号
Default User=	JDE	データベース・ブートストラップ・テーブルのユーザー・アカウント名
Default Env=	DEMOB9	ワークステーションやエンタープライズ・サーバーのデフォルト環境
Default PathCode=	APPL_PGF	環境を選択する以前にサインオン情報の表示スペックを検索するために ERP 9.0 で使用される¥b9 の下のサブディレクトリ名
Base Datasource=	ERP 9.0 Local	ログオン情報の取出し元データベースを表すデータ・ソース
Object Owner=		システム・データベース・テーブルの所有者
Server=		データベースが常駐するサーバー
Database=	ERP 9.0 Local	システム・テーブルが常駐するデータベースの名前
Load Library=	JDBODBC.DLL (Oracle 以外) (デフォルト) JDBOCI9.DLL (Oracle のみ) JDBOCI80.DLL (Oracle のみ)	システム・テーブルが保管されているデータベースにアクセスするための JDE ドライバ。これは、使用するデータベースと ERP 9.0 を実行するシステムのタイプに応じて異なります。
Decimal Shift=	N	数値データに小数点シフトを使用するかどうかを示すフラグ
Julian Dates=	N	日付をユリウス暦で保管するか、データベース固有の書式で保管するかを示すフラグ
Use Owner=	N	テーブル名に所有者名を含めるかどうかを示すフラグ
Secured=	N	データベースがユーザーおよびパスワード・ログインを必要とするかどうかを示します。
Type=	A (デフォルト) O S I	システム・テーブルが保管されているデータベースのタイプを示す 1 文字。 O (Oracle)、A (MS Access)、S (SQL Server)、または I (Client Access、AS/400) のいずれかが使用されます。

LibraryList= AS/400 のみ。システム・テーブルを保持するデータベース・サーバーです。

Default Pwd= デフォルトのパスワード

[DEBUG]

このセクションの設定によって、jde.log と jdedebug.log のロケーションが確定されます。また、この設定は jdedebug.log のオン/オフの切替えにも使用されます。

設定	標準値	目的
TAMMultiUserOn=	0	
Output=	なし	<p>jdedebug ファイルの状況を制御します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">• NONE -トレース情報は jdedebug.log に書き込まれません。• FILE -データベースおよびランタイム・トレース情報が、[DEBUG]セクションの DebugFile=パラメータで指定されたファイルに書き込まれます。• EXCFILE -ランタイム・トレース情報が、[DEBUG]セクションの DebugFile=パラメータで指定されたファイルに書き込まれます。• BOTH -トレース情報が jde.log と jdedebug.log の両方に書き込まれます。
ServerLog=	0(デフォルト) 1	<p>有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">• 0. ワークステーションはサーバーからのビジネス関数 JDE.LOG および JDEDEBUG.LOG エントリを要求できなくなります。• 1. ワークステーションはサーバーからのビジネス関数 JDE.LOG および JDEDEBUG.LOG エントリを要求できます。
LEVEL=	BSFN,EVENTS	<p>デバッグ・レベルを制御します。有効な値をカンマで区切り、任意に組み合わせて指定できます。デフォルト設定は LEVEL=BSFN,EVENTS です。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">• EVENTS = イベントの開始と停止がトレースされます。• BSFN = ビジネス関数の入力時刻と値が戻される時刻がトレースされます。• SF_x = システム関数の実行時刻がトレースされます。x 変数には、有効な任意のシステム関数値を指定できます。有効な値は次のとおりです。<ul style="list-style-type: none">• SF_GRID• SF_PARENT_CHILD• SF_GENERAL• SF_MESSAGING• SF_WORKFLOW• SF_WORKFLOW_ADMIN• SF_MEDIA_OBJ• SF_CONTROL <p>たとえば LEVEL=SF_CONTROL と指定できます。カンマで区切って複数のシステム関数を指定することもできます。たとえば、LEVEL=SF_GRID,SF_CONTROL と指定できます。</p>

DebugFile=	c:\jdedebug.log	jdedebug.log ファイルのロケーションと名前
JobFile=	c:\jde.log	jde.log ファイルのロケーションと名前

[EVEREST]

設定	標準値	目的
ShowAlias=	0 (PROD パッケージのデフォルト) 1 (APPL パッケージのデフォルト)	この設定では、データ辞書項目を右クリックしてエイリアスを表示する操作を有効(1)または無効(0)にします。

[INSTALL]

このセクションの設定には、ディレクトリ・パスとインストール全般の情報が含まれています。

設定	標準値	目的
DefaultSystem=	system	ERP 9.0 のファンデーション・コードとツールが含まれる B9 の下のサブディレクトリ名
ClientPath=	ERP 9.0 Client Install	デプロイメント・サーバー上で、ワークステーションのインストール・プログラムおよび配布時に使用される他のファイルが含まれるディレクトリの名称
PackagePath=	package	デプロイメント・サーバー上で、特定のパス・コード用にビルドされるパッケージを含むパス・コードの下のサブディレクトリ名
DataPath=	data	デプロイメント・サーバー上で、特定のパス・コード用の全パッケージ用に配布される Access データベースを含むパス・コードの下のサブディレクトリ名
HOSTS=	hosts	デプロイメント・サーバー上で、すべてのタイプの host ファイルを含むディレクトリの名前。ホスト構成生成アプリケーションに使用します。
HP9000=	hp9000	デプロイメント・サーバー上で、HP9000 ファイルを含むディレクトリの名前。ホスト構成生成アプリケーションに使用します。
RS6000=	rs6000	デプロイメント・サーバー上で、RS/6000 ファイルを含むディレクトリの名前。ホスト構成生成アプリケーションに使用します。
AS400=	as400	デプロイメント・サーバー上で、AS400 ファイルを含むディレクトリの名前。ホスト構成生成アプリケーションに使用します。
SUN=	sun	デプロイメント・サーバー上で、Sun ファイルを含むディレクトリの名前。ホスト構成生成アプリケーションに使用します。
LocalCodeSet=	WE_ISO88591	代替言語使用を決定するための設定。他の値については、『ERP アップグレード・ガイド』の「言語の概要」を参照してください。
ActiveConsole	0	この設定が 0 の場合、パッケージ・ビルドでは package.inf ファイルにエントリは追加されません。1 の場合は、パッケージ・ビルドの .INF ファイルに ActivEra Console の

	1	ショートカットが追加されます。パッケージをワークステーションにインストールするときに、デスクトップにショートカットが追加されます。
ExplorerShortCut	0	この設定が 0 の場合、ERP 9.0 のショートカットと起動はパッケージに組み込まれないため、デスクトップには配信もインストールもされません。1 の場合は、ERP 9.0 のショートカットと起動がパッケージに組み込まれ、インストール時にデスクトップにインストールされます。
	1	
WebAdmin=	0	この設定が 1 の場合、ユーザーには Java & HTML Generator の管理権限が与えられます。これは、管理者が Java シリアル化オブジェクトをパブリックに生成できることを意味します。0 の場合は、ユーザーが Java & HTML Generator を使用して生成できるのは、個人用フォームおよびメニューのみとなります。
	1	

[JDE_CG]

設定	標準値	目的
STDLIBDIR=	\$(COMP)¥VC98¥lib	MSVC コンパイラで使用される lib ディレクトリへのパス。この値は、ユーザー・デプロイメント環境設定に基づいて、ワークステーションへのインストール時に更新されます。
TPLNAME=	EXEFORM2	
ERRNAME=	CGERR	
TARGET=	Debug (デフォルト) Release	コード生成プログラムおよびグローバル・ビルド・プログラムで、ビルド・タイプの確定に使用されます。デバッグ中にビルドするとツールのリリース・ビルドと競合するため、リリース時にのみビルドする必要があります。
INCLUDES=	\$(COMP)¥VC98¥include;\$(SYSTEM)¥include; \$(SYSTEM)¥cg; \$(APP)¥include; \$(SYSTEM)¥includev	MSVC コンパイラで使用される include (ヘッダー・ファイル) ディレクトリへのパス。この値は、ユーザー・デプロイメント環境設定に基づいて、ワークステーションへのインストール時に更新されます。
LIBS=	\$(COMP)¥VC98¥lib; \$(SYSTEM)¥lib32; \$(APP)¥lib32; \$(SYSTEM)¥libv32	MSVC コンパイラと ERP 9.0 ファンデーションで使用されるライブラリ・ディレクトリへのパス。この値は、ユーザー・デプロイメント環境設定に基づいて、ワークステーションへのインストール時に更新されます。
MAKEDIR=	\$(COMP)¥VC98¥bin; \$(COMP)¥Common¥MSDev98¥Bin	MSVC コンパイラで使用される make ディレクトリへのパス。この値は、ユーザー・デプロイメント環境設定に基づいて、ワークステーションへのインストール時に更新されます。
USER=	user name	ワークステーションのインストールを実行したユーザーの ID

[JDEMAIL]

設定	標準値	目的
ClientType=	Windows HTML	外部電子メール・メッセージに添付されるアプリケーション・ショートカットに Windows アプリケーション・ショートカットを含めるか、HTML アプリケーション・ショートカットの URL を含めるかを定義します。デフォルト値は Windows です。
mailProfile=	Default Profile	ERP 9.0 ワーク・センターを通じてアクセスする外部メール・システム用のプロファイルの名前。外部メール・サーバーの例には、Microsoft Exchange Server や Lotus Domino Mail Server があります。
mailServer=	owsmtpjdedwards.com	サーバー・メール・メッセージの送信用にアクセスする SMTP サーバーのドメイン名

[JDENET]

設定	標準値	目的
serviceNameListen=	6005	TCP/IP ネットワーク上の通信サービスのポートを指定します。ERP 9.0 では、このポート・アドレスがネットワーク上での要求のリスニングに使用されます。
serviceNameConnect=	6005	TCP/IP ネットワーク上の通信サービスのポートを指定します。ERP 9.0 では、このポート・アドレスがネットワークへの接続に使用されます。 OCM では、ビジネス関数を実行するサーバーが判別されます。ERP 9.0 の複数インスタンスを同じサーバー上で実行すると、各インスタンスは異なるポートで実行されず。serviceNameConnect パラメータの値によって、ビジネス関数要求を処理する ERP 9.0 インスタンスが確定されます。
maxLenInlineData=	1024	内部専用
maxLenFixedData=	4096	内部専用
maxFixedDataPackets=	1024	内部専用
netTrace=	0	netTrace のオン/オフを切り替えます。デフォルト設定の 0 は、netTrace が OFF であることを意味します。1 - 4 に設定すると、JDENET デバッグによってメッセージのログを保存できます。数値を増やして詳細レベルを上げることができます。このログ・メッセージはデバックに使用することもできます。
kernelDelay=	0	内部専用

[JDENET_KERNEL_DEFx]

設定	標準値	目的
bOneUserOnly=	0	1 を指定すると、クライアント・ワークステーションはサーバー上で専用カーネル・プロセスを取得できます。この設定を機能させるには、対応するパラメータ bAllowOneUserOnly に値 1 を指定して、サーバー側 jde.ini ファイルの[JDE_KERNEL_DEFx]セクションに追加する必要があります。

次のようにカーネル定義セクションの番号を追加して、サーバー上のユーザーが使用できるカーネル・プロセスを指定します。

[JDENET_KERNEL_DEF6]

bOneUserOnly=1

この設定では、クライアント・ワークステーションはサーバー上で専用の CallObject カーネル・プロセスを持つことができます。

[LOCK MANAGER]

設定	標準値	目的
Server=	server name	この設定は、レコードの処理に使用するロック・マネージャ・サーバーを示します。この値は、ロック・マネージャとして機能するサーバーの名前です。
RequestedService=	NONE	この設定は、ワークステーションがサーバーに対して要求するサービスのタイプを示します。現在サーバーから提供されるサービスは、タイムスタンプ (TS)のみです。

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

このセクションの設定には、サーバー上でバッチ・ジョブの実行時に使用される待ち行列名が含まれています。また、ワークステーションの UBE の優先順位と、ジョブをスプール・ファイルに保持するか即時にプリンタに送信するかを示します。

設定	標準値	目的
UBQueue=	QBATCH	クライアントが UBE またはパッケージ・インストレーションに関してサーバーに投入するバッチ名
UBEPriority=	5	UBE の投入時に設定される優先順位。ワークステーションの場合、有効な値は 1～5 (1 は最上位の優先順位設定) です。この優先順位設定は、ERP 9.0 によって投入される他の UBE ジョブとの相対順位を示す値です。
PrintImmediate=	FALSE (デフォルト) TRUE	ワークステーション上の jde.ini ファイルで [NETWORK QUEUE SETTINGS] セクションの設定値が PrintImmediate=TRUE (大文字/小文字の区別あり) でなければ、ERP 9.0 ワークステーションから投入された UBE スプール・ファイルは ERP 9.0 サーバーで維持されます。 AS/400 上では、スプール・ファイルはデフォルトの HOLD(*YES)属性にて作成されます。ワークステーションの jde.ini ファイルで PrintImmediate=TRUE が設定されている場合は、ERP 9.0 サーバーに UBE が投入されると、スプール・ファイルは該当する出力待ち行列に保管され、解放された後にクローズします。
SaveOutput=	TRUE (デフォルト) FALSE	UBE によって生成されたログ・ファイルを保存するかどうかを示す設定
InstallSpecs=	Y	UBE の投入時にスペックをインストールするかどうかを示す設定
JDENETTimeout=	60	クライアントからサーバーへの接続試行のタイムアウト値。秒単位で表示されます。

[OBJECT LIBRARIAN]

設定	値	目的
OLTLLogMode=	YES (デフォルト)	<p>〈オブジェクト管理ワークベンチ〉のトランザクション・ログ(OLT.log)を生成するかどうか、および生成方法を指定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> YES = トランザクションごとに OLT.log が生成されます。トランザクションの前にログが存在する場合は、その内容が一時変更されます。 NO = オブジェクト管理ワークベンチのオブジェクト・トランザクション時には OLT.log が生成されません。 APPEND = トランザクション情報は OLT.log に追加されます。 <p>ログが最大許容サイズ(2MB)に達すると、既存ファイル名の変更を求めるプロンプトが表示されます。名前を変更しないように選択すると、ログの既存の内容が新規トランザクションによって生成される情報で上書きされます。</p>
	NO	
	APPEND	
OLTLLogContents=	GENERAL (デフォルト)	<p>OLT.log でスペック・レコードの詳細情報が生成されるかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> GENERAL = スペック・レコードの詳細情報は生成されません。 DETAIL = 詳細情報が生成されます。
	DETAIL	

[SECURITY]

設定	標準値	目的
SecurityServer=	server name	
RowSecurity=	DEFAULT	
DataSource=	ORACLE PVC	
DefaultEnvironment=	environment name	パス・コードで F98OWSEC が定義されている有効な環境を定義します。
UnifiedLogon=	0 (デフォルト)	<p>汎用ログオン機能の操作状態を指定します。オフにすると、ERP 9.0 では標準ログオン機能が使用されます。“0”を入力(またはブランクに)すると汎用ログオンがオフに設定され、“1”を入力するとオンに設定されます。</p>
	1	
UnifiedLogonServer=	server name	汎用ログオン・サーバーのロケーションを指定します。サーバーが存在しなければ、ERP 9.0 では ERP 9.0 セキュリティ・サーバーが使用されます。
ShowUnifiedLogon=	0	<p>汎用ログオン機能の使用時に ERP 9.0 の〈環境の選択〉フォームを表示するかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0. 〈環境の選択〉フォームが表示されない 1. 〈環境の選択〉フォームが表示される
	1 (デフォルト)	

[SVR]

このセクションの設定には、環境およびサブディレクトリ情報が含まれています。

設定	標準値	目的
EnvType=	1	JDEKRNL で使用されます。
EnvironmentName=		
SpecPath=	spec	この行とこのセクションの後続のすべての行では、他の ERP 9.0 ソース・プログラムにファイルのロケーションが認識されるようにパス名を指定します。たとえば、“spec”が“specifications”に変更された場合、SpecPath の値を変更するとすぐにロケーションが認識されます。この値は、プログラムやプロセスでは更新されません。この値は、外観上の理由で変更します。これは、ワークステーション上でスペック・ファイルのレプリケート・セットを保管するパス・コードの下の子ディレクトリです。
SourcePath=	source	クライアント・ワークステーションでは、ビジネス関数のオブジェクト・ファイルを保管するパス・コードの下の子ディレクトリ
ObjectPath=	obj	クライアント・ワークステーションでは、ビジネス関数のソース・ファイルを保管するパス・コードの下の子ディレクトリ
HeaderPath=	include	クライアント・ワークステーションでは、ビジネス関数とシステム・ヘッダーのファイルを保管するパス・コードの下の子ディレクトリ
HeaderVPath=	includev	クライアント・ワークステーションでは、これはファンデーション・コード・ヘッダー・ファイルを保管するための、システム・ディレクトリの下の子ディレクトリです。
BinPath=	bin32	クライアント・ワークステーションでは、ビジネス関数、アプリケーション、およびファンデーション・コードの dll の複製セットを保管するための、パス・コードおよびシステム・ディレクトリの下の子ディレクトリ
LibPath=	lib32	クライアント・ワークステーションでは、ビジネス関数とシステム・ライブラリのファイルを保管するパス・コードの下の子ディレクトリ
LibVPath=	libv32	クライアント・ワークステーションでは、サードパーティ・ライブラリを保管するための、パス・コードおよびシステム・ディレクトリの下の子ディレクトリ
MakePath=	make	クライアント・ワークステーションでは、ビジネス関数の make ファイルを保管するパス・コードの下の子ディレクトリ。この値は、プログラムやプロセスでは更新されません。このディレクトリ名は変更しないでください。
WorkPath=	work	クライアント・ワークステーションでは、ビルド中に作成されるアプリケーションの temp ファイル・レプリケート・セットを保管する、パス・コードの下の子ディレクトリ。この値は、プログラムやプロセスでは更新されません。このディレクトリ名は変更しないでください。
CodeGeneratorPath=	cg	クライアント・ワークステーションでは、これは対話型アプリケーションのフォーム・タイプ・テンプレートを保管するための、システム・ディレクトリの下の子ディレクトリ。これらのテンプレートは実行時に使用され、アプリケーションのビルド時に作成

されます。

ResourcePath=	res	クライアント・ワークステーションでは、ビットマップのレプリケート・セットを保管するパス・コードの下のサブディレクトリ
IconPath=	res¥icons	クライアント・ワークステーションでは、アイコンのレプリケート・セットを保管するパス・コードの下のサブディレクトリ
FontPath=	res¥font	クライアント・ワークステーションでは、フォントのレプリケート・セットを保管するパス・コードの下のサブディレクトリ
HelpPath=	helps	クライアントからアクセス可能なレプリケート・ヘルプ・ファイル・セットが存在する場合に、それが保管されるロケーションへのパス。このパスはサーバーをポイントしておりユーザー・プロファイルで指定します。
TreeBmpPath=	res¥treebmps	クライアント・ワークステーションでは、ツリー・ビットマップ・ファイルを保管するパス・コードの下のサブディレクトリ
ModelPath=	models	クライアント・ワークステーションでは、モデル・ファイルを保管するパス・コードの下のサブディレクトリ
LocalePath=	locale	ナショナル・ランゲージ・サポート(NLS)変換テーブル用の基本ディレクトリ
Iconvpath=	locale¥Iconv	ナショナル・ランゲージ・サポート(NLS)変換テーブル用の基本ディレクトリ

[UBE]

このセクションの設定により、jdedebug.log の操作状態が確定されます。また、デバッグ・レベルも確定されます。

設定	標準値	目的
UBException	0 1 (デフォルト)	例外ハンドリングを無効(0)または有効(1)にします。0 = エラーを伴って終了します。1 = デバッグ・ログを表示します。
UBChkMem	0 1 (デフォルト)	jdeCheckMemory を呼ぶコールを無効(0)/有効(1)にします。メモリはビジネス関数をトレースすることができます。
UBSubsystemLimit	3	レポート・バージョンあたりのサブシステム・ジョブ数を指定します。
UBSaveLogFile	0 (デフォルト) 1	UBE ログ・ファイルを削除(0)または保存(1)します。DebugLevel が 0 の場合にのみ削除できます。
UBDebugLevel=	0 (デフォルト) 1- 6	UBE デバッグ・ロギングの使用時に表示されるデバッグ情報のレベルを指定します。6 は最上位のログ・レベルです。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0. エラー・メッセージのみ1. 情報メッセージ2. セクション・レベルのメッセージ3. オブジェクト・レベルのメッセージ

		<ul style="list-style-type: none"> 4. イベント・ルール・メッセージ 5. SQL 文 6. UBE 関数メッセージ
UBEShowPDFLink	0(デフォルト) 1	PDF ホット・リンクのボックスを表示するには“1”を入力してください。
UBEPrintDataItems	0(デフォルト) 1	.pdf ファイルの関連データ項目記述を、サードパーティ・ベンダ用のメタデータとして印刷するかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> 0. 印刷しない 1. 印刷する
UBESSDebug	0(デフォルト) 1	サブシステム・キーの印刷を無効(0)または有効(1)にします。
UBEVCDebug	0(デフォルト) 1	プロセスの UBE を実行する際に VC を自動添付します。(NT のみ)
UBETHread	0 1(デフォルト)	プロセス(0)またはスレッド(1)として UBE を実行します。
WebServer	0(デフォルト) 1	この設定では、システムで Web サーバーからの UBE 機能を有効にして、Web の特殊なニーズを満たすために ERP 9.0 カーネルを Web カーネルとして識別するかどうかを指定します。この値をブランクにすると、ビジネス関数からのコールやカーネルからのエラー・メッセージ処理は正常に機能しません。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> 0. 無効 1. 有効

[WORKFLOW]

設定	値	目的
Asynchronous Workflow=	FALSE	非同期ワークフローのオン/オフの切替えに使用されます。デフォルト値は FALSE です。

[EXPLORER]

設定	値	目的
ExplorerHomeURL=	variable	変数値として Solution Explorer ホーム・ページの URL を指定する必要があります。
ExplorerStart=	variable	変数値として INTERNET (Solution Explorer をホーム・ページから起動する場合)または TASK (タスク・ビューから起動する場合)を指定する必要があります。

[ACTIVE DIRECTORY]

設定	値	目的
JdenetSCP	variable	この値は、Active Directory の Service Connection Point(SCP)オブジェクト名となります。SCP により、ワークステーションは ERP 9.0 が稼働中のサーバーに接続できます。通常、サーバー上で実行されている ERP 9.0 サービスの名前です。 例: JDEDWARDS_ERP_B9_SP20 JdenetSCP は、接続ポート・パラメータです。
SecurityServerSCP	variable	上に同じ。SecurityServerSCP は、セキュリティ・サーバー・パラメータです。
LockManagerSCP	variable	上に同じ。LockManagerSCP はロック・マネージャ・パラメータです。
UnifiedLogonServerSCP	variable	上に同じ。UnifiedLogOnServer SCP は汎用ログオン・サーバー・パラメータです。

AS/400 サーバーの JDE.INI 設定の理解

ここでは、ERP 9.0 AS/400 サーバーの INI ファイルの設定の詳細を説明します。情報は、[DEBUG] などセクション別になっています。各セクションはアルファベット順になっていますが、セクションの設定はソフトウェアで表示される順番に掲載してあります。

[AS400]

設定	値	目的
CRTMOD=	CRTMOD MODULE(%s/%s) SRCFILE(%s/%s) SRCMBR(%s) OUTPUT(*PRINT) DBGVIEW(*NONE) OPTIMIZE(40)	パッケージ・インストール時にビジネス関数のコンパイルに使用される文字列。CRTMOD と CRTMOD2 は連結され、ERP 9.0 でビジネス関数のコンパイルに使用されるため注意してください。
CRTMOD2=	DEFINE(JDENV_AS400MUTEX PRODUCTION_ VERSION NO_SIGNALS) TGTRLS(V4R3M0)	ビジネス関数のコンパイル用の追加定義を宣言するために、パッケージのインストール時に使用される連結文字列
CRTSRVPGM=	CRTSRVPGM SRVPGM(%s/%s) MODULE(%s/*ALL) BNDSRVPGM(JDELIB JDEKRNL OWVER) EXPORT(*ALL) OPTION(*DUPPROC *DUPVAR *UNRSLVREF) ALWLIBUPD(*YES) TGTRLS(V4R3M0)	ERP 9.0 サービス・プログラム(*SRVPGM)作成用のビジネス関数モジュールを連結するために、パッケージのインストール時に使用される文字列
CRTDBPGM1=	CRTPGM PGM(%s/%s) MODULE(DBDRVAG DBDRV_AC DBDRV_CC DBDRV_CN	データベース・プログラム JDB_*の作成には、CRTDBPGM*設定の連結が使用されます。これらのデータベース・プログラムは、起動時に ERP 9.0 によって自動的に作成されます。SENTINEL ジョブにより起動時に作成され、他のプログラムは実行時に必要に応じてモニタリングおよび作成されます。プログラムの状況

		とその用途は、CONTROL ライブラリのユーザー・スペース JDEPGMCTL で保守されます。
CRTDBPGM2=	DBDRV_CH DBDRV_CP DBDRV_RQ DBDRVSQL DBMONCTL DBDRVDLI	CRTDBPGM1 の「目的」を参照してください。
CRTDBPGM3=	DBSQL DBSQL_A DBSQL_D DBSQL_I DBSQL_M DBSQL_S DBSQL_U DBSQL_X	CRTDBPGM1 の「目的」を参照してください。
CRTDBPGM4=	BNDSRVPGM(JDEKRNL JDELIB JDEIPC) ACTGRP(%s) OPTION(*DUPPROC	CRTDBPGM1 の「目的」を参照してください。
CRTDBPGM5=	*DUPVAR) ALWLIBUPD(*YES) AUT(*ALL) TGTRLS(V4R3M0)	CRTDBPGM1 の「目的」を参照してください。
PrintUBEJoblog=	FALSE (デフォルト) TRUE	TRUE の場合、バッチ・アプリケーション(UBE)の AS/400 JOBLLOG が、ERP 9.0 によって常にスプール・ファイルに書き込まれることを示します。
PrintUBEJoblogOn Error=	FALSE (デフォルト) TRUE	TRUE の場合、バッチ・アプリケーション(UBE)の AS/400 JOBLLOG は、UBE の異常終了時など、エラーが発生した場合に、ERP 9.0 によってスプール・ファイルに書き込まれることを示します。

[BSFN BUILD]

設定	値	目的
Build Area=	/jdeb9_0/packages	サーバー上でパッケージがビルドされるロケーション。
Optimization Flags=	(40)	マシンに依存。これらのコンパイル・フラグは、ビジネス関数をリリース・モードでビルドするときに使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
DebugFlags=	*ALL	マシンに依存。これらのコンパイル・フラグは、ビジネス関数をデバッグ・モードでビルドするときに使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
InliningFlags=	Y (デフォルトの yes) N (no)	有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> Yes = AS/400 上でインライン化がオンになります。 No = オフになります。 AS/400 以外のサーバーの場合、このエントリはブランクです。
DefineFlags=	JDENV_AS\$}}MUTEX PRODUCTION_VERSION JDBDB2400 AS400V3R6	
CompilerFlags=	*EXPMAC *NOSHOWINC	この設定では、サーバー・パッケージのビルド時にリストをコンパイルするかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> *PRINT = リストがコンパイルされます。

		<ul style="list-style-type: none"> *NONE = リストはコンパイルされません。
CompileOutput=	*PRINT blank	マシンに依存。有効なコンパイラ・フラグです。 このスビル・フラグでは、ビジネス関数のコンパイル時のスタック・スペースを設定します。デフォルトのビジネス関数をコンパイルするには、1024 が適切です。各種ホスト・プラットフォーム上では、デフォルトの 1024 以外の値も有効ですが、J.D. Edwards で検証済みの値は 1024 のみです。
OSReleaseLevel=	V4R3M0	コンパイルするリリース・レベル。この設定は変更しないでください。
LinkFlags=	*DUPROC *DUPVAR * UNRSLVREF	マシンに依存。このフラグは、ビジネス関数のリンク時に使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
LinkLibraries=	JDELIB JDEKRNL JDENET JDEIPC OWVER	ビジネス関数のリンク先ライブラリ (Windows NT および AS/400 サーバーのみ)
SimultaneousBuilds=	0 (デフォルト) 任意の整数	一度にビルドできる DLL 数を示します。0 (ゼロ) は、すべてが同時にビルドされることを意味します。
QName=	as400 batch jobq name	すべてのパッケージ・ビルドが投入されるジョブ待ち行列の名前。ブランクにすると、投入時に ERP 9.0 ユーザー・プロファイルで指定されているデフォルトの JOBQ が使用されます。

[DB SYSTEM SETTINGS]

このセクションの設定には、デフォルトの環境とパス・コードに関する情報が含まれています。

設定	値	目的
Version=	43	jde.ini ファイルと実行中の ERP 9.0 のバージョンの不一致を防止するためのバージョン番号
Default User=	JDETL	データベース・ブートストラップ・テーブルのユーザー・アカウント名
Default Pwd=	JDETL	データベース・ブートストラップ・テーブルのユーザー・アカウント・パスワード
Default Env=	B9APP	ワークステーションやエンタープライズ・サーバーのデフォルト・データ・ソース
Default PathCode=	B9APP	ビジネス関数コードが保管される¥\$PKG の下のサブディレクトリ
Base Datasource=	DB2	ログオン情報の呼び込み元のデータベースを表すデータ・ソース

Object Owner=		システム・データベース・テーブルの所有者
Server=	server name	データベースが常駐するサーバー
Database=	database name	システム・テーブルが常駐するデータベースの名前
Load Library=	DBDR(デフォルト)	システム・テーブルが保管されているデータベースにアクセスするための JDE ドライバ。使用するデータベースと、ERP 9.0 を実行するシステムのタイプに応じて異なります。
Decimal Shift=	Y(デフォルト) N	数値データに小数点シフトを使用するかどうかを示すフラグ
Julian Dates=	Y(デフォルト) N	日付をユリウス暦で保管するか、データベース固有の書式で保管するかを示すフラグ
Use Owner=	Y N(デフォルト)	テーブル名に所有者名を含めるかどうかを示すフラグ
Secured=	Y(デフォルト) N	ユーザーおよびパスワード・ログインを必要とするセキュリティ・データベースかどうかを示します。
Type=	I	システム・テーブルが保管されているデータベースのタイプを示す 1 文字。有効な値は、O(Oracle)、A(MS Access)、S(SQL Server)、または I(Client Access、AS/400)のいずれかです。
Library=	database library	AS/400 のみ。システム・テーブルを保持するデータベース・ライブラリです。
DatabaseProgramMax=	-1(デフォルト)	AS/400 のみ。データベース接続プログラムの最大許容数です。値-1 は、無制限を意味します。
DatabaseProgramInitial=	10(デフォルト)	AS/400 のみ。ERP 9.0 の起動直後に起動するデータベース接続プログラム数です。
DatabaseProgramThreshold=	3(デフォルト)	AS/400 のみ。新規データベース接続プログラムの起動に関する限界値です。使用中でないデータベース接続プログラム数がこの制限値未満になると、新規プログラムが起動されます。
DatabaseProgramAdditional=	10(デフォルト)	AS/400 のみ。限界値に達したときに起動される新規データベース接続プログラムの数です。
DatabaseProgramCheckIntervalSeconds=	10(デフォルト)	AS/400 のみ。データベース接続プログラムの作成後に ERP 9.0 がスリープ状態に入るまでの秒数です。
Default Journal=	OW_JRNL	AS/400 のみ。デフォルトのジャーナル名です。AS/400 上では、ロールバックによる回復のためにジャーナリングが必要です。ジャーナリングには 2 つのコンポーネントがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ジャーナル

- ジャーナル・レシーバ

ジャーナルによって、変更前および変更後のデータベース・トランザクションを記録できます。この値は、10 文字以内の任意の文字列に設定できます。

Default Journal LIBRARY=	journal library	AS/400 のみ。ジャーナルが保管されるライブラリ名。この値は、有効な任意のライブラリ名に設定できます。ライブラリ名はリリースごとに異なります。
Default Journal Receiver	OW_JRNL000	AS/400 のみ。ジャーナル・レシーバー名です。この値は、10 文字以内の任意の文字列に設定できます。
Default Journal Receiver LIBRARY=	journal library	AS/400 のみ。ジャーナル・レシーバーが保管されるライブラリ名です。この値は、有効な任意のライブラリ名に設定できます。ライブラリ名はリリースごとに異なります。
Size of Journal Receiver=	6000	<p>AS/400 のみ。この設定では、ジャーナル・レシーバーの記憶域の限界値(KB 単位)を指定します。ジャーナル作成中に限界値を超えると、次のいずれかが発生します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ジャーナルに MBGRCV(*USER)属性がある場合は、ジャーナル・メッセージ待ち行列にメッセージ CPF7099 が送信されます。 • ジャーナルに MBGRCV(*SYSTEM)属性がある場合、システムは新規レシーバーを作成して添付しようとします。旧レシーバーがオフライン状態になると、ジャーナル・メッセージ待ち行列にメッセージ CPF7020 が送信されます。この試行がロック競合により失敗すると、メッセージ CPI70E5 が送信され、ジャーナル変更処理が成功するまで 10 分ごとに再試行されます。 <p>ジャーナルに MBGRCV(*SYSTEM)属性があるかどうかをシステムが確定できない場合、またはロック競合以外の原因で新規ジャーナル・レシーバーの作成および添付が失敗した場合は、メッセージ CPI70E3 が送信されます。</p>

[DEBUG]

このセクションの設定によって、jde.log と jdedebug.log のロケーションが確定されます。また、この設定は jdedebug.log のオン/オフの切替えにも使用されます。

設定	標準値	目的
Output=	FILE	<p>dedebug ファイルの状況を制御します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • NONE = トレース情報は jdedebug.log に書き込まれません。 • FILE = データベースおよびランタイム・トレース情報が、[DEBUG]セクションの DebugFile=パラメータで指定されたファイルに書き込まれます。
Trace=	TRUE	デバッグ時に役立つ追加のトレース情報がログ・ファイルに書き込まれます。
DebugFile=	JDEB9/ jdedebug	<p>dedebug.log のロケーション。この値は、ERP 9.0 の出荷時に jdedebug に設定されています。この値を更新するプロセスはありません。生成されるファイルの名前は idedebug #####.log で、#####はファイルを作成したジョブに関連する AS/400</p>

のジョブ番号を表します。

注:

ERP 9.0 では、これらのファイルへのパスは作成されません。パスは、ログ・プロセスの前に設定する必要があります。このパスは、AS/400 上の統合ファイル・システム(IFS)にあります。AS/400 WRKLNK コマンドを使用すると、ディレクトリとファイルのリストを表示して IFS ディレクトリ間で移動できます。これらのログ・ファイルを表示できるように、DSPSTMF というコマンドが用意されています。また、Client Access は、一部の小型ログ・ファイルを簡単に表示できるように設定できます。

Client Access をログ・ファイル表示用に設定する方法については、『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「AS/400 整合済みファイル・システム・ログ・サポート」を参照してください。

JobFile=	JDEB9/jde.log	jde.log のロケーション。この値は、ERP 9.0 の出荷時に jde.log に設定されています。この値を更新するプロセスはありません。ログ・ファイル jde.log および jdedebug で、問題の分析と解決に役立つ情報を検証してください。生成されるファイルの名前は jde_#####.log で、#####はファイルを作成したジョブに関連する AS/400 のジョブ番号を表します。 Client Access をログ・ファイル表示用に設定する方法については、『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「整合済みファイル・システム・ログ・サポート」を参照してください。
JDETSFile=	/JDEB9/JDETS.LOG	AS/400 上のロック・マネージャのトレース・ファイルのロケーションを指定します。
ClientLog=	1 (デフォルト) 0	有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">1 の場合は、CALLOBJ サーバー・トレースをワークステーションに提供可能になります。0 の場合は、CALLOBJ サーバー・トレースをワークステーションに提供不能になります。
LogErrors=	1 (デフォルト) 0	エラー・メッセージの操作。 有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0 または FALSE = JDE.LOG にエラー・メッセージが書き込まれないことを示します。1 または TRUE = JDE.LOG にエラー・メッセージが書き込まれることを示します。
KeepLogs=	1	有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">1. ログが出力後に保存されることを示します。0. ログが保存されないことを示します。
RunBatchDelay=	0	起動時に runbatch が待機する秒数を指定します。この設定により、開発者はジョブやプロセスのデバッグを開始できます。
TAMTraceLevel=	0 (デフォルト)	TAM のトレース・レベルを指定します。0 はオフで、9 は最上位のトレース詳細レベルです。

[INSTALL]

このセクションの設定には、ディレクトリ・パスとインストール全般の情報が含まれています。

設定	標準値	目的
DefaultSystem=	B9SYS	ERP 9.0 のシステム・ライブラリ名
ClientPath=	B9APP	デプロイメント・サーバー上で、ワークステーションのインストール・プログラムと配布時に使用される他のファイルが保管される有効なパス・コードの名前
B9=		AS/400 の場合はブランクにします。
LocalCodeSet=	US_EBCDIC	代替言語の使用を決定するための設定。 他の値については、『アップグレード・ガイド』の「言語の概要」を参照してください。
WebAdmin=	1	この設定では、デフォルト・ユーザー用にすべての Java オブジェクトをシステム生成させるかどうかを指定します。これには、以前に生成された Java オブジェクトの一時変更が含まれます。この値をブランクにすると、現在のユーザー用のすべての Java オブジェクトがシステム生成されます。
EnvCreation=	1 (デフォルト) ~ 5	この設定では、同時に処理(ロード)できる環境数を指定します。

[JDEIPC]

設定	標準値	目的
maxNumberOfResources=	1000	JDE に使用可能な IPC リソースの合計数。
startIPCKeyValue	2101	NT 上では、この値は固有の IPC 共有メモリ名を指定するためにのみ使用されます。他のすべてのシステムでは、これは JDEIPC で共有メモリに使用された IPC ID の値です。この値と maxNumberOfResources によって、JDE がシステム上で使用する IPC ID の範囲を定義します。システム管理者は、この ID の範囲が他のソフトウェアに使用されていないかどうかを確認する必要があります。JDEIPC では範囲内の既存 ID は使用されませんが、他のソフトウェアの場合は使用されることがあります。
avgResourceNameLength	15	JDE 内部用。IPC エラー String table full が表示される場合は、この値を大きくしてください。
maxMsgqEntries=	1024	
mazMsgqBytes=	65536	
ipcTrace=	0	jddebug.log に書き込まれるプロセス間通信(IPC)メッセージのレベルを制御します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0 (デフォルト). debug log にメッセージを書き込みません。1. 汎用トレース・メッセージのみ書き込みます。2. IPC ハンドル状況トレース・メッセージを書き込みます。3. 汎用メッセージと IPC ハンドル状況トレース・メッセージを書き込みます。

[JDEMAIL]

設定	標準値	目的
mailServer=	owsmtp.jdedwards.com	サーバー・メール・メッセージの送信用にアクセスする SMTP サーバーのドメイン名。

[JDENET]

設定	標準値	目的
serviceNameListen=	jde_server	TCP/IP ネットワーク上の通信サービスのポートを指定します。ERP 9.0 では、このポート・アドレスがネットワーク上での要求のリスニングに使用されます。
serviceNameConnect=	jde_server	TCP/IP ネットワーク上の通信サービスのポートを指定します。ERP 9.0 では、このポート・アドレスがネットワークへの接続に使用されます。
maxNetProcesses=	システムが処理を予期している同時 ERP 9.0 ユーザーの最大数、およびサ ーバーの処理能力およびメモリに依存	実行できる JDENET_N プロセスの最大数を定義しま す。大量の JDENET メッセージ・フローが予想されるサ ーバーの場合は、大きい値を指定できます。
maxNetConnections=	システムが処理を予期している同時 ERP 9.0 ユーザーの最大数と、サーバ ーの処理能力およびメモリに依存	すべての JDENET_N プロセスで処理できる合計接続 数。これはプラットフォーム固有の値です。同時に多数 のワークステーションを処理することが予想されるサ ーバーの場合は、大きい値を指定できます。
netShutdownInterval=	15	
maxKernelProcesses=	次の複数の要因に依存 <ul style="list-style-type: none">個々のカーネル・タイプの最大 数の合計。その最大数より大き い値にする必要がありますが、 必要に応じて増やすことがで きます。許可する単一ユーザーのみの カーネル数。個々のカーネルの 最大合計数を超える数は、単 一ユーザーのみのカーネルに割 り当てます。〈サーバー管理ワークベンチ〉か らのカーネル・プロセス数を動的 に増やすための余地です。	実行可能な JDENET_K プロセスの最大数。ここでは、す べての専用サーバーの maxNumberOfProcesses の合 計より大きい値を指定する必要があります。
maxKernelRanges=	20	専用サーバー数とタイプ
kernelDelay=	0	内部専用
maxLenInlineData=	1024	内部専用

maxLenFixedData=	4096	内部専用
maxFixedDataPackets=	1024	内部専用
netTrace=	0	内部専用
krnlCoreDump=	0	内部専用
newProcessThreshold Connects=	0	
MaxIPCQueueMsgs	12	内部専用
InternalQueueTimeout	30	内部専用

[JDENET_KERNEL_DEFx]

このセクションでは、JDENET 内部の専用サーバー・プロセスを定義します。各セクションには、JDENET_KERNEL_DEF1 から JDENET_KERNEL_DEF20 の番号が付いています。これらのセクションの設定は、特に明記されていない限り変更しないでください。

設定	値	目的
bAllowOneUserOnly=	1	<p>パラメータ値 1 は、クライアント・ワークステーション上では、単一ユーザーのみのカーネル・プロセスが許されることを意味します。デフォルトでは、単一ユーザーのみのカーネル・プロセスが許されます。CallObject kernel カーネル・プロセスの場合にのみ、次の設定を追加してください。</p> <p>[JDENET_KERNEL_DEF6] bAllowOneUserOnly=1 [JDENET_KERNEL_DEFx]と共に、次の設定を追加する必要があります。</p> <p>クライアント・ワークステーションの jde.ini ファイルに、bOneUserOnly=1 セクションを追加します。</p>
krnlName	DEF1:JDENET RESERVED KERNEL DEF2:UBE KERNEL DEF3:REPLICATION KERNEL DEF4:SECURITY KERNEL DEF5:LOCK MANAGER KERNEL DEF6:CALL OBJECT KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF1:内部用とテスト用に使用されます。 DEF2:ERP 9.0 のバッチ処理要求を処理します。 DEF3:データ・レプリケーション要求を処理します。 DEF4:セキュリティ・サーバー要求を処理します。 DEF5:トランザクション・マネージャとロック・マネージャの要求を処理します。

	DEF7:JDBNET KERNEL	<p>ヤの要求を処理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> DEF6:リモートのマスター・ビジネス関数(MBF)に対する要求を処理します。
	DEF8:PACKAGE INSTALL KERNEL	
	DEF9:SAW KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF7:JDBNet のサーバー間要求を処理します。
	DEF10:SCHEDULER KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF8:パッケージ・インストール要求を処理します。
	DEF11:PACKAGE BUILD KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF9:SAW アプリケーション要求を処理します。
	DEF12:UBE SUBSYSTEM KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF10:〈スケジュール〉アプリケーション要求を処理します。
	DEF13:WORKFLOW KERNEL	
	DEF 16:XML LIST KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF11:パッケージ・ビルド要求を処理します。
	DEF 19:EVENT NOTIFICATION KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF12:UBE サブシステム要求を処理します。
	DEF 20:INTEROPERABILITY EVENT OBSERVER KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF13:ワークフロー要求を処理します。
	DEF 22: XML DISPATCH KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF16:データ要求を処理して XML ドキュメント・フォーマットに戻します。
	DEF 23: XTX KERNEL	
	DEF 24: XML SERVICE KERNEL	<ul style="list-style-type: none"> DEF19:Interoperability Event Observer (インターオペラビリティ・イベント・オブザーバー)によって生成されたリアルタイム・イベントと XML ドキュメント、および Z ファイル・イベントを処理します。すべての ERP 9.0 イベントをサブスクライバにパブリッシュします。 DEF20:リアルタイム API をコールするビジネス関数からの情報を処理し、その情報を使用して Event Notification Kernel によってサブスクライバにパブリッシュ可能な XML または Z ファイルを作成します。 DEF22:XML メッセージを正しいカーネルにルーティングするカーネル DEF23:異なるタイプの XML メッセージ間でトランスフォームするカーネル DEF24:XAPI メッセージを受信するプロセス
dispatchDLLName=	DEF1:JDENET	JDENET サービス・プログラム名を識別します。
	DEF2:JDEKRNL	

	DEF3:JDEKRNL	
	DEF4:JDEKRNL	
	DEF5:JDEKRNL	
	DEF6:JDEKRNL	
	DEF7:JDEKRNL	
	DEF8:JDEKRNL	
	DEF9:JDESAW	
	DEF10:JDEKRNL	
	DEF11:JDEKRNL	
	DEF12:JDEKERNL	
	DEF13:JDEKRNL	
	DEF16:XMLLIST	
	DEF19:JDEIE	
	DEF20:JDEIEO	
	DEF22:XMLDISPATCH	
	DEF23:XJSKERNEL	
	DEF24:XMLSERVICE	
dispatchDLLFunction=	DEF1:JDENET_Dispatch Message	JDENET メッセージを処理する JDENET 関数の名前。
	DEF2:JDEK_DispatchUBEMessage	dispatchDLLName および dispatchDLLFunction エントリは、 プラットフォームに固有です。
	DEF3:DispatchRepMessage	
	DEF4:JDEK_DispatchSecurity	
	DEF5:TM_DispatchTransactionManager	
	DEF6:JDEK_DispatchCallObject Message	
	DEF7:JDEK_DispatchJDBNETMessage	
	DEF8:JDEK_DispatchPkgInstallMessage	
	DEF9:JDEK_DispatchSAWMessage	
	DEF10:JDEK_DispatchScheduler	
	DEF11:JDEK_DispatchPkgBuildMessage	

DEF12:
JDEK_DispatchUBESBSMessage

DEF13:
JDEK_WFServerProcess

DEF16:
JDEK_XMLListDispatch

DEF19:
JDEK_DispatchITMessage

DEF20:
JDEK_DispatchIEOMessage

DEF22:XMLDispatch

DEF23:JDEK_DISPATCHXTSMessage

DEF24:XMLServiceDispatch

maxNumberOfProcesses=

ユーザー数とカーネル・タイプによって異なります。たとえば、CallObject カーネルはカーネルごとに 5～10 人の同時ユーザーを開始するように構成する必要があります。

カーネル・タイプごとに、このサーバー上で実行できるカーネル・プロセスの最大数。ユーザーは、この設定を修正してパフォーマンスを調整できます。デフォルト値は、すべての JDENET_KERNEL_DEF セクションで 1 です。

numberOfAutoStartProcesses= *Variable*

各カーネル・タイプに対して自動的に開始されるカーネル・プロセスの数。この値が 0 であれば、そのカーネル・タイプのカーネル・プロセスは自動的に開始されません。この値は、そのカーネル・タイプの最大プロセス数より小さくしてください。ユーザーは、この設定を修正してパフォーマンスを調整できます。デフォルト値は、すべての JDENET_KERNEL_DEF セクションで 0 です。
このパラメータへの値の割当ては、発生させるカーネル・プロセスの開始オーバーヘッドの必要な時期 (ERP 9.0 サービスの開始時か、カーネル・タイプの最初のメッセージが受信されたとき) に基づきます。

[LOCK MANAGER]

設定	標準値	目的
AvailableService=	NONE	この設定は、ロック・マネージャ・サーバーが提供するサービスを示します。ロック・マネージャのオン/オフ指定にも使用されます。有効な値は次のとおりです。

- TS
- NONE

RequestedService= NONE この設定は、ワークステーションがサーバーに対して要求するサービスのタイプを示します。現在サーバーから提供されるサービスは、タイムスタンプ(TS)のみです。有効な値は次のとおりです。

- TS
- NONE

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

このセクションの設定には、サーバー上でバッチ・ジョブの実行時に使用される待ち行列名が含まれています。また、ワークステーションの UBE の優先順位、およびジョブをスプール・ファイルに保持するか、即時にプリンタに送信するかを示します。

設定	標準値	目的
DefaultPrinterOUTQ=	QGPL/ONWORLD_A	バッチ・アプリケーションがルーティングされるデフォルト・プリンタ
UBQueue	QBATCH	クライアントが UBE またはパッケージ・インストールに関してサーバーに投入するバッチ名
JDENETTimeout=	60	クライアントからサーバーへの接続試行のタイムアウト値。秒単位で表示されます。サーバーは、JDBNET の使用時、他のサーバーに対する UBE の投入時、他のサーバー上のビジネス関数の呼出し時、他のサーバー上のロック・マネージャの使用時、または他のサーバーに対するサーバー要求にセキュリティを適用するときには、クライアントとして動作できます。

[SECURITY]

設定	標準値	目的
DataSource=		
User=	JDESVR	
Password=	JDESVR	
DefaultEnvironment=	P9ASD1	パス・コードで F98OWSEC が定義されている有効な環境を定義します。
SecurityServer=	security server name	
ServerPswdFile=	TRUE	このパラメータの設定によって、サーバー上で実行中のバッチ・レポートに、特殊パスワード処理を使用するかどうかを確定します。この値を TRUE に設定すると、ERP 9.0 でパスワードの特殊処理が可能になります。FALSE に設定すると、特殊処理は不能になります。 ERP 9.0 によってサーバー上でバッチ・レポートが実行される時には、“user password”を含むコマンドとパラメータの文字列行が使用されます。一部のオペレーティング・システム上では、ジョブの状況をクエリーして、プロセスの開始に使用

されたパラメータを確認できます。

セキュリティ措置として、ERP 9.0 による特殊処理を有効にすることができます。有効にすると、“user password”はバッチ処理用のパラメータ・リストに組み込まれません。代わりに、“user password”を含むファイルの名称が組み込まれます。ERP 9.0 は、オペレーティング・システムに対して、バッチ・レポートがパスワードを読み込んだらこのファイルを破棄するように指示します。

History=	0	
SecurityMode=	0 (デフォルト) 1 2	ERP 9.0 で標準ログオン・プロシージャ、汎用ログオン、またはその両方のうち、どれを使用するかを制御します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0. 標準ログオンのみを受け入れます。1. 汎用ログオンのみを受け入れます。2. 標準ログオンと汎用ログオンの両方を受け入れます。
AllowedUsers=	グループまたは ユーザー名	この設定は汎用ログオン機能に関するもので、ERP 9.0 の使用許可を与えるユーザーまたはグループを指定できます。 ユーザーまたはグループを指定しなければ、正しいドメインにログオンしているユーザー全員が汎用ログオン・サーバーによって認証されます。

[SVR]

このセクションの設定には、環境およびサブディレクトリ情報が含まれています。

設定	標準値	目的
SpecPath=		この行と、このセクションの後続のすべての行では、他の ERP 9.0 ソース・プログラムにファイルのロケーションが認識されるようにパス名を指定します。この値は、プログラムやプロセスでは更新されません。この値は、外観上の理由で変更します。
PackedSpecPath=	/b9APP	

[TCENGINE]

設定	標準値	目的
TraceLevel=	0 (デフォルト)	実行されるテーブル変換のログ・レベル。有効な値は 0～9 で、9 に設定すると最も詳細なログが生成され、0 に設定するとログは生成されません。
StopAfterRow=	0 (デフォルト)	テーブル変換中に処理されるロー数。デバッグ時に役立ちます。値 0 は、すべてのローが処理されることを示します。処理が停止されるまでのロー数を入力します。
ForceRowByRow=	0 (デフォルト) 1	有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0. 選択(SELECT)からそう入(INSERT)を実行可能にします。1. 挿入できるかどうかに関係なくテーブル変換は一度に 1 行ずつ変換します。

[UBE]

このセクションの設定により、jdedebug.log の操作状態が確定されます。また、デバッグ・レベルも確定されます。

設定	標準値	目的
UBEException	0 1 (デフォルト)	例外ハンドリングを無効(0)または有効(1)にします。0 = エラーを伴って終了します。1 = デバッグ・ログを表示します。
UBEChkMem	0 1 (デフォルト)	jdeCheckMemory を呼ぶコールを無効(0)/有効(1)にします。メモリはビジネス関数をトレースすることができます。
UBESubsystemLimit	3	レポート・バージョン 1 つあたりのサブシステム・ジョブ数を指定するために使用します。
UBESaveLogFile	0 (デフォルト) 1	UBE ログ・ファイルを削除(0)または保存(1)します。DebugLevel が 0 の場合にのみ削除できます。
UBEDebugLevel=	0 (デフォルト) 1- 6	UBE デバッグ・ログの使用時に表示されるデバッグ情報のレベルを指定します。6 は最上位のログ・レベルです。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0. エラー・メッセージのみ1. 情報メッセージ2. セクション・レベルのメッセージ3. オブジェクト・レベルのメッセージ4. イベント・ルール・メッセージ5. SQL 文6. UBE 関数メッセージ
UBEShowPDFLink	0 (デフォルト) 1	PDF ホット・リンクのボックスを表示するには“1”を入力してください。
UBEPrintDataItems	0 (デフォルト) 1	.pdf ファイルの関連データ項目記述を、サードパーティ・ベンダ用のメタデータとして印刷するかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0. 印刷しない1. 印刷する
UBESSDebug	0 (デフォルト) 1	サブシステム・キーを無効(0)または有効(1)にします。
UBEVCDebug	0 (デフォルト) 1	プロセスの UBE を実行する場合に VC を自動的に添付します。(NT のみ)
UBETHread	0 1 (デフォルト)	プロセス(0)またはスレッド(1)として UBE を実行します。
WebServer	0 (デフォルト)	この設定では、システムで Web サーバーからの UBE 機能を有効にして、Web の特殊な

- 1 ニーズを満たすために ERP 9.0 カーネルを Web カーネルとして識別するかどうかを指定します。この値を空白にすると、ビジネス関数からのコールやカーネルからのエラー・メッセージ処理は正常に機能しません。有効な値は次のとおりです。

- 0. 無効
- 1. 有効

[WORKFLOW]

設定 **値** **目的**

Asynchronous Workflow= FALSE 非同期ワークフローのオン/オフの切替に使用されます。デフォルト値は FALSE です。

[WORLD ENVIRONMENT MAP]

設定 **値** **目的**

OneWorldEnvironmentName= WorldEnvironment Name ERP 9.0 から WorldSoftware ライブラリ・リストを設定するために、特
(APPLJDEDC2 など) (QA9COMP など) 殊なビジネス関数コードで使用される文字列。ライブラリ・リストは、
ERP 9.0 から WorldSoftware をコールします。B73.3 の場合、アプリ
ケーション開発者はこれらの設定に関連する関数を使用できない
場合があります。

[INTEROPERABILITY]

設定	標準値	目的
RegisteredEvents=	RTSOOUT	イベント・タイプ名。イベントは ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーで実行する ERP 9.0 ビジネス・トランザクションです。リアルタイムでイベントを生成するには、生成する各イベントを登録する必要があります。
FilteredEvents=	*ALL	リアルタイムで作成するイベントを定義します。値*ALL に設定すると、すべての登録済みイベントが生成されます。*NONE に設定すると、イベント生成は無効化されます。登録済みイベントのサブセットを入力することもできます。

[SAMPLE_EVENT]

設定	標準値	目的
DS1=	D4202150B	[INTEROPERABILITY]セクションに登録されたリアルタイム・イベントのデータ構造体を定義します。[SAMPLE_EVENT]をイベント名 (RTSOOUT など) で置き換え、イベントのデータ構造体を定義する値を入力します。
DS2=	D4202150C	
DS3=	D34A1050C	

[JDEITDRV]

設定	標準値	目的
DrvCount=	3	イベント生成プログラム (Z ファイルまたはリアルタイム) のメッセージ処理に使用するイベント・ドライバの数
Drv1=	Z:ZDRV	Z ファイル・イベント・ドライバのディレクトリ・ロケーション

Drv2	RT:RTDRV	リアルタイム・イベント・ドライバのディレクトリ・ロケーション
Drv3	JDENET:JDETRDRV	JDENET ドライバのディレクトリ・ロケーション

[LREngine]

設定	標準値	目的
System=	/B9SYS_X (IFS 整合性ファイル・システムを使用する必要があります。)	List-Retrieval Engine (XML リポジトリ・ファイルへのアクセスを管理するデータベース) のディレクトリ・ロケーション

UNIX サーバーの jde.ini 設定の理解 (HP9000、RS/6000、または Sun サーバー)

ここでは、UNIX の ERP 9.0 サーバーの jde.ini ファイルの設定の詳細を示します。一部の設定は、サーバー・プラットフォームごとに異なる場合があります。[DEBUG] など、セクション別に情報が説明されています。各セクションはアルファベット順になっていますが、セクションの設定はソフトウェアで表示される順番に掲載してあります。

[BSFN BUILD]

設定	値	目的
Build Area=	/usr/PeopleSoft/b9/packages	サーバー上でパッケージがビルドされるロケーション
Optimization Flags=	+O2 (HP9000 のデフォルト) -O2 (RS/6000 と Sun のデフォルト)	マシンに依存。これらのコンパイル・フラグは、ビジネス関数をリリース・モードでビルドするときに使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
DebugFlags=	-g -y -D_DEBUG -DJDEDEBUG (HP9000 のデフォルト) -g -qfulpath -qdbextra -D_DEBUG -DJDEDEBUG (RS/6000 のデフォルト) -g -D_DEBUG -DJDEDEBUG (Sun のデフォルト)	マシンに依存。これらのコンパイル・フラグは、ビジネス関数をデバッグ・モードでビルドするときに使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
InliningFlags=	ブランク (デフォルト)	Yes の場合は、AS/400 上でインライン化がオンになります。No の場合はオフになります。AS/400 以外のサーバーの場合、このエントリはブランクです。
DefineFlags=	-DKERNEL -DPRODUCTION_VERSION - DNATURAL_ALIGNMENT -D_HPUX_SOURCE (HP9000 のデフォルト) -DKERNEL -DPRODUCTION_VERSION - DNATURAL_ALIGNMENT (RS/6000 のデフォルト) -DKERNEL -DPRODUCTION_VERSION - DNATURAL_ALIGNMENT -D SUN-SOURCE (Sun	

	のデフォルト)	
CompilerFlags=	<p>-Aa +w1 +z -c (HP9000 のデフォルト)</p> <p>-qalign=natural -qflag=l:l -c (RS/6000 のデフォルト)</p> <p>-qspill=1024</p> <p>-misalign -KPIC (Sun のデフォルト)</p>	<p>マシンに依存。有効なコンパイラ・フラグです。</p> <p>このスピル・フラグでは、ビジネス関数のコンパイル時のスタック・スペースを設定します。デフォルトのビジネス関数をコンパイルするには、1024 が適切です。</p>
OSReleaseLevel=	<p>+DAportable (HP-UX の場合のみ)</p> <p>-q32 (AIX の場合)</p>	コンパイルするリリース・レベル。これらのフラグは変更しないでください。
LinkFlags=	<p>-b -z -ljdesaw -L/usr/PeopleSoft/BDEV/system/lib (HP9000 のデフォルト)</p> <p>-b -z -B symbolic -ljdesaw -L/usr/PeopleSoft/BDEV/system/lib (HP9000 の場合のみ)</p> <p>-B symbolic -ljdesaw -L/usr/PeopleSoft/BDEV/system/lib (HP9000 の場合のみ)</p> <p>-</p> <p>bl:/usr/oneworld/BDEV/b9/system/bin32/func list.imp -bM:SRE -bexpall -brtl -lc -bnoentry -L -L/usr//PeopleSoft/BDEV/b9/system/lib -lm -ljdelib -lcallobj -lerror -lgentext -ljdb -ljde_erk -ljdecache -ljdecache -ljdeddapi -ljdeknet -ljderepl -ljdeschr -ljdesec -ljdespec -ljdetam -llanguage -lmisc -lpackage -lport -lrdbapi -lruntime -lsrc -ltransmon -lube -lworkflow -ljdenet -loadmap:loadmap -ljdesaw (RS/6000 のデフォルト)</p> <p>-</p> <p>bl:/usr//PeopleSoft/BDEV/b9/system/bin32/func list.imp -bM:SRE -bexpall -brtl -lc -lm -bnoentry -L -L/usr//PeopleSoft/BDEV/b9/system/lib -lm -ljdelib -lcallobj -lerror -lgentext -ljdb -ljde_erk -ljdecache -ljdecache -ljdeddapi -ljdeknet -ljderepl -ljdeschr -ljdesec -ljdespec -ljdetam -llanguage -lmisc -lpackage -lport -lrdbapi -lruntime -lsrc -ltransmon -lube -lworkflow -ljdenet -lowver -loadmap:loadmap -ljdesaw (AIX のデフォルト)</p> <p>-G -L\$ -ljdesaw (ORACLE_HOME)/lib -L/usr/PeopleSoft/BDEV/system/lib (Sun のデフォルト)</p>	<p>マシンに依存。これらのフラグは、jdesaw システム共有ライブラリへのリンク時など、ビジネス関数のリンク時に使用されます。これらのフラグは変更しないでください。</p> <p>-b -z -B シンボリックを設定すると、可能な場合、HP リンカーによって参照元と同じライブラリでシンボル (関数コール) が解決されます。これによって、あるライブラリから異なるパス・コードで同じ名前を持つ他のライブラリに対する呼出しが禁止されます。</p> <p>-B シンボリックを設定すると、共有ライブラリのビルド時に、可能な場合、そこに含まれる関数コールが同じライブラリで解決されます。</p> <p>-ljdesaw および -L/usr/PeopleSoft/BDEV/system/lib の設定は、システム・ライブラリ libjdesaw.sx の関数にリンクするビジネス関数のビルド前に追加する必要があります。</p>
LinkLibraries=	ブランク (デフォルト)	ビジネス関数のリンク先ライブラリ (Windows NT および AS/400 サーバーのみ)
SimultaneousBuilds=	<p>0 (無制限) (デフォルト)</p> <p>任意の整数 (即時ビルド数)</p>	一度にビルドできる DLL 数を示します。0 (ゼロ) は、すべてが同時にビルドされることを意味します。

[CLUSTER]

設定	標準値	目的
Primary Node=	server name	ERP 9.0 でクラスタ化を使用する場合は、この設定で ERP 9.0 を実行する基本サーバー、またはフローティング IP アドレス名を指定します。 この設定は、コメント・アウトして出荷されます。

[DB SYSTEM SETTINGS]

このセクションの設定には、デフォルトの環境とパス・コードに関する情報が含まれています。ディレクトリは、jde.ini ファイルで指定されているデフォルトのパス・コードと同じ名前のワークステーションに常駐させる必要があります。また、このセクションにはサーバー名も含まれています。

設定	値	目的
Version=	43	jde.ini ファイルと実行中の ERP 9.0 バージョンの不一致を防ぐためのバージョン番号
Default User=	JDESVR	データベース・ブートストラップ・テーブルのユーザー・アカウント名
Default Pwd=		データベース・ブートストラップ・テーブルのユーザー・アカウント・パスワード
Default Env=	PDEVHP02 (HP9000 のデフォルト) PDEVRS02 (RS/6000 のデフォルト)	ワークステーションやエンタープライズ・サーバーのデフォルト・データ・ソース
Default PathCode=	PROD	ビジネス関数コードが保管される¥\$PKG の下のサブディレクトリ
Base Datasource=	ORACLE SVR	ログオン情報の読み込み元のデータベースを表すデータ・ソース
Object Owner=	JDESVR	システム・データベース・テーブルの所有者
Server=	server name	データベースが常駐するサーバー
Database=	hp9000adevl	システム・テーブルが常駐するデータベースの接続文字列
Load Library=	libora9.sl (HP9000 のデフォルト) libora80.so (RS/6000 と Sun のデフォルト)	システム・テーブルが保管されているデータベースにアクセスするための JDE ドライバ。使用するデータベースと、ERP 9.0 を実行するシステムのタイプに応じて異なります。
Decimal Shift=	Y (デフォルト) N	数値データに小数点シフトを使用するかどうかを示すフラグ
Julian Dates=	Y (デフォルト) N	日付をユリウス暦で保管するか、データベース固有の書式で保管するかを示すフラグ

Use Owner=	Y(デフォルト) N	テーブル名に所有者名を含めるかどうかを示すフラグ
Secured=	Y(デフォルト) N	ユーザーおよびパスワード・ログインを必要とするセキュリティ・データベースかどうかを示します。
Type=	O (デフォルト) A S I	システム・テーブルが保管されているデータベースのタイプを示す 1 文字。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • O (Oracle) • A (MS Access) • S (SQL Server) • I (Client Access, AS/400)
LibraryList=	ブランク(デフォルト)	AS/400 のみ。システム・テーブルを保持するデータベース・サーバーです。
TriggerLibrary=	JDBTRIG(デフォルト)	AS/400 のみ。システム・テーブルを保持するデータベース・ライブラリです。

[DEBUG]

このセクションの設定によって、jde.log と jdedebug.log のロケーションが確定されます。また、この設定は jdedebug.log のオン/オフの切替えにも使用されます。

設定	標準値	目的
Output=	FILE	<p>jdedebug ファイルの状況を制御します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • NONE = トレース情報は jdedebug.log に書き込まれません。 • FILE = データベースおよびランタイム・トレース情報が、[DEBUG]セクションの DebugFile=パラメータで指定されたファイルに書き込まれます。 • EXOFILE = ランタイム・トレース情報が、[DEBUG]セクションの DebugFile=パラメータで指定されたファイルに書き込まれます。 • BOTH = トレース情報が jde.log と jdedebug.log の両方に書き込まれます。
Trace=	TRUE	デバッグ時に役立つ追加のトレース情報がログ・ファイルに書き込まれます。
ClientLog=	1(デフォルト) 0	<p>有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1. ビジネス関数 JDE.LOG および JDEDEBUG.LOG エントリをサーバーからワークステーションに提供できます。 • 0. サービスを無効にします。
DebugFile=	jdedebug.log	jdedebug.log ファイルのロケーションと名前
JobFile=	jde.log	jde.log ファイルのロケーションと名前
LogErrors=	1	
JDETSFile=	JDETS.log	ロック・マネージャのトレース・ファイルの位置を指定します。

RepTrace= 1 ログ・メッセージのレプリケーションを有効にします。

[INSTALL]

このセクションの設定には、ディレクトリ・パスとインストール全般の情報が含まれています。

設定	標準値	目的
DefaultSystem=	system	ERP 9.0 のファンデーション・コードとツールが含まれる B9 の下のサブディレクトリ名
ClientPath=	client	デプロイメント・サーバー上で、ワークステーションのインストール・プログラムと配布時に使用される他のファイルが保管されるディレクトリの名前
PackagePath=	package	デプロイメント・サーバー上で、特定のパス・コード用にビルドされるパッケージを含むパス・コードの下のサブディレクトリ名
DataPath=	data	デプロイメント・サーバー上で、特定のパス・コード用の全パッケージ用に出荷される Access データベースを含む、パス・コードの下のサブディレクトリ名
B9=	/usr//jdedwardsoneworld/b9	ERP 9.0 の基本インストール・パス
Double_Byte=	0	
LocalCodeSet=	WE_ISO88591	代替言語使用を決定するための設定。他の値については、『アップグレード』ガイドの「言語の概要」を参照してください。

[JDEIPC]

設定	標準値	目的
ipcTrace=	0	1 に設定すると、IPC ログ・メッセージが有効になります。 注意： この設定では、ログ・ファイルが短時間に大きくなる可能性があります。
maxNumberOfSemaphores=	200 (HP9000 と Sun のデフォルト)	RS/6000 用の設定値はありません。
startIPCKeyValue	7999	コメント・アウトして出荷されます。 UNIX 上では、これは JDEIPC で共有メモリに使用された IPC ID の値です。この値と maxNumberOfResources によって、JDE がシステム上で使用する IPC ID の範囲を定義します。システム管理者は、この ID の範囲が他のソフトウェアに使用されないかどうかを確認する必要があります。JDEIPC では範囲内の既存 ID は使用されませんが、他のソフトウェアの場合は使用されることがあります。

[JDEMAIL]

設定	標準値	目的
mailServer=	owsmtp.jdedwards.com	サーバー・メール・メッセージの送信用にアクセスする SMTP サーバーのドメイン名

[JDENET]

設定	標準値	目的
serviceNameListen=	jde_server	ERP 9.0 がクライアントおよび他のサーバーとの通信に使用するポート番号またはサービス名
serviceNameConnect=	jde_server	ERP 9.0 がクライアントおよび他のサーバーとの通信に使用するポート番号またはサービス名
maxNetProcesses=	1	実行できる JDENET_N プロセスの最大数を定義します。大量の JDENET メッセージ・フローが予想されるサーバーの場合は、大きい値を指定できます。
maxNetConnections=	1250 (HP9000 のデフォルト) 800 (RS/6000 のデフォルト)	すべての JDENET_N プロセスで処理できる合計接続数。プラットフォーム固有の値です。同時に多数のワークステーションを処理することが予想されるサーバーの場合は、大きい値を指定できます。
maxKernelProcesses=	50	実行可能な JDENET_K プロセスの最大数。ここでは、すべての専用サーバーの maxNumberOfProcesses を合計した値より大きい値を指定してください。
maxKernelRanges=	20	専用サーバー・タイプの数
maxLenInlineData=	1024	内部専用
maxLenFixedData=	4096	内部専用
maxFixedDataPackets=	1024	内部専用
netTrace=	1	JDENET のログ・メッセージを有効にします。
kernelDelay=	0	内部専用
HandleKrnISignals=	1	プロセスに配信されるシグナルの処理のオン/オフを切り替えます。カーネル・プロセスは、この設定を起動時に読み取ります。パラメータ値 1 の場合は処理がオンになります。これは、カーネル・プロセスがシグナルを処理し、何らかのクリーンアップ・タスクを実行してから終了することを意味します。パラメータ値が 0 の場合は、シグナル処理がオフになります。値が 0 の場合、シグナルがプロセスに配信されると、そのプロセスはコア・ファイルを書き出します。コア・ファイルには、開発者がシグナルの原因とロケーションの判断に使用できるデータが含まれています。デバッグにはパラメータ値 0 を使用します。 ERP 9.0 サービスの開始後は、この設定の変更後に開始されたプロセスのみが影響を受けます。

netCoreDump=	0	内部専用。RS/6000 用の設定値はありません。
netTemporaryDir=	temporary file directory	ERP 9.0 の一時ファイルに使用するディレクトリを設定します。
newProcessThreshold Connects=	0	
MaxIPCQueueMsgs	12	内部専用
InternalQueueTimeout	30	内部専用

[JDENET_KERNEL_DEFx]

このセクションでは、JDENET 内部の専用サーバー・プロセスを定義しています。各セクションには、JDENET_KERNEL_DEF1～JDENET_KERNEL_DEF12 の番号が付いています。これらのセクションの設定は、特に明記されていない限り変更しないでください。

設定	値	目的
bAllowOneUserOnly=	1	<p>パラメータ値が 1 の場合は、クライアント・ワークステーション上では、単一ユーザーのみのカーネル・プロセスが許可されます。デフォルトでは、単一ユーザーのみのカーネル・プロセスが許可されず、CallObject kernel カーネル・プロセスの場合にのみ、次の設定を追加してください。</p> <p>[JDENET_KERNEL_DEF6]</p> <p>bAllowOneUserOnly=1</p> <p>[JDENET_KERNEL_DEFx]と共に、次の設定を追加する必要があります。</p> <p>クライアント・ワークステーションの jde.ini ファイルに、bOneUserOnly=1 セクションを追加します。</p>
krnlName	<p>DEF1:JDENET RESERVED KERNEL</p> <p>DEF2:UBE KERNEL</p> <p>DEF3:REPLICATION KERNEL</p> <p>DEF4:SECURITY KERNEL</p> <p>DEF5:LOCK MANAGER KERNEL</p> <p>DEF6:CALL OBJECT KERNEL</p> <p>DEF7:JDBNET KERNEL</p> <p>DEF8:PACKAGE INSTALL KERNEL</p> <p>DEF9:SAW KERNEL</p>	<ul style="list-style-type: none"> DEF1:内部用とテスト用に使用されます。 DEF2:ERP 9.0 のバッチ処理要求を処理します。 DEF3:データ・レプリケーション要求を処理します。 DEF4:セキュリティ・サーバー要求を処理します。 DEF5:トランザクション・マネージャとロック・マネージャの要求を処理します。 DEF6:リモートのマスター・ビジネス関数(MBF)に対する要求を処理

DEF10:SCHEDULER KERNEL		します。
DEF11:PACKAGE BUILD KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF7:JDBNet のサーバー間要求を処理します。
DEF12:UBE SUBSYSTEM KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF8:パッケージ・インストール要求を処理します。
DEF13:WORKFLOW KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF9:SAW アプリケーション要求を処理します。
DEF13:XML LIST KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF10:<スケジューラ>アプリケーション要求を処理します。
DEF 19:EVENT NOTIFICATION KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF11:パッケージ・ビルド要求を処理します。
DEF 20:INTEROPERABILITY EVENT OBSERVER KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF12:UBE サブシステム要求を処理します。
DEF 22:XML DISPATCH KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF13:ワークフロー要求を処理します。
DEF13:XTX KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF16:データ要求を処理して XML ドキュメント・フォーマットで戻します。
DEF13:XML SERVICE KERNEL		<ul style="list-style-type: none"> DEF19:Interoperability Event Observer によって生成されたリアルタイム・イベントと XML ドキュメント、Z ファイル・イベントを処理します。すべての ERP 9.0 イベントをサブスクライバにパブリッシュします。 DEF20:リアルタイム API をコールするビジネス関数からの情報を処理し、その情報を使用して、Event Notification Kernel によってサブスクライバにパブリッシュ可能な XML または Z ファイルを作成します。 DEF22:XML メッセージを正しいカーネルにルーティングするカーネル DEF23:異なるタイプの XML メッセージ間でトランスフォームするカーネル DEF24:XAPI メッセージを受信するプロセス
dispatchDLLName=	DEF1:libjdenet.sl (HP9000 のデフォルト) または libjdenet.so (RS/6000 と Sun のデフォルト) DEF2:libjdeknet.sl (HP9000 のデフォルト) または libjdeknet.so (RS/6000 と Sun のデフォルト) DEF3:libjderepl.sl (HP9000 のデフォルト) または libjderepl.so (RS/6000 と Sun のデフォルト) DEF4:libjdeknet.sl (HP9000 のデフォルト) または libjdeknet.so (RS/6000 と Sun のデフォルト) DEF5:libtransmon.sl (HP9000 のデフォルト) または	JDENET サービス・プログラム名を識別します。

は libtransmon.so (RS/6000 と Sun のデフォルト)

DEF6:libjdeknet.sl (HP9000 のデフォルト) または
libjdeknet.so (RS/6000 と Sun のデフォルト)

DEF7:libjdeknet.sl (HP9000 のデフォルト) または
libjdeknet.so (RS/6000 と Sun のデフォルト)

DEF8:libjdeknet.sl (HP9000 のデフォルト) または
libjdeknet.so (RS/6000 と Sun のデフォルト)

DEF9:libjdesaw.sl (HP9000 のデフォルト) または
libjdesaw.so (RS/6000 と Sun のデフォルト)

DEF10:libjdeschr.sl (HP9000 のデフォルト) または
libjdeschr.so (RS/6000 と Sun のデフォルト)

DEF11:libjdeknet.sl (HP9000 のデフォルト) または
libjdeknet.so (RS/6000 と Sun のデフォルト)

DEF12:dekern.sl (HP9000 と Sun のデフォルト) ま
たは libjdeknet.so (RS/6000 のデフォルト)

DEF13:libworkflow.so (HP9000 と Sun のデフォル
ト) または libworkflow.sl (RS/6000 のデフォルト)

DEF16:libxmllist.so (Sun/AIX)、libxmllist.sl (HP9000)

DEF19:libjdeie.so (Sun/AIX)、libjdeie.sl (HP9000)

DEF20:libjdeieo.so (Sun/AIX)、libjdeieo.sl (HP9000)

DEF22:libxmldispatch.so/sl

DEF23:libxtskrnl.so/sl

DEF24:libxmlservice.so/sl

dispatchDLLFunction=

DEF1:JDENET_Dispatch Message

DEF2:JDEK_DispatchUBEMessage

DEF3:DispatchRepMessage

DEF4:JDEK_DispatchSecurity

DEF5:TM_DispatchTransactionManager

DEF6:JDEK_DispatchCallObject Message

DEF7:JDEK_DispatchJDBNETMessage

DEF8:JDEK_DispatchPkgInstallMessage

DEF9:JDEK_DispatchSAWMessage

DEF10:JDEK_DispatchScheduler

DEF11:JDEK_DispatchPkgBuildMessage

DEF12:
JDEK_DispatchUBESBSMessage

DEF13:

JDENET メッセージを処理する JDENET 関数の名称。dispatchDLLName および dispatchDLLFunction エントリは、プラットフォームに固有です。

	JDEK_DispatchWFServer Process	
	DEF16:	
	JDEK_XMLListDispatch	
	DEF19:	
	JDEK_DispatchITMessage	
	DEF20:	
	JDEK_DispatchIEOMessage	
	DEF22:XMLDispatch	
	DEF23:JDEK_DISPATCHXTSMMessage	
	DEF24:XMLServiceDispatch	
maxNumberOfProcesses=	1	カーネル・タイプごとに、このサーバー上で実行できるカーネル・プロセスの最大数。ユーザーは、この設定を修正してパフォーマンスを調整できます。デフォルト値は、すべての JDENET_KERNEL_DEF セクションで 1 です。
numberOfAutoStartProcesses=	0	各カーネル・タイプに対して自動的に開始されるカーネル・プロセスの数。この値が 0 であれば、そのカーネル・タイプのカーネル・プロセスは自動的に開始されません。この値は、そのカーネル・タイプの最大プロセス数より小さくなければなりません。ユーザーは、この設定を修正してパフォーマンスを調整できます。デフォルト値は、すべての JDENET_KERNEL_DEF セクションで 0 です。

[LOCK MANAGER]

設定	標準値	目的
Server=	server name	この設定は、レコードの処理に使用するロック・マネージャ・サーバーを示します。この設定の値は、ロック・マネージャとして機能するサーバーの名前です。
AvailableService=	TS	この設定は、ロック・マネージャ・サーバーが提供するサービスを示します。ロック・マネージャのオン/オフ指定にも使用されます。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • TS • NONE
RequestedService=	TS	この設定は、ワークステーションがサーバーに対して要求するサービスのタイプを示します。現在サーバーから提供されるサービスは、タイムスタンプ(TS)のみです。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • TS • NONE

[MEMORY DEBUG]

設定	標準値	目的
Frequency=	10000	
Full=	1	

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

このセクションの設定には、サーバー上でバッチ・ジョブの実行時に使用される待ち行列名が含まれています。また、ワークステーションの UBE の優先順位、およびジョブをスプール・ファイルに保持するか、即時にプリンタに送信するかを示します。

設定	標準値	目的
UBE Semaphore Key=	3600	
DefaultPrinterOUTQ=	printer name	バッチ・アプリケーションがルーティングされるデフォルト・プリンタ
OutputDirectory=	directory name	PrintQueue ディレクトリを作成するディレクトリ
JDENETTimeout=	60	クライアントからサーバーへの接続試行のタイムアウト値。秒単位で表示されます。サーバーは、JDBNET の使用時、他のサーバーに対する UBE の投入時、他のサーバー上のビジネス関数の呼出し時、他のサーバー上のロック・マネージャの使用時、または他のサーバーに対するサーバー要求にセキュリティを適用するときには、クライアントとして動作できます。

[SECURITY]

設定	標準値	目的
User=	JDESVR	ERP 9.0 ユーザー
Password=	JDESVR	ERP 9.0 パスワード
DefaultEnvironment=	PDEVHP02 (HP9000 パス・コードで F98OWSEC が定義されている有効な環境を定義します。 のデフォルト) PDEVRS02 (RS/6000 のデフォルト)	
DataSource=	ORACLE PVC B9	セキュリティ・テーブルを含む ERP 9.0 データ・ソースの名前
SecurityServer=	server name	セキュリティ・サービスを提供するサーバーの名前。通常は現在のホストです。
ServerPswdFile=	TRUE	このパラメータの設定によって、サーバー上で実行中のバッチ・レポートに、ERP 9.0 で特殊パスワード処理が使用されるかどうかを確認します。この値を TRUE に設定すると、ERP 9.0 でパスワードの特殊処理が可能になります。

FALSE に設定すると、特殊処理は不能になります。

ERP 9.0 によってサーバー上でバッチ・レポートが実行される時には、user password を含むコマンドとパラメータの文字列行が使用されます。一部のオペレーティング・システム上では、ジョブの状況をクエリして、プロセスの開始に使用されたパラメータを確認できます。

機密保護措置として、ERP 9.0 による特殊処理を有効にすることができます。可能にすると、“user password”はバッチ処理用のパラメータ・リストに組み込まれません。代わりに、user password を含むファイル名が組み込まれます。ERP 9.0 は、オペレーティング・システムに対して、バッチ・レポートがパスワードを読み込んだらこのファイルを破棄するように指示します。

History= 0

[SERVER ENVIRONMENT MAP]

設定	標準値	目的
----	-----	----

ServerName=	environment name	このセクションの各設定には、各サーバーがマップされている環境が表示されます。
-------------	------------------	--

[SVR]

このセクションの設定には、環境およびサブディレクトリ情報が含まれています。

設定	標準値	目的
EnvType=	1	JDEKRNL で使用されます。
EnvironmentName=	PDEVHP02 (HP9000 のデフォルト) PDEVRS02 (RS/6000 のデフォルト)	
SpecPath=	spec	この行と、このセクションの後続のすべての行では、ERP 9.0 ソース・プログラムにファイルのロケーションが認識されるようにパス名を指定します。たとえば、spec が specifications に変更された場合、この値を変更するとすばやく設定できます。この値は、プログラムやプロセスでは更新されません。この値は、外観上の理由で変更します。これは、ワークステーション上でスペック・ファイルのレプリケート・セットを保管するパス・コードの下サブディレクトリです。
SourcePath=	source	
ObjectPath=	obj	
HeaderPath=	include	
HeaderVPath=	includev	
BinPath=	bin32	

LibPath= lib32
 LibVPath= libv32
 MakePath= make
 WorkPath= work
 CodeGeneratorPath= cg
 ResourcePath= res
 HelpPath= helps
 NextIDPath= nextid
 LibraryListName= PDEVHP02 (HP9000 の
 デフォルト)
 PDEVRS02 (RS/6000 の
 デフォルト)

[TAM]

設定 値 目的

TAMTraceLevel 0

[WORKFLOW]

設定 値 目的

Asynchronous Workflow= FALSE 非同期ワークフローのオン/オフの切替に使用されます。デフォルト値は FALSE です。

[INTEROPERABILITY]

設定	標準値	目的
RegisteredEvents=	RTSOOUT	イベント・タイプ名。イベントは ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーで実行する ERP 9.0 ビジネス・トランザクションです。リアルタイムでイベントを生成するには、生成する各イベントを登録する必要があります。
FilteredEvents	*ALL	このパラメータ値では、リアルタイムで作成するイベントを定義します。値 *ALL に設定すると、すべての登録済みイベントが生成されます。*NONE に設定すると、イベント生成は無効化されます。登録済みイベントのサブセットを入力することもできます。

[JDENET_KERNEL_DEFx]

このセクションでは、JDENET 内部の専用サーバー・プロセスを定義しています。

設定	値	目的
bAllowOneUserOnly=	1	<p>パラメータ値が 1 の場合は、クライアント・ワークステーション上では、単一ユーザーのみのカーネル・プロセスが許可されます。デフォルトでは、単一ユーザーのみのカーネル・プロセスが許可されます。CallObject kernel カーネル・プロセスの場合にのみ、次の設定を追加してください。</p> <p>[JDENET_KERNEL_DEF6]</p> <p>bAllowOneUserOnly=1</p> <p>[JDENET_KERNEL_DEFx]と共に、次の設定を追加する必要があります。</p> <p>クライアント・ワークステーションの jde.ini ファイルに、bOneUserOnly=1 セクションを追加します。</p>
krnlName	<p>DEF1:JDENET RESERVED KERNEL</p> <p>DEF2:UBE KERNEL</p> <p>DEF3:REPLICATION KERNEL</p> <p>DEF4:SECURITY KERNEL</p> <p>DEF5:LOCK MANAGER KERNEL</p> <p>DEF6:CALL OBJECT KERNEL</p> <p>DEF7:JDBNET KERNEL</p> <p>DEF8:PACKAGE INSTALL KERNEL</p> <p>DEF9:SAW KERNEL</p> <p>DEF10:SCHEDULER KERNEL</p> <p>DEF11:PACKAGE BUILD KERNEL</p> <p>DEF12:UBE SUBSYSTEM KERNEL</p> <p>DEF13:WORKFLOW KERNEL</p> <p>DEF 16:XML LIST KERNEL</p> <p>DEF 19:EVENT NOTIFICATION KERNEL</p> <p>DEF 20:INTEROPERABILITY EVENT OBSERVER KERNEL</p> <p>DEF 22:XML DISPATCH KERNEL</p> <p>DEF13:XTX KERNEL</p> <p>DEF13:XML SERVICE KERNEL</p>	<ul style="list-style-type: none"> DEF1:内部用とテスト用に使用されます。 DEF2:ERP 9.0 のバッチ処理要求を処理します。 DEF3:データ・レプリケーション要求を処理します。 DEF4:セキュリティ・サーバー要求を処理します。 DEF5:トランザクション・マネージャとロック・マネージャの要求を処理します。 DEF6:リモートのマスター・ビジネス関数(MBF)に対する要求を処理します。 DEF7:JDBNet のサーバー間要求を処理します。 DEF8:パッケージ・インストール要求を処理します。 DEF9:SAW アプリケーション要求を処理します。 DEF10:〈スケジューラ〉アプリケーション要求を処理します。 DEF11:パッケージ・ビルド要求を処理します。 DEF12:UBE サブシステム要求を処理します。

		<ul style="list-style-type: none"> • DEF13:ワークフロー要求を処理します。 • DEF16:データ要求を処理してXMLドキュメント・フォーマットで戻します。 • DEF19:Interoperability Event Observer によって生成されたリアルタイム・イベントとXMLドキュメント、Z ファイル・イベントを処理します。すべての ERP 9.0 イベントをサブスクライバにパブリッシュします。 • DEF20:リアルタイム API をコールするビジネス関数からの情報を処理し、その情報を使用して、イベント通知カーネルによってサブスクライバにパブリッシュ可能な XML ファイルまたは Z ファイルを作成します。 • DEF22:XML メッセージを正しいカーネルにルーティングするカーネル • DEF23:異なるタイプの XML メッセージ間でトランスフォームするカーネル • DEF24:XAPI メッセージを受信するプロセス
dispatchDLLName=	DEF1:jdenet.dll DEF2:jdekrnl.dll DEF3:jdekrnl.dll DEF4:jdekrnl.dll DEF5:jdekrnl.dll DEF6:jdekrnl.dll DEF7:jdekrnl.dll DEF8:jdekrnl.dll DEF9:jdesaw.dll DEF10:jdekrnl.dll DEF11:jdekrnl.dll DEF12:jdekrnl.dll DEF13:jdekrnl.dll DEF16:xmlist.dll DEF19:jdeie.dll DEF20:jdeieo.dll DEF22:xmldispatch.dll	JDENET サービス・プログラム名を識別します。

	DEF23:xtskrnl.dll	
	DEF24:xmlservice.dll	
dispatchDLLFunction=	DEF1:JDENET_Dispatch Message@28 DEF2:JDEK_DispatchUBEMessage@ 28 DEF3:DispatchRepMessage@28 DEF4:JDEK_DispatchSecurity@28 DEF5:JDEK_DispatchTransactionManager@28 DEF6:JDEK_DispatchCallObject Message@28 DEF7:JDEK_DispatchJDBNETMessage@28 DEF8:JDEK_DispatchPkgInstallMessage@28 DEF9:JDEK_DispatchSAWMessage@28 DEF10:JDEK_DispatchScheduler@28 DEF11:JDEK_DispatchPkgBuildMessage@28 DEF12:JDEK_DispatchUBESBSMessage@28 DEF13:JDEK_DispatchWFServer Process@28 DEF16:JDEK_XMLListDispatch@28 DEF19:JDEK_DispatchITMessage@28 DEF20:JDEK_DispatchIEOMessage@28	カーネル要求メッセージを処理するカーネル関数の名前。Windows NT 上で動作する Intel プロセッサの場合は、先行アンダースコア「_」と後続の「@28」が必要です。Windows NT 上で動作する Compaq AlphaServer プロセッサの場合は、先行アンダースコア「_」と後続の「@28」が省略されます。
maxNumberOfProcesses=	1	カーネル・タイプごとに、このサーバー上で実行できるカーネル・プロセスの最大数。ユーザーは、この設定を修正してパフォーマンスを調整できます。デフォルト値は、すべての JDENET_KERNEL_DEF セクションで 1 です。
numberOfAutoStartProcesses=	0	各カーネル・タイプに対して自動的に開始されるカーネル・プロセスの数。この値が 0 であれば、そのカーネル・タイプのカーネル・プロセスは自動的に開始されません。この値は、そのカーネル・タイプの最大プロセス数より小さくしてください。ユーザーは、この設定を修正してパフォーマンスを調整できます。デフォルト値は、すべての JDENET_KERNEL_DEF セクションで 0 です。

[SAMPLE_EVENT]

設定	標準値	目的
DS1=	D4202150B	[INTEROPERABILITY]セクションに登録されたリアルタイム・イベントのデータ構造体を定義します。[SAMPLE_EVENT]をイベント名 (RTSOOUT な

DS2=	D4202150C	ど)で置き換え、イベントのデータ構造体を定義する値を入力します。
DS3=	D34A1050C	

[JDEITDRV]

設定	標準値	目的
DrvCount=	3	イベント生成プログラム(Z ファイルまたはリアルタイム)のプロセス・メッセージに使用するイベント・ドライバの数。
Drv1	Z:libzdrv.so (Sun および AIX) Z:libzdrv.sl (HP9000)	Z ファイル・イベント・ドライバのディレクトリ・ロケーション
Drv2	RT:librtdrv.so (Sun および AIX) RT:librtdrv.sl (HP9000)	リアルタイム・イベント・ドライバのディレクトリ・ロケーション
Drv3	JDENET:libjdetdrv.so (Sun および AIX) JDENET:libjdetdrv.sl (HP9000)	JDENET ドライバのディレクトリ・ロケーション

[LREngine]

設定	標準値	目的
System=	/owdisk2/oneworld/b9_bdev/output	List-Retrieval Engine (XML リポジトリ・ファイルを使用するデータベース) のディレクトリ・ロケーション

Windows NT エンタープライズ・サーバーの jde.ini 設定の理解

ここでは、ERP 9.0 の Windows NT エンタープライズ・サーバーの jde.ini ファイルの設定の詳細を示します。情報は、[DEBUG]など、セクション別になっています。各セクションはアルファベット順になっていますが、セクション内の設定はソフトウェア内で表示される順番に掲載してあります。Intel 用と Compaq AlphaServer 用のプロセッサのデフォルトが異なる場合は、2 つの値が明記されています。

[BSFN BUILD]

設定	値	目的
DoCompression=	0	同じプラットフォーム・タイプの他のサーバーに再配布するために、サーバー・パッケージを圧縮する時に使用します。この設定により、各サーバー上でパッケージをビルドする必要がなくなります。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> 0. 使用しない 1. 使用する
BuildArea=	Z:¥OneWorld¥b9¥ddp ¥packages	サーバー上で Package Name ディレクトリが作成され、パッケージがビルドされるロケーション

DebugFlags=	/Gz /Od /Zi /MDd /Yd /W4 /GX /Gy /D "_DEBUG"	マシンに依存。これらのコンパイル・フラグは、ビジネス関数をデバッグ・モードでビルドする時に使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
OptimizationFlags=	/Gz /O2 /MD /W4 /GX /Gy	マシンに依存。これらのコンパイル・フラグは、ビジネス関数をリリース/最適化モードでビルドする時に使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
OSReleaseLevel=	5.0	コンパイルする Windows NT サーバーのリリース・レベル。このフラグは変更しないでください。
DefineFlags=	/D "WIN32" /D "_WINDOWS" /D "IAMASERVER" /D "KERNEL"	マシンに依存。これらのコンパイル・フラグは、ビジネス関数のリンク時に使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
CompilerFlags=	/nologo /c	マシンに依存。これらのコンパイル・フラグは、ビジネス関数のリンク時に使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
LinkFlags=	/DLL /DEBUG /SUBSYSTEM:windows /FORCE:MULTIPLE /FORCE:UNRESOLVED /INCREMENTAL:YES /VERBOSE /MAP	マシンに依存。このフラグは、ビジネス関数のリンク時に使用されます。これらのフラグは変更しないでください。
LinkLibraries=	jdekrnl.lib, jdel.lib, jdenet.lib, jdeipc.lib	ビジネス関数のリンク先ライブラリ。
SimultaneousBuilds=	0	ビジネス関数のビルドのために開始されるプロセス数を示します。0 は、最大数のビルド・プロセスが実行されることを意味します。

[BSFN Builder]

このセクションの設定は、J.D. Edwards 内部専用です。

設定	値	目的
User=	JDE	BSFNBuilder.exe の実行に使用される ERP 9.0 ユーザーID
Pwd=	JDE	BSFNBuilder.exe の実行に使用される ERP 9.0 ユーザー・パスワード
PathCode=	appl_pgf	BSFN がビルドされる ERP 9.0 パス・コード
Build Area=	z:¥OneWorld¥b9¥ddp	ビルドするビジネス関数用のパス・コードの親ディレクトリへのパス。通常は、基本インストール・ディレクトリと同じです。
DBSFNFlags=	/Gz /Od /Zi /MDd /Yd /W4 /GX /Gy /Fp\$(PRECOMPHDR) /D "WIN32" /D "_DEBUG" /D "WINDOWS" /D "IAMASERVER" /D "KERNEL"	デバッグ・ビルド・コードを作成するための、マシン依存のコンパイラ・フラグ

	/nologo /c	
RBSFNFlags=	/Gz /O2 /MD /W4 /GX /Gy /Fp\$(PRECOMPHDR) /D "WIN32" /D "NDEBUG" /D "_WINDOWS" /D "IAMASERVER" /D "KERNEL" /nologo /c	リリース・ビルド・コードを作成するための、マシン依存 のコンパイラ・フラグ
DLinkFlags=	/DLL /DEBUG /SUBSYSTEM:windows /out:\$(DLLTARGET) /PDB:\$(PDB) /IMPLIB:\$(LIBRARY) /FORCE:MULTIPLE /FORCE:UNRESOLVED /INCREMENTAL:YES /VERBOSE /MAP	デバッグ・ビルド用のマシン依存のリンク・フラグ
RLinkFlags=	/DLL /DEBUG /SUBSYSTEM:windows /out:\$(DLLTARGET) /PDB:\$(PDB) /IMPLIB:\$(LIBRARY) /FORCE:MULTIPLE /FORCE:UNRESOLVED /VERBOSE /MAP:\$(MAPTARGET) /OPT:REF	リリース・ビルド用のマシン依存のリンク・フラグ
KeepMake=	0	ビルド後の make ファイルの状況。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> 0. 保存しない(デフォルト) 1. 保存する
BFDDir=	bsfnerr	ビルド・エラー・ログが保管されるパス・コードの下の子 ディレクトリ。デフォルト値は bsfnerr です。

[DB SYSTEM SETTINGS]

このセクションの設定には、デフォルトの環境とパス・コードに関する情報が含まれています。ディレクトリは、jde.ini ファイルで指定されているデフォルトのパス・コードと同じ名称のエンタープライズ・サーバーに常駐させる必要があります。

設定	値	目的
Version=	43	jde.ini ファイルと実行中の ERP 9.0 のバージョンの不一致を防止するためのバージョン番号。有効な値は 43 のみです。
Default User=		ブートストラップ・テーブル F986101 および F98611 へのアクセスに使用される ERP 9.0 ユーザー ID
Default Pwd=		ブートストラップ・テーブルへのアクセスに使用される ERP 9.0 ユーザー・パスワード
Default Env=	P9HPO1	環境を指定しない場合に使用される環境
Default PathCode=	PROD	デフォルトのパス・コード。ブートストラップ・テーブルのスペック・ファイルが、このパス・コード・フォルダの spec サブディレクトリから読み込まれます。
Server=	hp9000a	ブートストラップ・テーブルが格納されるサーバー。この値は、jdbnet の使用時以外は無視されます。
Type=	0	ブートストラップ・テーブルが常駐するデータベースのタイプ。有効な値は次のとおりです。

A	• O (Oracle)
S	• A (MS Access)
I	• S(SQL Server)
	• I(Client Access Express)

[DEBUG]

このセクションの設定によって、jde.log と jdedebug.log のロケーションが確定されます。また、この設定はロギングのオン/オフの切替にも使用されます。

設定	標準値	目的
DebugFile=	z:¥OneWorld¥b9 ¥ddp¥log ¥jdedebug.log	デバッグ・トレース情報を書き込むためのログ・ファイルのパスと名称。このファイル名のピリオドの前に、プロセス ID が追加されます。
JobFile=	z:¥OneWorld¥b9 ¥ddp¥log¥jde.log	ジョブ・エラーおよび警告情報を書き込むためのログ・ファイルのパスと名称。このファイル名のピリオドの前に、プロセス ID が追加されます。
Output=	FILE	<p>トレース情報の書き込み方法を制御します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • NONE -デフォルト設定。トレース情報は DebugFile に書き込まれません。 • FILE -データベースおよびランタイム情報が DebugFile に書き込まれます。 • AUX -トレース情報がプログラムのデバッグ出力ウィンドウに出力されます。 • BOTH -トレース情報が DebugFile とプログラムのデバッグ出力ウィンドウに出力されます。
JDETSFile=	z:¥OneWorld¥b9¥ddp¥log¥jdet ets.log	ロック・マネージャのトレース情報を書き込むためのログ・ファイルのパスと名前
KeepLogs=	1	<p>UBE のログが Print Queue ディレクトリに保存されます。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1. UBE の実行時に作成されたログを保存する • 2. UBE が完了したときに UBE ログを削除する <p>UBE の処理中にエラーが発生した場合は、この設定に関係なくログが保存されます。</p>
TAMTraceLevel=	0	<p>jdebug.log にログ記録された TAM 情報を制御します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0 から 10 を入力すると、値が大きいほど記録される情報量が増えます。 • 0. 情報が出力されません(デフォルト)。
TAMTrace=	0	TAM ファイルのトレース情報を制御します。有効な値は次のとおりです。

		<ul style="list-style-type: none"> 0. TAMトレース情報はデバッグ・ファイルに書き込まれません。 1. TAMトレース情報がデバッグ・ファイルに書き込まれます。
ClientLog=	0	<p>ログ情報をクライアントに送信し、そこでクライアントの jde.log および jdedebug.log ファイルとマージします。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0. クライアントにログ情報を送らない 1. クライアントにログ情報を送る
QKLog=	0	<p>JDE Queue Kernel のトレース情報を制御します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0. QUEUE KERNEL のメッセージ情報をデバッグ・ファイルに書き込まない 1. QUEUE KERNEL のメッセージ情報をデバッグ・ファイルに書き込む
TraceRowSecurityFetch=	FALSE	<p>ロー・レベルのセキュリティのトレーシングを制御します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> FALSE (デフォルト) = トレースを無効にする TRUE = トレースを有効にする
WTSLogs=	FALSE	<p>TSE インストールに関して User Profile ディレクトリにログを作成します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> FALSE (デフォルト) = JobFile および DebugFile によってログ・ファイルのパスを設定する TRUE = c:\WTSRV\Profiles\%Userid%\Windows にログ・ファイルを書き込む
jdelibFatal=	FALSE	<p>メッセージ・ボックスがサポートされるかどうかを確定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> FALSE (デフォルト) = メッセージ・ボックスをサポートしない TRUE = メッセージ・ボックスをサポートする
TAMMultiUserOn=	0	<p>TAM ファイルへのマルチユーザー・アクセスを許可するかどうかを確定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 (デフォルト) -1. 複数ユーザーのアクセスを許可しない 1. 複数ユーザーのアクセスを許可する
TAMErrorMsgBox=	0	<p>TAM エラー・メッセージによってメッセージ・ボックスがオープンするかどうかを制御します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 (デフォルト). メッセージ・ボックスに致命的なエラー・メッセージを書き込まない 1. メッセージ・ボックスに致命的なエラー・メッセージを書き込む

[INSTALL]

このセクションの設定には、ディレクトリ・パスとインストール全般の情報が含まれています。

設定	標準値	目的
B9=	¥JDEdwards OneWorld¥B9¥ddp	ERP 9.0 の基本インストール・ディレクトリへのパス
LocalCodeSet=	WE_ISO88591	ERP 9.0 で使用する文字コード・セットを確定します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">WE_ISO88591 (1252) - 英語JA_SJIS (932) - 日本語TC_BIG5 (950) - 中国語(繁体字)SC_GB (936) - 中国語(簡体字)KO_KSC (949) - 韓国語
StartServicePrefix	JDE B9	単一インストールに対して ERP 9.0 サービスを一意に識別します。単一サーバー上で並列リリースを実行中は、プレフィックスによって ERP 9.0 サービスにタグが設定されます。デフォルト値は JDE です。
DefaultSystem	system	システム・ディレクトリ名。デフォルト値は system です。この値は変更しないでください。
Double_Byte	0	これがダブルバイトのインストールかどうかを示します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0 (デフォルト) ダブルバイト・インストールでない1. ダブルバイト・インストールである
POSTSCRIPT_ONLY	0	PostScript のみを強制的に使用するために、ダブルバイトと併用されます。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0 (デフォルト) 強制しない1. 強制する
	1	現在のプロセス用のコード・ページを取り込むために使用します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">1 (デフォルト) 1252 英語コード・セットを使用する<0. 1252 英語コード・セットを使用する=0. jde.ini ファイルの[INSTALL]ローカル・コード・セットのコード・ページを使用する>0. 既に有効なコード・ページ・セットを使用する

[JDE_CG]

設定	標準値	目的
TARGET=	RELEASE	オブジェクトのコンパイルに使用するビルドのタイプ。有効な値は

次のとおりです。

- RELEASE (デフォルト) リリース・モードでビルドする
- DEBUG デバッグ・モードでビルドする

INCLUDES=	c:\%msdev%\devstudio%\vc\ include	Microsoft Visual C++, ERP 9.0 システム、および ERP 9.0 パス・コードのインクルード(ヘッダー)ファイルへのパス
LIBS=	c:\%msdev%\devstudio%\vc\lib	Microsoft Visual C++, ERP 9.0 システム、および ERP 9.0 パス・コードのライブラリ・ファイルへのパス
MAKEDIR=	c:\%msdev%\devstudio%\vc %bin	Microsoft Visual C++プログラムのディレクトリへのパス
STDLIBDIR=	c:\%msdev%\devstudio%\vc %lib	Microsoft Visual C++ライブラリのディレクトリへのパス
ServerPackage Sleep=	60	サーバー・パッケージ・ビルドの状況チェック間の待機秒数。デフォルトの値は 60 です。

[JDEIPC]

設定	標準値	目的
ipcTrace=	0	<p>jddebug.log に書き込まれるプロセス間通信(IPC)数を制御します。有効な値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0(デフォルト). ログにメッセージを書き込まない • 1. 汎用トレース・メッセージのみログに書き込む • 2. IPC ハンドル状況トレース・メッセージのみログに書き込む • 3. IPC ハンドル状況トレース・メッセージと汎用メッセージの両方をログに書き込む
startIPCKeyValue=	7001	ERP 9.0 の複数インスタンスの実行中に、グローバル共有メモリを分離するために使用される整数オフセット。これらのキーの値は、ERP 9.0 インスタンスごとに、少なくとも maxNumberOfResources の値だけ異ならなければなりません。デフォルトの値は 5000 です。
maxNumberOfResources=	1000	ERP 9.0 インスタンスで使用される IPC リソースの最大数。この値に達すると、それ以上は IPC リソースを作成できなくなります。デフォルトの値は 1000 です。
maxNumberOfSemaphores=	100	ERP 9.0 で使用されるセマフォ・リソースの最大数。この値に達すると、それ以上はセマフォ・リソースを作成できなくなります。Windows NT では、各メッセージ待ち行列をインプリメントするために 2 つのセマフォ・リソースが使用されます。デフォルトの値は 100 です。
maxMsgqMsgBytes=	2048	メッセージ待ち行列に置かれるメッセージの最大バイト数。デフォルト値は 2048'(2KB)です。
maxMsgqEntries=	1024	一度にメッセージ待ち行列に格納できる最大メッセージ数。デフォルトの値は 1024 です。
maxMsgqBytes=	65536	一度にメッセージ待ち行列に格納できる最大バイト数。デフォルト値は 65536(64KB)です。

[JDEMAIL]

設定	標準値	目的
ClientType=	Windows HTML	外部電子メール・メッセージに添付されるアプリケーション・ショートカットに、Windows アプリケーション・ショートカットを含めるか、HTML アプリケーション・ショートカットの URL を含めるかを定義します。デフォルト値は Windows です。
mailServer=	owsmtpjdedwards.com	サーバー・メール・メッセージの送信用にアクセスする SMTP サーバーのドメイン名
RuleN=	HANDLER:DATA	SMTP トランスフォーメーション・エンジン・ルール&レグ・テーブル(F90005)から取り込まれた SMTP 電子メール設定ルール。空または無効な入力、リストの終わりで見なされます。N は 1 以上の正の整数です。

[JDENET]

設定	標準値	目的
serviceNameListen=	6003 jde_server	通信パケットの受信に使用される TCP/IP ポート番号。この値が整数であれば、その値がポート番号として使用されます。この値が文字列であれば、ファイル c:\winnt\system32\drivers\etc\services を介してポート番号とトランスポート・プロトコルに変換されます。デフォルトの値は 6003 です。
serviceNameConnect=	6004 jde_server	通信パケットの送信に使用される TCP/IP ポート番号。この値が整数であれば、その値がポート番号として使用されます。この値が文字列であれば、ファイル c:\winnt\system32\drivers\etc\services を介してポート番号とトランスポート・プロトコルに変換されます。デフォルト値は jde_server です。
maxNetProcesses=	1	実行できる JDENET_N プロセスの最大数を定義します。大量の JDENET メッセージ・フローが予想されるサーバーの場合は、大きい値を指定できます。
maxNetConnections=	100	実行中のすべての jdesnet および jdenet_n プロセス用の最大接続数。デフォルトの値は 100 です。
maxKernelProcesses=	50	実行可能な JDENET_K プロセスの最大数。ここでは、すべての専用サーバーの maxNumberOfProcesses を合計した値より大きい値を指定する必要があります。
maxKernelRanges=	20	専用サーバー・タイプの数
NetHostName=		サーバー上で複数のネットワーク・カードが使用される場合の IP アドレス
netTrace=	1	JDENET のログ・メッセージを有効にします。
ServiceControlRefresh	1	Jdesctrl プログラムによってサービスの状況がリフレッシュされる秒単位の間隔。Jdesctrl を Services アプレットの代わりに使用して、Windows NT エンタープライズ・サーバー上で ERP 9.0 のネットおよび待ち行列サービスを開始、停止、一時停止、および続行できます。デフォルトの値は 1 です。
EnablePredefinedPorts=	0	ERP 9.0 ネットで事前に定義した範囲の TCP/IP ポートを使用できるようにします。これは、ファイアウォールの外部にある ERP 9.0 Java サーバーを許容するために必要です。このポート範囲は、serviceNameListen で指定したポート番号から

等式 $\text{serviceNameListen} + \text{maxNetProcesses} - 1$ で計算されるポートまでです。値 0 (デフォルト) は事前定義のポート範囲を使用しないことを意味します。サーバーをファイアウォール内でセットアップしている場合は、値を 1 に設定してサーバーを再起動してください。

PreConnectHosts=	0	初期化されるエンタープライズ・サーバーの数。初期化により、キー PreConnectHost1”、PreConnectHost2”などにリストされたエンタープライズ・サーバーは、ブートストラップ・テーブルをロードできます。これにより、これらのサーバーにタスク要求が実際に送信されるときの応答時間が向上します。
PreConnectHostN	EntServer1	初期化されるエンタープライズ・サーバーの名前。N は 1 以上の正の整数です。
NetTemporaryDir=	Variable	〈Server Administration Workbench〉(SAW)で、5 MB を超える一時ログ・ファイルを作成、転送、および削除できるようにします。変数には、SAW でこれらのタスクに使用される一時ディレクトリの名称を指定する必要があります。
MaxIPCQueueMsgs	12	内部専用
InternalQueueTimeout	30	内部専用

[LOCK MANAGER]

設定	標準値	目的
Server=	server1	レコード・ロック・サービスを処理 (使用可能に) するサーバーの名前。これはカーネルの一種です。どの ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーも、レコード・ロック・サービスを処理できます。
RequestedService=	TS	ローカルのエンタープライズ・サーバーのプロセスが、Server フィールドで指定された ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーに要求するサービスのタイプ。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> なし (デフォルト) TS タイム・スタンプ用
AvailableService=	NONE	ローカルのエンタープライズ・サーバーが処理 (使用可能に) するサービスのタイプ。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> なし (デフォルト) TS タイム・スタンプ用
LogServices=	0	ロック・マネージャのトレース情報を制御します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> 0 (デフォルト) = [DEBUG]JDETSFile で指定されたファイルにメッセージを書き込まない 1. メッセージを書き込む

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

このセクションの設定には、バッチ待ち行列の開始に関する情報が含まれています。

設定	標準値	目的
QEnv=	P733HPO1	バッチ待ち行列の開始環境
QUser=	JDE	バッチ待ち行列を開始するための ERP 9.0 ユーザーID
QPassword=	JDE	バッチ待ち行列を開始するための ERP 9.0 ユーザー・パスワード
QName=	QBATCH	UBERQueueN、PKGQueueN、または SPCQueueN で指定されていない場合のデフォルト待ち行列名
QueueDelay=	30	バッチ待ち行列が F986110 テーブル内でジョブを検索する秒単位の間隔。デフォルトの値は 5 です。
JDENETTimeout=	60	クライアントからサーバーへの接続試行のタイムアウト値。秒単位で表示されます。サーバーは、JDBNET の使用時、他のサーバーに対する UBE の投入時、他のサーバー上のビジネス関数の呼び出し時、他のサーバー上のロック・マネージャの使用時や、他のサーバーに対するサーバー要求にセキュリティを適用する時には、クライアントとして動作できます。
UBERQueues=	1	UBE 要求の処理に割り当てられるバッチ待ち行列の合計数。サブシステム UBE を起動してサーバー上で実行する場合は、値を 2 に設定します。これにより、サブシステム UBE は単一待ち行列で実行され、その間に通常の UBE を別の待ち行列で実行できます。これが必要になるのは、サブシステム UBE は永続処理モードになり、待ち行列内の他のすべての UBE を消費するためです。
UBERQueueN=	QBATCH	UBE バッチ待ち行列名。N は、1～UBERQueues の値です。
SpecInstallQueues=	1	スペック・ファイルのインストール要求の処理に割り当てられるバッチ待ち行列の合計数。デフォルトの値は 1 です。
SpcQueues=	QBATCH	スペック・インストール待ち行列の名称。N は、1～SpcQueues の値です。
KillImmediate=	1	シャットダウン・プロセス操作。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0. バッチ待ち行列プロセスでシャットダウン・リクエストを受信した後に現在のタスクを終了させる1 (デフォルト) シャットダウン・リクエストを受信した後にすぐに待ち行列プロセスを終了する
OutputDirectory=	z:\¥OneWorld¥b9¥ddp	ジョブ・ファイル (.pdf 形式) が格納されている PrintQueue ディレクトリの親ディレクトリ

[MQSI]

このセクションの設定は、Commerce Integrator に必要なメッセージのヘッダー情報に関するものです。Net Commerce/Commerce Integrator なしでアダプタを使用する場合、create ヘッダーは No となり、OWHostName を除く次の jde.ini 設定はブランクとなります。

設定	標準値	目的
QMGRName=	JDE_QMGR	MQ Series の待ち行列マネージャ
QInboundName=	INBOUND.Q	MQ Series の着信メッセージ待ち行列名。この待ち行列は、着信 MQ Series メッセージの格納に使用されます。
QErrorName=	DEFRES.Q	MQ Series のデフォルトの応答待ち行列名。この待ち行列は、着信メッセージに成功および失敗の宛先が指定されていない場合に使用されます。
QOutboundName=	OUTBOUND.Q	MQ Series の発信待ち行列名。この待ち行列は、発信 MQ Series メッセージの格納に使用されます。
TimeoutWaitInterval=	15	カーネル・プロセスのタイムアウト待機間隔
MaxBufferLength=	10240	MQ Series メッセージのバッファの最大長
CreateHeader=	YES	Commerce Integrator に関する MQ Series メッセージの特殊ヘッダー情報を作成します。
AppGroup=	NNJDE	create ヘッダーと併用されます。
JDEOrderStatusCode=	JDESOOUT	create ヘッダーと併用されます。J.D. Edwards 受注オーダー状況のトランザクション・タイプです。
JDECustomerCode=	JDEAB	create ヘッダーと併用されます。J.D. Edwards の顧客の追加および更新のトランザクション・タイプです。
JDEItemPriceCode=	JDEPRICE	create ヘッダーと併用されます。J.D. Edwards の価格更新のトランザクション・タイプです。
JDEItemQtyCode=	JDEIL	create ヘッダーと併用されます。J.D. Edwards の製品数量更新のトランザクション・タイプ。
NCOOrderStatusCode=	JDE.IC.F4201Z1	create ヘッダーと併用されます。Net Commerce のオーダー状況コードです。
NCCustomerCode=	JDE.IC.F0101Z2	create ヘッダーと併用されます。Net Commerce の顧客の追加および更新コードです。
NCPProductPriceCode=	JDE.IC.F4106NC	create ヘッダーと併用されます。Net Commerce の製品数量更新コードです。
NCPProductQtyCode=	JDE.IC.F41021Z1	create ヘッダーと併用されます。Net Commerce の製品数量更新コードです。

新コードです。

OWHostName= ERP 9.0 ホスト名。発信ネット・メッセージの作成に使用されます。OWHostName では、Outbound Adapter を起動するネット・メッセージが作成されます。これは、ERP 9.0 がインストールされているサーバーの名前です。

[SECURITY]

設定	標準値	目的
SecurityServer=	server1	セキュリティ・サービスを処理するサーバー。ERP 9.0 サービスを実行中の任意のサーバーが、セキュリティ・サーバー・サービスを処理できます。
User=	JDE	セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)へのアクセスに使用するデータベース・アカウント
Password=	JDE	セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)へのアクセスに使用するデータベース・アカウント・パスワード
DefaultEnvironment=	JDEOPT32	セキュリティ・カーネルが実行されるデフォルト環境
DataSource=	System - B9	セキュリティ・テーブル(F98OWSEC)が格納されているデータ・ソース。デフォルト値は System - B9 です。
SecurityMode=	0、1 または 2	ERP 9.0 で標準ログオン、汎用ログオン、またはその両方のうち、どれを受け入れるかを制御します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">0 (デフォルト) 標準ログオンのみを受け入れます。1. 汎用ログオンのみを受け入れます。2. 標準ログオンと汎用ログオンの両方を受け入れます。
AllowedUsers=	ERP 9.0_users, Bowens	汎用ログオンによる ERP 9.0 へのサインオンが許可されているユーザー・アカウントやユーザー・アカウント・グループをカンマで区切ったリスト。このリストにより、ユーザーは ERP 9.0 クライアントのサインオン画面をバイパスできます。
NumServers=	1	接続を検証できるセキュリティ・サービスを実行中のサーバーの合計数。セキュリティ・サーバー要求は、応答があるか、他にリストされているセキュリティ・サーバーがなくなるまで、各セキュリティ・サーバーに順番に送信されます。デフォルトの値は 1 です。
History=	0	サインオン・セキュリティ履歴のログをオンにします。この情報は F9312 テーブルに保管されます。

[SERVER ENVIRONMENT MAP]

設定	標準値	目的
ENV1=	ENV2	ある環境名を別の環境名にマップします。ERP 9.0 エンタープライズ・サーバー上で ENV1 が使用されるたびに、ENV2 で置換されます。複数の環境マッピングを指定できます。

[SVR]

このセクションの設定では、他のプログラムでソース、ヘッダー、スペック、および他の情報を検索できるように、パス名を指定します。

設定	標準値	目的
SpecPath=	spec	TAM ファイルへのパス。変更しないでください。
SourcePath=	source	ビジネス関数のソース・ファイルへのパス。変更しないでください。
ObjectPath=	obj	ビジネス関数のオブジェクト・ファイルへのパス。変更しないでください。
HeaderPath=	include	ビジネス関数のヘッダー・ファイルへのパス。変更しないでください。
HeaderVPath=	includev	サードパーティ・ベンダのヘッダー・ファイルへのパス。変更しないでください。
BinPath=	bin32	システム関数とビジネス関数の実行可能ファイルと DLL へのパス。変更しないでください。
LibPath=	lib32	システム関数とビジネス関数のライブラリ・ファイルへのパス。変更しないでください。
LibVPath=	libv32	サードパーティ・ベンダのライブラリ・ファイルへのパス。変更しないでください。
MakePath=	make	ビジネス関数の make ファイルへのパス。変更しないでください。
WorkPath=	work	ワーク・ファイルへのパス。変更しないでください。
FontPath=	res¥fonts	フォント・ファイルへのパス。この設定は、バッチ・レポートの作成時に使用できます。
SysFontPath=	winnt¥fonts	Windows NT のシステム・フォント・ファイルへのパス。この設定は、バッチ・レポートの作成時に使用できます。

[ACTIVE DIRECTORY]

このセクションの設定は、Active Directory のインストール時に使用されます。

設定	値	目的
SCPToPublish	Variable。通常は、JD_EDWARDS.ERP_B9_SP12 など、サーバー上で実行中の ERP 9.0 のバージョンを使用します。	<p>Active Directory 内の Service Connection Point(SCP)オブジェクトを識別します。ユーザーが ERP 9.0 にサインオンすると、ワークステーションの jde.ini ファイルの[ACTIVE DIRECTORY]セクションのパラメータ値と一致するサービス名を持つ SCP オブジェクトが Active Directory 内で検索されます。ERP 9.0 では、状況が「running(実行中)」になっている SCP オブジェクトが選択され、サーバー名とポート番号が取り込まれます。これによって、ワークステーションからサーバーに接続できるようにします。</p> <p>ERP 9.0 サービスをサーバー間で移動する場合や、サービスのポート番号を変更する場合に、Active Directory 内の SCP オブジェクト名とワークステーションの jde.ini ファイルの[ACTIVE DIRECTORY]セクションのパラメータ値が一致していれば、ワークステーションの jde.ini ファイルを変更する必要はありません。</p>

[INTEROPERABILITY]

設定	標準値	目的
RegisteredEvents=	RTSOOUT	イベント・タイプ名。イベントは ERP 8.0 エンタープライズ・サーバーで実行する ERP 8.0 ビジネス・トランザクションです。リアルタイムでイベントを生成するには、生成する各イベントを登録する必要があります。
FilteredEvents	*ALL	このパラメータ値では、リアルタイムで作成するイベントを定義します。値*ALL に設定すると、すべての登録済みイベントが生成されます。*NONE に設定すると、イベント生成は無効化されます。登録済みイベントのサブセットを入力することもできます。

[SAMPLE_EVENT]

設定	標準値	目的
DS1= DS2= DS3=	D4202150B D4202150C D34A1050C	[INTEROPERABILITY]セクションに登録されたリアルタイム・イベントのデータ構造体を定義します。[SAMPLE_EVENT]をイベント名 (RTSOOUT など) で置き換え、イベントのデータ構造体を定義する値を入力します。

[JDEITDRV]

設定	標準値	目的
DrvCount=	3	イベント生成プログラム (Z ファイルまたはリアルタイム) のプロセス・メッセージに使用するイベント・ドライバの数。
Drv1	Z:zdrv.dll	Z ファイル・イベント・ドライバのディレクトリ・ロケーション
Drv2	RT:rtdrv.dll	リアルタイム・イベント・ドライバのディレクトリ・ロケーション
Drv3=	JDENET:jdetdrv.dll	JDENET ドライバのディレクトリ・ロケーション

[LREngine]

設定	標準値	目的
System=	P:¥Builds¥BDEV_WF¥output	List-Retrieval Engine (XML リポジトリ・ファイルを使用するデータベース) のディレクトリ・ロケーション

WebSphere サーバーの jde.ini 設定の理解

ここでは、WebSphere サードパーティ・ソフトウェアを実行するために必要な ERP 9.0 エンタープライズ・サーバー jde.ini ファイル内の設定について説明します。ここで説明する情報は、プラットフォーム固有の項の情報を補足するものです。情報は、[JDENET]など、セクション別になっています。各セクションはアルファベット順になっていますが、セクション内の設定はソフトウェア内で表示される順番に掲載してあります。

参照

- ❑ storefront の設定については『J.D. Edwards Integrator to Storefronts Installation』ガイド

- ❑ IBM storefront については『J.D. Edwards Storefront (Powered by IBM WebSphere Commerce Suite)』ガイド

注:

Knowledge Garden から Storefront にアクセスするには、[Product] - [JDE5] - [CRM]を選択してください。

[JDENET]

設定	標準値	目的
maxKernelRanges=	13	使用されるカーネル・タイプと範囲の最大数。この数値が次の番号に更新されることを確認してください。

[JDENET_KERNEL_DEF13]

このセクションでは、JDENET 内部の専用サーバー・プロセスを定義しています。

設定	標準値	目的
krnlName=	MQSI Kernel	
beginningMsgTypeRange=	5513	各カーネル・タイプの範囲の開始メッセージ
endingMsgTypeRange=	6001	各カーネル・タイプの範囲の終了メッセージ
dispatchDLLName=	mqsadapt.dll	この設定によって、カーネル・プロセスに使用する.DLL が確定します。
dispatchDLLFunction=	_JDEK_DispatchMQ SeriesProcess@28	カーネル要求メッセージを処理するカーネル関数の名前。
maxNumberOfProcesses=	1	カーネル・タイプごとに、このサーバー上で実行できるカーネル・プロセスの最大数。
numberOfAutoStartProcesses=	1	各カーネル・タイプに対して自動的に開始されるカーネル・プロセスの数。この値が 1 であることを確認してください。

[MQSI]

このセクションの設定は、Commerce Integrator に必要なメッセージのヘッダー情報に関するものです。Net Commerce/Commerce Integrator なしでアダプタを使用する場合、create ヘッダーは No となり、OWHostName を除く次の jde.ini 設定はブランクとなります。

設定	標準値	目的
QMGRName=	JDE_QMGR	MQ Series の待ち行列マネージャ。

QInboundName=	INBOUND.Q	MQ Series の着信メッセージ待ち行列名。この待ち行列は、着信 MQ Series メッセージの保管に使用されます。
QErrorName=	DEFRES.Q	MQ Series のデフォルトの応答待ち行列名。この待ち行列は、着信メッセージに成功および失敗の宛先が指定されていない場合に使用されます。
QOutboundName=	OUTBOUND.Q	MQ Series の発信待ち行列名。この待ち行列は、発信 MQ Series メッセージの保管に使用されます。
TimeoutWaitInterval=	15	カーネル・プロセスのタイムアウト待機間隔
MaxBufferLength=	10240	MQ Series メッセージのバッファの最大長
CreateHeader=	YES	Commerce Integrator に関する MQ Series メッセージの特殊ヘッダー情報を作成します。
AppGroup=	NNJDE	create ヘッダーと併用されます。
JDEOrderStatusCode=	JDESOOUT	create ヘッダーと併用されます。J.D. Edwards 受注オーダー状況のトランザクション・タイプです。
JDECustomerCode=	JDEAB	create ヘッダーと併用されます。J.D. Edwards の顧客の追加および更新のトランザクション・タイプです。
JDEItemPriceCode=	JDEPRICE	create ヘッダーと併用されます。J.D. Edwards の価格更新のトランザクション・タイプです。
JDEItemQtyCode=	JDEIL	create ヘッダーと併用されます。J.D. Edwards の製品数量更新のトランザクション・タイプです。
NCOOrderStatusCode=	JDE.IC.F4201Z1	create ヘッダーと併用されます。Net Commerce のオーダー状況コードです。
NCCustomerCode=	JDE.IC.F0101Z2	create ヘッダーと併用されます。Net Commerce 顧客の追加および更新コードです。
NCPProductPriceCode=	JDE.IC.F4106NC	create ヘッダーと併用されます。Net Commerce の製品数量更新コードです。
NCPProductQtyCode=	JDE.IC.F41021Z1	create ヘッダーと併用されます。Net Commerce の製品数量更新コードです。
OWHostName=		ERP 9.0 ホスト名。発信ネット・メッセージの作成に使用されます。OWHostName では、Outbound Adapter を起動するネット・メッセージが作成されます。これは、ERP 9.0 がインストールされているサーバーの名前です。

Web サーバーの jas.ini 設定

jas.ini ファイルでは、スタートアップのオブジェクト構成マネージャとその他の Web サーバー用 Web サーバー固有のプロパティを定義して、エンタープライズ環境と通信できるようにします。インストールの重要な鍵となります。重要な設定が間違っていたりブランクの場合は、Web サーバーは実行しません。これらの重要な設定は次の各セクションの表にリストされています。

jas.ini ファイルは、Java サーバー・インストーラを使用して Web サーバー・インストール中に自動的に更新されます。インストール後にテキスト・エディタを使って jas.ini 設定を変更できます。jas.ini ファイルは機能的には J.D. Edwards ERP エンタープライズ・サーバーの jde.ini ファイルと似ています。

注:

ERP 9.0 から、jas.ini ファイルの設定の多くは JDBjini という新しいファイルに移動されました。新しいファイルについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「Web サーバーの jdbjini 設定」を参照してください。

jas.ini ファイルを構成するには、サプライ・サーバーで次の内容を実行します。

- インストールに固有のサーバー名を[SECURITY]および[SERVER]セクションでパラメータに追加する。
- パス名に固有なさまざまな設定についてパス名を確認する。これらのパスには変更を加えないことをお勧めします。
- TCP/IP 接続のポート番号を確認する。

注:

.ini ファイルにコメント行を追加して次の情報を含めることをお勧めします。

- 現在の JAS パッケージ・バージョン (CD のラベル記述に従う)
 - ファイルを手作業で更新した日付
 - 更新を行ったユーザー名
-

次の表は、ERP 9.0 Java サーバーで使用される jas.ini 設定を示しています。

設定	説明
[DB SYSTEM SETTINGS]	この任意のセクションは標準の jas.ini の一部としては出荷されません。 リダイレクタ機能を使用して複数 JAS インスタンスのロード・バランシングを有効にする設定を含みます。
[SECURITY]	ERP 9.0 のセキュリティ情報が含まれています。
[OWWEB]	ERP 9.0 Web サーバー固有の設定。環境に合わせて修正してください。
[PORTAL CONFIGURATION]	J.D. Edwards Portal のオプション設定が含まれています。上記の場合を除き、このセクションに示されている設定はすべてデフォルト設定であり、jas.ini の一部として組み込む必要はありません。つまり、ias.ini で値を指定しなければ、ポータルではこのセクションに示されているデフォルト設定が自動

的に使用されます。

ただし、jas.ini から読み込める値を修正するサイトでは、そのカスタム・インストールに合わせて適切な値を入力および修正する必要があります。

注:

インストールを将来行った場合、カスタム変更は維持されないことがあるため、更新する前に jas.ini のコピーを保存しておいてください。

[CACHE]	HTTP セッションの設定
[DB CONNECTION POOL]	ERP 9 では、このセクションは JDBj.ini ファイルに移動され名前が変更されました。新しいセクションについては『システム・アドミニストレーション』ガイドに出てくる jas.ini ファイルの[JDBj-CONNECTION POOL]セクションを参照してください。
[JDBC URL]	ERP 9 では、このセクションは JDBj.ini ファイルに移動され名前が変更されました。新しいセクションについては『システム・アドミニストレーション』ガイドに出てくる jas.ini ファイルの[JDBj-SPEC DATA SOURCE]セクションを参照してください。
[JDBC DRIVERS]	ERP 9 では、このセクションは JDBj.ini ファイルに移動され名前が変更されました。新しいセクションについては『システム・アドミニストレーション』ガイドに出てくる jas.ini ファイルの[JDBj-JDBC DRIVERS]セクションを参照してください。
[SERVER COMPONENTS]	ERP 9.0 Java サーバー・パッケージをロードします。このセクションは変更しないでください。
[JNET]	ERP 9.0 Java サーバーが ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーと通信するための値を指定します。
[SERVER]	ERP 9.0 Java サーバーで ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーからデータ・ディレクトリのエラー記述を取り込むための値を指定します。
[LOGIN]	ログインおよびローカル・ディレクタの設定を含みます。
[LOGS]	デバッグ・ログをオンにして、ログ・ファイルのロケーションを指定します。
[TRANSACTIONS]	JAS 内でトランザクション処理をカスタマイズするための構成設定を含みます。
[JAS Instance]	<p>この任意のセクションは標準の jas.ini の一部としては出荷されません。</p> <p>リダイレクタ機能を使用して複数 JAS インスタンスを定義するための設定を含みます。複数インスタンスを定義してパフォーマンスを向上させたり、大規模ユーザー・ベースのインストールを拡張させたりできます。複数 JAS インスタンス間のユーザー割当てに関するデフォルト・メカニズムはラウンド・ロビン方式または順次選択が適用されます。</p>
[JAS Weight]	<p>この任意のセクションは標準の jas.ini の一部としては出荷されません。</p> <p>リダイレクタ機能を使用して複数 JAS インスタンスのロード・バランシングを有効にする設定を含みます。</p>
[Redirector]	<p>この任意のセクションは標準の jas.ini の一部としては出荷されません。</p> <p>使用可能な WebServer がない場合、リダイレクタがリダイレクトするロケーションを指定します。通常、説明を表示する HTML ページです。</p>

[ERPINTERACTIVITY]

このセクションでは、対話型 HTML 設定を有効にして設定します。

[WEB GUI]

Web GUI インターフェイスをカスタマイズするのに使用するセクション

[OWWEB]

パラメータ	推奨設定	説明
PathCodes=	('JD9','DV9','PY9','PD9')	ERP 9.0 に有効なパス・コードを指定する必要があります。 デフォルト環境はパス・コードで示されます。この値がブランクの場合、使用可能なすべての環境が特定のユーザーまたはグループに使用可能になります。各パス・コードは、一重引用符で囲んでカンマで区切ります。
MO QUEUE=	x:¥JDEdwardsOneWorld¥B9 ¥ internet¥jdedwww¥ moqueue (Windows マシン)	Web サーバーでメディア・オブジェクト・ファイルのキャッシュに使用されるパスを指定します。これらは、Web ブラウザで使用される実際のファイルです。このパスは Web ブラウザの仮想パス '/jde/moqueue/' に翻訳されます。 Web サーバー・プロセスには、このパスの読取権限と作成権限が必要です。
FtpPort=	21	FTP に使用されるデフォルト・ポートを指定します。 (Unix および iSeries のみ)
FtpUsr=	anonymous	メディア・オブジェクト・ファイル・サーバーへの FTP アクセスに使用するユーザー ID を指定します。 (Unix および iSeries のみ)
FtpPwd=	anonymous	メディア・オブジェクト・ファイル・サーバーへの FTP アクセスに使用するパスワードを指定します。 (Unix および iSeries のみ)
F0005Prefix=	DR	F0005 テーブルのカラム・プレフィックス
F0004Prefix=	DT	F0004 テーブルのカラム・プレフィックス
MaxUser=	100	ERP 9.0 (インターネット) ユーザーの最大数
UseProxyServer=	FALSE	ERP 9.0 Java サーバーでプロキシ・サーバー機能を使用するかどうかを定義します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> FALSE = この値に設定すると、ERP 9.0 JAS サーバーから JDENET メッセージが直接送信され、プロキシ・サーバー機能は使用されません。 TRUE = この値に設定すると、JDENET メッセージは ERP 9.0 クライアントの JOWProxy プロセスを介して送信されます。この値は、ERP 9.0 には無効です。
UseMOWinNTShare=	TRUE (Windows) FALSE (iSeries と UNIX)	Web サーバーでロケーションから Web サーバーのキャッシュ・ロケーションへとメディア・オブジェクト・ファイルを取り込むために使用される共有方法を指定します。有効な値は次

パラメータ	推奨設定	説明
		のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> TRUE = Windows UNC 共有が使用される FALSE = FTP サーバーが使用される
PrintImmediate=	FALSE	FALSE に設定すると、エンタープライズ・サーバーでは PDF ファイルのみが生成されます。TRUE に設定すると、エンタープライズ・サーバーでは PDF ファイルが生成され、PostScript に変換されます。UBE ジョブの PDL またはライン出力です。
KeepUBE=	TRUE	FALSE に設定すると、UBE ジョブの完了時に JDE.LOG および JDEDEBUG.LOG ファイルが削除されます。TRUE に設定すると、UBE ジョブの完了時に JDE.LOG および JDEDEBUG.LOG ファイルが保存されます。
UBEQueue=	QB9	UBE ジョブが投入されるバッチ待ち行列
VirtualClientTimeOut	30000	仮想クライアントがタイムアウトになるまでのミリ秒数
SystemDateFormat=	MDE	システム日付フォーマットを指定します。
SystemDateSeparator=	/	システム日付区切り文字を指定します。
HelpPath=	/jde/owhelp/	ヘルプ・ファイルのディレクトリ・パスを指定します。この設定の構文は次のとおりです。 http://[machine]/[path]/ HelpPath を指定しないか、デフォルト設定の /jde/owhelp/ を使用すると、ERP 9.0 Java サーバーでは JAS サーバーの現在のインスタンスに基づいてヘルプ・パスが作成されます。 たとえば、ERP 9.0 Java サーバーの URL が次の場合、 http://machinename:82/ ERP 9.0 Java サーバーではヘルプ・パスの URL が次のように想定されます。 http://machinename:82/jde/owhelp
OWJRNL=	OWJRNL	この設定は、AS/400 プラットフォーム上で実行中の ERP 9.0 Java サーバーにのみ適用されます。AS/400 の DB2 データベース・レコードを更新するために手動コミットを有効にしている場合は、この設定を使用して、ERP 9.0 Java サーバーで該当する AS/400 テーブルの JOURNAL を有効にすることができます。 この設定には、STRJOURNAL ストアド・プロシージャ用の AS/400 ライブラリ名を指定する必要があります。
AutoPilotIDs=	FALSE	この設定では、Java サーバーで AutoPilot ツールを使用して HTML クライアント・アクションのスクリプトを作成する場合に役立つ ID が生成されるかどうかを制御します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> FALSE = Java サーバーで AutoPilot ID が生成され

パラメータ	推奨設定	説明
		<p>ない</p> <ul style="list-style-type: none"> TRUE = Java サーバーで AutoPilot ID が生成される
AnonAccess=	TRUE	匿名ユーザー・アクセスを有効にします。
DefaultEnvironment=	サイト依存の変数	デフォルトのログイン環境。基本認証が使用されます。
InitialLanguageCode=	EN	初期ユーザー言語の ISO 言語コード
LogoutProcessTimeout =	90	ユーザーがアクティブ化したビジネス関数が、ログアウト後も引き続き実行される秒数

[CACHE]

各キーで指定する値はミリ秒単位です。たとえば、60000 ミリ秒は 1 分です。

注:

- ERP 9.0 以前にこのセクションにあった設定の多くは、前の製品では削除されています。『システム・アドミニストレーション』ガイドに出てくる ini ファイルの[JDBj-CONNECTIONPOOL] および[JDBj-RUNTIMEPROPERTIES]セクションを参照してください。

パラメータ	推奨設定	説明
UserSession=	2400000	<p>非アクティブなユーザー・セッションのキャッシュがクリーンアップされるまでのミリ秒数。</p> <p>注:</p> <p>この値は、Java サーバーが WebSphere より先にタイムアウトにならないように、WebSphere の[Invalidate Time]設定より大きい値に設定する必要があります。WebSphere で無効なタイムアウト設定を確認するには、WebSphere Administrative Console を開いてノードを Application Server(AS_JDEdwards_1)に展開し、Services をクリックして[Session Manager Services]を選択し、[Advance]タブをクリックしてください。Invalidation Timeout が有効で、適切な値(分)に設定されているかどうか確認してください。</p> <p>デフォルト値: 12000000</p> <p>UserSession の値は常に、WebSphere の HTTP セッション・タイムアウト(Invalidate Timeout)設定より大きな値を指定してください。</p> <p>変更の効果: HTTP Session timeout の値が最大に達したら、キャッシュから UserSession を削除するよう JAS が通知を受け取ります。UserSession の値を変更しても、WebSphere でこの値が HTTP session timeout 値より大きければ、変更に影響ありません。</p>
CacheCheck=	300000	<p>キャッシュに保管されるすべてのオブジェクトの状況を確認する時間(ミリ秒)</p> <p>デフォルト値: 300000</p> <p>注:</p> <p>デフォルト値の使用をお勧めします。</p>

パラメータ	推奨設定	説明
		<p>最小値: 60000. 60000 より小さい値が使用されている場合、必要以上に頻繁にキャッシュに保管されている値 (JAS サーバーに負担をかける) が CacheManager により検討されます。</p> <p>最大値: 600000. 600000 より大きい値を使用しないでください。CacheManager がキャッシュ化されたオブジェクトの状況を検討できなくなり、無効なオブジェクトの期限が切れた後も残ってしまいます。</p> <p>関係: この値は、JAS.INI ファイルにあるその他のパラメータには依存しません。</p> <p>変更の効果: この値を小さくすると、CacheManager により頻繁にキャッシュに保管される値 (JAS サーバーの負担となる) が検討されます。この値を極端に大きくすると、CacheManager による検討が行われず、無効なオブジェクトの期限が切れた後もキャッシュに残ります。</p>

[SERVER COMPONENTS]

jas.ini の[SERVER COMPONENTS]セクションは、ERP 9.0 Java サーバーで環境変数の設定に使用されます。このセクションは、J.D. Edwards から特に指示されない限り修正しないでください。

このセクションでは次の設定を確認してください。

[SERVER COMPONENTS]

```
com.jdedwards.jas.UserManager
com.jdedwards.jas.JDBCProxy
com.jdedwards.jas.JDEORB
com.jdedwards.jas.DDValidaton
com.jdedwards.jas.security.SecruityBroker
com.jdedwards.jas.UDCJDBC
com.jdedwards.jas.JDEUDCtext
com.jdedwards.jas.JDEUpdates
com.jdedwards.jas.JDEQueries
com.jdedwards.jas.JDEOWDirect
com.jdedwards.jas.MenuServer
com.jdedwards.jas.ServerQuery
com.jdedwards.jas.JDESignon
com.jdedwards.runtime.virtual.VCServlet
```

注:

最後のエントリである、com.jdedwards.runtime.virtual.VCServlet は MAF(Multiple Application Framework)に必須です。この設定が欠けている場合は、ERP アプリケーションが MAF の元で起動しません。

[JDENET]

このセクションを使用するのは、ビジネス関数の実行と UBE の起動に JOWProxy サービスを使用しない場合のみです。

パラメータ	推奨設定	説明
serviceNameConnect=		エンタープライズ・サーバーがリスニングする TCP ポート。環境に合わせて修正してください。
enterpriseServerTimeout=	90000	タイムアウト条件が発生するまでのミリ秒数
MaxPoolSize=	50	エンタープライズ・サーバーへの最大接続数。この設定は非表示です。
TempFileDir=	c:\b7¥internet(Windows) /tmp (iSeries と UNIX)	jdenet 用の一時ディレクトリ。システム上の有効なディレクトリを入力する必要があります。

[SERVER]

このセクションを使用するのは、ビジネス関数の実行と UBE の起動に JOWProxy サービスを使用しない場合のみです。

パラメータ	推奨設定	説明
GlossaryTextServer=	machinename:port	ERP 9.0 JAS サーバーで環境に合わせて修正できるように、ERP 9.0 が用語解説テキスト情報を提供する目的でリスニングするエンタープライズ・サーバーとポート番号を指定します。
codePage=	1252	用語解説テキスト情報の表示に使用するコード・ページ

[LOGS]

このセクションでは、ERP 8.0 Java サーバーに関連する各種ロギング機能のシステム依存値を設定します。

パラメータ	推奨設定	説明
Debug=	FALSE	TRUE = デバッグ・ロギングが有効 FALSE = デバッグ・ロギングが無効
Log=	サイト依存の変数	jas.log ファイルの位置と名前。パスには、システム上に存在するディレクトリを指定する必要があります。
Debuglog=	サイト依存の変数	jasdebug.log ファイルのロケーションと名前。パスには、システム上に存在するディレクトリを指定する必要があります。
JdbcTrace=	FALSE	TRUE = JDBC ステートメントのトレース・ログが、標準出力ログ・ファイルに書き込まれます。

パラメータ	推奨設定	説明
		FALSE = トレース・ログは書き込まれません。
stderr=	サイト依存の変数	<p>入力エラー用の WebSphere ログ・ディレクトリを指定します。</p> <p>stderr キーと stdout キーは、WebSphere アプリケーション・サーバーの定義時に stderr および stdout フィールドで指定したのと同じディレクトリを指す必要があります。通常 B7334 の下にあります。デフォルト・パスは次のとおりです。</p> <p>iSeries の場合 : /PeopleSoft/B7334/stderr.log</p> <p>Windows の場合 : c:\WebSphere\AppServer\logs\stderr.log</p> <p>UNIX の場合 : /u01/PeopleSoft/B7334/stderr.log</p>
stdout=	サイト依存の変数	<p>出力エラー用の WebSphere ログ・ディレクトリを指定します。stderr キーと stdout キーは、WebSphere アプリケーション・サーバーの定義時に stderr および stdout フィールドで指定したのと同じディレクトリを指す必要があります。通常 B7334 の下にあります。デフォルト・パスは次のとおりです。</p> <p>iSeries の場合 : /PeopleSoft/B7334/stdout.log</p> <p>Windows の場合 : c:\WebSphere\AppServer\logs\stdout.log</p> <p>UNIX の場合 : /u01/PeopleSoft/B7334/stdout.log</p>

[SECURITY]

[SECURITY]セクションでは次の設定を確認してください。これらの設定は、JAS セキュリティ・サーバーに固有のものです。

パラメータ	推奨設定	説明
DefaultEnvironment=	JPD9	デフォルトの ERP 9.0 環境を指定します。
NumServers=	1	<p>この ERP 9.0 Java サーバーにサインオンするユーザーに使用可能として定義する、ERP 9.0 セキュリティ・サーバーの合計数を指定します。</p> <p>このパラメータを指定しないか、ブランクにした場合、デフォルト値は 1 で、サインオンは jas.ini の[SECURITY]セクションの SecurityServer=N パラメータで定義されているプライマリ・セキュリティ・サーバーによって処理されます。</p>
SecurityServer=	サイト依存の変数	ERP 9.0 エンタープライズ・サーバーのインストール用に定義したセキュリティ・サーバーの名称を指定します。
SecurityServer/N=	サイト依存の変数	<p>セカンダリ・セキュリティ・サーバー名を指定します。ユーザーがプライマリ・サーバーにサインオンできない場合に、有効なセカンダリ・サーバーへのフェールオーバーにサインオンする場合は、複数のセカンダリ・サーバーを定義できます。</p> <p>N に有効な値は、1 から n の数値です。</p> <p>各文字は次の意味を表します。</p> <p>最初のセカンダリ・セキュリティ・サーバーを定義します。</p>

パラメータ	推奨設定	説明
		第 2 のセカンダリ・セキュリティ・サーバーを定義します。 n 番目にアクセスするセキュリティ・サーバーを定義します。
UserLagonCookie=	FALSE	ユーザー・サインオン情報が HTML クライアント・マシン上の暗号化 Cookie に保存されるかどうかを定義します。この情報には、ユーザー名、パスワード、および環境が含まれます。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> TRUE = ユーザー情報は、ログイン画面に自動入力される暗号化 Cookie に保存されます。 DIRECT = ユーザーは Cookie のログイン情報にアクセスし、ログイン画面をバイパスできます。 FALSE = ユーザー情報は暗号化 Cookie に保存されません。JAS リダイレクタの使用時には、この設定を使用する必要があります。
CookieLifeTime unit is	“day”	CookieLifeTime=パラメータで使用する時間の単位を指定します。
CookieLifeTime=	7	Cookie が失効するまでの期間を指定します。この値の単位には、CookieLifeTime unit is パラメータの値が使用されます。

[PORTALCONFIGURATION]

このセクションには、ERP 9.0 Portal 用のオプション設定が含まれています。

Cisco LocalDirector などのロード・バランサを使用している場合は、localhost 設定を指定する必要があります。

Portal Component Importer を使用している場合は、backup, jde, および servlet 設定を指定する必要があります。

上記の場合を除き、このセクションに示されている設定はすべてデフォルト設定であり、jas.ini の一部として組み込む必要はありません。つまり、jas.ini で値を指定しなければ、ポータルではこのセクションに示されているデフォルト設定が自動的に使用されます。

ただし、jas.ini から読み込める値を修正するサイトでは、そのカスタム・インストールに合わせて適切な値を入力および修正する必要があります。

注:

将来インストールを行った場合、カスタム変更は維持されないことがあるため、更新する前に jas.ini のコピーを保存しておいてください。

パラメータ	推奨設定	説明
admin (SP 13.1 以上の場合)	サイト依存の変数、デフォルト値なし	ユーザーID を 文字で区切ったリストを指定します。これらのユーザーは、リレーションシップに関係なくすべてのコンポーネントとワークスペースを管理できます。
backup	Windows の場合 : x:\temp\%backup iSeries と UNIX の場合 :	Component Importer によって上書きされるファイルの保存場所。これにより、上書きされたファイルのバックアップが提供されます。

パラメータ	推奨設定	説明
	/backup	
cache_workspace_purge	3600000	<p>ワークスペースが削除される前にアクセスされないままキャッシュに残っているミリ秒数。0(ゼロ)に設定すると、ワークスペースはキャッシュからパージされません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_workspace_expire	900000	<p>期限付きコンポーネントについて、ワークスペースが削除されるまでの、最後にロードされたタイムスタンプに加算されるミリ秒数。コンポーネントを期限付きにするには、<code>public long getLastLoadedTimestamp();</code>を実装します。ユーザーがアクセスしない限り、ワークスペースは期限切れになりません。0(ゼロ)に設定すると、ワークスペースはキャッシュ内で期限切れになりません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_workspace_timeout	300000	<p>項目がパージ対象か期限切れかをキャッシュ内でチェックするまでシステムが待機するミリ秒数。この値が小さいほど、メモリ使用効率は向上しますが、キャッシュが低速になります。0(ゼロ)に設定すると、ワークスペースはキャッシュから除去されず、期限も切れません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_workspace_refresh	0	<p>すべてのワークスペースがキャッシュから削除されるまでのミリ秒数。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_component_purge	3600000	<p>コンポーネントが削除される前にアクセスされないままキャッシュに残っているミリ秒数。0(ゼロ)に設定すると、コンポーネントはキャッシュから除去されません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_component_expire	900000	<p>期限付きコンポーネントについて、コンポーネントが削除されるまでの、最後にロードされたタイムスタンプに加算されるミリ秒数。コンポーネントを期限付きにするには、<code>public long</code></p>

パラメータ	推奨設定	説明
		<p>getLastLoadedTimestamp();を実装します。ユーザーがアクセスしない限り、コンポーネントの期限は切れません。0(ゼロ)に設定すると、コンポーネントはキャッシュ内で期限切れになりません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_component_timeout	300000	<p>項目がページ対象か期限切れかをキャッシュ内でチェックするまでシステムが待機するミリ秒数。この値が小さいほど、メモリ使用効率は向上しますが、キャッシュが低速になります。0(ゼロ)に設定すると、コンポーネントはキャッシュから除去されず、期限も切れません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_component_refresh	0	<p>すべてのコンポーネントがキャッシュから削除されるまでのミリ秒数。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_itrust_purge	60000	<p>継承によるトラスト・セッションが削除される前にアクセスされないままキャッシュに残っているミリ秒数。0(ゼロ)に設定すると、継承によるトラスト・セッションはキャッシュから除去されず、期限切れにもなりません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスとセキュリティが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_itrust_expire	0	<p>期限付きコンポーネントについて、継承によるトラスト・セッションが削除されるまでの、最後にロードされたタイムスタンプに加算されるミリ秒数。コンポーネントを期限付きにするには、 public long getLastLoadedTimestamp();を実装します。ユーザーがアクセスしない限り、継承によるトラスト・セッションは期限切れになりません。</p> <p>このセクションは、特に指示されない限り修正しないでください。</p>
cache_itrust_timeout=	30000	<p>項目が除去対象か期限切れかをキャッシュ内でチェックするまでシステムが待機するミリ秒数。この値が小さいほど、メモリ使用効率は向上しますが、キャッシュが低速になります。0(ゼロ)に設定すると、継承によるトラスト・セッションはキャッシュからページされず、期限切れにも</p>

パラメータ	推奨設定	説明
		なりません。
cache_itrust_refresh	0	すべての継承によるトラスト・セッションがキャッシュから削除されるまでのミリ秒数。
cache_entbutton_purge	3600000	<p>エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンが削除される前にアクセスされないままキャッシュに残っているミリ秒数。0(ゼロ)に設定すると、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンはキャッシュからパージされません。</p> <p>この値を変更すると、ポータルのパフォーマンスが大幅に変化する可能性があります。値を変更する場合は注意してください。</p>
cache_entbutton_expire	0	<p>期限付きコンポーネントについて、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンが削除されるまでの、最後にロードされたタイムスタンプに加算されるミリ秒数。コンポーネントを期限付きにするには、<code>public long getLastLoadedTimestamp();</code>を実装します。0(ゼロ)に設定すると、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンはキャッシュ内で期限切れになりません。</p>
cache_entbutton_timeout	900000	項目がパージ対象か期限切れかをキャッシュ内でチェックするまでシステムが待機するミリ秒数。この値が小さいほど、メモリ使用効率は向上しますが、キャッシュが低速になります。0(ゼロ)に設定すると、エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンはキャッシュ内で期限切れにならず、除去もされません。
cache_entbutton_refresh	0	エンタープライズ・ナビゲーション・バーのボタンがすべてキャッシュから削除されるまでのミリ秒数。
pagegreeting	Welcome to your Portal	新規ワークスペースを追加するときのデフォルト・ページに表示される挨拶メッセージ。この設定のデフォルト値はブランクです。
localhost	サイト依存の変数	<p>Cisco LocalDirector ルーターを使用している場合は、この設定を組み込む必要があります。Web サーバーのポートが 80 以外の場合は、ポートを指定する必要があります。構文は次のとおりです。ip_address:port, ip_address:port</p> <p>は、ローカルの ERP 9.0 Java サーバー・マシンです。(Cisco LocalDirector マシン以外)ポータル・コードでマシン要求の出所を判別し、それに従って応答をルーティングできるようにするには、この設定が必須です。</p> <p>例:</p> <p>10.0.110.79:85</p>

パラメータ	推奨設定	説明
styleurl	/jde/owportal/portal.css	ポータル・スタイルシートの URI。 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
hlpimg	/jde/owportal/images/ help2.gif	コンポーネント・ツールバーのヘルプ・イメージ名。 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
perimg	/jde/owportal/images/ edit2.gif	デフォルトのパーソナル・アイコン・ファイル・パス名。次のような例があります。 /jde/owportal/images/ edit2.gif 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
maximg	/jde/owportal/images/ maximize2.gif	デフォルトの拡張アイコン・ファイル・パス名。次のような例があります。/jde/owportal/images/ edit2.gif 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
minimg	/jde/owportal/images/ minimize2.gif	デフォルトのコントラクト・アイコン・ファイル・パス名。次のような例があります。 /jde/images/minimize2.gif 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
resimg	/jde/owportal/images/ restore2.gif.	デフォルトの回復アイコン・ファイル・パス名。次のような例があります。 /jde/images/restore2.gif. 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
retimg	/jde/owportal/images/ return.gif.	デフォルトの戻りアイコン・ファイル・パス名。次のような例があります。/jde/images/return.gif. 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
servlet	x:¥Program Files¥JDEdwards¥JAS¥EA_JAS_80.ear¥webclient.war¥classes (Windows) /JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war/classes (UNIX および iSeries)	ポータル・サーブレットが常駐するディレクトリ。Component Importer/Exporter は、このディレクトリでサーブレットの検索と書き込みを行います。JAS システム管理者はこのディレクトリを使用します。JDE の Web アプリケーションのクラス・パスに含まれるように作成および構成してください。
ShowCurrentEnvironmentRole	FALSE	環境表示。TRUE に設定すると、ワークスペース・ナビゲーション・バーに現在の環境が表示されます。

パラメータ	推奨設定	説明
ShowSignin	TRUE	ユーザーが匿名でログインした時に、ワークスペース・ナビゲーション・バーに標準ログインのハイパーリンクを表示します。
corplogourl	/jde/owportal/images/jdelogo.gif	デフォルトの会社ロゴの URL。このイメージは、現行のワークスペースでイメージが指定されていない場合に使用されます。 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
corplogolinkurl		デフォルトの会社ロゴのハイパーリンクの URL。このリンクは、現在のワークスペースでリンクが指定されていない場合に使用されます。 この設定にはデフォルト値がありません。 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
DataMigrationHasOccurred	これはシステム設定です。この設定の修正や jas.ini ファイルへの追加は行わないでください。	B9 のプリスティン (JDE オリジナル) コンポーネントとワークスペースのデータが更新されている場合は TRUE です。
DefaultWorkspace		他のワークスペースが指定されていない場合や、DefaultWorkspaceOnly が TRUE に設定されている場合に表示されるワークスペース。このパラメータの設定には大文字を使用します。 この設定にはデフォルト値がありません。
DefaultWorkspaceOnly	FALSE	デフォルトのワークスペースへのアクセスのみを許可します。
edting	/jde/owportal/images/edit2.gif	デフォルトの編集アイコンの URL。編集アイコンは、ユーザーがオブジェクトを変更するためのボタンに使用されます。 相対 URL と完全修飾 URL の両方が有効です。
jde	x:\Program Files\JDEdwards\JAS\EA_JAS_80.ear\webclient.war (Windows) /JDEdwards/JAS/EA_JAS_80.ear/webclient.war (UNIX および iSeries)	JAS インストール時に作成される jdewww ディレクトリ。Component Importer/Exporter は、このディレクトリで.html、.gif、.jpg ファイルなどの HTML リソースの検索と書き込みを行います。
NumberOfIcons	34	エンタープライズ・ナビゲーション・バーのアイコンの一時変更数
colorscheme1	Default #FFFFFF #00009C #0063CE #080029 #CECECE #FFFFFF #636363 #FFFFFF background.jpg	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名前、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシー

パラメータ	推奨設定	説明
	/jde/owportal/owportal.css	トの URL からなっています。
colorscheme2	Springtime #FFFFFF #218C7B #84BDB5 #006B63 #CECECE #FFFFFF #FF6B29 #FFFFFF springtimebkgd.gif /jde/owportal/portal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名前、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートの URL からなっています。
colorscheme3	Bluedot #FFFFFF #4A5A9C #849CC6 #001873 #CECECE #FFFFFF #737BB5 #FFFFFF bluedotbkgd.gif /jde/owportal/portal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名前、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートの URL からなっています。
colorscheme4	Techno #FFFFFF #006363 #739C9C #004242 #CECECE #FFFFFF #B5C6C6 #FFFFFF technobkgd.gif /jde/owportal/portal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名前、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートの URL からなっています。
colorscheme5	Cityscape #FFFFFF #FF9C00 #FFC66B #000063 #CECECE #FFFFFF #636363 #FFFFFF cityscapebkgd.gif /jde/owportal/portal.css	カラー・コードを示す区切り付き文字列。文字列は、名前、背景色、ツールバーの色、ツールバーのツールの色、固定領域の色、枠の色、テキストの色、メニューの色、メッセージの色、一番手前の背景イメージの色、およびスタイルシートの URL からなっています。

参照

- ❑ 最新の jas.ini および jdbj.ini ファイル設定 (各サービス・パックで変更されます) については、Knowledge Garden の Update Center で『J.D. Edwards Web サーバー・インストール・ガイド』
- ❑ インタオペラビリティの設定については『インタオペラビリティ・ガイド』の「インタオペラビリティの概要」
- ❑ J.D. Edwards ERP システムでの XPIe 設定については『Enterprise XPI Foundation Installation and Configuration』ガイド
- ❑ ワークフローの設定については『エンタープライズ・ワークフロー管理』の「ワークフロー・プロセスの作成」およびその他の関連トピック

[JAS PREFERENCE]

設定	標準値
JasServer=	ownts1
Port=	80
Servlet=	/jde/servlet/html.login

Web サーバーの jdbj.ini 設定

jdbj.ini ファイルには、JDBj の設定情報が含まれています。JDBj によって、Web サーバーから ERP データベースにアクセスできるようになります。このファイルのパラメータは、J.D. Edwards ERP のデータへのアクセスにのみ使用され、スタンドアロンのデータベース・アクセスでは無視されます。

jdbj.ini ファイルの重要なパラメータは、Java サーバー・インストーラを使用して Web サーバーのインストール中に自動的に更新されます。これらの設定はインストール後にテキスト・エディタを使って変更できます。jdbj.ini ファイルは機能的には J.D. Edwards ERP エンタープライズ・サーバーの jde.ini ファイルと似ています。

ヒント:

.ini ファイルにコメント行を追加して次の情報を含めることをお勧めします。

- 現在の JAS パッケージ・バージョン (CD のラベル記述に従う)
- ファイルを手作業で更新した日付
- 更新を行ったユーザー名

jdbj.ini ファイルのセクションは次のカテゴリに分けられます。

- J.D. Edwards ERP データに固有なセクション
- 汎用セクション

J.D. Edwards ERP データに固有なセクション

次の jdbj.ini セクションは、J.D. Edwards ERP データにアクセスする場合にのみ適用されます。これらのセクションはスタンドアロン・データベース・アクセスでは無視されます。

設定	説明
[JDBj-BOOTSTRAP SESSION]	システム・テーブルへのアクセスを提供するサインオン情報を含みます。
[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]	OCM およびその他のシステム・テーブルが常駐するデータ・ソースを定義します。
[JDBj-SPEC DATA SOURCE]	シリアル化されたスペック・テーブルが常駐するデータ・ソースを定義します。

[JDBj-BOOTSTRAP SESSION]

この情報はシステム・テーブルにアクセスするためのサインオンに使用されます。JDBj によって、ブートストラップ・プロセス中にセキュリティ・サーバーを通してユーザーがサインオンできます。サインオン情報が無効な場合は、OneWorld/ERP データベースにはアクセスできません。

注:

このセクションの情報は、ERP 9 より前にインストールした JDE.INI ファイルの [DBSYSTEM SETTINGS] セクションで指定された情報に一致している必要があります。

パラメータ	推奨設定	説明
user=	サイト依存の変数	OneWorld/ERP セキュリティ・サーバーにログインするためのユーザー名
password=	サイト依存の変数	OneWorld/ERP セキュリティ・サーバーにログインするためのパスワード
environment=	サイト依存の変数	システム・テーブルを含む OneWorld/ERP 環境
role=	*ALL	すべてのロールに"*ALL"を入力します。

[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]

OCM およびその他のシステム・テーブルが常駐するデータ・ソースを定義します。JDBj ではブートストラップ時にこの情報が使用され、必要に応じて OCM エントリが検索されます。無効な場合は、OneWorld/ERP データベースにはアクセスできません。

注:

このセクションの情報は、ERP 9 より前にインストールした JDE.INI ファイルの[DBSYSTEM SETTINGS]セクションで指定された情報に一致している必要があります。

[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]		
パラメータ	推奨設定	説明
name=	サイト依存の変数	データ・ソースの名前このパラメータは、ブートストラップ接続には大きく影響しませんが、エラー・メッセージやログ・ファイルで表示されます。 (すべてのサーバー)
databaseType=	I = AS/400 O (Oracle) S (SQL Server) W = UDB	OneWorld/ERP システムで使用されるデータベース・タイプを選択します。 (すべてのサーバー)
server=	サイト依存の変数	サーバー名 (AS/400, SQL Server)
database=	サイト依存の変数	データベース名 (Oracle, UDB)
serverPort=	サイト依存の変数	サーバーのポート番号 (SQL Server)
physicalDatabase	サイト依存の変数	物理データベース (AS/400 のライブラリ修飾子として使用) (AS/400, SQL Server)
owner	サイト依存の変数	データベース所有者 (Oracle, SQL Server, UDB)
lob=	True False	LOB (Large Object Binary) をサポートします。 (Oracle, AS/400)

[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]		
パラメータ	推奨設定	説明
unicode=	True	Unicode 変換を実行します。
	False	(SQL Server)

[JDBj-SPEC DATA SOURCE]

この任意のセクションでは、シリアル化されたスペック・テーブルが常駐するデータ・ソースを定義します。JDBj では、ブートストラップ時にこれらのパラメータが使用され、必要に応じてシリアル化されたスペック・オブジェクトが検索されます。このセクションが指定されていない場合は、JDBj はシリアル化されたスペック・テーブルを OCM を使って検索します。無効な場合は、J.D. Edwards ERP データベースにはアクセスできません。

[JDBj-SPEC DATA SOURCE]		
パラメータ	推奨設定	説明
name=	サイト依存の変数	ODBC データ・ソースの名前このパラメータは、ブートストラップ接続には大きく影響しませんが、エラー・メッセージやログ・ファイルで表示されます。 (すべてのサーバー)
databaseType=	I = AS/400 O = Oracle S = SQL Server W = UDB	OneWorld/ERP システムで使用するデータベース・タイプを選択します。 (すべてのサーバー)
server=	サイト依存の変数	サーバー名 (AS/400, SQL Server)
serverPort=	サイト依存の変数	サーバーのポート番号 (SQL Server)
database=	サイト依存の変数	データベース名 (Oracle, UDB)
physicalDatabase=	サイト依存の変数	物理データベース (AS/400 のライブラリ修飾子として使用) (AS/400, SQL Server)
owner=	サイト依存の変数	データベース所有者 (Oracle, SQL Server, UDB)
lob=	True False	LOB(Large Object Binary)をサポートします。 (Oracle, AS/400)
unicode=	True False	Unicode 変換を実行します。 (SQL Server)
user=	サイト依存の変数	OneWorld/ERP セキュリティ・サーバーにログインするためのユーザー名

[JDBj-SPEC DATA SOURCE]		
パラメータ	推奨設定	説明
password=	サイト依存の変数	OneWorld/ERP サーバーにログインするためのパスワード

参照

- 各データベース・プラットフォームで入力するフィールドについては『システム・アドミニストレーション』ガイドに出てくる[JDBj-BOOTSTRAP DATA SOURCE]セクション

汎用セクション

以下のセクションは、ERP およびスタンドアロン・データの両方にアクセスする際に適用されます。

設定	説明
[JDBj-JDBC DRIVERS]	JDBC ドライバおよび JDBC の特定の設定を定義します。
[JDBj-ORACLE]	Web サーバーの tnsnames.ora ファイルのロケーションを定義します。
[JDBj-LOGS]	JDBC ドライバから JDBC をトレースできるようにします。
[JDBj-CONNECTION POOL]	現在、これらの設定は JDBC 接続をプールするのに常に使用されます。
[JDBj-RUNTIME PROPERTIES]	これらの設定は、JDBj 論理接続に適用されるシステム・ランタイム・プロパティに対応しています。

[JDBj-JDBC DRIVERS]

このセクションの値を使用して、Web サーバーでデータベース・タイプへのアクセスに使用される JDBC ドライバを指定します。J.D. Edwards ERP の前のリリースでは、Oracle と iSeries ドライバは Web サーバーでデフォルトだったため、設定する必要がありませんでした。ただし、J.D. Edwards ERP では、JAS の CLASSPATH 例外を回避するために、デフォルト・ドライバは想定されません。Web サーバーでは、このセクションで指定するドライバのみロードされます。

[JDBC DRIVERS]		
パラメータ	推奨設定	説明
Oracle=	oracle.jdbc.driver.OracleDriver	Oracle データベースに使用されるドライバ
SQLSERVER=	com.microsoft.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver	SQL Server 2000 と共に使用される Microsoft JDBC ドライバを使用するためのドライバ
AS400=	com.ibm.as400.access.AS400JDBCdriver	AS/400 用 DB2 UDB に使用されるドライバ
UDB=	com.ibm.db2.jdbc.app.DB2Driver	Windows 用 DB2 UDB に使用されるドライバ

[JDBj-ORACLE]

このセクションでは Web サーバーの tnsnames.ora ファイルのロケーションを定義します。このパスは、Oracle データベースへのデータ接続にのみ必須です。

パラメータ	推奨設定	説明
tns=	サイト依存の変数	Oracle tnsnames.ora ファイルのロケーションを指定します。Oracle を使用しない場合、このエントリはブランクでかまいません。Oracle データベースを使用している場合、このステートメントは、コメントアウトしてください。 デフォルト値は次のとおりです。 D:¥Oracle¥Ora9¥ network¥ADMIN¥tnsnames.ora Ora9 は、使用している Oracle のバージョンを識別します。この値は Oracle の異なるバージョンをインストールすると変更されます。

[JDBj-LOGS]

JDBC ドライバから JDBC をトレースできるようにします。

パラメータ	推奨設定	説明
jdbcTrace=	false	JDBC ドライバから JDBC をトレースできるようにします。通常デバッグにのみ使用されます。本稼動環境で JDBC のトレースを有効にすると、パフォーマンスに影響します。

[JDBj-CONNECTION POOL]

現在、これらの設定は JDBC 接続をプールする際に使用されます。

パラメータ	推奨設定	説明
jdbcPooling=	False	現在、JDBC プールはサポートされていないため、この設定が有効になってもプールは JDBj によって実行されます。
MaxConnection=	50	データ・ソースへの最大接続数。この数を超えた接続要求は、次に使用可能な接続の待ち行列に入れられます。
MinConnection=	0	データ・ソースへの最小接続数。古い接続をクローズしても、使用中かどうかに関係なくプールにはこの数の接続が残ります。
PoolGrowth=	5	接続要求を現在の割当てで満たせない場合に、システムによって作成される接続数
InitialConnection=	5	プール作成時に作成される接続数
connectionTimeout	1800000	アクティブでない接続キャッシュがプールから削除されるまでの時間(ミリ秒)。 ERP 9 より前のバージョンでは、この設定は[cache]セクションの <i>Connection</i> パラメータです。
CleanPoolInterval=	300000	プール・クリーナーが検証文字列を持つデータ・ソースをクリーンアップする間隔(ミリ秒)

		<p>グするように設定される間隔を指定します。</p> <p>注: 各キーで指定する値はミリ秒単位なので注意してください。たとえば、60000 ミリ秒は 1 分です。</p> <p>検証文字列の書式は次のとおりです。</p> <p>ValidationString_x=<statement> x,I,I、4、R(DB2/400)、S(SQL Server)、O(Oracle)です。</p> <p>statement は、任意のユーザーが実行できる SQL ステートメントです。</p> <p>例:</p> <p>ValidationString_I=Select * from QSYS2.SYSCOLUMNS WHERE 1=2</p> <p>ValidationString_S=Select @@connections</p> <p>ValidationString_O=Select sysdate from dual</p>
maxSize	50	各 JDBC 接続でキャッシュ化された JDBC 準備ステートメントの最大数
cachePurgeSize	5	maxSize が制限に達した場合 JDBC 接続から除去される JDBC ステートメント数

[JDBj-RUNTIME PROPERTIES]

これらの設定は、JDBj 論理接続に適用されるシステム・ランタイム・プロパティに対応しています。

注:

各キャッシュでは、リストにある値がデフォルトです。テンプレート・デフォルトのエントリはコメントアウトされています。これらの値を変更する場合は、記号(#)を削除してください。

パラメータ	推奨設定	説明
dataCacheEntrySizeThreshold=	500	<p>データ・キャッシュにある単一エントリの最大数(ロー)を設定します。エントリがこのしきい値を超えると、キャッシュされません。値が-1 の場合は、エントリがすべてキャッシュされます。</p> <p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p>
dataCacheEntryThreshold=	100	<p>データ・キャッシュの最大数(エントリ)。データ・キャッシュがこのサイズを超えると、最も古いエントリが削除されて新しいエントリ用にスペースが設けられます。値が-1 の場合は、無制限です。</p>
forceSingleDataSource=	False	<p>単一データ・ソースに対して実行する複数データベース・オブジェクトに関連する操作を JDBj が実行するかどうか</p>

		<p>を指定します。この値が TRUE の場合 JDBC は、操作に関連する最初のデータベース・オブジェクトの物理データ・ソースのみを解決します。この値が FALSE の場合 JDBC は、すべてのデータベース・オブジェクトの物理データ・ソースを解決し、単一操作が複数データ・ソースをスパンする場合に例外を引き起こします。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • True • False
resultSetTimeout=	60000	<p>操作がなかった場合に結果セットがタイムアウトするまでの時間(ミリ秒)。</p> <p>デフォルト設定の使用をお勧めします。</p> <p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p> <p>ERP 9 より前のバージョンでは、この設定は[cache]セクションの ResultSet パラメータです。</p>
retryInterval=	0	<p>Interval プロパティを再試行します。等価(idempotent)なデータベース操作を再試行するまでの待機間隔(ミリ秒)を設定します。値が -1 の場合は、再試行しません。0 の場合はすぐに再試行します。</p> <p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p>
retryMaximum=	5	<p>等価(idempotent)なデータベース操作の再試行回数を設定します。値が-1 の場合はすぐに再試行します。</p> <p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p>
ocmCachePurge=	3600000	<p>非アクティブな OCM キャッシュ・エントリが除去されるまでのミリ秒数を設定します。</p> <p>値が 0 の場合は OCM キャッシュ・エントリは除去されません。</p>
personalSpecVersions=	False	<p>ユーザーの個人バージョンを読み取るかどうか指定します。この情報は、スペック生成時ではなく読取時にのみ実行されます。True に設定すると、個人バージョンが存在する場合は戻され、そうでない場合はパブリック・バージョンが戻されます。プロパティを False に設定すると、個人バージョンは読み取られずパブリック・バージョンにデフォルト設定されます。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • True • False
securityCachePurge=	3600000	<p>非アクティブなサービス・キャッシュ・エントリが除去されるまでの時間(ミリ秒)。値が 0 の場合はサービス・キャッシュ・エントリは除去されません。</p> <p>デフォルト値の使用をお勧めします。</p> <p>有効な値には 0 以上を指定してください。</p> <p>ERP 9 より前のバージョンでは、この設定は[cache]セクションの Security パラメータです。</p>

serviceCachePurge=	3600000	<p>非アクティブなサービス・キャッシュ・エントリが除去されるまでの時間(ミリ秒)。値が 0 の場合はサービス・キャッシュ・エントリは除去されません。</p> <p>有効な値には 0 以上を指定してください。</p> <p>ERP 9 より前のバージョンでは、この設定は[cache]セクションの UDCInfo パラメータです。</p>
specCachePurge=	3600000	<p>非アクティブなスペック・キャッシュ・エントリが除去されるまでの時間(ミリ秒)。値が 0 の場合はスペック・キャッシュ・エントリは除去されません。</p> <p>有効な値には 0 以上を指定してください。</p> <p>ERP 9 より前のバージョンでは、この設定は[cache]セクションの ViewTable パラメータです。</p>
specConsistencyCheck=	minimal	<p>スペックの一貫性チェック・レベル。このプロパティ・レベルを上げると、スペックの一貫性に欠ける問題に関する例外メッセージが改善されます。パフォーマンスが低下するため不要な場合は、このプロパティ・レベルを下げてください。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Full • Minimal • None
transactionIsolation=	default	<p>トランザクションの分離レベルを設定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Default • None • Read uncommitted • Read committed • Repeatable read • Serializable
transactionTimeout=	120000	<p>トランザクション・タイムアウトまでの時間(ミリ秒)。トランザクションは指定された時間に操作がなかった場合、タイムアウトします。-1 に設定されている場合は、トランザクション・タイムアウト機能は無効になります。(この操作は現在 JDBj が JAS トランザクションの一部として実行しているときにのみ行われます。)</p> <p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p>
triggerAutoFetch=	none	<p>JDBj が、変更するローを自動的に取り込んで OneWorld トリガーに渡すかどうかを指定します。この操作は一部のトリガーが正しく動作するために必要です。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • None • Single • All
updatableResultSetTimeout=	-1	<p>操作がなかった場合に更新可能な結果セットがタイムアウトするまでの時間(ミリ秒)。値が-1 の場合は、更新可</p>

		<p>能な結果セットに RESULT_SET_TIMEOUT と同じ値が必要です。</p> <p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p>
usageExecutionThreshold=	20000	<p>実行する単一データベース操作の最大時間(ミリ秒)。単一データベース操作がこのしきい値より長くかかる場合、ステートメントと時間は使用トラッキングの一部としてログに記録されます。</p> <p>有効な値には 0 以上を指定してください。</p>
usageFetchSizeThreshold=	500	<p>戻す単一取込みに対して期待される最大取込み(ロー)サイズ。単一の取込みがこのしきい値以上の値を戻した場合、実際の取込サイズが使用トラッキングの一部としてログに記録されます。値が-1 の場合は、どの取込みサイズも有効です。</p> <p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p>
usageResultSetOpenThreshold=	60000	<p>オープンし続ける結果セットの最大時間(ミリ秒)。結果セットがこのしきい値より長くかかる場合、結果セットは使用トラッキングの一部としてログに記録されます。この設定が制限に達すると、結果セットは自動的にクローズされなくなります。使用結果セット・オープンしきい値が-1 の場合は、使用トラッキングがログに記録されません。</p> <p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p>
usageTracking=	false	<p>使用トラッキングを有効/無効にします。この設定によって、テスト中に追加トラッキングやログ記録が行われます。使用トラッキングはパフォーマンスに影響を与えるため、本稼動コードには無効にしてください。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • True • False
usageTrackingOutput=	log	<p>使用トラッキング出力のロケーションを指定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Log • Exception
usageTransactionActiveThreshold=	120000	<p>有効な値には-1 以上を指定してください。</p>

[LOGIN]

これらの情報は、ログインとローカル・ダイレクタ・オプションの設定に使用されます。

パラメータ	推奨設定	説明
PassKey=	サイト依存の変数	Cookie の暗号化に使用するキーの英数値一時変更
externalhost=	machine:port	リソースのブラウザ・リクエストに完全修飾 URL を作成します。

DisplayEnvironment=	Administrator preference	<p>デフォルトの環境が DefaultEnvironment で設定されているかどうかの環境表示ルール。</p> <p>Show:ログイン時にデフォルト環境を一時変更できます。</p> <p>Hidden:ログイン時に環境ボックスが表示されません。</p> <p>ReadOnly:ログイン時に環境設定を表示できません。</p> <p>UseDefault:ログイン時に異なる環境を選択できますが、その他のユーザー選択はシステムによって一時変更され、デフォルトの環境にログインします。</p>
DisablePasswordAboutToExpire	TRUE	パスワードの期限切れ通知を非表示にします。

[TRANSACTIONS]

これらの情報は構成設定および JAS 内のトランザクション処理をカスタマイズするのに使用されます。

[TRANSACTIONS]		
パラメータ	推奨設定	説明
ReapInterval=	5	<p>中止したトランザクションを TransactionReader がチェックする頻度(分)。</p> <p>有効な値は 1 から n までの整数です。</p> <p>デフォルトは 5 分です。</p>
MaxAge=	10	<p>トランザクションの最大期間(分)トランザクションがこの数値を超えた場合は TransactionReader によってロール・バックされます。</p> <p>有効な値は 1 から n までの整数です。</p> <p>デフォルトは 10 分です。</p>

[ERPINTERACTIVITY]

このセクションでは、対話型 HTML 設定を有効にして設定します。これらの設定はサービス・パック 22 用に新しくなっています。

パラメータ	推奨設定	説明
InteractivityLevel=	LOW または HIGH	<p>JAS のインスタンス全体の対話操作レベルを指定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • LOW (デフォルト) • MEDIUM • HIGH <p>Low の場合、致命的/非致命的なポスト・イベントが発生した場合、ページ全体が Web サーバーに送信され、ユーザーはページが戻って来るのを待つ必要があります。この場合、ページ全体は再ペイントされ、ブラウザでフラッシュされます。この操作は SP21 以前のバージョンにある機能と同じです。ポストを強制する致命的なイベントの例は次のとおりです。フォーム、ロー、ビュー、ツール・エグジット、ツールバー・</p>

		<p>ボタンのクリック、ビジュアル・アシストのクリック、タブ・ページの切替え、ツリー・ノードの展開/縮小、親/個ツリーのドラッグ&ドロップ、スタティック・テキスト・コントロールのクリック。イベントの中には FDA の中で強制ポストのマークが付いているものもあります。</p> <p>対話型モードが Medium の場合、Low モードで全ページのリフレッシュが実行される時点でデータ転送とイベントが実行されます。ただし Low モードと異なり、Medium モードではこれらのイベントが発生しても全ページを送信しません。サーバーには待ち行列にあるイベントやデータのみが送られます。さらに、リフレッシュされないページもあります。JavaScript と DHTML を使用して、変更されたコントロールのみがペイントされます。このモードではページ・フラッシュは実行されません。</p> <p>High モードでは、さらに頻繁にイベントとデータが転送されます。致命的なイベントが発生した場合にポストされます。フォームに変更が発生するとポストされます。たとえば、コントロールやグリッド・カラムが終了/変更された場合にポストされます。待ち行列にあるイベントとデータのみがサーバーに送信されます。リフレッシュされないページもあります。JavaScript と DHTML を使用して、変更されたコントロールのみがペイントされます。このモードではページ・フラッシュは実行されません。</p> <p>注:</p> <p>High モードと Medium モードにおける違いは、どちらのレベルでもページがリフレッシュされないため、ほとんどわかりません。これらのレベルにおける差は、ネットワーク・トラフィックの量とサイズにあります。High モードでは、さらにトラフィックが増えますが、サイズは小さくなります。Medium モードでは、トラフィックの量は減りますが、バッチ・イベントを一度に送信するためデータの量は増えます。</p>
MultipleBrowserEnabled=	FALSE	<p>この設定では、Task Explorer およびポータル・リンクから別のブラウザで複数のアプリケーションを起動するかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • TRUE • FALSE (デフォルト)
MaxOpenBrowsers=	10	<p>[1-n] デフォルトの値は 10 です。</p> <p>このパラメータは、ユーザーがいつでも使用できるオープン・ブラウザの最大数です。最大数に達すると、新しいブラウザを開けなくなります。代わりに現在開いているブラウザのリストが表示され、新しいブラウザを開く前にいずれか 1 つを閉じるようプロンプトが表示されます。</p>
DBFetchLimitBeforeWarning=	500	<p>デフォルトの値は 500 です。</p> <p>警告が表示される前にクエリー/検索から取り込まれるレコードの最大数。この警告によって、大量のレコードを取り込まないように、クエリーを変更できるようにします。</p> <p>Web サーバーでは、各 500 レコードごとに警告が表示されます。たとえば、検索/クエリーを実行して 1000 件のレコードを取り込むと、警告が表示されます。[OK]をクリックすると、次の 500 件のレコードについて 2 番目の警告が表示されます。</p>

[WEB GUI]

このセクションでは Web の GUI インターフェイスのカスタマイズ方法とサービス・パック 22 で新しく加わった内容について説明します。

パラメータ	推奨設定	説明
bandwidth=	narrow wide (デフォルト)	<p>低い帯域幅でネットワーク処理を行うための GUI インターフェイスをカスタマイズします。デフォルトでは、J.D. Edwards Web サーバーでは HTML で表示されるすべての OneWorld/ERP フォームでタブ修飾が使用されます。タブ修飾では角の丸いタブが表示されますが、このフォーマットで表示するにはさらに帯域幅が必要です。</p> <p>帯域幅を狭く設定するとタブ修飾が無効になり、タブを表示するのに少ない帯域幅が使用されます。この設定を使用すると、HTML で表示されるタブは長方形のボックスに見えます。</p> <p>帯域幅を広く設定すると、タブ修飾が有効になります。</p> <p>この設定は任意です。設定されていない場合は、Web 修飾はデフォルトで wide となっています。</p>